THE RECONSTRUCTION

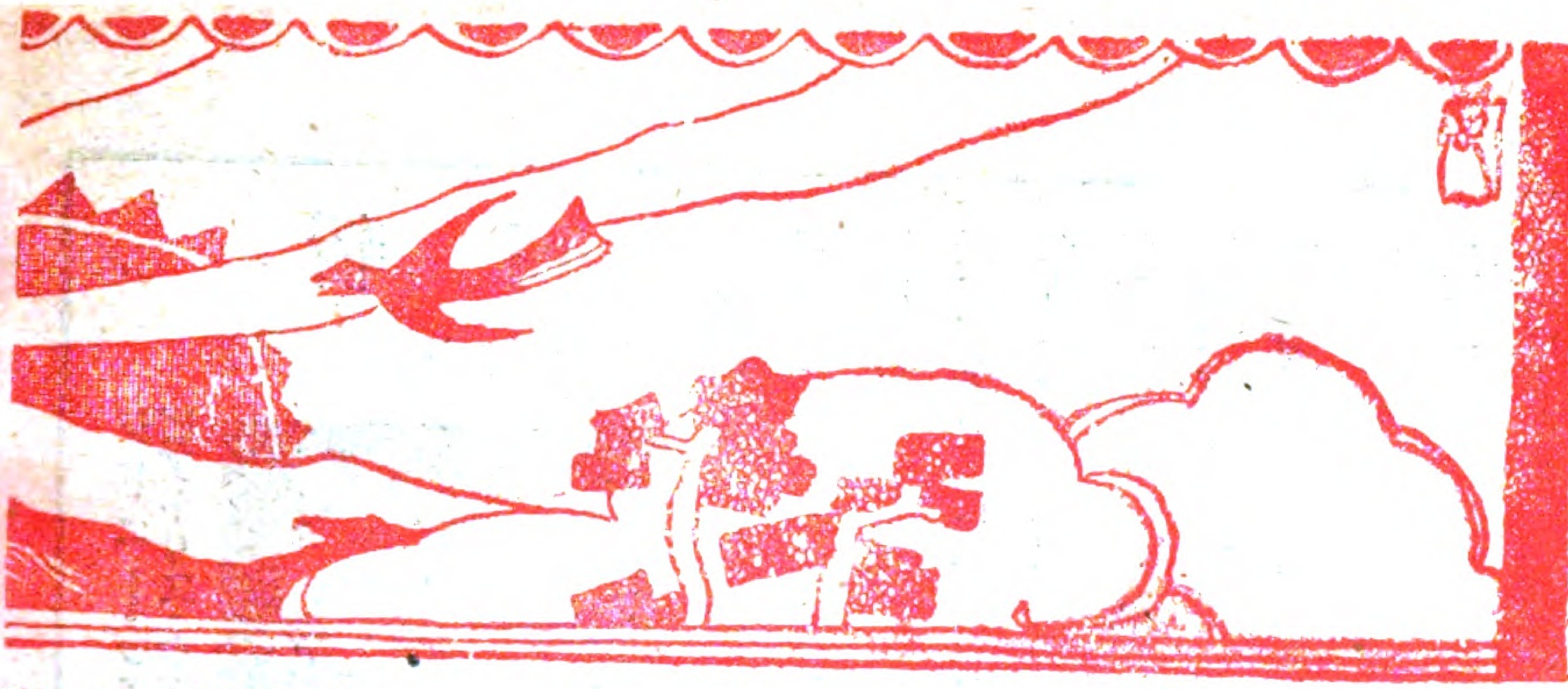
改造

生活現狀打破號

勞働組合公認論

拾壹月號


BEST MADE
RED HAT
WEAR GUARANTEED
SPAIN
FRANCE
POLAN
戰禍の後に聯盟生まる
華彩列島に
誇るべき「雄飛ネクタイ」を生む
全市至る處の洋品店にあり
東京 大坂
南商店



改造十一月號目次



佛國ア・ドビドゥール著　早稻田大學教授 煙山專太郎譯（新刊）

歐洲最近外交史

脊皮製全一册 六百五十餘頁
正價 金參圓五拾錢
郵税十八錢

今や世界は縺れたる外交の十字街頭に立てり。世界大戰の因て起れる外交上の經緯を審にし、大亂勃發當時の外交界の曲折を究めんとする歐米の士は、唯一の指針として皆此書を推奬せり。斯學の泰斗佛國ドビドゥール氏の新著『歐洲最近外交史』は、筆を伯林公會に起し、獨墺伊三國同盟、露佛同盟、日英同盟、英佛の接近、英露佛三國協商等の由來を詳述したる後、漸く世界大戰勃發の顛末に入りて開戰中の國際關係を明確に叙し、更に之に加ふるに深刻なる評論を以てし、實に露國革命の前夜に於ける條に至りて筆を收めたり。凡そヴエルサイユ會議の議に上れる波蘭問題、チエック問題、アドリヤ海問題、アフリカ問題、南スラブ問題、ガリシヤ問題、アルメニヤ問題、ペルシヤ問題、支那問題、乃至國際聯盟問題の如き、苟も此書を手にするに非ずんば、五里霧中に彷徨するの感あるべく、一たび此書を座右に備へんか、他の戰前戰時の外交に關する一切の書籍は總べて之を縮くの勞と之を購ふの費とを省き得べし。吾人は最近我出版界に於ける最も權威ある刊行物として敢て之を江湖に奬む。

新早稻田叢書

既刊

米國大統領ウイルソン著　法學博士高田早苗譯【訂正増補 政治汎論】
脊皮製千五百餘頁上下二册
正價各貳圓卅錢郵税各十八錢

獨逸トライチケ著　法學博士浮田和民譯【軍國主義政治學】
脊皮製上卷七百餘頁（下近刊）
正價貳圓五十錢　郵税十八錢

發行所　東京牛込早稻田　振替一一二三番　早稻田大學出版部

（賣捌）東京堂、至誠堂、北隆館、東海堂　大阪 盛文館、名古屋 星野（其他）

生田長江氏全譯

マルクス資本論

第壹分册發賣

大版四四〇頁

定價	貳圓貳拾錢
特價	壹圓九拾錢
送料	拾貳錢

大勢はさまに―

急峻なる角度を畫いて、急轉直下し去らんとしてゐる。

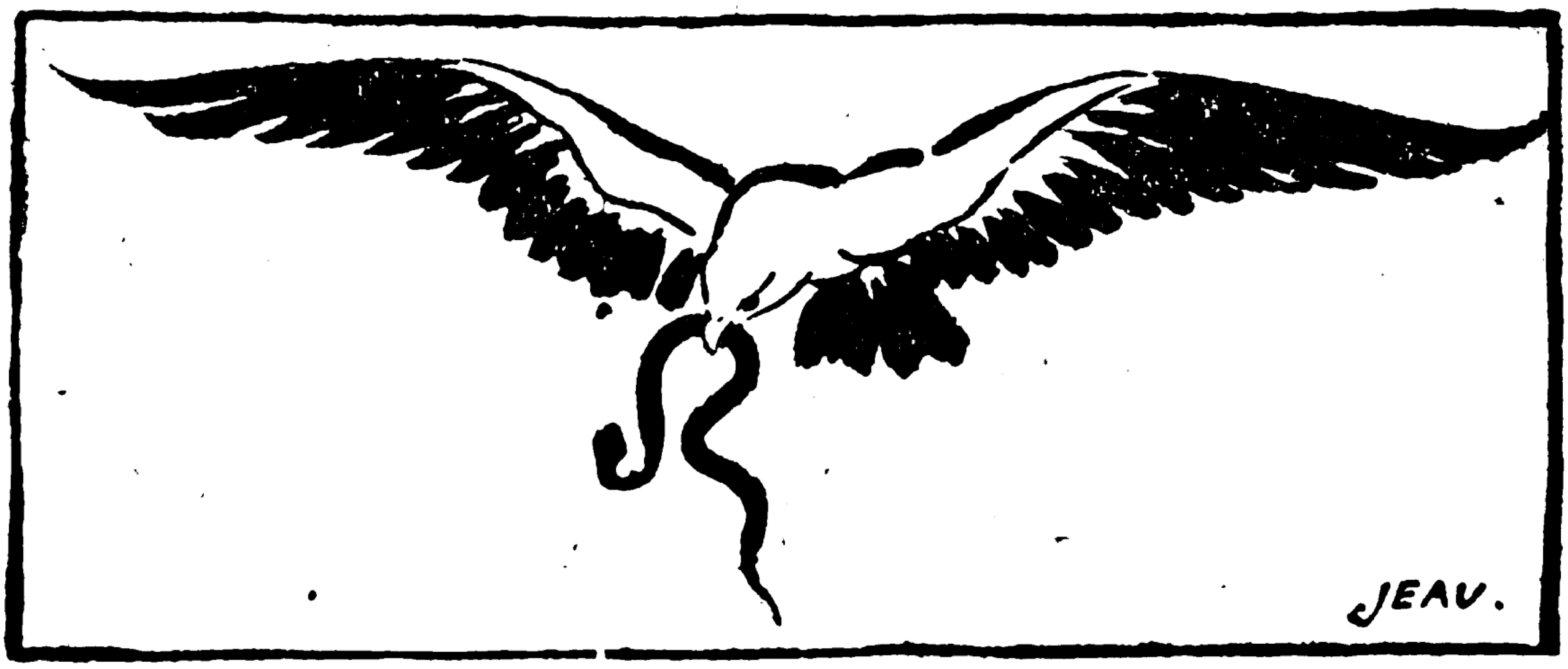
來るべきは暗憺たる恐怖時代であるか、はたまた春風の駘蕩たるが如き理想實現の社會であるか。之を明らかにするものとしての『資本論』の研究は、社會問題勞働問題に對する一切の眞實なる解決方法のアルファアにして且つオメガアであらねばならぬ。しかも天才者の大なる獨創は常に、學究者流に取ての謎語である。マルクスの難解も亦、マルクスのほかに、社會主義のほかに、或は經濟學のほかに何物をも知らざるが如き一味學徒に取ての難解に外ならぬ。いま本書の譯者生田氏に於て特に人意を強うするものは、氏が其尖鋭なる直觀と精緻なる論理とを以てして、總ての科學及哲學に精通し徹底することの用意を具備しつつも、尙ほ且つ其部門の孰れにも偏落すが如きことなく、渾然たる全人格的努力を傾倒して、常に潑溂たる文化運動の指導者となつて來てゐる點にある。若くは文壇思想界の先覺として、忌憚なき社會批評文明批評の權威者として、日本の現代に重きをなして來てゐる點にある。そして氏は、氏が前きに個人革命の詩人ニイチエの推奬に於て貢献した所のものを、此度び更に社會革命の預言者マルクスの紹介に於て貢献すべく、昨冬以降萬事を放擲し去つて此一事に執し、最善の後に最善を盡して泣血の苦心を惜まなかつた。刊行者また、空前にして恐らくは絶後なるべき斯の如き壯學に參加し得たことの大なる光榮を思ふものである。

第二分册以下刊行豫定

第壹卷全部――大正九年一月中
第貳卷全部――同　四月中
第參卷全部――同　八月中

大賣捌　東京堂・東海堂・北隆館・上田屋・至誠堂・慶文堂

東京麻布十番通り　綠葉社　振替東京三二七五二番　電話芝七〇一二番



——（改造十一月號）——

補教と普選

社會各方面の急激なる變化に先驅して、斷乎たる根本的組織の革新は今日の急務である時は既に「議論より實を行へ脐け武士、彌生半ばゝねむけさましに」の實行期に入るもの。差當り、普通選擧實施は急務中の急なるものであるが、セテその根本は矢張り智能の普及と、德性の完通とが兩々相俟たなくてはならぬ。それには補習敎育が徹底的に、普遍的に完成さるゝの日に於て初めて、普通選擧の効果も揚げ得られ、國民的改造の實果をも見ることが出來るのである。

見よ、歐洲歸りの仁輪加師の寄合によつて火の手を揚げられた改造運動の收獲は幾千かある。それ等の人々の熱烈な叫び〻に對して多數の國民は何風馬牛の觀があるではないか。そしてその狂熱的內閣破壞の運動より、寧ろ一山縣の入京によつて政權が動き出すではないか。

强ち、改造運動者が非力の結果とは見ないが、大體に於て、多數の國民がその論旨を明嚼すべき智力の缺乏から來たものである。民本といひ、民主と喚き、國民的政治と怒鳴つて見た所が、多數國民に諒解のない改革論では一場の空騷ぎに歸する。これではいつまでも少數權力者の犧牲に供せられて無智の國民はいつまでも人格を蹂躪せられ、塗炭の栂內から脫却することが出來ない。

夥多の國民に人格的覺醒を與へ、廣く參政權を與へて國民改造の魁をなすものは、補習敎育の完整の外にない。英國にせよ、獨逸にせよ、勞働能率の向上せる一に此伸の敎育が普及せられたる結果である。勞働組合の成立にせよ、根柢に勞働者それ自身の智的涵養と德操の充實した上に城かれなくては、それは空中樓閣を築くと同一で必然失敗の招致を豫期せなくてはならぬ。

脐力から成る無氣の內閣を信じ、一老爺を中心として政機が動くなぞは、全く國民の總てが責任を負はねばならぬ。自分達の盲目とそして意氣地なさが主因をなすものであるからである。

理想の政治に憧憬し、適法の人格的生存をなさんと欲せば、自分そのものが總ての點に於て進步しなくてはならぬ。自分そのものが盲目、無氣力であれば、理想の社會も理想の生活も出來ないのである。此の意味に於て、我國の改造運動の中核となり、基本となるものは、補習敎育の完備にある。普通選擧は實にその結果とならねばならぬ道程にある。

思想と評論



經濟戰に於ける徴兵制度

工學博士　青柳榮司

一　偉人を方程式にて解く

聯合與國の大捷と共に玆に侵略的、武斷的政策を奉ずる獨逸國は九地に墮されて、世は再び平和の聲に蘇つた。武力的活躍は一段落を告げ、文事、財的の活躍で各國とも、戟を斂めたかわりに算盤づくめの戰爭と變つてくる。

各國勢力の消長は物質的影響より來たるものと、精神的方面より來るものとの二樣がある。勿論吾人の世に處するや地位の高下、職の如何に拘らず、其爲す所は國家社會に貢獻し、精神生活を完ふするに外ならぬことは今更云ふ迄もない。

余は此說明を便にするため一の方程式を案出した。今xを以て精神的としyを以て科學的とし、其相乘積をzとする。zは即ち國家社會に貢獻する價値を表はすものである。然る時は次の方程式が得らる。

$$z=xy$$

xとyとの關係は寧ろ函數$f(x.y)$と書くべきもので相乘積とするには限らないが、了解し易きため便宜上前記の形に見做したのである。上式に於て數字上左の場合がある。

第一、今xが零即ち$x=0$ならばyは如何に大でもzは零即ち$z=0$である。換言すれば精神の伴はない仕事は其效果に於て零である。

第二、又反對にyが零即ち$y=0$であればxが如何に大でもzなる效果は零である。換言すれば第一は精神は正直で一生懸命なる積りでも、其方法に於て缺ぐる所がある。即ち其方法の極めて非科學的たるが爲め、其爲す所の效果は零である。第二は其方法に於て智識を缺いてゐる。即ち其科學的たることに於て缺くる所なきも、其精神に於て至らざる所あるがため其效果は亦零である。

第三、次はxが負號にてyが正號なる場合である、這は惡人が奸智を逞ましくする如きを示すもので、社會に害毒を流す最も恐るべき場合である。

第四、xが正號なるもyか負號なる場合である。此は善人が科學を誤用するが如きである。

第五、x及びy共に負號の時はzが正號となる、例へば惡人が智識を過り、身を亡ぼすと同時に、社會に對し勸善懲惡の實を擧ぐるが如き場合である。

第六、然らば世は奈何なる人が必要であるかと云へば、其行爲の根柢は精神的にて其方法の科學的たるにある。即ちxもyも共に正號で而も其價値の可出來だけ大なる人を要求するので、之に依て始めて其貢獻の偉大なるものがある。

第七、尙ほ $xyz=E$ と云ふ結果をも生む、x が精神的で y が科學的、それから z を時間とすれば E が其結果となる。E は價値若くは功果であつて z の時間が長ければ長いだけ價値も大なる譯である。偉大とか英雄とかも畢竟は E のより大なるものである。乍去列强にも時間を與へられてあるから勢ひ x y を偉大にし、先にした方が競爭に打克つこととなる。

第一或は第三の場合は獨逸の如きもので、如何に科學的であつても精神的たる點に於て缺ぐる所あるのみならず、或は誠意なき行爲を敢てしたるが爲めに、外國の同情を失し數多の强國を敵にして無慘の最後を遂ぐるに至つたのである。第二の場合は吾國民に多い例で、兎角世人は精神的であれば其丈で十分だと誤解して科學を忽にする弊がある。若し其方法にして非科學的であつたならば、如何に其精神は一生懸命でも其效果を見る事難いのである。第四の場合は精神のみに走つて科學を誤りし場合で、例へば日本刀が如何に鋭利なるも其使ひ方を誤れば却て國家社會に大損害を與ふるので、遠くは佐久間象山、大久保利通、近くは伊藤博文を斬りし刀の場合と同一である。第五は惡人が奸計を廻らし、他を傷けんとして却て己れを傷つけ其身を亡ぼす場合で、舊劇にある如く明智光秀が誤つて實母を殺した如き其一例である。吾人の望む所は第六の場合で x y 共に正號で且つ大なるもの、即ち出來得べきだけ精神的であると同時に科學的に最善の方法を盡す人の輩出にある。

然り、而して、吾々國民たるもの國運の隆盛を計り國家をして泰山の安きに置かんとするの念誰として一刻も忘れて居らぬことは勿論である。其には萬事について創造的であることが緊急要件の一つである。即 x の大なると同時に y の發揮に於て創造的たることが必要なることの一でかる。換言すれば吾人は須く先人未發の新しき事を産出し、以て文化に貢獻するため科學的に遺算なきを期せねばならぬ。徒に昔人の糟粕を嘗め、先人の後塵を拜する事を以て能事とするやうではいかぬ。殊に這回の大戰爭に遭ひ、學問及び商工業の獨立自給自足の必要等につき、苦き經驗を嘗めたる、我國民は誰とて痛切に其感を深くせざるものがなからう。然し、新しき試みをなし創造的の事を仕遂げんとせば苦心もあ

り、損害もあり、失敗もあるは免れざる所である。然らば其企てをなし、其局に當るものに對し、世人擧つて其苦心の存する所を察し損害、失敗に對し厚き同情を表し可出來だけ彼を助けて其完成を速かならしむるの覺悟を持たねばならぬ。

二　普通選擧實施より急務

卒爾として汝は何の爲めに働くやと一小童に問はゞ、恐らくば答辯し得るものはなからう。又、一小童と云はず青壯年者にも滿足なる答解をなし得るものは少からう。人間が果してパンの爲にのみ働くものならば、パンが得らるれは活動を休止して然るべきか。否々、我が國民は總て名譽あり光輝ある帝國の爲めに盡さねばならぬ義務があり、社會の爲めに貢獻すべき重大なる使命を負はされて居るのである。何が爲めに働く可きか、非文明の無智識者に普通選擧制を能ふるは可なりや、勿論普通選擧も重要なる問題であり、且つその問題の解決を何等否定するものではないが、それより以前に解決すべきは公民教育の根本的治療にあるを思はなくてはならぬ。現行選擧法の可不可は別論なるも、外形の資格より內容の公民的資格の充實について論議する人なきは奈何のものにや。

形式あつて實質なきは採るに足らず、形式整備して內容充實せざれば蹉跌し易し、國家の進展は堅實にして穩健なるを尙ぶ、內容の充實をなして突進せさるに於ては中道に於て陣形くづれ、思はぬ敗軍を見るものである。この意味に於て吾人は普通選擧の解決も、理窟もあるし必要でもあるが、一歩先きに公民としての訓練を完全にした上で實施するの可なるを信ずるものである。形而上の教育はまだしもの、實質上に於ける教育の不完全、殊に道德的方面に於て其著しきを見る。

さる日、友人某氏を大阪の××會社の重役室に訪問せる事があつた。其時友人某氏にさる人よりその日の午後に面談を申込み來れるが、重役はその時間及其會見に少からず困惑の狀があつた。電話を取次げる十三、四と覺しき給仕は重役當惑の色を察知して、單獨に『それならば現在留守だと答へませう』と云ふて重役室の扉を排して退いた。重役も默々として一言なかつた。これは一例に過ぎぬが我國の小僧、給仕の輩はかくの如くして平氣で噓をつき、重役もそれを知り

ながら默過せるは慨嘆すべき事ではないか。これ無教育者と何等異らざるのみならず、無教育者の行爲よりは一層惡むべく憫むべきの徒と稱すべきである。かくの如き道德的訓練の缺如せる選擧民を作りたればとて國家は一向何等の進展を期することは出來まい。別に心あつての事ではないが、夢我夢中で噓をつくを平氣とせる徒には人格上の訓練を與ふるが國家の第一の急務である。無教育者より劣る選擧民によつて、選出せられたる議員によつて國家が富强の實を擧ぐることは不可能ではあるまいか。

三　科學の力

試みに見よ。新醒の教育と稱へらるゝ現代のそれが、未だ傳承と因習とから開放せられて居ないではないか。鎖國の安泰を樂んで極めて靜的な、形式的な教養の精神が、尙其の根柢に蟠踞して、眞に積極的な、動的な、活躍的なる教育と訓練とが施されてゐることは少ないではないか。

維新以來所謂新日本が、西歐の先進國を驚駭せしめた第一のものは何であるか。言ふまでもなく我海陸軍の精鋭無比なる所にある。我西伯利出兵の當時、その戰蹟を聞いて歐米人は我軍の精鋭を想望し、かゝる驍勇無比なる將卒の前には獨軍も一溜もなからふと言つた位であつた。彼等は殆んど武力の强大が我日本の唯一の精華なるが如く解し、これを稱揚するの陰に、潜かにこれに對して畏怖の念を抱くものが多いのである。我日本の國民自身にすら之を大に誇とするものがある。けれども、國家の富强は時代後れの武力にあらずして、時勢に適應せる武力に加ふるに更に一層重大なる種々の要素が存在することを忘れてはならぬ。而も、正義を以て一貫し道義の卓絕せるものたらざる可からざるは無論である。蓋し、武力のみによつて國家の隆興と衰亡とが決せられた時代も存したけれども、今や國運の前途を左右するファクトルが、單にこれのみでないこと、寧ろこれのみであつてはならぬことが、將に時局の變轉よりしても察知せらるゝのである。

予はこゝに將來何れの國家についても、正義一貫は無論であるが彼の武力以外に、その運命を掌握すべしと思はるゝ

重大なるファクトルの一として、「科學の力」を高調したい。自然科學の發見及び其の發達が、吾人の世界觀、人世觀を一變せしめたといふのは、既に數世紀以前のことである。而してこの趨勢は、爾來、日に月に推擴せられて、その那邊に極まるかを知らざる勢である。今日に於て科學は、吾人の日常の生活から、國家社會の現狀幷びにその將來を支配すべき偉大なる勢力を持つに至れることは何人も否む可らざることである。

史上空前にして恐らく殆んど絶後なるべく思料せらるゝ、近時の歐洲大戰亂は、その影響を世界の隅々に傳へてゐる。盟邦の友誼に從つて、交戰國の一に加はれる我が帝國に於ても亦固より直接間接に、甚大の影響を被りつゝある、商業、工業、農業、鑛業、その他一切の產業生活上には勿論政治、教育、國防等のことに至るまで一としてこの餘波を受けてゐないものはない。而して、吾人は是等諸方面に亘つて押し寄せたる影響を一貫して、看過しがたい一大勢力の存することを認めなければならない。否寧ろ我が國民をしてあらゆる方面に、驚異の眼を瞠らしめたる、「新しき勢力」の儼存することを知らなければならない、「新しき勢力」とは何ぞ。言ふまでもなくこれ「科學の力」である。

今や諸種の方面に於て、策劃せらるゝ戰後の帝國經營が、一としてこの新しき勢力を度外視し得るものはないではないか。余輩はこれを以て喜ぶべき現象なりとなすよりも、むしろ當然の事象が、注目せらるゝことの餘りに遅かりしを憾まざるを得ない位である。けれども、後れても爲さゞるに勝ることを思うて、漸く自から心を安んずることができる。

四　何が故に强制的補習教育が未だ我國に實施せられざる乎

抑も獨逸が國家として戰前の强盛を致したるものは、實にナポレオン麾下の鐵蹄に其の祖國を蹂躙せられたる憤怨の凝固して、教育を一新したる所に存する。而も其の教育たるやフキヒテがこれを疾呼したるが如く、一面祖國の傳統を重視すると共に、他面よく國家の世界的地位を顧慮して、國民的幷びに民族的自覺を徹底せしめたる種々のものであつた。徒らに歷史的自負に頼らずして能く新たに隆興せんとするに國家の使命を覺知したところに在る。然るに最近に至

り、さしも强大なりし彼の獨逸が一敗地に塗れたる所以のものは、正義人道を無視したるの結果神人共に怒れる點に存する、如何に科學の力は旺盛なりとは云へ、それのみが强國たる唯一の重要素ではない、正義てふ大切なる要素を輕視したる以上失敗を招くは至明の理である。吾人は能く此眞相を了解し其の長短を認識し、長所を範とし短所を戒となすことを逸してはならぬ。

我が帝國が維新以後是等先進國の範に則つたことは可いとして、これを現狀から推せば、むしろ佛を彫んで魂を入れざりし憾があるのではないか。我が國の教育は、識者の所期するところと正反對に、依然として低回し顧望するの態度を離れない。而して其の低回し顧望するに對象は一に非科學的、非獨創的なる東洋思想である。歷史の尊ぶべきこと、傳統の重んずべきことは何人もこれを首肯する。然しながら、歷史と傳統との尊重が單に歷史と傳統とのためならば、即ち過去に對する自負に止るならば、それは殆んど價値が無い。支那人が今に於てなほ後世聖なしと稱して文武周公を崇むるが如きものである。歷史と傳統とは、須らく將來の國運隆興の背光として乃至根基として尊重するに於て始めて意義と價値とが存するのである。日本の歷史主義者、傳統主義者、乃至日本の平均的思想家の抱懷するところは果して如何。

翻て獨逸が宇內の列强を相手として戰を交はすこと玆に滿四ケ年を超へ容易に屈せざりし所以のものは決して彼國が有する武力一偏のことに非ずして、國家の實力を旺盛ならしめることを忘れなかつた不斷の努力に因るのである。而して其國家の實力の增盛は主として科學の充實を企圖し若くはそれを驅進したる教育の効果である。獨逸が其教育を、單に形式的、虛飾的の餘戲と見ることなく、直ちに國家生活と緊接することを懈らなかつたことは、敬服に値するのである。特にその科學の隆興を圖ることによつて國民全般に、勤勞と創作との精神を涵養しつつあることは最も範とすべき所である。

此くの如きは、ひとり獨逸のみならず、今や世界の列强の等しく企圖する所である。而もこれ少數なる識者のみに委

すべきことでなくして、須らく國民一般の覺悟すべきことである。「科學の力」を眞に理解し從つてこれを實際に施爲することを畫策することが現今並びに將來の教育と重大なる關係を有する所以は實にこゝに存するのである。

　この默過しがたき大勢に心付かなかつた教育者は勿論、他人のことの如くに、自から實驗室や書齋裡に籠居してゐた引込主義の科學者も、其の責任を分擔せざるを得ざるを警醒せしめんことは、刻下の時勢に徵して、思を國家の將來に凝らすものゝ必然の義務である。予はこの堅實なる信念の下に、この義務の一端を果さんがためにこゝに先づ職業補習教育の強制制度を主張せんことを欲する者である。如上の言說が、徒らに危激に流るゝものに非ざることは、次に論述するところによつて普く讀者の承認し得ることであらう。予は現下の日本の教育の方針に關する缺陷の一端は之を既に述べたけれども、その實際上に存する誤謬に至つては具體的に未だ論及しなかつたのである。

　抑も補習教育の必要は、今更喋々を須ふるを要しない。その之をいかにして普及改善すべきかゞ刻下の問題であらねばならない。これを實際に徵するも我國に於て、特に戰爭以來重視せられ又戰後の教育經營としても、第一に注目せらるゝ所である。然しながら、その實績に至つては、未だ全く屑々微々たるものである。何が故にかくの如く振はざるかの理由は、固より一でないけれども、予は就中顯著なるものは、未だ教育者並に一般社會が、眞個に補習教育の實質と必要とを徹底的に痛感しないからであると思ふ。屢次。或は不斷にこれを口にしながら、實は一の口頭禪に了つてゐるがためであると思ふ。でなければこれが決行に際して橫はる多少の難關に逢着し、若しくは之を想望して、心中躊躇するがためである。而かもこれも亦要するに必要を痛感しないことに歸する。切迫的必要を感ずるならば、そこに何等の躊躇と逡巡とが許されるべきでないからである。換言すれば一刻の遲滯もなく、須く稅制を整理し新稅を求め增稅を行ひ此等緊要なる施設の資途に供すべきである。こゝに於てか、この必要感を痛烈ならしめ、徹底せしむることは、又吾人の最大急務と言はなければならない、予は自から再度の渡歐に際して、見聞したる事實を紹介し、これと日本の現狀とを比較對照することによつて直ちに讀者自身の判斷を覓め、一は以てこの緊急の責務に對する予の立場を明かにした

いと思ふのである。

五　瑞西に於ける强制的職業補習敎育

さて予は千九百十六年八月交、瑞西に遊んで、親しくベルン、チュリッヒ等の職業補習學校を參觀することを得、多大なる利益を受けたのである。人口八九萬を有するベルン市に於ける補習學校は、同市を距る三キロメートル以內に住居する手工、機械的職業、飮食店、宿泊所等に使役せらるゝ兒童の全部を收容してゐる。而して農業に從ふものを除いては、みなこれに就學するの義務がある。修學年限は三年乃至四年であつて、月謝を徵收せず、男生は每週晝夜三時間宛、女生は每週晝間に限つて同じく三時間半の授業がある。若し許可なくして缺席する場合には、必ず處罰せらるゝことになつてゐる。

恰かも予の視察した時の一組は、車輛工（Wagner）になるべき徒弟を敎授してゐたが、その敎師は同市に於て、自から車輛製造に從事せる人であつた。敎科書といふべきものは、該敎師が自から作つたところの車輛の圖面及びその說明書等であつて、講習生は二十人足らずであつた。

人口五十餘萬を有するチュリッヒ市に在つては補習生徒の全數は約六千人、內女生が約千二百人位とのことであつたやはり每週一度半、或は二度半登校し、少くとも每週六時間位の授業を受くることゝなつてゐる。講師は專任のものと囑託として來る者とがある。予の視た時は、恰かも一專任敎師が、模型を示して製圖の授業を行つてゐた。敎師は每週二十八時間の授業を擔任し、年俸五千四百フラン(近々五千八百フランに昇給する筈)を給せられてゐるといふことや、三十八歲にしては老けて見ゆる半ば禿げ去つた頭を撫でながら、切りに生活難を喞ちて家賃だけでも一年に一千乃至一千六百フランを要するなどゝ話してゐたのは少からず同情された。こゝでは校舍が狹隘なるために市內の各所に借屋をして授業してゐる。從て統一上稍々困難を感ずる節があるといふことであつた。こゝに一つ最も注意すべきは、これら兩市に於ける職業補習敎育が强制的に、義務的に行はれてゐることである。これは予がこゝに力を極めて論ぜんとする

所に外ならない。

六　獨逸に於ける强制的職業補習教育

抑も職業補習教育を義務的としたのは、其の端を獨逸に發してゐる。而して其の後これに倣へるものは、墺太利、瑞西を除いて英米の極一小部に之を施せるを聞くのみであつた。獨逸が何れの文明國にも先んじてこの擧に出でたことは、さすがに獨逸當局の卓見を語るものであるが、然らば獨逸がこれをなすに至つた理由は何であらうか。これ吾人のまづ究明すべき重要なる契機である。

抑も獨逸が義務一般補習教育の制を布くに至つたのは、一千八百七十六年の一月一日のことであつた。此補習教育は義務初等教育を終へて、中等の學校に入學せざる子女の便宜と利益とを企圖したのであるが、この制度の任意的なりし時代に於てはこれに就學するものゝ步合、僅かに五步乃至二割に過ぎなかつたのである。これは主として、雇主の好意、家庭の狀況、健康狀態、業務の性質、周圍の境遇、將來の見込み等によつて定まるものであるが斯の如く少數の割合に過ぎない爲めこの企畫は殆んど全く失敗に歸したと言ふべきである。こゝに於て竟に政府當局もこれを强制するの必要を感じ、斷然任意的制度を改めて義務的强制的補習教育を施すに至つたのである。

一千八百九十一年六月一日に獨逸政府の發布したる實業法に依れば次の如き規定がある。卽ち「雇主は十八歲以下の勞務者を、政府又は地方自治團體の設立せる補習學校に入らしめ、且つ、學習に要する時間を與ふることを要す」とある。又、市町村條令に於て「十八歲以下の男子には補習教育を義務となすことを得。地方自治團體の統一者は、其の條令に基き、前條の義務補習教育を遂行するに必要なる處置をなし、通學、訓練、操行等を確保するを以て、生徒の親權者、後見人、又は雇主の義務となすことを得。」「前條の規定を犯すものは、二十マルクの罰金又は、三日間の拘留に處す」とある。

而もこの規定が出來ても、尙永年月實施せざりし都市があつた、卽ちハムブルヒ市の如き其の一である。獨逸商務大

臣は、之に對し一千八百九十九年八月三十一日附を以て、次の如き訓令を發した。

「世上未だ强制補習敎育の、任意補習敎育に勝ることを知らざるものがあれど、從來の經驗に徵するに、抑もこの敎育たるや、市町村條令によつて强制することによつて、始めて其の目的を遂し得べきことを認むる、苟くもその成績を實際に擧げんとせば、須らく强制するを要する。然らざれば、生徒の出席するもの少く、十分の授業をなし難く、又、彼等は口實を設けて、就學を免れんとし、或はたとひ生徒は自から進んで就學せんとするも、雇主等は自家の利益のみを顧慮して、その生徒に十分の時間を割くことを爲さない、これがために、明敏なる頭腦を有し、實著勤勉なる精神を懷ける生徒すらも、竟に、その驥足を伸ぶるに由なくして終るの恐がある、されば須らく强制制度を徹底し、啻に生徒のみならず、雇主も亦すべて法律に本づく義務を課することによりて、始めて敎育の實を擧ぐることが出來る。

かくてこの制度の實績を收めんとせば、一方には、徒弟の從事する現在の職業、及び將來の境遇を參照して、其の學科を按排し、他方には、徒弟が十分なる敎育を受け得る時間を與ふることが肝要であつて、場合によれば、雇主の繁閑の都合に依つて、多忙の際には時間を減少し、閑散なる時に於て其の補講をなす等のことも爲し得られるのである。凡そ十四歲以上十八歲以下の徒弟敎育を目的とする、强制的補習敎育制度の効果は左の四點に基因すると稱してゐる。云々」

（一）雇主が徒弟敎育の必要を眞實に自覺すること。

（二）敎育を受けたる徒弟自身の享有する利益と滿足。

（三）徒弟の從事する職業に應じて專門的敎育を施すこと。

（四）義務初等敎育終了後敎育を繼續するの利便。

是等四點の充足は、斯の敎育の効果を擧ぐる基礎であつて、伯林、ライプチッヒ、ミュンヘン等の都市に見らるゝ實績は今日殆んど間然する所なきまでの狀態に至つてゐるのに徵しても知られることである。

七　英米に於ける補習敎育

獨逸に於て、義務補習教育の制度が、着々として進み、その成績も日に擧がるのを見て、英國に在つても、既に戰亂勃發以前より、これが實施の必要を論ずるものが起つたが、戰爭以後一層この叫びが大きくなつて來たのである。しかし依然として任意的に行はれてゐることは猶ほ日本のごとくであつた。これがために補習教育に就くものゝ歩合は、極めて僅少であつて、やはり以前の獨逸と同じく四分乃至二割に過ぎないとのことである。北米合衆國も亦未だ任意制度であるけれども、これを強制すべしとの論は日に昂まりつゝあるのである。最近までは英米共に極の一小部分だけ義務的補習教育を施せるのみの様である。

英國の現狀が何故に此くの如きであつたかと言ふに、英國では、夜間實業教育の制を布くに方つて、獨逸の如く、國家主義を基とせずして、寧ろ人道主義に據つた結果、其の生徒の意志を尊重するとゝなつた。而してその生徒の力量の如きも、種々雜多であつて、學科の選擇も亦彼等の隨意としたからして、未だ頭腦の幼弱なる生徒の常として、或は浮薄なる思想に迷はされ、或は營業方法の變更輿論の變化等の如き取るに足らざる原因に動かされて、一旦選定したる學科をも、容易に之を變じて極りないといふ風になり、自由の美名が却つて惡弊を生じ、今や終に國民の性情に食ひ込んで容易く拔く能はざるに至つたものであると論ずる者があつた。

或は又次の如く說を作す者があつた。獨逸にては、高等程度の教育に於てさへも、學科の選擇の自由は許されず、大學程度に及んで、始めて完全なる自由を與へらるゝのである。これを英國のと比較すればまことに大なる軒輊がある。英國に於ては、かゝる組織のために、實業補習教育の必要が十分に認識せられ難く、從つて雇主は學校の價値を知らず、これに對して極めて冷淡である。英國の都市、特に倫敦では、初等普通教育を終つたところの、十四乃至十五歲の少年が、將來の職業に對する明確なる觀念がないために、學校の選擇が十分でない。十八歲位に至つて漸く學科の選擇をなし得るに至るも、時既に遲く、十分なる學習の時間がないために、僅かの時間を以て、數多の技術を授くるところの工業學校に入るといふやうな弊害が生ずる、かくて自由制度の下には勞費の多きに比して、其の收め得る効果が乏し

いわけである。これを矯正するには。一に强制制度の制定によるの外はないと。

これに依て見れば、英國の識者乃至輿論が、實業徒弟問題の解決のために强制補習學校の急務を高調するに至れることを知ることが出來る。

果せる哉昨年八月一日英國文相フイツシヤー氏は教育制度改革法案を下院に提出した、本案は戰後教育調査會の報告を主として立案したるもので、實に千八百七十年以來の大改革なりと稱せられてゐる、其の改正案の要點は左の通りである。

一、五歲以下の幼兒に對して幼兒學校を設立すること。

二、義務教育年限を九個年とし五歲より十四歲迄の兒童をして總て義務的に登校せしむること、但し地方學務當局者の希望に依り義務年限を五歲乃至十五歲卽ち十箇年と定むることを得。

三、前項の義務教育修了後十八歲に達するまでは一個年三百二十時間より少からざる補習教育を義務的に受けしむること、但し十六歲まで完全なる補習教育を受けたる者又は補習教育卒業試驗に及第したる者は之を除外すること。

四、補習教育は體育に重きを置くこと。

五、十二歲以下の兒童は之を利益事業に使役することを得ざること。

六、十二歲乃至十四歲の兒童を勞役に服せしむる場合には嚴重なる制限を附すること。云々（以上文部省の報ずる所に依る）

以上は多少の修正を經たる後遂に可決するに至つた（フ氏自ら上出來なことをしたではないかと自慢した）と聞くのである。これを見ても今回の大戰亂の結果、英國の知識階級は少くとも一大覺醒をなし、大決心のもとに國家の爲めに努力しつゝあることが察知せられる。

八 我國の實業教育と獨逸との比較

翻て我が國に於ても其の眞相英國と略ぼ同樣の狀態にあるから、先年來設置されたる臨時敎育調査會に於ても義務的補習敎育の實施を希望條件として決議してゐる。然し未だこれを實行するの域に達せないのは眞に遺憾に感ずる次第である。去りながら過去に比すれば大都市に於ける補習敎育は可なり盛大となつた。然し我國にては何れも未だ任意的敎育であるから、仔細なる統計的調査を行ふときは、遺憾ながら其の數極めて微々たるものと言ふを得べく、補習敎育を受けさせたい大多數の我國民は殆んど受けないと言つてよい位である。苟くも我國運の發展を念とするもの丶、輕視すべからざる事柄である。

之に反し前項に說述せる所によつて見るも、獨逸が居常たえず如何に細心の注意を國民敎育の上に拂へるかを察知すべく、その戰前の强盛を致したる主因の一が、こゝに伏在せることを窺ひ得ると同時に我國の實業敎育に於てそこに如何なる一大逕庭の存するか、次の比較に依つてこれを讀者の前に披瀝したいと思ふ。

獨逸に在つても就中この補習敎育制度の完備してゐるのは人口約六十萬を有するミユンヘン市なること周知の事柄である。我國の六個年なるに比し其の年限に於て二個年永き八ケ年の義務初等敎育を了へたる滿十四歲の兒童は、更に進んで中等學校に入る者も鮮くないが、その大多數は、直ちに一定の職業に就くのである。そして其等の者は、日本ならば殆んど何等の敎育をも施さずに放任して置く。然るに、彼等はその實際に從事せる職業に對し更に三四ケ年間每週六時間乃至八時間位の强制補習敎育を施し、その職業に應じて特殊の敎育を施す爲め、クラスを細分してゐる。ミユンヘンではこれらの異れるクラスの數が五十六、伯林では實に一千百に上つてゐるといふ。そのクラスの主なるものは、鍛冶工、車輪工、運轉工、料理人、バター職人、給仕人、煙突掃除夫、火夫、靴工、活版工、園丁、理髮師、手傳職、商店の徒弟その他數多くある。

こゝに日本と比較して、懸隔の甚だしき現象がある。それは、ミユンヘンでも、伯林でも、此等の補習生徒中工業（雜業を含む）に從事する者に比して、商家の番頭や丁稚として商業に從事する者の割合は、僅かに其の二割に過ぎな

いことである(大正元—二年調)。今、日本の實業補習學校入學者に就いて見るのに、大正三年度に於て、

工　業…………一萬八百六十名。　商　業…………二萬百八十四名。

農　業…………拾三萬五百四十五名。

これによつて見れば、獨逸に於て商は工に比し二割に過ぎないものゝ數が、日本に於ては二倍となつてゐることが知れる。大體より見て如何に青年子弟が技術者たらんとするよりは寧ろ商業家たらんとするの念盛なるかが分る。此の如く商業家が多く技術者の少ない趨勢はこれを一面から見れば日本人の大多數は自から製作的作業によつて生きんとするよりは寧ろ代辨的な、口錢取風のことに從ふ傾向があることを證明してゐるもので日本の將來を悲觀せざるを得ない。

高等教育に於ても又然りで、獨逸の工科大學生は一萬六千四百餘名(大正元—二年調)で、法科大學生よりも約五割多い盛況である、日本はその反對の趨勢を呈し、我工科大學生は一千六百三十名(大正元—二年調)で、我法科大學生(官立私立共)の一萬一千六百五十七名なるに比し一割四分に過ぎない、而も獨逸の工科大學生の一割にしか當らないといふ情ない少數である(大正元—二年調)。即ち口の人たらんとするに比し手の人たらんとする者極めて少なきは甚だ憂ふべき現象である。

九　商、法多くして工少なきは如何に國運の發展を遲々たらしむる乎

抑も吾人の希望として、平和の際に於ては教養ある技術者及職工の力に依りて優良にして多額なる工業製品を得、以て列強間の貿易戰爭に勝を制し國運の隆盛を圖るにある。又一朝干戈を動かすの曉には工業動員に依りて武器及軍需品を始めとし、萬般の機械器具及船舶の製造建設等に何等痛痒を感ぜざるを期せなければならぬ、彼の英國が今回の戰亂に於て平時に比し約三十倍の工場を要したるに徴しても如何に教養ある技術者及職工の必要なるかを推知するに難くないのである、現代の趨勢として獨逸は工業軍隊を「進歩の武器」と名けたが、予の國家發展のバロメーターは科學者、技術者、教養ある職工其の他技術的能力を有する者の數であると斷言して憚らないのである。

試に其の影響する所を見よ、たとへば何が故に我國の發明其の數少なきか、彼の獨逸は人口六千人に對し一個の發明を成すに比し我日本は人口三萬五千人に對し漸く一個の發明を成すに過ぎない、世人は往々我國に發明の少なき故を以て我國民は創始的腦力を缺くものなりと臆斷するを聞くも、予はその主なる原因を以て科學者技術者職工等の獨逸のそれに比し極めて少數なるに歸せんとするのである、政治法律經濟文學其他形而上の學を修むる者に向つて發明を望むのは寧ろ無理なる注文である、然らば科學者、技術者、職工等に之を待たなければならぬ、然るにその數が前述の通り僅少なる以上はその割合上獨逸に比し發明の少なき何等不思議はない、換言すれば吾人の非は發明の頻出を希望しながら人爲的にその方法を盡さざるにあるかと思ふ、而して發明の少なき國家は勢ひ發展の遲々たるを免れない以上は此點から見ても科學の應用たる工業教育の特に必要なる多言を要しないのである。

又試に我國現時の工業を見よ、皆分立して個々別々に進まんとするの傾向を有するにあらずや、米國の如く互ひに合同して大會社となし其の基礎を强固にせんとするもの少きは手に依て生きんとする技術者職工の非にあらずして口に依て生きんとする政治法律經濟等を學修せる人士の過多なるに歸因する點がないでもない、試に工業會社の重役を見よ、技術者出身の者極めて少なく主に資本家たらずんば上述の人士である、獨逸のそれの如く其の兩者相半ばするとは其の効果を異にするそれ果して幾何ぞや、我國の如くんば自然技術を解するの明を缺き、徒らに形式に走り、事業發展の要點を逸するの恐あるは注目すべき事柄であると思ふ。

國運の發展は工業に待たざる可からざること明かなる今日の現狀に於ては、商、法に赴くものを轉じて工に赴かしめ、以て商業家の過多、技術者の不足なるの悲運を救ふの方法を講ずるは我國刻下の一大急務である、此意味に於て此種の學校經營に關與せる識者に向つて一層の努を乞はざるを得ないのである。若し夫れ現時の狀態に於て永く經過するに於ては國家や青年に對し憂ふべき結果を與ふるであらうかと眞に掛念に堪へないのである。

上述の理由を了解し易からしめんが爲め一箇師團の戰闘力を以て其の比較を試みん、今一師團が假りに二萬の軍人よ

り編成さるゝものとし、步兵の數約其の半分を占むるとせば、こゝに始めて所期の戰鬪力を發揮することを得ん、若し同じ二萬の兵士より成るも、步兵の代りに輜重兵輜重輸卒等が其半を占むるものとせんか。たとへ、兵士の數は同一なりとは言へ其の戰鬪力は殆んど言ふに足らざる貧弱のものと化するであらう。此の比喩と略ぼ同樣で、青年の數は彼我同一であつても、列強と反對の現象を呈し、修學上其の嚮ふべき方針を誤り、商や法に赴くもの割合上多きに過ぎ工に向ふもの割合上少なきに過ぐる我國の現狀に於ては、教養ある技術者職工等の數少なく從て其の手に成る製品の數量少なきは、勢の免れざる所である、之に反し徒に代辨的な口錢取としてこれを販賣せんとする人の過多なるは、價格不廉品質粗惡に陷るの嫌あるのみならず、種々の弊害を生じ却て產業の發達を阻害するの恐がある。此の如くんば個人として如何に大に努力するあるも、國家として得る所の效果之に副はず、國運發展遲々として振はざるの結果を來すべきこと、何等不思議はないのである。是れ畢竟世人一般が世界の大勢に通ぜず、島國的因習に捉はれ、其の病根に心附かないから來る所の現象ではあるまいか。須らく此弊風を改善せんが爲め、上下大に覺醒する所がなくてはならぬと思ふ。

一〇　獨逸職業補習教育に於ける公民學と其の經營

次に獨逸に於ける補習學校の教授について觀るに、特に注目すべきは、その公民學に重きを置けることである。抑も人として此世に生を享けたるものは、何等かの方法に於て、國家社會に貢獻する所がなければならない。こゝに於て人各々その適する所好む所に從つて、何等かの職業に從ひ、以て國家社會に對する本分を完ふすべき筈である。各自が選ぶところの職業は、たとひいかなる種類のものにしても、何れも國家社會に貢獻するものたる可き性質と使命とを有するものであるから、各自は徒らにその職業に於ける傳承的態度に耳從し、古老頑固なる親方式人物の頤使に默從することなく、よく國家社會の要求を察するの明を養いて、能ふかぎり大なる能率を表はさんことを力むべきである。「手足の職人」に終らずして、教養あり精練せられたる職匠たらねばならぬ。公民學は實にかくの如き國民として恥しからぬ職匠の素地を與へんがために授けらるゝものである。

次に公民學として生徒の從事せる職業の發達史の大要を授ける、これ各自の職業の社會的地位を自得せしむるためであつて、同時に、國家社會の爲めに獻身的寄與をなしたところの人物の實例を述べ、最後に國家に對する各自の權利と義務とを教ふることゝし、かくてこれらの基礎的知識乃至教養を施した上に技術を授くるのである。今、大工たらんとするものを教育するミユンヘン市の大工科について、その教科の實例を示せば、以上の如き基礎的教養の上に、徒弟入門、材料學、材料運搬、營業に關する一般教育、衛生、國家及地方自治團體が公共のために行ふ行政、實地建築學、建築業の價値、書式、手紙、商業作文、實業算術、製圖等のものを授ける。毎週總計三十六時間、三ケ年を期限としてゐる。これによりて見れば、日本の大工たらんとするものゝ修業と彼此雲泥の差があることが覗はれる。他の職業になると四個年の期限を要するものがある。これを軍人に比すれば、一は訓練せられたる精兵であり、一は教養なき器械的人間である。一は創作に生き、一は傳承に生きてゐる。その効果の大小、もとより多言を要しない。

試に見よ、最近の現象として我國職工の缺勤する者頓に二倍にも劇増せりと聞く、恐らく收入の大に增加せるに際し、義務的觀念を缺げるの餘り、其の收入を空費しながら座食せる者多きに因るものゝ如くである。又下婢等の如きも徒らに安逸なる家庭を撰み訓練修養の功を積むの念に乏しき者がある、又或る職業、たとへば菓子職の如き顏料の撰定其の他衛生上の知識を缺けるの結果、其の菓子を用ゆる者をして危險に陷らしむるの恐がある。又馬子の如きも一日五六圓の收入あるに醉ひ、幾日も其の業を怠るの弊を生ずるあるを聞く、又鑛山に於ける坑夫の如きも、收入增加と共に遊惰に流れ、缺勤者多く、從て鑛山として勞銀の支出劇增しながら却て產額を減ずるの珍現象を呈するに至つた。而も職業的に彼等を教養する爲め何等强制的教育機關の備はらざるは我國刻下の現狀である。

下婢と云ひ、職工と云ひ、將た又馬子と云ひ、坑夫と云ひ、雇主にして若し其の非を責むることあらんか、改悛の實を擧ぐることは愚か、却て彼の怒を買ひ他に轉じ去りて顧みざる恐がある、故に現時の雇主は所謂腫れ物にさはるの感を以て雇人に接せざる可からざるの情なき有樣たるを見るのである。

翻て我國の義務教育を見るに、獨逸の八個年なるに反し六個年なるを以て、滿十二歳にて其の業を卒ふるのである。此の如き若年にては學校に於て習得せるもの恰も夢の如く彼等の腦裡に記憶せらるゝのみにて十分了解するに至らないであらう。從てそれを實際に活用せしむるには甚だ不十分であるかと恐るゝ。若し滿十二歳より數個年間に亘り更に隨時教養を加ふるあらば、將に成熟せんとする年輩たるが故に、其の教ゆる所を餘程能く了解し、從て其の習得せし所を有效に活用せしめ得ると思ふ。此點から見ても補習教育の必要は明である。

次に獨逸の補習教育の經費は主に當該都市の負擔であつて、其の經費の半分位まで政府が補助してゐる。管理は實業家の委員と市當局者の手に委せられ、教師は實地の職に從ふ者の中より選拔せる者と、專務教師として聘せられてゐる者とがあり、中には大學出身も少からずある。

補習教育の强制制度の實施から、最も、打撃を被むるものは雇主でなければならぬ。從つて、彼等はその當初に於て可なり激しき反抗の氣勢を揚げ、後に至つても、私かに制度の不備に乘じ、若くは當局の眼を掠めて、この制度の埒外に立たんとしたのである。けれども、政府當局者の熱誠と、自治團體の努力とは、能くこれを討壓し、彼等をして、眞にその教育の本質と價値とを覺らしめるに至つたのである。こゝに於てか、今や彼等は自己の蒙を啓き得て、反對はもとより、妨害を加ふるものなく、却つて金品の寄附を申出づる者が多くなつた程である。これ亦、予が國民の反省熟慮を乞はんとする所である。

一一　職工及農民に關する彼我の差異と現代の兵士

實業補習教育の强制制度、予はこれを稱して「經濟戰に於ける徴兵制度」と名づけんと欲するもので、平和の競爭に於ける大切なる兵卒を作るのである、今や我國平和の競爭に於ける將校下士に當る者即ち技師技手はあるも兵士に當る者即ち教養ある職工は殆んど皆無と云ふて宜しい。我日本の陸軍は、獨逸制度に倣つた結果傳來の日本魂と相俟つて國威を顯揚せしむることを得たが、同じく獨逸制度に則つたわが國の教育が、上述の如く徹底せざる所あるは、眞に憾みと

すべきである。敎育界の他の方面に關しては暫らく言はず、我が實業補習敎育について見るに、特にこの憾が多い。これが實績を得んがためには、必ずや强制制度を布き、その實行を督勵せなければならない。今若し陸軍の兵卒をして志願制度に一任し去つたとせば如何。强國の實を擧ぐる能はざることは、多言を要せずして知るべきである。實業補習敎育に在つても亦同樣であつて任意制に放任する限り、敎養を與へんと囑望せらるゝ兒童の八九割以上も其の學校に入學しないであらう。精練せられたる工匠の得べからざるは、理の當然である。

予が極力この制度の設定を主張する所以のものは、獨りこれによつて從來輕視せられたる科學に對する國民の理解と興味とを昂進增大せしむるのみでなく直ちに國家民人の福利を增殖し國運發展を促進し得るの可能を包藏するからである。換言すれば、それは職工の精練敎養によつて、彼等の能力を大ならしめ、從つて科學と密接關係を有する生活の能率を加へ品質優良價格低廉を誘致し得るといふことに存するのである。

今工業從事員の總數を見るに、獨逸は全人口に比して四割五分、英國は其の七割である、中央報德會の統計に依れば獨逸の職工數は一千百五十萬人なるに比し日本の職工百十萬人と算せらるゝから、日本の數は獨逸の約一割に過ぎない。近來其の數の大に增加せる所ありとは云へ、恐らくは多くも全人口の約二割を出でないであらう、而かもその敎養の點について彼我多大の軒輊の存するがため、それらの人によつて作らるゝ製品について見るに、その品質、分量、乃至價格に於いて又多大の差異なきを得ないのである。即ち一は、少量の粗惡なるものを高價に出市し、一は分量の比較的精良なるものを低廉に提供し得ることとなるのである。

又、これを農作物について觀るに、獨逸は自國の農產を以て自足する能はざる程度に在り、日本も亦少しく足らざる有樣である。而も農耕に從事するものゝ數について言へば、水田でないとは云へ獨逸全人口に比し農民の數約三割であるに對し、日本は約六割餘である。この事實は抑も何を語るものであらうか言ふまでもなく日本の農夫は、同一の効果を收むるに約二倍の勞費を拂つてゐることである。換言すれば日本の農夫の能率の低きことを意味するのである。同じ

食ふ爲に約二倍の人が奔命に疲れてゐるとは大に改むべきことで、大和民族の大なる恥辱である。さればこの點に關しては、須らく農夫の幾人かを減じて、それらを工業の如き他の生産事業に從はしめることを緊要とする。つまり農耕の科學的改良を要する。蓋し、こゝに吾人の問題とする所は、單なる形式的數量のことに非ずして、實質的なる能率問題であるからである。卽ちこれがためには、土地の整理、農具の改良、機械力の利用、肥料の精選、種子の選擇等、總て科學的知識に據らなければならない。これらにして、適切なる解決を得れば所謂日本の農村問題、農民疲弊問題も案外に容易に解決され得べきである。今日農村問題の解決者乃至評論家中には農村子女の都市集中慾を非難し團體を設けて農村を離れざる樣に勉めてゐるの觀あるを聞く、這は所謂一を知りて二を知らざる者であるまいか。彼等の總べてをして、而して社會の注意をして今少しく科學的ならしめば、能く都會に赴く者も、田園に滯留する者をも、兩者をして滿足なる生活を遂げしめ、而かも國利民福を直ちに增進せしめ得ることとなるのである。而して吾人は、日本の現時の一大缺陷よりして、今日農村に於ける冗員（先に言へるところによつてその意を推想し得べし）を須らく工業界に投ぜしむべしと主張せんとするものである。況んや今日の戰爭は從前と異なり兵器の戰爭である、之を取扱ふの兵士は機械を取扱ふ腦力を有するものでなければならぬ、卽ち我國現時の農民では殆んど機械を取扱ふ腦力を有しないから、新時代の兵士として職工が大に適する樣になつたのである。單に國防上より見るも農民に機械力の利用を馴知せしむることは極めて必要となつた。それ此の如く兵士としても舊來の農民では不十分となり、寧ろ職工が其の資格を有する樣になつたのは現代の一大變化である。而も敎養ある職工の數多きに依りて望み得べき工業の隆昌は、實に國家の運命を、實質的に左右するものなることを思ふとき、特にこの感を深くせざるを得ないのである。而も我國が他の世界列强の間に伍して、富の程度が低く、國家生活に必須なる施設をすら爲す能はざるを思はゞ、吾人が居常坐臥の間に、省慮すべく、作爲すべき事の重大なるを感ぜざるを得ない。して吾人はこれらの點について、特に今日工業思想を徹底せしめ、工業製產物を豐富にすることによりて、この缺陷を匡救せんことを欲するのである。夫の國防問題の如きも、若し理化學を本

としたる工業の發達に依り富力の促進を圖るに於ては、そのこれを解決し、若しくは、その解決を容易ならしめることは決して難事ではないのである。

固より予は徒らに工業や農業の如き形而下學の應用のみを誇稱するものではない。他の數多の方面即ち政治法律經濟文學等の形而上學に於ても同じく改良發展を企圖すべきであるけれども、現下の國情よりして特に科學の應用中工業を誇張することの必要を感ずるものである。而してこれがためには、一面に於て、一大決心のもとに十分の費用を投じて是非とも職業補習教育の强制制度を設定勵行すると共に、他面に於ては、教育者(并びに一般社會の指導者)をしてこの主張の趣旨を痛感せしめ、延いて、一般にこの思想を徹底せしめこれに對する興趣を湧起せしめんことを冀はざるを得ない。

予は日本の教育が實業補習教育の方面、特にその工業方面に於ていかに先進國に比して後れを取るかの實情及其の不可なる所以を叙上數節に亘つて論述したのであるが、これを汎く日本の教育全體について言へば、我が國の教育は遺憾ながら迂遠なりとの非難を免れない。部分的の改善はこれを心にするもの莫きに非ざる如しと雖も、眞に經國的識見を以てこれに處するものは極めて少ない。世界の大勢と背馳して、生產的よりもむしろ消費的なる生活に赴かんとする國民生活を矯正せずして、これに準由せんとする傾向を有することは、眞とに歎はしきことである。

一二　我國の教育方針は果して徹底せる乎

第一に余輩の尠からざる疑惑の對象となるところのものは、我國の教育方針である。教育の趣旨は、畏くも、教育勅語に宣はせられてあつて秋毫の疑義をも挿む可らざるが、而かも之を實行するに當て幾何か能くこの趣旨を徹底せしめつゝあるかに至つては、遺憾の感なくんばあらずである。暫らくこれを教育せられたる青年子弟に就て見るに、その如何にも不徹底にして迂遠なる、將又遊戲的なる點に於て、不安なきを得ないのである。なるほど彼等多少の教育あるものには、社會の實生活に投じたる初期に於ては隨分猛烈なる活動にも赴くだらう。しかしそれがいつまでも持續する

か、彼等がその子を見、その孫を得るに及んで尙ほ能く從前の意氣と活力とを發揮し得るか、見よ彼等の多くは遺憾ながらその得たる時と富とを或は謠曲に、圍碁に、歌、俳諧に、或は骨董等に費すことを以て能事とするもの少なくないではないか、尠くともいつかは「運動は小兒らしい」との觀念に壓せらるゝではないか、且つ彼等の甚しきはかくの如き老後（又は壯時）の娛樂を以て高等階級乃至知識階級の占め得る獨舞臺なるかの如く得々然々たるものがある、幼時或は敎へられたる禁酒禁煙に對しても亦同樣の狀態である。夫のツェッペリン伯が老後の生活を飾るべく、飛行船の爲に、その晩年を獻げたるが如きを引用せずとするも、老後までも運動熱の盛なる歐米人、戰爭以前より禁酒を實行せる米人などに比し、如何にその差異の太甚しきや、歐米人の體格や健康狀態に比べて非常に劣等なる日本人たる以上はいやが上にも、これが改善を圖らねばならぬ今日に於て、かくの如き有樣とは實に情ないではないか。大澤謙二博士曰く我國犯罪の九割は酒に歸因すと、然も未成年禁酒法さへ行はれない樣な不徹底の狀態を見るも實に悚然たらざるを得ない。予常に靑年學生を戒めて曰く輕しく老人先輩を模倣する勿れ、老人先輩は過去の時代に於ける道德習慣等を基とせるもの多し、たとへ老人先輩が圍碁、謠曲、骨董、飮酒等に耽るあるも這は過去の道德習慣等に依るものなれば、將來ある靑年は毫もこれを咎めずして進んでこれを改むるに勇なれ、そこに文明進步が發芽し國運發展の基が樹立せらるゝのであると。固より趣味は個人の獨有すべきものであつて、敢て一般的にこれを强制し得べきに非ずといふも、而も個人の趣味はこれを敎養するの方法に從つて高下何れにも歸し得べきである。徒らに花鳥を翫び風月を侶とする如きことのみが高尙なる趣味ではない、否國家の將來までも考へ然る後これを撰擇する如き徹底的のものであつて貰ひたい。然るに日本に在つては前述の如きことを以て上流者のなすことの如く考へるのが久しい習慣となつてゐる今日に當つて尠くともこれが矯正に盡すことの足らざる如き有樣にあるの點のみ見ても現時の敎育は果して徹底せるものと云ふを得べきか。

人間の興味は、生活に密接することに於て、最も深刻であり、且つ最も豐富であり、持久的である、人生生活と隔離したところに求め得た興味なり娛樂なりは貧薄であり、皮相である。眞實に人間生活に滲透してこれを眞底から理解す

るものは、その興味を索むるに於ても決して後者でなくして、必ず前者である。日本の教育がかゝる人を作るに適せずして、寧ろ閑日月を弄ぶものを作る傾向あらざるなきか、換言すれば恰も外國の壓迫を受けざる富國の子弟を養成する場合の方法に傾けるの感なくんばあらざるは眞に慨ずべきである。これを矯正せんが爲には、須らく教育をもつと人生生活と直接せしむる工夫を要する。予が工業教育に關して說く所も、亦決して浮誇の言でないことは、これらの事情からも察せられる。

叙上の如き見地からして、少しく今日の小學校教科書を檢べて見たい。尤もこれは予の專門以外のことであるから、詳細に論ずることは出來ないが、たゞ折々見るところのものに對する印象を語るに止めよう。たとへば地理書について見ても神社佛閣とか、所謂名所舊跡といつたやうなものが、苟くも洩さざるやうにしてあるけれども、生產的な、興業的な方面の注意は著しく缺如してゐるやうである。

讀本について見ても、たゞ遊覽地の案內記のやうなものや、文章のために文章を綴つたやうなものや、今日の時代から見れば頗る考慮を要すべき樣な史話傳記類や、花鳥風月の閑文字等が比較的大部分を占めてゐるに對し現代生活並びに將來の生活の上に重大なる影響を有する科學的材料に乏しきが如きは如何。「日光山」や、「箱根山」のことは知らせなくとも炭坑鑛山等の著名なるものや電燈瓦斯等の如きものを初めとし製造工場等は知らせなければならないのであらう。人或はそは理科の教科に含まるべきものと言ふかも知れぬけれども、そこが問題である。同じ勞費によつても、其の效果を倍蓰すべき方策があるならば、それを撰むことは遙かに賢なる仕方である。畏くも教育勅語の聖旨が徹底せるならば、たとへば彼の民間に普及せる電燈をして、たとへ定額料金制に依るとは言へ、不用の際點火の儘放置して心附かざる如きことのあるべき筈はない、若しそれこれを放置せんか、國富の空費すること夥しきのみでなく、外人に對しても耻辱に堪へないのである。であるから教育者たるもの其の非なる所以を兒童に教へ兒童は之を父兄に傳へて其の弊風を一掃する位の勢でなければならぬ。然も此の如き實地問題に心附かないのは何故であるか。予の主張する所は即ち

徹頭徹尾こゝに存するのである。又讀本の何卷かに「世界の話」といふのがある。そこにも名所案内記的な敘述が少くないが殊に不可思議なのは、「北米合衆國は農商工業共に盛なり」といふ意味のことがあつて、進んで獨逸を述ぶるに至つて、單に「獨逸は學問の盛なる國なり」とあるのみである。北米合衆國が農業の盛なといふことや、獨逸を單に學問の國とのみ印象せしむることは果して如何。又善行者の模範とし、愛國者の龜鑑として示さるゝ例話の人物が、多くはみな貧苦の人であつたり、鰥寡孤獨であつたり、政治家とか軍人であつたりすることは如何、偉大なる發明家や科學者は尊敬すべき愛國者ではないのか。模範とすべき偉人ではないのか。試みに其の立身の理想を小學兒童に聽け、腕白なる男兒は大臣たらずんば元帥大將たらんとし、可憐なる女兒は慈善たらずんば看護婦たらんことを以て答ふるの少くないであらう。大臣大將慈善家看護婦固より必要であるが、是等のみより成る國家が存在し得べきか。科學者、技術者、教養ある職工又これより生るゝ發明家が何が故に我國に少ないか、此點から見ても推知せらるゝ。

又、圖畫について見ても、實生活と懸絶せる題材や手法を教授することに腐心してゐる、毛筆畫も水彩畫も共に決して絶對に無用とはいへまい。けれども、予はこれらよりも、もつと適切なもの〻存在を認めざるを得ない、基礎的圖畫用器畫の如き即ちこれである。これに關してはこゝに多く説明するの要もなく、例へば平面側面並に斷面圖の大要を知るでさへ、いかに實生活に裨益することの多きかは至明の理である。

更に教育の實際について見れば、夫の何れの學校にも見らるゝ遠足旅行の如きもこれを從來のまゝにするより外に途がないものであらうか。予は立所ろに否と答ふることを憚らない。徒らに歴史的の名所舊跡を訪ねたりするよりは、製作工場等の參觀をすることが、どれ程兒童將來のために益することが多いだらうか。こゝに炎暑と寒冷とを顧みる能はずして、營々孜々として働けるものを見るとき、又その諸種の設備に接する時、いかに人生々活が、勞苦と勤勞とに充てゐるか、又それがいかに科學的に更改されつゝあるかを直接に知らしむることが出來るではないか、そして教育と生活との關係を判然と覺らしめ得るではないか。

又、綴方などについて見ても、たゞ「某山に遊ぶの記」とか、何とかいふよりも、「一某工場を訪ふの感」といつた方がどれ位切實なる生活味を彼等幼き者の頭に染み込ませ得るであらうか。

數へ來ればこれを一々言ふの煩に堪へない感がする、と言つて、余輩は、決して歴史を無視し、風趣を無にせんとする者でない。けれども既に日本の敎育が從來並びに現在に於て、科學的、生活的方面に於て太だしき後れを取れるものあることを、眞に自覺する以上は、敢て反動的氣勢ならずとも、國家發展の必要上、特に專らこの方面に力點を置かんとすることは理の當然である。夫の力學的原則たる加速度の法則を信ずるものならば、實業敎育は勿論實業敎育の基礎たる初等敎育に對しても、今日いかほど高調力說するもなほ足らざるを感ぜざるを得ないのである。

一三　須らく强制制度を斷行すべし

世上或は予の此言說を目して、徒らに机上の空論を弄する者となし、その實行難を訴ふる者あらんも、そは多く憂ふるに足らないのである。見よ、今日民間に於て、一營利會社を經營するとして假りに五萬圓を投ずるのみにてはその利益を見ざるも、若し千萬圓を投ずるならばその利益甚大なりとすれば、如何に奔走しても投資者は必ず後者に赴くにちがひない。果して然らば、今國家將來の興亡に關する一大事業なるものに、その資財而も可能の資財を吝むが如きはあり得べからざることである。然るに今日まで事實に於てこれを見ざるは、未だ眞にこの方面を必要視する輿論の勢力の微弱なるがためである。この時に當つて、眞にこの必要を覺知するならば、經濟上の艱苦、敢て意とすべきではないと思ふ。又然あるべきものである。

固より敎育界全般に亘りてそれが刷新改善を圖らねばならぬが、叙上章を重ねて論述せる通り目下の最大急務として先づ指を工業敎育殊に强制的職業補習敎育に屈するのである。而して予は單に刻下の時局乃至過去の缺陷のみよりして立言することなく國家永遠の策としてこれを主張するのである。即ち都市たるもの須らく他の費途を節約し、適當なる徵税を行ひ、以てこれを斷行し、其の資に充て、更に政府も亦增税を斷行し大にこれを補助すべきである、校舍は先づ

小學校を利用し、成るべく夜間よりは晝間適當の時間に亘り義務的補習教育を行ひ公民教育を徹底せしめ滿十七八歳に至らしめたい、又これと同時に雇主の好意と各自の奮勵とを喚起し以て所期以上の好果を收めたい、又教師として專任者以外に專門家實際家等を聘し献身的出講を乞ひ、徹底せる教養を施すことにしたい、これ等が主要なる點である。

熟ら思ふに日本人ほど富の程度に比して、贅澤なる國民はない、彼等が漫然費消する財貨を、必須なる方面に轉ぜしむるに於ては、いかなることもこれを行ひ得るであらう。尠くとも國家が刻下の要求に鑑みて喫緊事となすものを施爲することは太だしき難事ではなからうと思はるゝ。獨逸がナポレオンの鐵蹄下に苦しめられた當時、及びその時の用意を思はゞ、將又禁酒會を斷行せる米國の意氣込を考ふれば、而も國運隆々たるの基礎がそこにありと信ずるならば、國民の奮起は至難でない筈である。英國宰相ロイド・ジョージは世界改造は至難事中の難事ではあるが、國民が戰爭中の四分の一の緊張味を見せて努力したら何でもないことだと豪語した。全くその通りに違ひはない。然るに我國は歐洲列强のそれの如き非常の困難に遭遇した經驗がないから、日清、日露の戰役や今回の歐洲戰爭ではまだ〳〵覺醒が足らないのである。在外同胞が歐米の實況を熟知し而も悲慘なる戰爭狀態を目擊し、想を故國に廻らすときは其の呑氣さ加減に憤慨するであらう。げに、一昨年余が歐米視察中在外の士が「日本は酷い目に遭はさねば到底目が醒めぬであらう」と嘆ずるを聞く一再でなかつたのを見ても、眞に殘念に堪へないではないか。苟も世界の新興國として、人も許し自も認むる日本が、徒に傳承の羈束に甘んじて、眞に新興の鋭氣を發する能はざるが如きは顧みて一大耻辱とせざるべからざるのみでなく、東洋に偏在するの結果不知不識不眞面目に陷るに至つては眞に遺憾の極である。

勞働組合公認問題

組合公認問題と勞働運動の危機

山川均

一

勞働組合法案が本年の議會に提出せられることは、殆んど疑ひなきもの丶ようである。組合の公認は、今や社會の有ゆる階級の輿論である。獨り勞働階級の要求であるばかりでなく、獨り第三者たる公平なる研究者の意見であるばかりでなく、資本家階級の間にあつてすらも、或意味に於ける組合の公認は、今や多く異論のないところである。

そこで此際、政府が組合法案を提出すれば、即ち此輿論に聽從した形となるものであつて、斯くの如く外觀は、政府をして其組合法案の美しき外皮のうちに、偶々有毒の餡を包んで、日本の勞働階級に嚥下せしめるをすらも比較的容易ならしめるものであることを忘れてはならぬ。輿論は一齊に、組合の公認を求めて居るけれども、然らば如何なる組合を、如何なる形式に於て公認すべきかに至つては、一般の輿論に明白な傾向のないばかりでなく、勞働階級の間に於てすらも、遺憾ながら確乎たる要求が現はれて居らぬようである。輿論は唯だ饅頭を求めて居る。之に如何なる饅頭を與へるかは、今や之を與へる者の判斷に一任せられて居る。吾々啻に餡の多少を氣遣ふばかりでなく、實に其中に、有毒物の含有せられざるか否かを危ぶむものである

る。

予は固より、組合の公認を要求する者の一人である。けれども公認を求めることの急なるが爲に、如何なる公認の饅頭をも、無批評に嚥下する事は公認せられざるの危險以上の危險であることを痛感する者である。世の中には、唯だ法律に依て公認せられさへすれば、組合の前途は光明に滿てりと考へる者があるやうである、如何なる國の勞働組合と雖も、斷じて法律に依つて生じた者ではない。否な各國の組合は、却つて有害なる法律の存するにも拘らず成長したものである。予は勞働組合法制定の陰に、或は日本の勞働運動に對する、一大危機の潛んで居らぬかを憂ふるものである。組合公認の聲を聞いて、日本の組合運動の爲に歡呼する前に、先づ此危險と禍機とを指ざして、勞働階級の爲に警鐘を打たなければならぬ。

二

勞働組合法の制定は、昨年の議會に於て、早くも多少の問題となつたが、當時床次內相を初め政府當局者の答辯は、徹頭徹尾、法律による組合公認の必要を認めずといふに在つた事は、何人も記憶するところである。床次內相は、本年二月三日の豫算委員第二分科會に於ける質問に答へて、『……勞働組合は……現行法規の下にあつては、禁止もせられず、又認められても居らず、政府としては殊更之を促進するの必要なかるべく、自然に任すを可なりと思惟す……歐米の例に徵するも、勞働組合は法によりて之を促進せしむると云ふよりは、寧ろ勞働者の敎育の進步に伴ひ、自覺して自ら組織するが當然なるべしと信ず』と云はれ、川村警保局長も之を註釋して、『……我國に於ては、勞働組合は之を禁止するの法令がないのであるから、其設立は全く自由であると云ふの外はない……我國の如く（勞働組合を）初めから禁止して居らざる國に於ては。故ら此勞働組合法を制定するの必要がなからうと思はれる……』と云はれて居る。（東京日々新聞二月十三日）

床次氏は『禁止もせられず、又認められても居らず』と云はれて居るが、法治國に於ては、苟も法律によつて禁止せられて居らぬ事實は、法律によつて消極的に『認められ』て居るものである。川村氏が之を註釋して『其設立は全く自由である』と云はれるの外なかつたのは、固より其の處である。

況んや川村氏は語を繼いで、『元來法令なるものは、事體を創造するものではなくして、自然に發生したる或る事體に對して

適用さるべき性質のものである。從て勞働組合の如きも、勞働者自身の自覺に依て出來、又其努力に依つて發達し、茲に初めて之に關する法令を見るに至るのではあるまいか：：』と云はれて居る。

之は確かに、一個の見識である。法律は勞働組合を創造するものではない。たゞ勞働組合てふ實際の事實を其儘承認すれば足るものである。否なそれすらも、組合を禁止するの法律を有せざる我國に於ては、全く無用の事である。勞働組合の『設立は全く自由』である。之は寧ろ當然の見解ではあるが、日本歴代の政府中、この最初の『平民内閣』を除いては、斯くの如き當然自明の見解にすらも到着し得なかつたのである。少くとも床次、川村兩氏の政治家的見識は、此當然の見解に依つて、確かに數段の高きを加へたと謂はなければならぬ。

そこで組合運動は『全く自由である』と云ふ見解に立つて、組合法の制定を、徹頭徹尾、無用とし、『自然に任すを可なりと思惟』した政府としては、唯だ爲すべきことは、組合の發達を不自然に妨げて居る、有ゆる障礙物を撤廢するの一事にあつたことは、固より云ふまでもない。從つて眞に政府が、誠實に『自然に任すを可なりと思惟』したなら、先づ何を措いても、勞働組合の發達を不自然に抑制して居る、治安警察法第十七條の撤廢を斷行すべきであつた事は、云ふまでもない所であつた。

然るに政府は、飽くまで治安警察法の存置に固執した。けれども政府が治安警察法の存置に固執したのは、之を勞働運動に適用する爲ではなくて、正さに之を勞働運動に適用せぬ爲に、其存置に固執したものであつた！。當時政府當局者が、治安警察法は『拔かぬ太刀』であると公言せられたことは、尚ほ吾々の記憶に新たなところであつて、政府はこの『拔かぬ太刀』の佩用を固執した筈であつたからこそ、輿論は暫く、路邊の小兒の竹刀木劍を歡迎すると同一の意味を以つて、政府の『拔かぬ太刀』の佩用を默過したのである。

政府の、組合法制定無用の主張には、斯くの如く一定の論理があり、確乎たる論據がある。然るに僅々數ケ月後の今日、其同じ政府當局者の口から、組合法制定の必要を聞くに至つては、何人と雖も、其動機の何づれにあるかを怪まざるを得ないところである。

三

然しながら、政府の謂ゆる『拔かぬ太刀』が、如何に日本の

勞働組合運動の發達を威嚇して居るかは、其後の數ケ月間の經驗が遺憾なく物語つて居る。獨り威嚇して居るばかりでなく、幾度びか勞働者は、鞘のまゝでも毆ぐられた。否な最近に至つては、政府が治安警察法の拔身を振り翳したことすらも啻に一再のみではない。

治安警察法の不適用が、既に恃むに足らずとしたならば、勞働組合を『自然に任す』といふ、消極的の組合公認も、亦た甚だ恃むに足らざるものである。從つて組合法を制定して、積極的に組合を公認することは、必ずしも謂はれのないことではない。そこで政府の豹變は、其動機の如何に拘らず、著るしき改過遷善であるとも謂ふことが出來る。

然らば政府豹變の動機を問ふことは、果して無用であらうか。予は否と答へる。何故ならば、政府の組合法制定の動機如何は、直ちに組合法の內容實質の如何を決定するものだからである。饅頭を與へられることは善き事であるけれども吾々は饅頭を與へるの動機も問はなければならぬ。何故ならば犬を養ふ爲に與へられる饅頭と、犬を殺す爲に與へられる饅頭とは、餡中の含有物に、大なる相異を有するからである。

然らば政府が、條理整然たる理論を基礎として、或は『信じ』或は『思惟し』た組合法制定無用の確信を、僅々數ケ月の間に放擲した動機は、果して何處にあるであらうか。一切の形勢は依然として數ケ月の以前と異らぬ。日本には依然として、組合を禁止するの法律は無いではないが、法律は依然として、團體を創造すべきものでは無いではないか。そして組合運動は、依然として、自然の發達に任すべきものではないか。日本の組合運動の、法律上の立場は依然として同一である。形勢には何等の相異がない。唯だ此間に唯一の相異を求めたなら、曰く勞働爭議頻發の一事である。罷工は到る所に起つた。サボターヂュは到る所に起つた。そして多くは勞働者の勝利に歸した。政府が桃太郞の鬼ケ島征伐の意氣込みを以つて、遙に米國三界まで勞働征伐の遠征軍を派遣して、八時間勞働の揉消しに苦慮して居る間に、勞働者は國際聯盟と、資本家政府の『勞働會議』との力を待つまでもなく、自己の實力と、直接の行動とによつて、到る所に八時間勞働を獲得した。先見なき政治家が、如何に此急轉直下の形勢に眩暈を感じたかは、遽然として浪花節は語られ侠客の召集せられた事によつても推知することが出來る。政府が今更ら『拔かぬ太刀』の拔身を眞向に振り翳して、勞働運動の大潮流に向ふに至つた一事は、明らかに此形勢によつて生

じた心機の一轉を物語つて居る。

本年二月三日の豫算委員會に於て、床次内相は、『……工場外のものが從業員を教唆誘惑せんとするが如き場合には、治安警察法第十七條を適用することあるべきも、工場内の者が相協議して首唱を遂行せんとするものに對してまでは、適用すべきものにあらずと予は思惟し居れり』と答へられ、此公約は近頃に至るまで、少くとも外觀上は遵奉せられて居た。然るに最近に至つて、頻りに十七條適用の不幸を見るに至つたのは、罷工そのものゝ性質が變化した結果ではなくて政府の心機一轉の結果であることは、何人も疑はざる所である。そして吾々は、治安警察法第十七條の運用に對する政府の心機一轉と、組合法制定に對する政府の心機一轉とを、全く無關係に見ることは出來ないと思ふ。

然らば政府の組合法制定の動機は、此勞働運動の潮流を助長せんが爲であるか、沮止せんが爲であるか。投げ與へられたる如何なる饅頭に對しても、必ず尾を振るかの如く考へるのは、日本の勞働階級を侮蔑することの甚だしいものである。吾々は饅頭を與へるの動機と毒物の有無を問はなければならぬ。

政府の組合法案の內容は、固より詳細に知ることは出來ぬが、法案の骨子として新聞紙の傳へるところに依れば、

（一）現在各工場に於ける職工組合を公認し、社團法人として登記すること。

（二）資本家と勞働者との間の、協調的機關を設置すること。

（三）勞働組合內に理事を置き、其理事長に依つて資本家對勞働者間の、有ゆる問題を處理解決せしむること。

などであつて、新聞紙は尙ほ之に對する某工場監督官の註釋を附記して、右の法案は『同盟罷工乃至は怠業を、他に波及せしめずして、其組合內（即ち其工場內）で解決して了ふ』ことを目的とするものであつて、政府は各工場の工場監督官をして、組合の理事長を兼任せしめる意向であると云つて居る。

之に對しては、他の新聞は川村警保局長の正式的の談話を載せて居る。川村氏は、同案の骨子は、民法の條規に據る社團法人と同樣、組合を自治的法人團體として認むるも、其基本團體は一會社若くは一工場を單位とする方針』なりと云ひ、『其説傳ふ

るが如く、官選理事長を任命するが如きことは全く無根なり』と辯ぜられ、『彼の縱斷橫斷に關しては、未だ纏りたる意見を有せず』と附け加へられて居る。

以上の新聞記事は、大體に於いて正確と見るべき理由がある。何故ならば、政府の公認せんとする勞働組合とは、要するに一工場又は一會社を限りての組合であつて、此方針は本春の議會に於ける、床次內相の答辯のうちにも、既に明白に現はれて居る。內相は二月三日の豫算委員第二分科會に於て、『若し工場每に資本家と從業者とが相調和して、事業の圓滿なる發達を期するために組合を組織せんとするならば、(政府は)之を歡迎すべし。之には別に法規(の制定)を要せざるべし』と明言せられて居る。そして此內相の言明は、前掲組合法案骨子の第二項(資本家と勞働者との間に、協調的機關を設置すること)と頗るよく照應を保つて居る。そこで一工場又は一會社に限つた組合は、前後を一貫した政府の主張と見ることが出來る。勿論本春の床次內相は『之には別に法規の制定を要せざるべし』と信ぜられてゐたので、從つて之は、唯だ政府の希望として現はれて居り、八ケ月後の內相は、『之には別に法規の制定を要す』と信ぜられて居るので、從つて之は、法案の骨子となつて現はれたゞけの相違であつて、其間には明らかに一貫した脈絡がある。即ち八ケ月前に於ける政府の『希望』は、今や國家の法律てふ形を取つて、日本の勞働運動の上に强行せられ、日本勞働階級の運命を支配しようとして居るのである。

五

政府の組合法案が、一工場又は一會社のみの組合公認を骨子とするものであることは、殆んど疑ひがないそこで川村警保局長が、『縱斷橫斷に關しては、未だ纏りたる意見を有せざるも……諸般の調査を完了したる上に縱橫何れを可とするかに關し、意見を決定すべし』と云はれたのは、斯くの如き一工場又は一會社の組合の、業別による聯合團體を許すべきか、それとも各種の職業を包括する、地方的の聯合團體を許すべきかと云ふ意味にも解せられるし、さもなくば、一工場又は一會社の組合の外に、別に縱斷橫斷いづれかの聯合團體を認めるといふ意味にも解せられる。けれども何づれの場合に於ても、『基本團體は一會社若くは一工場を單位とする方針なり』と云ふところを見ると、『自治的法人團體』として公認せられるのは、一會社又は、一工場に限るの組合であつて、聯合團體、又は一工場一會社以

外に亘る組合は、積極的に禁止せられぬ場合にも、之と同等の地位に立つて法人たる。資格を與へられないものゝように思はれる。

其れのみではない。政府の組合法案は、資本家と勞働者との間に、協調的機關を設置することを以て、第二の骨子とするものだと云ふ。川村氏の正誤的談話が一言この點に及んでゐない所を見ると、恐らく之は事實であつて、川村氏の談話は、當然消極的の肯定と見做さなければならぬ。殊に前項に引用した、今春の議會に於ける床次内相の答辯は、明らかに組合を以つて、資本家と勞働者とが『相調和して（資本家の）事業の圓滿なる發達を期する』の道具と見做されて居る。否な政府は、斯くの如き性質の組合をのみ、『歡迎』するものなることを言明せられて居る。この床次氏の言明に照して考へても來る可き議會に提出せらるべき組合法案が、『協調機關の設置』を骨子の一つとして居るものであることは、想像するに難くない。即ち此點に於ても。八ヶ月前に於ける政府の希望は、今や法律の形態を取つて、日本の勞働組合運動の上に強課せられんとして居るものである。

以上の如き構造を『骨子』とする組合が、果して勞働階級の所要に應ずるものであるか、そして斯くの如き施設を『骨子』とする組合法の制定が、果して機宜を得たものであるかは、暫く不問に附するとしても、斯くの如きは、政府が今春の議會に聲明したる、對組合方針と果して一致するものであらうか。

床次内相は、組合の發達は、之を『自然に任すを可なりと思惟』したではないか、そして川村警保局長は、『法律は事體を創造するものに非ず』と言明せられたではないか。そして之を理由として組合法制定の必要を絶對に否認せられたではないか、然るに政府は今や、其官僚的卓子の上で生みだした、自己の希望する組合の型の中に、日本の勞働運動を捻ぢ込まうとして居るではないか。之が果して自然に任すの所以であらうか。勞働運動の實力が——少くとも外觀的には——尙ほ極めて微弱であつた八ヶ月前には『自然に任すを可なりと思惟』し、『法律は事體を創造するの力なき』ことを理由として、組合法の制定に反對した政府は、勞働組合と勞働運動との實力が俄然として現れて來ると、逆さまに、勞働組合の自然の發達を打破して、自己に最も都合のよき組合を法律によつて『創造』しようとしかけて居るではないか。

六

組合は、勞働階級の自衛の機關である。從つて組合が、如何なる形態と構造とを取るべきかは、唯だ勞働階級そのものゝ必要によりて決定せらる可き問題である、政府が豫め計畫したる一定の類型のうちに、組合を押し込めようとすることは、如何に其動機が善意であつて、其方法が理想的である場合と雖も、原則としての誤謬であつて斷じて許すべからざる所である。

況んや政府の動機に至つては、大に批判を免れざるものゝあることは、先きに指摘した通ほりである。政府は斯くの如き組合法の制定を以つて、或は『事體』の承認に過ぎずと強辯するかも知らぬ。けれども、日本に組合運動の勃興したのは、極めて最近の事であつて、斯くの如き組合法は、此最近の『事體』の承認ではなくて、政府が組合法制定の必要を認める以前から抱懷してゐた先入の偏見に法律の形態を賦與せんとするものに外ならぬことは、前項の引用によつて一點の疑ひがない。八ケ月の前には、組合運動の實力は政府の目には倘ほ恐るゝに足らなかつたから、此偏見を法律として強制するの必要を見なかつた、故に於てか組合法の制定は必要のないものである、組合の發達は、自然に任すべきものである、そして法律は、自ら事體を創造するものに非ずといふ、其當然の地位に謙遜して居つた。然るに八ケ月間に於ける組合運動の『事體』は、事每に政府の先入の偏見に逆行した。組合の發達は、最早や自然に任かしてはならぬものとなつて來た。法律は『事體』を『創造』しなければならなくなつて來た！　斯くの如くにして生まれる組合法規は、之れ勞働者の組合の『公認』であらうか、それとも、政府の偏見の『公認』ではあるまいか。

七

斯くの如き動機によつて投げ與へられる饅頭が、當然其中に如何なる物質を含有して居るかを分析するのは無用である。

假りに政府の希望の如く、一工場又は一會社に限られたる、小組合のみが公認せられるものとすれば、其他の勞働團體は、單に法人として登記せられる資格のない任意の團體又は非公式的の團體として存在することが許されるか、それとも積極的に違法の團結と認めらるべきかは、今日の所では詳かでない。公認を經ざる非公式の勞働團體が、單に法人たる資格を持つことが出來ないと云ふことに止どまるなら、勞働團體に取つては、

深く意とするに足りないやうである。如何に浪花節と侠客とによつて、世界の大勢をヒツクリ返へそうとする程の哲人政治英雄内閣とは申せ、今更外國の手前、五十年乃至は百年の昔に立ち返つて、非公式の任意團體を違法とするまでの、無鐵砲な法律を制定しようとは思はれぬから、恐らく公認を經ざる團體も、事實上の勞働團體として存在を許されることゝ思ふ。けれども政府が既に、大なる決心を以て、或る特殊なる形式の組合を限つて公認するといふ事の裏には、其他の形式の組合の存在を、法律に依つて絶對に禁止しないまでも、少くとも其存在と發達とを歡ばぬといふ、恐る可き意圖の潜んで居ることは疑ふの餘地がない。そして其結果として、公認團體が多少の便宜を享有するの代償として、非公認團體が今日以上の壓迫を蒙ることは、今より覺悟しなければならぬ。

故に斯やうな意味に於ける組合の公認は、其名は組合の公認であるが、其實は非公認團體に對する不當の抑壓てふ刑罰によつて、勞働組合運動を、政府の注文通りの通路に逐ひ込まんとするものである。コオランか然らざれば劍か！　一工場一會社の組合か然らざればサーベルか！

そして政府の注文通りの通路が、恰かも資本家の注文通りの通路であることは固より偶然の暗合でなければならぬ。

勞働者の自衛團體を、一工場又は一會社に協定することは、資本家に取つては、注文通りの手に嵌めて勞働者と鬪ふことを意味して居る。サムソンの力は其頭髮にあつた如く、勞働者の力は其階級的の團結にある。一工場一會社の限界に追込まれた勞働團體は、頭髮を剃られたサムソンではないか。佛國の勞働總同盟は、世界中、最も有力なる勞働團體の一つに數へられて居る。佛國の全勞働者は約千一百萬人であつて、組合加入勞働者は約百萬人である。そして勞働總同盟に加入して居る勞働者に至つては、僅かに六十萬人を出でないと云はれて居る。而かも全勞働者の百分の一に足らざる勞働總同盟が、よく佛國勞働階級の中堅たる實力を有して居るのは、總同盟の結構が、産業別若くは職業別による、職工組合の全國的聯合會と、有らゆる産業及び職業の組合の、地方的の聯合會との、縱横兩樣の團結を基礎として居るからである。英國の職工組合に全國的の組織の缺けて居たことは、組合運動の大なる缺陷として、屢々先覺者の指摘した所であつた、組合公認の美名の下に、日本の勞働組合運動を其搖籃期に於いて、早くも資本家の最も熱望して居る通路に追ひ込まうとすることは、勞働階級に對する、許すべ

からざる罪惡であると謂はなければならぬ。政府は資本家の爲に、其牡牛に鼻環を入れるの任務を敢てするのであらうか。

八

政府は、牡牛に鼻環を入れることを以て滿足せず、親切ついでに、官選の理事長をし其綱を引張らせようとして居るとさへも傳へられて居る。吾々は、之こそ日本政府の態面の爲に、其誤解であることを熱望する者である。けれども、勞働者の選出すべき國際勞働委員の人選が、勞働者自身による選擧といふ名目と形式との下に、白晝公然事實上の官選代表者に落札した意外と不本意とは、日本政府が最近に經驗したといふことである。組合法規の如何によつては、組合の理事長が、政府の本意に反して、工場監督官の手に落札するような意外が生ぜぬとも限られぬ。

理事長官選の巷説に就ては、吾々は謹で川村警保局長の正誤を信用するものである。けれども、政府が勞働階級の自衛機關たる勞働組合を以て、却つて勞働協調の機關としようとして居ることは、蔽ふことの出來ない事實である。勞資協調とは、資本家と勞働者との『隔意なき了解』の別名であつて、『資本家と勞働者との隔意なき了解』の結果は、七十六人の勞働協議員の選擧に、僅かに九人の勞働代表者しか選出せしめぬものである。組合を以て勞働協調の道具とすることは、言葉を換へて云へば、組合を以て資本家自衛の機關とすることに外ならぬ。

政府が『資本家と勞働者との間に、協調的機關を設置する』の可否は、自づから別問題であるが、協調的機關の設置を骨子とする組合法規に至つては、恐らく前代未聞である。組合公認の交換條件として、勞働者の自衛團體を、强制的に『協調的機關』と結び付けようと謀るのは、半分の饅頭の交換條件として、野良犬の命を要求するに均しい欺瞞である。

然しながら、床次内相の理想が、『工場毎に資本家と従業者とが相調和して、（資本家の）事業の圓滿なる發達を期する爲に、組合を組織する』にあるとを知つたなら、政府の組合法案の目的が、組合を化して勞資協調の機關とするにあつたとて、固より怪むに足りないことである。けれども資本家の事業の圓滿なる發達の爲め勞働組合は、不幸にして、必ずしも床次内相の發明の天才を立證するに足りないものである。何故ならば、謂ゆる『黄色組合』なるものに於いて、外國人は夙に床次氏に先鞭を着けて居るからである。

獨逸の黄色組合は、自ら『平和組合』と呼び、純粋の勞働組合に對抗する目的を以て、資本家によつて創立され、資本家によつて財政上の支持を與へられて居る。一九一一年には、十六萬二千餘の勞働者が黄色組合に屬してゐた。

佛國では、黄色組合の運動は一九〇三年から一九〇七年の間に盛んに行はれ、ノオル縣の如きは、資本家が宗教家を手先に使つて、百個以上の小いさな黄色組合が組織せられたことがあるけれども床次氏の理想を其まゝに實現したものは、主として一八八二年から一八九〇年の間に行はれた、黄色組合の一種たる混成組合であらう。混成組合は初めは加特力教徒の手によつて創立され、大資本家によつて指導せられたものであつて、主として大工場の勞働者を戰鬪的の勞働組合から引拔いて、階級的の團結を妨げ、『事業の圓滿なる發達』を計らんとしたものであつた。混成組合は、當初は傭主と職工とを一つの團體に纒めて居つたが、後には勞働者のみの組合として、其幹部に傭主側の代表者（工場監督官に非ず）を入れることゝした。黄色組合は英國では、自由勞働協會の名で知られ居るし、米國にも此種の組合がある。此點に於ても外國人は、床次氏より少くとも三十年の長がある。

けれども外國の黄色組合は、直接資本家の着手した運動であつた。勞働組合によつて黄色組合を『創造』するといふ一點に於ては、床次氏は新案特許を要求するの權利がある。

九

斯ような勞働組合は、勞働者の自衛團體を牽制する爲に、消極的に資本家によつて利用せられない場合と雖も、最善に於ても畢竟共濟組合たるに終る可きものである。否な政府が認容せんとする組合とは、當初から共濟的の組合を意味して居たものと解すべき、理由がある。本春の議會に於ける、川村警保局長の答辯には、『……共濟組合の如きは必要にして……是等の組合が意志疏通の機關となれば結構なり、政府の好まざるは勞働組合、卽ちツレード・ユニオンにして、同盟罷業を武器として、資本家と爭鬪するを目的とせる沿革あり、此點は相當に取締らさる可らず』といふ看過すべからざる一節のあつたことを忘れてはならぬ。

政府は組合法を制定して『勞働組合』を公認せんとするものである。けれども『ツレード・ユニオン』に至つては、政府の好まざる所である、『相當に取締らざる可ら』ざるものである！

けれども、ツレード・ユニオンを外にして、何づれの所に公認すべき組合があるであらうか。英國の用語例によれば、ツレードユニオンとは一職業の職工の組合であつて、之を外にしては、諸種の職業の勞働者を包括る組合たる『ツレーズ・ユニオンがあるのみである。政府はツレード・ユニオンを『好まず』して、ツレーズ・ユニオンを『好む』のであらうか。ツレーズユニオンは畢竟、床次氏の謂ゆる横斷的組合である。ツレード・ユニオンに至つては政府の好まざる所であるとしたならば、政府は抑々如何なる勞働組合を公認せんが爲め其官僚的智嚢の底を叩いて、組合法規を立案して居るのであらうか。

政府が心機を一轉して、今や其『好まざる』ところの『勞働組合、即ちツレード・ユニオン』を公認するといふならば、吾々は其改過遷善を多とするものである。けれども政府の眞意が、組合の公認を利用して、日本の勞働問題運動を主として共濟事業の方向に導かんとするものであるとせば、組合公認は日本の組合運動を、大なる危機に陥入れるのだと謂はなければならぬ。

勞働組合の活動を、共濟的方面に誘導することにより、其闘爭的の活動を魔痺しようとすることも、必ずしも日本政府の新發明であるとは謂はれない。各國の政府と資本家は、多かれ少かれ、同様の經驗を持つて居る。

共濟的施設が、勞働階級の當面の必要であることは云ふまでもない。從つて失業手當の如き、疾病手當の如き、求職旅費支給の如き、若くは養老金の如き施設が、組合の一事業となつて居ることは固より當然である。けれども、組合の第一義は、資本家に對立して、有効なる團體交渉權を行使すべき、勞働者の自衛機關たる所にある、勞働組合の行動と精力とを、主として共濟的施設の方向に向けようとするのは、其結果に於ては、勞働階級の自衛機關たる組合を化して、資本階級の利潤擁護の機關たらしめるものである。何故ならば、失業の如き、職業より生ずる疾病、傷害の如きは、今日の生産組織の必然の結果として生ずる現象であつて、之に要する失費は、當然生産事業そのものゝ負擔すべき費目である。一時的若くは永久的の勞働過剰を意味する、謂ゆる產業の豫備軍は、現在の生産組織の必然の結果であると同時に、また必然の要件である。現在の生産組織は之なくしては存立することが出來ない。そこで現在の生産組織が、賃銀勞働制度を必要とする限りは、賃銀勞働制度が含蓄して居る失業其他の場合に於ける勞働者の生活費は、生産事業そのものが、當然、生産費目の一項目として負擔すべきもの

である。若し生産事業が國家の經營に係かるものならば、此費用は、當然國家の負擔すべきものであるし、一私人の經營にかゝるものならば、當然資本家が其利潤として收めて居るものゝうちから支辨すべきものである。そして今日の資本家の利潤の一部分——若くは大部分——は、實に此の當然の負擔の回避によつて生じて居るものである。

然らば此負擔は、何人が支辨して居るであらうか。或場合には、國家も其一部を負擔して居るし、また或場合には、慈善事業も其一半を負擔して居るだらう。けれども、勞働組合の共濟的施設の發達して居る場合には、是等の負擔は、主として組合の支辨する所となつて居る。言葉を換へて云へば、組合の失業手當基金は、組合員の平時の賃金の一部分を割いて、資本家の生産事業に要する産業の豫備軍（失業者）を維持して居るものであり、組合員の平時の賃銀の一部を割いて、資本家の當然に負擔すべき費用に當てられて居るものである。そこで組合勞働者の名目上の賃銀は增加しても、勞働者が此賃銀のうちから、組合の共濟施設の爲に費やすだけは、畢竟資本家に拂ひ戻して居るものであつて。實際上の賃銀は、遙かに名目上の賃銀の下にあることを知らなければならぬ。

斯ように、組合の共濟的施設が完全になればなる程、資本家の負擔は減少し、其利潤は却つて確實となるものである。けれども、共濟的施設の究極の影響は暫く措き、それが勞働者の當面の急である限りは、吾々は固より組合の共濟的方面を輕んじないものである。けれども勞働組合が、單に——若くば主として——共濟機關に墮落することは、畢竟するに勞働組合が、資本家の利潤擁護となり了するものであつて、勞働階級の爲に新境地を開拓す可き職分を有する組合は、却つて勞働者が現狀に適應し、現狀を鞏固にするの道具となり了したものと謂はなければならぬ。

各國に於ける資本家の階級、若くは資本家階級の利益を代辨する階級が、異口同音に勞働組合の共濟的方面を强調するの秘密は實に此の所にある。各國の勞働運動史は、資本家階級、乃至は資本家階級によつて左右せられてゐた政府が、有ゆる苦肉の策を廻らして、組合運動の活動と精力とを、共濟的施設の方向に誘惑しようとした、無數の實例を以て滿されて居る。

佛國の勞働組合は、共濟的施設を以て、少くとも組合の第一義としない事を特徴とするものであつて、多くの組合では、共濟的施設は獨立別個の經營に屬し、組合團結の基礎とはなつて

居らぬ。從つて是等の組合では共濟基金に加入すると否とは、組合員の自由に一任せられて居る。そこで佛國政府は組合運動を共濟事業の方向に誘致して、好戰的の傾向を緩和する目的を以て、失業手當基金制度を設けて居る組合の間に、年額十萬法の補助金を下附することゝしたが、佛國の勞働者は、此見え透いた誘惑に過られるほどに鈍感でなかつた。此補助金の結果失業手當を創設した組合は、殆ど皆無であつたと謂はれて居る。

十

勞働組合の公認を獲ることを以て、日本の勞働運動の爲に、鬼の首でも取る事のように考へて居る人がある。そして勞働階級の間にも、多少は同じ幻影に欺かれて居る人があるようである。吾々は固より組合の公認を當然の事として要求するものである、けれども治安警察法の撤廢をすらも伴はぬ組合の公認に、果して何れだけの價値があらうか。組合の存在を公認せられて、組合の行動を束縛しておく組合法案に對して、日本の勞働階級は、果して有難た涙を落ぼすものであらうか。

況んや當世の世の中には、如何なるものにも、只のものはない。與へられるものに對しては、何等かの形で、代價を要求せられることを覺悟しなければならぬ。日本の勞働者は、兩脚を縛つておいて、歩行の公認を與へられることに對して、何れだけの代價を支拂ふの覺悟があるであらうか、否な、與ふるは往々にして取らんが爲である。唯だに取らんが爲であるばかりか、往々にして、與ふるものよりも多くのものを取らんが爲であることを忘れてはならぬ。

佛國では、一七九一年五月の制定に係はる、有名なル・シャプリエー法によつて、勞働組合は絶對に禁止せられてゐた。此法律は、一八一〇年の刑法の一部改正と・一八三四年の法律によつて一層嚴酷を加へたにも拘らず、勞働組合の運動は益々根帶を張り、今や其勢ひは沮止すべからざるものとなつた。そこで一八七六年には、この既成の『事體』を承認する代價として、勞働者に不利なる交換條件を附してル・シャプリエー法を廢止しようとする、ロクロアの法案が議會に現はれた。一八七六年には政府もまた自ら進んでロクロア案と略ぼ同一の法案を提出したが、何づれも通過を見なかつた。

ル・シャプリエー法が廢止せられて、佛國の組合が公認せられたのは、一八八四年三月二十一日を以て發布せられたワルデ

ク・ルソー內閣の法律であつた。ワルデック・ルソーの說明によれば、組合は最早や解散することは出來なかつた。そこで此法律は、寧ろ之を公認して、『社會的平和を維持するの道具とし』勞働者の勢力を團體組織の方向に『排泄』せしめる爲であつた。一八八四年の法律の要點は、(一)ル・シャプリエー法の廢止、刑法第四百十七條の廢止、刑法第二百九十一條乃至二百九十四條を勞働組合に適用せざること、(二)同職者の組合は、二十人以上の會員を有する場合と雖も、政府の許可を要せざること、(三)組合は工業上、商業上、農業上の、經濟的利害の硏究と擁護を目的とすること、(四)組合は、經濟的利害の硏究と擁護の爲に、自由に他の組合と共同行爲を取り得ること、但し是等の組合の同盟團體は不動產を所有し、又は法律上の責任者と爲り得ざることなどであつて、此法律によつて、佛國の組合は、先づ大體に於いて、實際上の事體を其儘承認せられたものであつた。

斯ように一八八四年の法律は、『事體』は最早承認するの外なかつたから、止むを得ずこの『事體』を承認したものであつたけれど、それすらも決して無代價ではなかつた。此饅頭の中には、慥かに毒藥があつた。即ち一八八四年法は、その『骨子』の一つとして、組合規約と役員名簿とを、官廳に提出すべきことを命じて居る。此條項の目的が、組合運動中の活動分子の姓名を、絕えず官憲の監視下に置くことにあつた事は云ふまでもない。佛國の組合が、一齊に一八八四年法に對して、反對の聲を揚げたのは之が爲であつた。

十一

其名聲に於いてル・シャプリエー法を凌駕する英國の團結禁止法は、一八二四年に、フランシス・プレース、ジョセフ・ヒューム等の努力によつて一部の廢止を見たが、一八三四年には、再び其中の一部分の復活を見た。一八六九年には、勞働組合運動の友人、フレデリック・ハリソンの起草に係はる法案が、マンデラ、ヒューズの二人によつて下院に提出せられ院外に於ける組合運動の壓迫によつて、第二議會の開會にまでは漕ぎつけたが、政府は明年、政府案を提出すべきことを公約して、ハリソン案の握潰しに成功した。次期の議會には、政府は公約履行の意はなかつたが、組合界の形勢は最早や回避を許さなかつたので、內務卿ブルースは急遽、政府案を議會に提出した。

此法案によつて、組合は如何に廣濶なる目的を有する、合同、若くは聯合團體でも、悉く公認せられることゝなり、其規約が刑法に抵觸せざる限り、一切の組合は、登記を受くるの權利あるものとなつたばかりか、組合の登記手續によつて、組合の基金を保護することが出來ると同時に、組合に對する訴訟により組合基金を以て損害賠償に應ずるの責任なきものとなつた。

此法案は、縱斷橫斷、有ゆる勞働者の團體を合法としたものであり、正さに當年の『事體』を其まゝに承認したものであつて、資本家側からは無用の讓步として、猛烈な攻擊の聲が揚げられた。けれども其れにも拘らず、此公認は決して無代價の公認では無かつた。英國運動史の著者、シドニイ・ウエッブの指摘して居る如く、勞働者の立場から見れば、此法律は、一面に於ては團結禁止法を撤廢しつゝ、而かも他方に於ては、新たなる刑法を以て之に代へんとしたものであつた。其第三項は、『强制の目的を以てする暴行、脅喝、干涉は嚴刑に處すべき事を規定したが、是等干涉、妨害、脅喝、脅迫などゝいふ舊團結禁止法の文字は、定義も制限もなしに、全て其儘に襲用せられ、且つ同盟罷工中の「偵察(ピケッチング)」は、或人物に「絕えず尾行」し、又は其所在の家屋を「監視又は包圍し」、或は斯かる家屋に接近する事等を、總括的に禁止することにより、明白に干涉又は妨害の條項中に含まれてゐた』。それのみではない。此法律は『平和なる勸說によつて、合法的の團體に加入を勸めることを、明白に合法と認めた一八五九年の法令』をも廢止した。ウエッブ氏の云つて居る如く、プルース法案の第三項は、『法律に何等の變更をも試みんとするものではなく……却つて過去或年間、職工組合主義者を惱ました種々なる裁判所の判決を綜括して、一つの法典としたに過ぎなかつた』。斯ように一八七一年の謂ゆる完全なる組合の公認は、要するにウエッブ氏の指摘した如く、『右の手で與へたものを、左の手で引き込ます』ものに過ぎなかつた。抗議の聲は、倫敦勞働評議會を中心として、英國の全組合界から揚げられ、全國組合大會は、プルース案が恰も下院の本議に上程せらるべき三月を期して、倫敦に開かれた。

『法律は事體を創造するものではない。』何づれの國の政府も最後の瞬間までは勞働組合の存在に抗爭した。そして愈々旣成の『事體』を承認するの外に途がなくなつた時、初めて組合を承認した。組合法の制定せらるゝ前に、勞働者の組合は、有害なる法律を冒して成長した。そして法律が之を公認する以前に於て、旣に分認せざる可らざる實力となつてゐた。組合の公認

は、與へられたるものではなくて、寧ろ自ら造つた事實であつた。政府は唯だ、此の事實の前に、當然の事をしたに過ぎなかつた。否な避く可らざる事を、避く可らざるが爲に、餘儀なくさせられたに過ぎなかつた。それにも拘らず。各國の政府は、此當然の事をも、決して無代價ではしなかつた。彼等は組合公認てふ美名を好餌として、勞働者をして高き代價を支拂はせようとした。組合公認の立法が、勞働者に與へる爲めではなくて、勞働者から取らんが爲めの狡猾なる手段として利用せられた事實は、各國の勞働運動史に、幾多の類例を有することである。

日本の組合法に至つては、若し新聞紙の傳へる所を以て事實であるとすれば、『事體』の承認ではなくて、事體を『創造』しようとするものである。現在の勞働團體を事實として認めるものでなくて、現在の事實を根柢から覆へさうとするものである。一片の法文によつて、日本の勞働運動の歷史を抹殺し、新たに日本の勞働運動を、政府の『好む』がまゝに書き替へようとするものである。

一八七一年のブルース法案は、『左の手で引つ込ませたには相違ないが、兎も角、右の手では與へる可きものを與へて居る。當時組合運動界に大なる勢力となつてゐた合同組合は、初めて此法律によつて、組合基金の法律上の保護を得ることゝなつた。然るに日本の組合法案は、何物をも與へないばかりか、持つて居る僅かのものまでも奪はんとするものである。否な共有する、最も重大なものを奪はんとするものである。一工場又は一會社に限られた、無害無力なる組合は、此法律によつて財團法人となることが出來よう、けれども之が爲には、日本の勞働組合は、何づれの國の歷史にも類例のない、法律によつて定められた、勞資協調の機關となり、資本家の『事業の圓滿なる發達を期する』の道具となり、最善に於いても、勞働者の自衛團體たる本來の意義を棄てゝ、資本家の利潤を保障する爲めの、共濟組合となり了せなければならぬ。日本の勞働者は、組合の公認を買ふ爲めに、其代價として勞働組合の精神を支拂ふことを肯んずるであらうか。組合公認てふ一杯の羹の爲めに、勞働階級の相續權を賣る事を肯んずるであらうか。

十二

日本の勞働組合運動は、今や一大危機の前に立つて居る。日本の勞働者は組合公認てふ一杯の羹と、勞働階級の運命との間

に、今や責任のある選擇をしなければならぬ。そして其選擇は獨り一部の勞働者の利益ではなくて、勞働階級全體の利害に係はるものであり、獨り現在の勞働階級の利害のみではなくて、日本の勞働階級の、永久の運命に係はるものである。他の事情が同一であつて、唯だ組合の公認せられると公認せられぬのと、何づれが良いかと云へば、云ふまでもなく公認を得る事は利益である。けれども法律が組合を公認するといふことゝ、資本家が組合を承認するといふことゝは、全くの別事であることを記憶しなければならぬ。殊に組合禁止の法律のない日本に於ては、組合の公認とは、畢竟、組合が財團法人として登記せられると云ふだけの事である。法律が勞働組合を法人團體と認めるといふ事は、資本家が勞働組合に對して、團體交渉權を認めるといふ事とは、全くの別事である。組合が法人の資格を得ることとは、固より多くの點に於て有利である。けれども、眞に組合の生命となるものは、法人の資格ではなくて、資本家に對して團體的交渉の權利を確立することとである。

組合に法人の資格を與へるものは法律であるけれども組合に團體交渉權を與へるものは、特り組合の實力である。然らば政府の勞働組合法は、果して如何なる實力を組合に與へるであらうか。政府の組合法案は、第一、組合を一工場一會社の範圍に限定することにより、第二、組合を協調機關に結び付けることにより、第三、組合を共濟事業の方向に誘致することにより、組合の自衞的實力を制限する事を目的とするものである。組合の實力は、其内部の組織と結構とに懸ると共に、其行動に懸るものである。然るに治安警察法の存置は、組合の行動をして、合法的には殆ど全く不可能たらしめて居る。組合に行動の自由を與へないで、たゞ組合を法人として登記簿に登錄する謂ゆる『公認』なるものは、餘りに勞働階級を愚弄した見え透いた餌餌である。然り其餌の陰には、惡意ある釣針が閃らめいて居る。

十三

一八七一年の法律によつて、英國の勞働組合は種類の如何を問はず、齊しく法人の登記を受け得ることゝなつたが、實際に於ては、英國の組合は悉く登記を受けて居るものではない。登記の必要は、主として組合基金の保護を目的とするものであるにも拘らず、現に最も大なる財力を有する組合にして、法人の登記を受けないものもあるし、最も有力な組合で、今尙ほ任意

の團體に止どまるものが少くない。

法律は、既に生じた『事體』を承認し確定する。法律の効用はこゝにあるけれども法律が一度び一定の事實を承認し確定すると勢ひ其事實の進展を妨げるものとなる。法律の弱點は實はこゝにある。法律は固定し、事實は流動する。組合法が組合運動の事實を、たゞ其有りの儘に承認した場合に於てすらも、組合運動が其後の進展をする爲には、法律との間に多少の摩擦を免れない。そして一度び制定せられた法律を、新らしき事實の進展に適合するように改修する爲めには、相應の時日と、相應の努力と、相應の精力の浪費と犠牲とを必要とする、況んや組合法が、事實を其有りの儘には承認しないで、却つて現在の事實を根柢から覆えして、組合運動を或る特定の方向に誘致する爲めに、或る豫定せられた偏見に從つて制定せられるとするならば、日本の組合運動は、此不利なる境遇の下に、多年の精力を浪費し、多大の犠牲を拂ふことを覺悟しなければならぬ。日本の勞働組合運動が、斯くの如き法律の制定を未發に防止する爲に、善意の努力を致さなければならぬとは云ふまでもない。

政府案の内容は固より不明である。來るべき議會に果して提出を見るかさへも不明である。そして組合法に對する運動の、最も効果のあるのも亦た此時である。今日に於て日本の勞働階級が、組合運動の完全なる解放に對して、明白にして有力な要求を提示しなかつたなら、誤れる組合法規の制定の爲めに、日本の組合運動は、永久に恢復す可らざる損失を蒙るに相違ない。

今や誤りたる組合法の制定は、日本の勞働運動の將來を脅かして居るばかりでなく、現在成立して居る勞働團體は、當面の存在をすらも脅やかれて居る。日本の組合運動は、其揺籃時代に於て、今や大なる危機に面して居る。そして現在の勞働團體が如何にして危機に應接するかは、少くとも今後十數年間に於ける、若くは數十年間に於ける、日本の組合運動の運命を決定するものである。

日本の組合運動を、能く此危機から救ふものは、明確な勞働階級の意志の表示と、有力なる行動である。少くとも第一着の運動方法としては、健全なる勞働組合協力により、全國組合會議を開催し、若くは組合聯合の主催によつて、全國勞働大會を開催し、組合法規に對する日本の勞働階級の要求を表示しなければならぬ。組合法規の問題は、決して特殊の勞働團體の利害に關する問題ではなくて、全ての勞働團體、否な全ての勞働階級の問題である。苟も勞働階級の利益を代表する勞働團體は、有ゆる情實と行掛りとを棄てゝ、互に提携して此大なる危機に當面するの誠意と、雅量と、勇氣とが無ければならぬ。勞働代表問題によつて、僅かに階級的聯合運動の第一歩を學んだ日本の組合はこのより大なる問題によつて、更に大なる事を學ばなければならぬ。(十月十九日)

勞働組合の諸主義とその公認問題

室伏高信

(一)

勞働組合は産業革命とともに必然的に存在するものである。各國の歴史はみなこの事實に裏書きを與へてゐる。この必然的事實はたゞ必然的の事實としてのみ受取ることができる。日本においても、既に産業革命が行はれてゐる以上、勞働組合が發達すべきことは自然的必然的の運命であるのみならず、この問題は事實によつて解決されてゐるともいふことができる。國際勞働會議に送るべき勞働者側の委員の選任に當り、結果は桝本某のような資本家によつて瞞過されることとなつたにしても、またその選定委員なるものが、多くは御用委員と稱すべきほどのものであつて、この點についての現内閣の態度は、遺憾なく資本主義の代辯者としての眞相を發露するに至つてゐるのであるにしても、兎も角も、勞働組合としての友愛會及び信友會の存在を是認し、それの代表者を選定委員のうちに加へたことから見ると、政府も——資本主義の代辯者としての原内閣も、既に勞働組合の存在を公認したことといはなくてはならない。否如何なる資本主義の内閣と雖も、この現前の事實と時代の當るべからざる勢とに對して、事實を事實として、ある程度までこれを正直に受取らなくてはゐられなかつたのである。それを受取るとを拒絶したものは、平常勞働者の味方であるかのごとくに裝つてきた諸新聞紙である。彼れは新聞職工罷工事件に際して職工團體の存在を容認するとを拒絶して遺憾なくその資本主義者としての眞底の精神を發揮するに至つたからである。しかし現代の社會の一部特に支配階級またはその代辯者の間において如何なる思想、如何なる態度が存在するにしても、必然的の事實——資本主義のもとにおいての勞働組合の存立と發達との事實を否認することは許されるものではない。政治家がこの厳然た

る事實を否認すれば、その政治家が現代から驅逐され、法律がこの事實を否認すれば法律がその威力を失墜し、その威信なき法律に強いて威信あらしめようとすれば社會的不安を増大し、國家的統制を困難に陷らしめるに過ぎないものである。

（二）

勞働組合が最も早く公認されたのは英國である。これは英國が世界において最も早く産業革命が行はれ、最も早く資本主義が發達した結果であつて、その一面においては産業革命と勞働組合との必然的關係を證明してゐるものであるとともに、その他の一面においては、ヒューム等のやうな先見の明ある政治家の存在してゐたことの結果でもある。それに對してフランスにおいては勞働組合の公認されることが非常に遲かつた。英國に比べると六十年間遲れて居つた。このことは、フランスにおいて資本主義の發達が甚だ遲かつたことの結果であつて少しも怪しむことを必要とするものではない。こゝに注意を要することは、勞働組合公認の最も早やかつた英國において、勞働組合が漸進的の發達を遂げたのに對し、それの公認の甚だ遲かつたフランスにおいて、勞働組合運動が革命的サンヂカリズムの運動となつたことである。フランスにおいて勞働組合 Syndicat の公認されたのは一八八四年であるに對し、革命的サンジカリズムの淵叢としての勞働總同盟 Conféderation Générale du Travail の成立したのが一八九五年のリモーヂの會議である。勿論フランスにおいて革命的サンヂカリズムの發達したことは、勞働組合の公認が遲かつたことの結果として見ることはできないにしても、革命的サンヂカリズムの發達の主要なる原因が、政治家の不信に原因してゐることの事實を否むことはできない。政治が勞働運動に滿足と感激とを與へない時に勞働運動が革命的となることを餘儀なくされることは、一九一一——一三年における英國勞働不安の歷史によつても明らかに裏書されてゐる事實である。われ等はその何れをとるべきか、即ち勞働運動に政治的滿足を與ふべきか否や、この點は單に政治家と稱する資本主義の職業的擁護者の諸君の反省を促すことに止めて置きたい。

（三）

勞働組合が公認されべきものであるとすれば如何なる勞働組合が公認さるべきものであらうか。原内閣の態度は、大體にお

いて謂ふところの『縦の組合』の主義に決定してゐるらしい。『縦の組合』のプロパガンヂストの隊長としての床次内相が、この方面についての現内閣の指導者、表面だけにても指導者である以上、われ等は斯樣に期待することに少しも不合理なことはないと信ずるものである。また十月十六日の諸新聞紙に發表された警保局長の意見によつて見ても、この點は既に現内閣の方針として確定されてゐるものと思はれる。その方針可なるか。またこれに對し現存の勞働組合としての友愛會及び信友會または大阪鐵工組合のごときものは、政府の『縦の組合』に對して『横の組合』として存在してゐるようである。何れにゆくべきか。

（四）

この問題に答へるためには、われ等は勞働組合主義の歷史的發展についても、また現存勞働組合の諸主義についても一應考量して置く必要がある。勞働組合主義の發達については、私は既に詳細に說述してゐる（拙著『社會主義批判』第五章參照）からこゝにこれを繰返すことは避けるが、この勞働組合主義の發達の歷史のうちにおいて第一期を劃するものは大合同主義（Universalism である。それはロバート・オーウェンによつて提唱されたものであつて、英國において先づ發達した。Grand Nationalがこれである。それは一八二〇年代から同四十年代に跨つて英國の勞働組合運動を指導したものであり、それが米國に輸入されて『ナイツ・オブ・レーヴォア』となつた。『ナイツ・オブ・レーヴォア』The Nole Order of the Knights of Labourは一八六九年に組織されたものであるが、その前年即ち一八六八年には獨逸においてもこれと同樣の趣旨のもとにオーウェン主義の組合Gewerks Chaftbund が組織された。こうして英獨米の各國を通じてその勞働組合の第一期を劃したものはロバアート・オーウェンの主義である。それの特質とするところは勞働者をたゞ勞働者としてのみ觀念し、職業產業または工場、會社等によつて區別しないことである。さうして勞働者といふことの標準によつて凡ての勞働者を結合することである。即ち勞働階級の無差別的大同團結を期するのであつて、その目的は階級鬪爭である。日本に現存する勞働組合の代表的のものとしての友愛會は、その九月の組織變更によつて大體この大同團結主義を奉じてゐるようである。彼れは既にその資本家的の臭味を脫したといはれてゐる。その點において一大進步である。即ち資本家的臭味か

ら一歩を進めて彼れの組合を階級鬪爭の機關とするに至つたからである。資本家的臭味から、或は溫情主義的臭味から、社會主義的勞働組合へと進化するに至つたのである。この點は日本の勞働組合運動のうへにおいて一時期を劃するものであるといふことができる。しかしロバート・オーウエンの大同團結主義は既に倒壞した、それは英國においても、獨逸においても、みな失敗の歴史を繰返した。素より近時の勞働組合運動はある意味においてロバート・オーウエンへの復歸を要求してゐるといふことができるにしても、それは決してオーウエンそのまゝへの復歸の要求ではない。『カントに還れ』の聲が單に『キョーニヒスベルヒの哲人の書いたものの文字通りの主張に還らんとする』の要求でないごとく、『オーウエンに還れ』の要求もまた決してオーウエンそのまゝに還らんとするの要求でないことは明白である。オーウエンの精神は、今日において、歴史上の如何なる時期においてよりも承認せられ、マルクスによつて空想主義者と罵られた社會主義の先驅者の精神は今後において益々その眞價を認められるに至るであらう。しかし、これ等の事實と復歸的傾向とは、ロバーアト・オーウエンの大同團結主義の失敗を辯護すべき何等の理由ともなるものではない。

（五）

・ロバアート・オーウエンの大同團結主義は、各國の政治的、社會的及び産業的事情が未だ社會主義のために熟せざりしがために、並に組合に參加したる勞働者の間に利益が平等に分配されなかつたために――利害が共通することのなかつたために、遂に各國において失敗した。私はこの各國において失敗したものを今日わが國において學ぶことを慫慂することはできない。それは再び失敗を繰返すことに運命づけられてゐるからである。勿論今日の日本においてのように、知識階級に屬する人々が率先して勞働組合の成立に盡力してゐる時代においては、大同團結主義もまた一般的に勞働者の階級的精神を感激せしめるうへにおいて一種の便利手段であるともいへるから、私は友愛會の態度、大同團結的態度を非難するものではなく、日本の勞働組合運動が、先驅者としての友愛會の進化の後に、或はそれのある時期においての改造の後において、更に他の組合主義の成立することを信じてゐるものである。然り、私はこの意味において、ある時期において、友愛會の進化しまたは改造さるべきことを信じ且つ希望するものである。何となればそれは日本の勞

働組合運動の進歩を意味してゐるに外ならないからである。否、友愛會は既にその途を歩いてゐるといふことである。然らば次は如何なる組合主義が期待するべきか。

(六)

勞働組合主義の歴史のうちにおいて第二期を劃するものは職業別組合主義である。職業別組合は英國において發達し、また米國においても發達した。ウイリアム・ニユートン等の運動のもとに一八五一年英國に生れた合同機械工組合 Amalgamated Society of Engineers がこれである。またサミユエル・ゴムパアス及びアドルフ・ストラツセル等の指導のもとに米國に生れた米國勞働組合聯合 Amrican Federation of Labour がこれである。合同機械工組合は一八五一年から一八八九年のドツク・ストライキに至るまで約四十年間に亘つての英國における代表的組合であつた。それの組織は職業によつて勞働者を組織することである。從つて熟練職工の組合となるものである。それの長所として計へられてゐるところ、さうしてそれが約四十年間に亘つて英國に於ける勞働組合運動の指導的精神となるに至るまでに發達していたことは、この組織が、これに參加する勞働者の間に、利益を平等に分配したといふことである。即ち利害の共通が密接であつたといふことである。もつと詳にいへば、その組合主義は、職業別によつて勞働者を組織するものであつて、大工は大工、機械工は機械工、左官は左官と區別してそれ〲大工組合、機械工組合、左官組合といふものを組織するのであるが、この組織に參加するものは、各組合それ〲同一または近似の經濟狀態にある勞働者であるがゆえに、それ等の勞働者が一致的行動をとることに共通の利益が頒たれるわけである。こゝにこの職業別組合主義の强味が存在してゐるのである、ところがこの强味はまた同時に弱味である。即ちこの組合主義が熟練職工の組合となることの結果は、熟練職工だけの間においては利益が平等に分割され、また從つて組合の利益を感じて一致團結を促すことができるにしても、その結果は不熟練職工の排斥とならざるをえない。不熟練職工は組合に參加することが不可能となり、勞働組合の利益を分つことができないのみならず、熟練職工と利益を異にする結果は、資本階級と大多數の勞働者たる不熟練職工との間に、中間の階級としての熟練職工の階級が存在することとなつて、資本勞働兩階級間の對抗關係を不明瞭にし、勞働者の貴族主義を生じ、さうして一部の貴族主義的勞働者の利益において、また資本主義の安全瓣にお

いて、大多數の勞働者、プロレタリアートの壓迫となるに至るものである。從つて職業別組合主義は決して第四階級としての自覺のうへに、眞實なる第四階級解放の精神を體現してゐるものといふとはできない。カウツキーがこの種の組合を罵つてかゝる贋僞の勞働運動が却つて眞實なる勞働運動を阻害するものであるといつたのは私の全然同感を禁じえないところである。

日本では先ず印刷職工の團體としての信友會がこの種の組合に屬してゐるようである。或はそれに近いものであるらしい。私の見當が外れてゐないとすればこうした組合がどれだけ勞働運動のうへに貢献しえられるかは疑問である（但し信友會の組織については充分に調査してゐないからそれに對する批評は保留するのほかはない。また私の見當が外れてゐることを希望する）

（七）

いふまでもなく職業別組合主義もある點においては勞働運動のうへに貢献しないことはない。八時間制のごとき、賃銀値上げのごとき、こうした點においては、それは政治的社會主義の運動に伴つて多少の効果を擧げてゐる。しかし職業別組合主義が勞働組合の指導的精神であつた間は、勞働組合に參加する勞働者の數は極めて少ない。英國において勞働組合會員の遽に膨脹したのは一八八九―九〇年のドック・ストライキからである。即ち純然たる職業別組合の破産の後においてゞある。また米國における勞働組合の代表的團體としての米國勞働組合聯合の會員は、全米國の人口九千萬に對しその組合員總數は三百萬人に滿たない。これを英國における人口四千萬に對し勞働組合員數六百萬人に比すると雲泥の相違である。それのみならず、賃銀の一部の値上げ、八時間勞働といふことは、勞働運動のうへにおいて絶對に排斥することのできるものではないにしても、かゝる目前の利益は、遠大なる勞働運動の理想と感激とを犧牲にするものであつて、勞働運動の精神を卑しくし、勞働者をして、勞働運動の眞實なる目的と、資本主義の眞實なる病弊とを忘却せしむるに至るものである。コールの言葉を借りていへば Poverty is the Symptom: Slavery the disease. である。われ等の問題、勞働運動の眞實なる目的は決して貧乏の廢止といふことではない。それの眞實の目的は奴隷制度の廢止である。即ち Abolition of Slavery でなくてはならない。この理想から判断すると、職業別組合主義のごときは、眞實なる勞働運動を

危機に導くものである。法學博士河田嗣郎君が嘗つて大阪朝日新聞（或は毎日）において發表した『勞働組合是非』と題する一文はその當時可成り世間の注意を惹いたようであつたが、それは純然たる職業別組合主義を鼓吹してゐるのであつた。また同君がその近著『社會問題及び社會運動』のうちに述べてゐるところによれば、勞働組合は職業別組合を本則とするもののごとくである。同君は如何なる根據があつてかゝる主張を發表されてゐるのであるか。かゝる主張こそ眞實なる勞働運動の精神を頽廢せしむるものではないか。

（八）

職業別組合主義の本家本元たる英國において、その純粹なる形においての職業別組合主義は既に一八八九年のドック・ストライキ以前のことである。このドック・ストライキの後においては、社會主義團體としての獨立勞働黨及びフェービアン協會のプロパガンダの影響のもとに、英國の勞働組合運動はこゝに一大革命をうけた。このストライキ以後においては、勞働運動が政治運動と結合するに至つたとともにまた多くの不熟練職工のために門戸が開かれたのである。從つて熟練職工の組合としての職業制勞働組合はその純粹なる形においての破産を餘儀なくされるに至つたのである。さうして新らたに生れたものは大體は職業別の組織を維持しながらも尚ほ多數の不熟練職工を加へた。コールの謂ふところの Occupational unionism がこれである。それは純然たる職業別組合主義に比べると既に一歩を進めて勞働者を階級的基礎に組織せんとするものであり、その理想は國家社會主義であつた。ジョン・バーンスやシドニー・ウエッヴなぞがその側の指導者であつたのである。この階段を經て新に英國において生れてきたものが産業別組合主義である。

（九）

現代の英國における勞働組合運動はこの産業別組合主義 Industrial Unionism 對職業別組合主義 Craft unionism の二大對抗を現出してゐる。三角同盟は産業組合主義の側に立つてゐるに對し、他の多くの勞働組合團は職業別組合主義の側に立つてゐるといふことができる。一九一五年九月の勞働組合會議においては、コムトンの提議について採決した結果、産業別組合派の敗亡となつたが、その投票の數からいふと、百三十萬對百十萬であつて、その間に大なる相違がないのみならず、産

業組合主義はギルド・ソーシャリズムの指導のもとに益々發達を加へつゝあることが現前の事實である。このことは獨逸英國だけではない。フラスにおいては一九〇六年のアミアンの會議以來、産業別組合主義がフランスにおける全勞働組合運動を征服したといふことができる。米國においては今日尙ほ未だゴムパアスの『勞働貴族主義』が最大の團體であるにしても、I・W・W・の勢力も近年著しく增大し、ブリッセンデン教授が最近の著述において計算してゐるところによればその會員數も既に二十萬を超えてゐるし、ゴムパアス一派がその黨與のごとくに吹張してきた鐵道從業員組合は寧ろより多くI・W・W・のプロパガンダによつて指導されてゐる有樣であつて、この二つの勞働團體の對抗は、今後における米國勞働運動のうへに最も注目すべきことであり、或は『米國勞働組合聯合』が『ナイツ・オブレーヴオア』にとつて代つたごとくに、I・W・W・がゴムパアスの『勞働貴族主義』に取つて代ることが近き將來のことであるかも知れない。少くとも今日においてはその傾向を見ることができるのである。獨逸においても夙にヒルシ・ドウンケルが存在したが、それは産業組合としての自由組合 Freie Gewerkschaft に比べると微々たるものであつて會員數からいつても約二十分の一位ひである。かくのごくにして世界における勞働組合運動は今日職業別對産業別勞働組合の二大爭鬪を演じつゝその傾向は急進的に産業別組合主義へと向つてゐることを知るのである。

産業別組合主義とは何んぞや。こゝにこの點を詳しく述べてゐることはできないが、大體においていへば、賃銀制度を撤廢し、勞働者を産業線に從つて組織し、勞働者によつての産業統制(またはこれに參加すること)を主張するものである。從つてそれは資本主義の撤廢を要求する。また勞働者の自由を要求する。産業自治の要求となる。職業の如何にかゝわらず、凡ての勞働者を産業線に從つて組織することを要求する。職業別組合主義に對しては正面の敵として立つてゐるのである。先づこういふことができる。

(十)

そこで問題はだん〲最後に近づいてきた。私は進んで床次内相の『縱の組合』について批評しなくてはならない『縱の組合』とは何んぞや。この問題に對する説明は未だ政府の何人によつても明白にされてゐない。床次氏としては、恐らく勞働組

合について何等深き知識もないことであらうから、立入つた説明もできないことであらう。從つて同氏からこの點の説明を求めようとする考は私には少しもないが、その他の諸氏からも未だ何等の具體的の説明のないところから見ると、政府の方針が決定してゐないのか、或は決定してゐても發表しないことが便利としてゐるのであるか。その何れであるかは私の知るところではないが、今日まで説明されてゐるところによると、謂ふところの『縱の組合』とは、『一會社または一工場』を單位とするものであるとのことである（十月十六日東京日日新聞による）。これだけでは政府の眞意の存するところが甚だ不明瞭であるが、先づ第一に推察することのできるのは、この『縱の組合』なるものが職業別組合（政府はこれを横の組合といつてゐるらしい）に反對するものであることである。卽ち職業の異同にかゝわらず、一會社または一工場に從業する凡ての勞働者を同一組合に組織しようとすることであつて職業別によつて數個の工場に亘つての組合――政府の謂ふところの『横の組合』に反對することである。

（十一）

私は『縱の組合』なるものが單にこれだけの意味のものであるとすれば、一概にこれを排斥しようとする者ではない。考へやうによつては職業別組合主義に一歩を進めてゐるものであるともいへるのである。何となればこの『縱の組合』においては勞働組合に參加するものは、政府が特別の制限を設けざる限り、全體の工場勞働者を網羅するの便利があり、從つて熟練工組合としての勞働階級貴族主義に墮するの憂がこの點において存在してゐないからである。またこの種の考は決して政府の獨創ではなくして既に英國においてこれに類似する運動が存在してゐる、Shop Steward Movement がこれである。Shop Steward Movement は先づクライデの勞働者の間に起つた。一九一五年二月のクライデ・ストライキはこの運動を表徴するものである。この運動は從來の勞働組合の地方機關としての District Committee に代ゆるに Works Committee をもつてしようとするものである。卽ち『横の組合』から『縱の組合』としての工場單位制度へと移らんとするものであつて、この點において政府の謂ふところの『縱の組合』と一致してゐる。各工場においてそれ〲委員會を設けてその工場においての勞働組合の自治を要求するものであるがゆえに、この點において明らかに縱の組合

であるといふことができる。しかしこの Shop Steward movement は單にこうした單純な意味のものではない。それの起原について見るも、この運動の起つたのは戦時における勞働組合幹部派の妥協的態度に慊らずして起つたものであつて、マアフキのごときはこの運動をもつて職業別組合主義にも産業別組合主義にも反對するものであつて、一大組合 One big Unionを理想とするものであるとなしてゐる。從つてまたその目的が革命的であることは勿論である。コールの説明に從へばこの運動は産業別組合主義への道程であるとされてゐる。何れにしてもその運動の目的は革命的であるといはなくてはならない。また次に政府の謂ふところの『縱の組合』なるものが單に職業別組合主義に對抗するの意味であるとすれば、それはまた産業別組合主義ともこの點において一致するものである。産業別組合主義は職業の異同のごときはこれを問はないからである。かくのごとくにして、今日の勞働組合の思想においては、『縱の組合』として考へらるべきものは二つある。その一つは産業別組合主義である。他の一つは Shop Steward Movement においての工場單位である。苟くも『縱の組合』と考へられるもの——今日の勞働組合運動の常識において考へられるものはこの二つがあるのみである。現内閣は果してかくのごとき進歩したる思想の持主であらうか。

（十二）

現内閣の眞實なる立場について理解してゐるものは素よりかくのごときことを信ずるわけにはゆかない、思ふに政府の意の存するところは職業別組合主義をも尚ほ急進的のもの、危險なもの、その辯護せんとする資本主義のために不利益なるものとして、それの發達を妨ぐるとともに他方、勞働組合公認者としての人氣をも維持せんがために、こゝに苦心の結果、謂ふところの『縱の組合』なるものを考へ及んだのであらう。この點は現内閣が一方に熱心なる資本的溫情主義としての勞資協調の主張者であることによつても察せられることである。然り。この縱の組合こそ政府の欺瞞と苦悶とをもつて作り上げられたる歴史上空前の資本的思想の産物であるといふことができる。國民は果してこれに欺かれるか否か。また政府は工場勞働者以外の勞働者を如何に組織せんとするのであるか。更に現存の勞働組合を如何にしようとするか。問題はこの三つを殘してゐる。

（十三）

しかし商人はその自ら製造した法律のために刑せられた。獨逸の官僚政治はその自ら利用せんとした普通選擧のために仆された。これ炳乎たるわれ等の眼前の事實である。誠意なきものは遂に敗れる。さうして人は遂に欺くことはできない。政府が勞働組合運動の勢を押へんがためにその「縦の組合」を組織せしむるにしても、それは却つて全勞働者を結合せしめ、勞働者の産業統制慾を刺激するの機會を早めるに過ぎないであらう。何となれば職業別的熟練職工組合よりも、工場本位の勞働組合は、より多く産業自治に便宜を與へるものであるからである。

（十月十八日）

矛盾せる政府の計畫

法學博士　河津暹

一

政府が今回勞働組合法案を本議會に提出せんとする意嚮ある旨は、過般來川村警保局長の言明として、新聞紙上に傳へらるゝ所なるが、其内容が果して如何なるものであるかは、未だ判明しない、從つて之れに批評を加へることは、稍早計に失するかもしれぬが、然し政府の大體の意嚮は之れを忖度するに難くないと思ふ。元來政府が急に勞働組合法を公認するに至つた經路は、之れを對內策と對外策との二方面から觀ることが出來る。對內策とは即ち近時頓に勃興し來つた勞働運動に對する、應急手術を施さねばならぬ必要の生じた結果であることは勿論である。對外策とは、華盛頓に開會しつゝある國際勞働會議に對する政策即ち是れである。世界列强に伍して國際勞働を議せんとする日本が、現に勞働組合さへ是認して居らないと云ふ事は、如何にも不合理不面目なことと云はねばならぬので、政府は體裁上から云つても、兎に角勞働組合を公認した形式位を執らねば、外國

に對して如何にも不體裁であるに相違ない。

然し翻つて現内閣の誠意如何を思ふ時は、吾人は聊か心細い感がせざるを得ないものがある。元來現内閣の施設する所を看るに、吾人は遺憾乍ら未だ其誠意を認めることが出來ない。隨つて此誠意のない内閣が、果して合理的な勞働組合を公認するの擧に出づるや否や、疑ひを狹まざるを得ない。或は懼る來議會に勞働組合法案を提出するのは、豫め議會の否決を豫期して遣つて居る政界的行爲が含まれて居りはしまいか、而して勞働組合法案の不成立の責任を、議會に轉嫁して旨く國際勞働會議に對する世間體を取り繕はんとする、ずるい考へが政府に在るのではなからうか。吾人は政府の現在迄の成り來りに省みて何となく斯くの如き不安さへ懷いて居る者である。

二

川村警保局長の言明に依れば、勞働組合法の制定に際して、治安警察法の問題には成るべく手を觸れぬことを心懸け、治安警察法は其儘に存置して、勞働組合の組織のみを公認しやうと云ふのである。然し勞働組合と治安警察法とは二にして實は一である。分離すべからざるものである。故に若し勞働組合を公認するならば、治安警察法は當然撤廢せらるべきもので、之れを存置して組合を認めた所が、組合其物の機能は何等發揮するを出來ぬことは明白である。尤も政府としては、勞働組合を公認した形式が備はれば、外國への面目も立つのであるから寧ろ組合の機能が著しく發揮せられないことを希ふて居るかもしれぬが、然し斯樣な不合理な公認は却つて事端を滋からしむるものであると思ふ。

若し假りに治安警察法を存續すると云ふならば、根本的の改正を爲すか、然らずんば「誘惑」「煽動」と云ふが如き、頗る曖昧なる文字の解釋を、單に裁判所又は警察官の解釋するが如き不合理なるものたらしめず、飽迄明確に限定して置く必要がある。即ち「誘惑」「煽動」とは如何なる場合を指すかを、法文を以て明示して置くの必要がある。今日では右の字義は裁判所又警察官の勝手の解釋にて、如何樣にも適用の出來るものとなつて居る。元則としては同一組合員相互の間には適用されず、他組合との交渉を以て「誘惑」又は「煽動」と認めて居るとのことであるが、今假りに甲組合員と乙組合とが、偶々一膳飯屋に落合つて同じ卓子に夕食をして居たと假定する。其場合に甲組合が現に同盟罷工を爲しつゝあることを乙組合員に語つたとして、乙は

非常に甲に共鳴して甲の罷工に同情罷工を爲すべく乙組合員を動かしたとする。此の場合に於て果して乙を誘惑し煽動したと云へるであらうか、甲は乙に自分の罷工を話したに過ぎぬ、乙は唯夫れに自由意志で共鳴したに過ぎぬとしたならば、如何にしても治安警察法は適用することが出來ぬのである。而も今日迄の治安警察法は斯くの如き場合も尙且誘惑煽動として之れを檢擧することが出來る斯くの如き不合理なことがあるべきでない。故に若し政府が治安警察法を存續する意志であるならば、法文を改正して「誘惑」「煽動」と云ふが如き曖昧な語義を、極めて明確に適用範圍を限定し、苟も今日迄の如き、時と場合と裁判所又は警察官の虫の居所如何に依つて、適用を自由に爲し得るが如きことなからしめねばならぬと思ふ。然し政府が誠意さへあるならば、此際に當然治安警察法十七條の如きは撤廢さるべきものである。

三

政府は勞働組合は横斷主義に依つて公認すると云ふ恐らく横斷主義に依る危險と云ふ様なことを虞れた苦しい考へから出たものであらうが、斯くの如きは勞働組合の機能を去勢するもので

勞働者自衛の武器をして、全く不能に終らしむるものである。斯くの如き同一單位の組合のみを公認した所で、何の役に立たふ、況んや其理事長を資本家から出すべしとするに至つては、組合をして資本家の意志に依つて造らんとするもので、其迂遠なるは蓋し驚くに餘りある。元來縱斷主義の組合が危險を豫防し得るものゝ如くに考へて居るは大間違ひにして、甲組合と乙組合との連鎖が、之れに依つて縱斷せらるゝが如きことは、事實有り得ざることである。總同盟罷工の連鎖は、一膳飯屋に夕食を認めつゝある勞働者間に、極めて簡易に、極めて根強く發せらるゝものである。然るに如何に政府が縱斷して見た所が何等の效力をも有せざることは明かである。斯くの如く凡てが矛盾に依つて公認せられんとする我が勞働組合は、公認に依つて却つて多くの事端を生ずることを虞れざるを得ない。

公認せられんとする勞働組合法案

早稻田大學教授　北澤新次郎

（一）

道途傳ふるところによれば、政府は這般來內務省內に於て起草されたる勞働組合法案を、來るべき議會に提出せんとする意嚮があるといふことである。吾人は未だその正確なる具體案に接せざるが故に、その內容の如何を批評することを得ないが然し從來勞働問題に對して、無理解無能なる內務省連の起草せるものであるから、大體に於て吾人はその內容、方針等について豫想が出來ると思ふ。即ち最近川村警保局長の談なりとして傳ふるところによれば、政府はいよ〳〵勞働組合を自治的法人團體として公認するらしい。然しながらその團體の單位を現在各工場を中心とせる組合を公認し、若しくはそれが存在せざる場合に於ては、斯くの如き團體を設立せしめんとする意嚮であるらしい。これは從來床次內相の主張する所謂縱の勞働組合なるもので、吾人が最も奇異に感ずるものである。

凡そ今日の世界の勞働運動は利害を同一にする勞働者の團體であつて、これが爲めに最も有力なる勞働者の利益保護及び進展機關は同職勞働組合を組織するにあつた。即ち勞働者がその職業を同じうする場合に於ては、その利害關係が極めて密接であつて、且つすべての點に於て步調を同一にする事が容易なる結果、所謂職工組合なるものが組織され、且つそれが漸次強大になつたのである。換言すれば橫の組合によつて勞働者はその團結的の力を強固にすることが出來、これによつて彼等が從來その地位境遇を改善した事が偉大なるものがあつた。

（二）

然るに近來資本主義の急激なる進展と共に、產業の單位が非常に擴大され、且つ分業の組織が複雑になるに從ひ、同職組合組織を以てしては到底資本家と對抗することが出來なくなつたのである。即ち小規模なる職業本位の組合によつては徒らに組

合間の分界點が爭ひ（Juris dictional Disputes）が強烈となつて、勞働者の同志打を現出する有様となり、これが勞働組合全般の進展を阻止する傾向を生じ、是に於て進歩せる勞働者間に從來の職業本位の組合を棄てゝ、事業別の組合（Industrial Union）を主張するもの益々多くなつたのである。此の組合は一事業に從事する勞働者は、その職業の如何を問はず總べての勞働者が事業を中心として組合を作り、以て一人の勞働者の損害はすべての勞働者の損害であるといふ原則の下に一大組合を組織し、彼等の地位境遇の向上發展に資せんとするに至つた。

而して此の事業別組合主義は、近來益々勞働者によつて主張され、且つ今後も恐らくは職業別の組合よりも偉大なる發展をするものと吾人は確信するのである。而して床次内相の所謂縱の組合が眞實に斯くの如き組合を意味するものならば、吾人は雙手を擧げて賛成するものであるが、實際其の精神は全く斯くの如きものを意味するものでなく、工場を本位とせる組合を公認するのであるから、その精神に於ては矢張り從來の温情主義であつて、工場に於ける主從關係を擁立せんとするものであることは疑ひもないことで、且つ斯くの如き組合を組織させながら、他の工場に於ける組合との連絡を全然禁止するといふに至つては其の實際生活に迂遠なる事と、勞働問題に理解のないことを赤裸々に暴露したものと言はねばならぬ。

床次内相の所謂縱斷主義に基いて勞働組合なるものを設立し、他の組合と連絡を禁止するに於ては、到底勞働者全般の利益を進展することが出來ないのである。何となれば我國に於ける事業の大規模なるに從つて、一工場に於ける勞働者の同盟罷業の成功には、必らずや他の工場に於ける勞働者と連絡せざる場合が多いのであつて、それを法律を以て禁止せんとするが如きことは到底不可能なる事である。要するに吾人は床次内相の縱斷主義の勞働組合なるものは、所謂工場封建制度を確立し、以て温情主義によつて我國の勞働問題を解決せんとするものであつて、斯くの如き方法によつては實に勞働問題を解決する事が出來ぬのみならず、益々紛糾せしむるものと言つて差支ない。

（三）

更に斯くの如き種類の勞働組合の理事長を、現在の工場監督官若しくは技師長或は職工長の如きものを以てするが如きは、勞働組合の圓滑なる運用が出來ざるのみならず、その精神を沒却するものである。尤も川村警保局長の談によれば組合の役員は、組合自體の意思に基く選擧によるとしてるが、これを徹底

的に政府が許容するか否かは頗る疑問である。或は過般の勞働代表選出の場合の如く、組合員の『隔意なき諒解』なる名辭に隱れて、工場監督官、技師長、職工長の如きものを組合長とするにあらざるか。若し斯くの如き事をしたならば、それは全く勞働組合の本質を沒却するものである。何となれば今日の工場監督官、技師長、若しくは職工長なるものは、多く勞働者の心理狀態を理解せざるもので、動もすれば資本家の手先傀儡となつて勞働者を壓迫することが多いのであるから、斯ぐの如きものを以てしては、啻に勞働組合の圓滑なる運用をなし得ざるのみならず、却つて勞働運動を阻止壓迫する事となるであらう。これを要するに政府が最近の勞働代表選出の際に於て、從來その不合理なる勞働政策の當然の結果として、非常の困難を痛切に會得したる結果、勞働組合の促進を必要と感じたるは當然の事である。然しながら今日の如き勞働運動の本質及び其の精神に對して、全く無理解なる政府が如何に努力しても到底勞働者の利益を助長する勞働組合法の如きものゝ出來る筈がない。吾人は動もすると勞働者の運動を檢束制肘せんとするが如き勞働組合法の制定せらるゝよりも、寧ろこれなきを望むものである何となれば徒らに制肘的、拘束的の勞働組合法の制定せらるゝに於ては我國の勞働者が到底自由なる行動に出づることが出來ないからである。吾人の見解によれば政府が眞に我國勞働の健全なる進展を希望するならば、先づ彼等の運動の一大障碍たる彼の惡法、治安警察法の十七條をまづ撤廢すべきである然るに斯くの如き勞働者の運働の自由を拘束する法規を存在して置きながら、更に拘束的の勞働組合法を設くるが如きは、いよ〳〵我國勞働者を鐵鎖を以てその運動の出來る樣にする精神であると云つても敢て過言ではないのである。

(四)

思ふに我國に於ける勞働者は、まさに覺醒の途上にある。而して我國に於ても歐米諸外國と同じく、今後改造せらるべき社會の中樞的要素たるべきものは勞働者であるといふことは何人も異論はない。而して勞働運動の進展如何は我國運の進展如何に重大なる關係を有するのである。勞働組合法の制定は極めて進歩的たるべき必要があるのである。徒らに表面勞働者に厚くその實勞働者を拘束せんとする法規を制定せんとするが如きは、啻に我國勞働運動の進展を阻害するのみならず、これを愈々過激化し陰險化し、遂には國家の基礎を動搖するに至るかも知れない。政府當局にあるものは須らく彌縫的、姑息的な方策を棄てゝ、極めて新時代に適應する勞働政策を確立し以て我國勞働問題の解決に資すべきである。

勞働組合の公認とは

勞働者の團體運動權の公認なり

荒畑勝三

一

政府が『勞働組合の公認』などと云ふのを聞くと、私は片腹いたくて堪らない。何故かと云ふに、少くとも、從來政府が勞働團體に對して執つて來た態度、及び今期議會に提出するやの風評ある、勞働組合法案なるものから推察するに政府は決して勞働組合の意義を、全く知つて居らないと見るの外無いからである。

内務大臣や警保局長が、『政府は勞働組合を公認するの意志無し』と、議會で聲明したのは今年の春ではなかつたか。其の舌の根のまだ乾かぬうちに、もう政府は勞働組合の公認などと云つて居る。勿論それは四圍の情勢に強制された結果であつて、且つ政府の施設と云ふものは、常に自動的で無くして全く他動的である。即ち四圍の事情がそうなつてどうともかうとも仕方が無くなると、初めて之れに向つて、法律上の裁可を與へると云ふのが慣例であるから、政府が今日、勞働組合の公認など、如何にも尤もらしく、如何にも進歩的らしく、如何にも先見の明あるらしく、見せかけて居るのは毫も怪しむには足らぬのかも知れない。

二

けれ共、政府が四圍の情勢に迫られて、蹤々ながら勞働組合を公認すると云ふ事は、決して政府が勞働組合の意義を了解して、勞働組合に向つてその存在と行動との、完全な自由を許すと云ふ事にはならない。

政府の所謂『勞働組合の公認』が、勞働組合の意義を了解し

その存在と行動との完全な自由を許さんとする、積極的な政策の結果で無くして、全く四圍の情勢に迫られた結果、一時の應變策として案出したる、無定見なる政治的手品に過ぎざる事は、その今期議會に提出せんとする勞働組合法案なるものの內容、及び治安警察法存續の意志聲明に依て、明らかに知る事が出來る。卽ち、その所謂『勞働組合法案』なるものに從へば各工場を單位として一小職工組合を組織せしめ、而して各工場の職工組合をして全く分離孤立せしめ、その聯合團結を許さぬのが、政府當局の『勞働組合公認』の眞意である。

私は此の點で、政府が勞働組合の意義を全然了解せず、その所謂『勞働組合公認』の、勞働者の運動の範圍と目的とを、これ以上に擴充せしめざらんとする橫蠻なる事が、既に明白に立證されて居ると思ふ。勞働組合の當面の目的は、勞働者の勞働條件の改善、生活狀態の向上を圖るに在り、十八世紀の倫敦革股引製造工倶樂部から、今日の巨大なる大英坑夫同盟に至るまで、白耳義の敬虔なる基督教徒勞働組合（キャソリック・センヂカ）から、佛蘭西の革命的な勞働總同盟（コンフエデラチオン・ゼネラル・ヅ・トラヴイユ）に至るまで、悉く之れをその職分とせざるは無い。

而して此の職分を行ふ方法としては、第一は云はゞ對內策とも云ふべき共濟保險制度、第二は政治運動、第三は團體的交涉（コレクチブ・バーゲイニング）、及び第四は同盟罷工（ボーイコット、ピケチング等の如き、同盟罷工の補助機關をも含む）が用ひられて居る。

三

苟くも、勞働組合を公認すると云ふからには、勞働組合の附隨的條件たる、その運動方法をも公認しなければならぬ。勞働組合とは、勞働者が團體運動の便宜の爲に設定せる常置的團體である。故に勞働者の團體運動權を認めずして、勞働組合を公認すると云ふが如きは、畢竟、意義を成さゞる囈語に過ぎない。

然るに、政府の勞働組合法案の如く、各工場を單位として職工組合を組織せしめ、然もその相互間の聯絡を禁遏すると云ふ政策は、此の勞働組合の職分、及びその方法を、薄弱無力に歸せしむる所以である。今日、歐米の勞働組合運動が、十八世紀當時の一職業の勞働者を包括せるに過ぎざる小組合から、一都市、一州又は一縣、若くは全國の同一職業の全勞働者を包括せる大組合に進み、更に數職業を包括せる一產業、若くは一地方の聯合團體を組織し、而して最後に、全勞働團體の同盟を構成し斯くして今回聯盟の傾向駸々として進みつゝある所以のものは、卽ちその團體的交涉に出て獲得せんと欲する勞働條件の改

善を、單に一職業にのみ局限せず、實に全産業に對して『共通規則』を施行し同一條件を適用せんとするが爲に外ならぬからである。

また若し、勞働組合が單に一職業の勞働者の利益のみを圖つて全職業間の利害關係の一致、その行動上の協力、實に勞働階級の相互扶助を樹立する事に努めなかつたならば、それは所詮、各職業の組合間に劇烈なる職業爭奪戰を起し、延ひて同勞働階級を、混亂內爭の渦中に投じ去るものである。故に、若し政府當局の望めるが如く、日本の勞働組合が各工場を單位として組織せられ、而して各組合間に如何なる聯絡も許されなかつたならば、勞働組合は團體的交渉に依て一職業全體に亘り共通の規約を施行し、同一條件を適用する能はず、從つて賃銀、時間等の標準と云ふものが、維持して往けない事になる。

四

標準の維持されて居ない所に、波動生じ、不平均起り、延ひて競爭の現はるゝは、固より其所であつて、斯くては勞働組合の存立は、全然その意義を失ふ事にならなければならぬ。且つ勞働組合分裂孤立が、勞働階級に取つては致命傷とも云ふべき、最も恐るべきものであると云ふのは、これは平時に於て、各組合間の協同一致、相互扶助の觀念の發達を妨げるものであるから、その一旦、一組合が同盟罷工を起した曉には、他の組合は直ちに之れが罷工破り(所謂スキヤブ、又はブラツクレツグス)を供給して、以て他の組合の戰鬪を失敗に歸せしめ了るからである。

私は、勞働組合がその職分を行ふ上の方法、即ち共濟保險制度、政治運動、團體的交渉、及び同盟罷工の中、共濟保險制度と、政治運動とに對しては、その効力に信用を措かざる者である。勞働組合が共濟保險を存するは、恰かも人間に盲腸の蟲様突起が存するやうなもので、時にはその爲に、屢ゝ害を蒙むる事すらあるのである。現に今日では、共濟保險制度は勞働組合の重要なる一方法としては觀られず、寧ろ組合員をアツトラクトする道具として觀らるゝに止まつて居る。私は勞働組合の共濟保險制度としては、失業保險と、罷工扶助と、この二つだけで充分であると思ふ。其他の疾病、傷害養老等に對する保險は、宜しく之を政府の簡易保險事業にでも任せるがいゝのである。

勞働組合の政治運動に至つては、私の絕對に反對する所であるがその理由は玆に述べる事を差扣へやう。少くとも私は、勞

働組合の最も有效なる方法は、團體的交渉と同盟罷工との二つに在ると思つて居る。團體的交渉(コンクチブ・バアゲイニング)は實に多くの人から、勞働組合の存在理由(レエゾン・デエトル)とされて居る所であつて、標準賃銀率及び勞働時間、工場の通風、衛生、危險豫防等、一切の勞働條件の制定、並びに非組合員又は徒弟の雇傭、或は一定の仕事に係はるべき職工の數、及びその等級等に關する契約に出れる、經營部に對する勞働組合の干渉等は、悉く團體的交渉に依て獲らるゝ所である。

故に、團體的交渉は一職業の全體、又は大部分に亘れる從業者の團結を豫想するものであるが、政府の勞働組合法案は、殆んど此の方法を默殺するものと云はなければならぬ。

五

勞働組合が團體的交渉に依つて、職業全體に適用せる共通規則の、充分な施行を期するを得るの手段は、實に同盟罷工である。同盟罷工權の勞働組合に於けるは、猶武力の國家に於けるが如きもので、平和なる外交手段の成否勝敗は、大抵の場合一に背後に扣ふる武力の强弱に依つて決せらるゝが如く、同盟罷工權も又、勞働組合の外交手段に對する保證である。産業上の鬪爭と國際戰爭との擬似を强調し、その悲慘を力説するのは間違ひであるが、然し同盟罷工もまた兵の如く、或は兇器であるかも知れない。濫りに用ふべからざるものであるかも知れない。けれ共外交手段で解決されざる場合には、最後に問題を解決する手段は、同盟罷工でなければならぬ。

政府は、各職工組合に一名の理事長を置いて、工場監督官を以て之れに任じ、而して工場内の紛爭は、一に理事長をして之れが解決に當らしむると云ふ。こんな馬鹿々々しい事を案出するのからして、正氣の沙汰とは思はれない位であるが、若し果して此の方法が行はるゝとせば、之れ職工組合員と毫も利害關係を同じふせざる一個人の手に、强制仲裁々權を握らしむるもので、勞働者に取つて之れより大なる危險は無い。公共事業の同盟罷工、又は工場締切(ロックアウト)に對する强制仲裁々判は、濠州、加奈太、南阿等の英領版圖や、丁抹(デンマルク)等に施されて居る所であるが、それすら産業上の紛爭の解決に、常に失敗して居るではないか。然るに、一個人をして産業上の紛爭を、高壓的に鎭壓する暴君たらしめんとするが如きは、甚だしき時代錯誤の政策と云はざるを得ない。

一體、各工場單位の職工組合だなど〻云ふからして、實は甚だしい時代錯誤なのである。抑々、勞働組合の形式及び方法の變

化は、産業進化の形式と照應せるものであつて、たとへば今日の廣汎なる、團體的交渉の原始的形式は、所謂ショッ・プバアゲイン、(『工場契約』)で、卽ち一定の工場、又は會社の全職工、若くは一部の代表者が、職工長又は雇主と賃銀、時間、其他の條件を協定する方法であつた。それが今日の如く、多くの職業に在ては、相互の協同に對する常置聯會委員さへ設立されて居る。精緻なる『團體的協定』制度に發達した所以のものは、實に産業的進化の結果として、一方には職工組合の發達を見、他方には雇主の間に於ける團結が發達したる爲である。政府の勞働組合法案なるものは、まるで大人に、三つ身の衣服を着せやうとするのと同じ矛盾ではないか。

六

勞働組合問題は、最早や議論ではなくして事實である。傾向ではなくして實際の情勢である。政府の之れに對する手段は、只だ一つしか無い。それは卽ち、いつ迄も國情だの、國民性だのと云ふ、下らない屁理屈を並べて馬鹿强情を張つて居ずと潔よく實際の情勢の前に、兜を脫いで降參する事である。

政府は既に降參しかけて居る。今春までは、勞働組合の組織を禁じて居る法文は無いから、作るのは自由である。何も特に法律を以て之れを公認する必要は無いと云つて居た政府が、今は遂々然として、勞働組合法案を社會に提出し、以て勞働組合を公認すると云ふのであるから、明らかに政府は天下の情勢に降參したのである。けれ共、降參するからには、眞に敵軍の實力を知り、その降參せざるべからざる所以を了解して、一切の軍器を悉く提出するが宜い。然るを、懷中ふかく匕首を藏して、降參と見せかけて敵の油斷を圖り、大將の寢首を掻かんなどとは卑怯の沙汰だ。それとも政府は、斯くてもまだ、社會の情勢に抗して、最期の一戰を試むる勇氣があるのであらうか。

勞働組合の公認とは、勞働者の團體運動權の公認で無れけばならぬ。政府若し眞に果して、勞働組合を公認せんとせは、須らく先づ勞働者の團體運動を妨ぐる、治安警察法を撤廢すべきである。之に反して、若し新聞紙所報の如き勞働組合法案か、眞に果して今期議會に提出せらるとせば、之れ政府が、名を勞働組合の公認に藉りて、實は勞働組合を無力薄弱、徒らに呑噬相剋を事とする、資本家の傀儡たらしめんとするに過ぎない。私は聰明なる日本の勞働階級が、政府のカラクリに欺瞞さるゝ事なく、國際勞働會議の代表員問題以上に、斯の如き山カン的『公認』に反抗し、勞働組合の存在と行動とに對する、完全なる自由を獲得するに至るべきを信じ、且つ期待するものである。

生活の現狀打破

營養價値を基礎とする社會政策

京大教授
醫學博士　戸田正三

一　緒言

勞働問題、社會主義、生活問題、斯の三個の問題は最近あらゆる階級を通じて殆んど國民の全頭腦を支配して居る問題である。殊に或意味に於て生活問題こそは云はゞ總ての社會運動の原因を爲して居るので有つて政治家、社會學者、經濟學者より小は一家の主婦に至る迄各其の專門の立場より分に應じて之が解決に努力はして居るが、私は或る經濟學者の生活改造に對する議論や政治家其他實際家の之に對する政策の世間に發表せられたものを見て、時々其れが私の考ふる所と非常に逕庭の有る事を氣附いた。特に近來喧ましい食糧問題の如きは、之を組織的に科學的にのみ考へ來つた私達の頭から見ると一部專門外の人士の云はるゝ處は時に營養論の基礎を訣り、又は一部の學說にのみに陷り、益無き努力に終るが如き觀なしとせず、是れが先づ私の考を述べて、他の學者の批判を乞ふと共に一般人士の參考に供して見たいと思ふ所以である。

二　營養價値の利用

生活問題を分つて所謂衣、食、住の三類とする。就中、住宅の改良と云ふ事は國民生活殊に本邦都市民の生活現狀にとつては最も重要問題であり、又隨分改良の餘地ある事と思つて居るが、是れは他日本誌に記載の榮を得る事として今回は先づ食物の問題に就て考へて見たい。元來食物の問題と云へ

ば營養の外に利用、經濟の二個の意味を持て居る。米價調節、節米、混食、代用食等は是れが具體化せられたものであるが、私は先づ其等の問題に論及する前提として、現在、國民の營養如何を研究して見たい。之れには先づ第一に

（一）人口に比例して國內の食品生產額充分なりや否や。

（二）食品の生產額は充分なりとするも果して是を適宜に利用して居るや否や。

に就て考へなければならぬ。例へ生產額が相當に有りとするも若し利用にして其の宜しきを得ざる時は一國民の營養狀態を低下するのは必然である。例へば飽食過食の弊、偏食の弊、嗜好品の過度の攝取等は直接國民營養上の損害を惹起するは勿論、延いては其の國民が永久に充分なる能力を保全し得るや否やをも疑はねばならず、且つ其上に糧食經濟上から云つても由々しき大問題の樣である。

三　現住人口と食品生產額需要額並に活用量の關係

本邦現在の人口は確實に知る事は困難だが內閣統計局の發表に依れば大正二年度本籍人口五千三百三十五萬六千、同年度現住人口五千二百五十七萬で最近各年の人口增加率は七十萬乃至七十五萬人なるを以て之より推算する時は大正七年度末には少くとも五千六百萬人の現住人口を算したであらう。今此人口を各年齡別に割當て、十六歲以上は男女に區別し、更に之より成年男子が一日の食糧として要する額を標準とせんが爲め老幼婦女の食糧額を成人男子一人としたるもの卽ち食糧需要の單位に換算し其總數を合すれば四千萬人となる、卽ち本邦の現狀は四千萬人の成年男子を養ふに適當の食料を必要とする事になるのである。

表にして示すと大要左の如くになる

府縣北海道現住人口概算

本籍人口（大正二年度）53.356.000
現住人口（　〃　）52.570.000
現住人口（大正七年度）56.000.000
年々增加率 70—75萬

（年齡別）	人員（百萬單位）	食料需要單位（成人男子＝1）	食量單位に換算せる人員數（百萬單位）
0—5	7.5	0.2	1.5
6—10	6.2	0.4	2.5
11—15	5.9	0.6	3.5
16—45	男12.4 女12.0	1.0 0.8	12.4 9.6
46—65	男4.5 女4.4	1.0 0.8	4.5 3.5
+65	男1.45 女1.70	0.9 0.7	1.3 1.2
總計	56.0		40.0

次に本邦現時の食品生産額は如何。元より其の精細なる産額は知らざるも又誰れとても知り得ざらんも、私が諸種の報告を參照して見たのに大正三年度の例を以てすれば第一、米の産額に於て內地米約五千七百萬石、外米輸入二百萬石となつて居るから例年に徵するに五千五百萬乃至七八百萬石を産するなる可く、此內より酒造用として近年三百萬乃至三百五十萬石、昨年の如きは約四百萬石の玄米を消費し、又翌年に要する種子として約百萬石に相當する玄米を要するとすれば、年々邦人の食用に供する玄米高は五千五百萬石內外であらう、此內より搗減步合として一割を減ずれば食用に供せらるゝ白米石高は一箇年約五千萬石となるであらう、左に表に依つて米以外の各種の主なる食品生産額及び其用途と同時に是等の食料品を總人口五千六百萬に配當せる一人一箇年、及び一日の配當額、並に是等の配當額より吾人の食膳に上る迄に減除せらるゝ割合を適宜に算出し更に其食膳利用額より是れが吾人の消化機管內を通過して活用せらるゝ量を各品種に應じ總熱量額及び各養素の活用熱量を算出して示さん。尤も此の數字は余が幾多の書類を參照すると同時に自己の實驗と考とに歸因する所も少くないので他の學者の擧げられたる數量との間には多少の差違あるは免かれない事を前以て御斷りして置く。（第二表次頁に揭ぐ）

第二表に示せるが如く本邦産並に極小部分の輸入額を計上して、是れより總人口五千六百萬人に對する活用熱量を概算する時は一人一日に就き二千百五十カロリーの配當額となり、更に酒をも合算すれば約二千二百カロリーとなる。就中米は其總熱量の半額を占めて居るのである。今此數字を立脚とし之を食料需要單位法に換算せる人口四千萬人に配當する時は一人一日に就き三千乃至三千百カロリーとなる、而して此熱量を更に養素の比に別ちて考ふれば第三表の如くなる。

第三表の內全蛋白量の十五％は肉食、主として魚肉による動物性蛋白質である。換言すれば本邦人の平均は活用せられたる養素約熱量の僅かに一・七％を動物性蛋白に仰いで居る譯である。今邦人成年男子の平均體重を五十五瓩（十四貫七百匁）とする時は其れに對する配當熱量三千カロリーより見て $3000 \div 55 = 55$ 即ち體重一瓩に就き日々五十五カロリーを取りつつある理である。

又之を食品別として考ふる時は米は其半分を形成し次で麥類及び其他の穀類豆類及び其等の製品は邦人の主なる營養を

（第二表） 本邦食品生產額（一小部分は輸入）食用額

並に其活用量概算

主なる用途	大正七年度現住人口五千六百萬人に對する一人配當額 一箇年	一日	同上食膳利用量	活用熱量	各營養素中の活用熱量
					蛋 80 Cal
食用	0.87 石	2.4 合	2.3—2.4 合	1050—1100 Cal.	脂 7 ,, 炭 1000 ,,
食用，味噌醬油，製粉造酒，豆腐及牛馬飼料等	0.43 ,,	1.2 ,,	1.2 合	480Cal.	蛋 63 Cal 脂 18 ,, 炭 400 ,,
	0.08 ,,	0.2 ,,			
	0.14 ,,	0.4 ,,	0.3 ,,	150 ,,	蛋 40 ,, 脂 40 ,, 炭 70 ,,
食用	25 貫	70 匁 (260 g)	200-250 g	240—300 ,,	蛋 17 ,, 脂 10—15 ,, 炭 240 ,,
,,	21 ,,	75 匁 (210 g)	150—200 g	40—60 ,,	
,,	27 ,,	7 匁 (26 g)	20 g	10—20 ,,	
,,	10 斤	4 匁	12 g	50 ,,	
,,	43 ,,	2 匁	8 g	9 ,,	蛋 6 脂 3
,,	6.5 貫	18 匁 (67 g)	40 g	40—45 ,,	蛋 30 脂 10
,,	18 個	2 g	2 g	3 ,,	
,,	5.3 合	3 g	3 g	2 ,,	
				2150 Cal.（活用量）	
食用並嗜好	8 升	40—45g	40—45 g	40—50 Cal	
				2200 Cal.	

品　　種	數　　量
1. 玄米食用高	55 百萬石
2 白米　〃	48－49 〃
3. 麥　類	24 〃
4. 粟及其他の穀類	4.5 〃
5. 豆類 { 大豆	4.7 〃
小豆類他	3.0 〃
6. 藷類 { 甘藷	1,000百萬貫 } 13.8億
馬鈴薯	230 〃
里芋	150 〃
7. 他の根菜 { 大根類	720 〃 } 11.8億
蕪菁菜類	212 〃
蔬果類	250 〃
8. 果實類	150 〃
9. 砂糖類	550 百萬斤
10. 獸肉類	290 〃
11. 魚肉類 { 魚類	282百萬貫 } 3.―2億
同製品	25 〃
貝及水產動物	55 〃
12. 鷄卵	10億個
13. 牛乳	30 萬石
合計	
14. 淸酒其他	4.5 百萬石
總計	

第三表

總人口五千六百萬人に對する一人一日食料配當額	食料需要額四千萬人に對する一日一人の配當額	備考
2150－2200Cal. (Notto Cal.) 就中 { 蛋白……240―245 Cal. 脂肪……90 Cal. 含水炭素……1870 Cal.	3000―3100 Cal. (Notto Cal.) 就中 { 蛋白……310 Cal. (總熱量の11%) 脂肪……125 Cal. (總熱量の 4%) 含水炭素……2535 Cal. (總熱量の85%	(1) 全蛋白量の15% 總熱量の 1.5% } 肉食主として魚肉 (2) 邦人成年男子平均體重＝55.Kg $\frac{3000}{55}$＝55 Cal. P. 1. Kg. K. G.

擧るものであつて、動物性の食品としては僅に魚肉一日一人平均四十瓦に加ふるに僅少の獸肉を以てするに過ぎず、歐米人とは全く趣きを異にして、獸肉、鷄卵、牛乳の如きは殆んど計算の中に入らないと云つてもいゝ。

處で、上述の食品平均配當額及び其の活用量の關係を從來歐米諸國に於ける諸大家の實驗に依る食物要求額と比較して見るに。其配當總熱量額は邦人の平均體重に比しては甚だ過大であるが、蛋白量就中動物性蛋白量に於てはフオイト。ルブネル。アトオーター氏等の要求額に比べると稍々少ない。同樣に脂肪量も甚だ少ないが、此の脂肪は寧ろ氣候に伴ふ嗜好の問題であつて營養上には大なる關係は無いものと見做して差支へはない、處が右の蛋白量の如きも之れを菜食論者及び減食論者として今日迄前三氏等と同樣に明赫々なる營養論を掲げたるシペン。ヒンドヘード。チッテンデン氏等の標準食として要求せる處に較べると甚だ過多である。

若し小生の擧げた是等の比較及以下述べる處の標準食に對する拙見に就て精しく申せと云はる方があれば岡山醫學會雜誌大正八年二月號を御參照下されたし。

要之、私の意見としては吾人の標準食素額即ち蛋白質、脂肪含水炭素の日々の所要額及び標準食料額を吾人の體重又は體表面積に換算して單に小範圍に制定するまで今日の營養學は進步して居ないと思ふ。斯う言ふては甚だ濟まぬやうな氣もするが、之れも一つは人間を試驗動物に使つて永年種々の試驗をする事が出來ないからである。と云つて吾々は今日まだ吾々の營養經濟上間接に於て甚だ必要なる家畜に就てすらまだ其標準食料の如何量なるかも研究して居ないのである。

實際又世間を通覽して見ても、下女は平均奧樣より營養可良の事多く、主人は家來よりも、地主は農夫よりも血色惡しく、一見生氣少き眞の營養不良狀況を屢々見るのである。尤も富豪や地主には豕の樣に肥つたのが屢々畫がかれてあるが、あれは營養可良では無くして飽食の結果なつた脂肪過多症と云ふ一種の營養不良症で、惡く云へば活力減退の一徴候である。

又食物を多量に採ると否とは習慣である事が多い。私はよく、營養學を論ぜんとする者は必ず食餌學を風土風習に應じて參考せねばならぬと言つて居るが、實際過食も少食も一定の範圍を超過せざる場合食餌である事が多いと思ふ。而して此の食餌を一朝一夕に改良せんとするのは困難でもあり、又之

を急に變化さすと屢々消化障害又は營養不良等の現象を引起す様に思ふ。尤も食癖なるものに就ては種々なる原因誘因又は性癖——等があつて、之を了解して行くと數限りもないから玆で食癖學を述べて居る間もないのである。

四　邦人の食癖——過食癖

其處で次に考へて見たいのは邦人一般の食物に對する癖である。其の第一に擧ぐ可きは過食の癖で有つて。是れは國民の健康にも又た最近唱ふる糧食經濟上にも著しき影響を有して居る事は見逃す事が出來ぬ。其の理由は前に揭げた二個の表にも明かである。尤も邦人が前表の如き割合に其全部を食せるや否やは多少の疑はあるも、前表も又吾人の日常の經驗より割り出したものである、唯其食糧量の比較的多額に計上してあるのは、日本人は歐米人程多量の食品をば調理と食膳とに放棄しないと思ふたからである。若し果して然らば邦人の平均食量額はフオイト氏の計算よりも遙かに過大なる觀がある。同氏の計算は體重一瓩に就き平時三十五乃至四十カロリー、多くも四十五カロリーを出でざるに邦人は五十五カロリーを攝取しつゝあるではないか。

更に顧れば邦人は一にも食物二にも食物と、餘り食物に對して意を用ふるに過ぎはしまいか。小供を見れば菓子を食はせる、來客が來ても食物を進める、食物は交際場裡の必需品として第一に擧げられて居る感がある。之は或は今日の如く機械的文明の發達せざる以前、饑饉續發時代の美風を存續して居るのであらうが、東洋人は一體歐洲人に比して大食して居るのは事實の様である。其結果として今日現に本邦に於て過食の結果消化器の疾病を患ひ居る者、並に其結果として營養不良を誘致せる者は全國民の一割位は有る様である、之に反して眞實食量不足の爲め漸次營養不良を來せる者などは稀れの様である。貧民窟や特殊部落の小學兒童などに斯る狀況に稍相似たる者を發見するも、それとても克く其の實情を洞察する時は食物不足の爲めではなくて、父母の不注意から來る食時の不整に依る場合が多いと思ふ。加之、本邦兒童は一般に過食である。先づ哺乳時代より夏季に於て過食に因して或は體温の鬱積となり消化器の疾病となり、爲めに斃るゝ兒童の數幾何なるかを知らず、是れ實に本邦兒童死亡率の第一因ともなつて居るのである。(尤も之れには種々の他の關係もあつて一概には云はれないが大體に於て間違ひの無い事と思ふ)

(第　四　表)

注意此の表は十頁九行目に入るべきものなるも組版の都合上此處に掲出せり

其熱量概算			備考		
攝取量 (Roh-Cal.)	不吸收量	活用量 (Notto-Cal.)	白米三合	白米四合	白米五合
40.0	20%	32.0	96	130	160
5.5	50%	2.8	8	11	14
420.0	0.5%	420.0	1250	1700	2100
		455	1350	1800	2270
41—50	2.6%	40—50	a) 米飯主食三合 副食物1—7全部 2000 Cal. 就中 蛋白 17—18% 内 2/3動物性 米 65—70%		
93—110	4.4%	90—105			
		130—155			
28		26	b) 米飯主食三合 副食物 1.4.5.6.7 又は 2.3.5.6.7 約1800 Cal. 米 75%		
65	7%	62			
37	5.3%	37			
		125			
82	2—3%	80			
37	5%	35			
		115			
70	2—3%	68	c) 米飯主食四合 副食物 1——7.全部 2500 Cal. 就中 蛋白15% 内3/5動物性 米 75%		
28	10%	25			
		93			
10.0 / 6.5 / 15.0	....20%	25 } 35	d) 米飯主食四合 副食物 1.4.5.6.7 又は 2.3.5.6.7 2200—2300 Cal. 就中 蛋白 12% 内 2/5動物性 米 80%		
13.5 / 14.0 / 2.0	4% / 3% / 11%	28			
6.0	30%	4	e) 米飯主食五合 副食物4.5.6.7 2600 Cal. 就中 蛋白 10% 内 30%動物性 米 85%		
1	1	1			
29	1	29			
		33			
....	....	50-100以上	f) 米飯主食五合 副食物 5—7 2500 Cal. 就中 蛋白 8% 米 90%		

所謂米食者の食品と

品種	營養素	數量（瓦）
主食　白米一合（飯三杯）140 g	蛋 脂 炭	9.7 0.6 103.0
1）鶏卵二個　80—100 g	蛋 脂	10—13 10—12
2）牛乳一合　約200g	蛋 脂 炭	7 7 9
3）中等牛肉　25—30匁　100 g	蛋 脂	20 3—5
4）魚肉（平均　25—30匁　100 g	蛋 脂	71 3
5）豆腐味噌汁（大椀一杯）	味噌 20 g：蛋 脂 炭 豆腐 50 g：蛋 脂 炭	2.5 0.7 3.6 3.3 1.5 0.5
6）生大根　50—200 g（[illegible]%H_2O）	蛋 脂 炭	1.5 0.02 7.0
7，糖類及[illegible]の嗜好品	…………	…………
8）水並に灰分		

上表備考中に記入せるＡＢＣは美食にして一般には之を求め難くＤは中流の部にＥ及びＦは中流生活以下の一般に相當せるものと見做してある。

然らば何が故に輓近食糧問題の聲澎湃たるか。今大正七年度に於ける食品生産額を正確には知り難きも大凡前表に示せる處より多量ならんも少きに擴するの憂無かるべく、従て吾人が今日食糧の缺乏に苦みつゝある者でない事は大凡想像せらるゝのである。但し上述の數字が大正二年乃至三年頃の生産額にして、當時の人口五千二百萬乃至三百萬人とし又同年に於て既に食品の剰餘が無かつたとすれば、當時の成年男子一人一日の食料配當額は三千二百カロリーに相當した理である。若し邦人の風習が由來斯くも大食し來れるものであるなれば、限りある此離小島に於ては將來の生産額も大概豫想せらるゝであらうし、年を逐ふて食料の缺乏するのは避け難い事である。

然し乍ら私の見る所で、輓近の食糧問題は廣汎な意味の食

糧問題ではなく寧ろ米が不足するといふ問題である如く解せらる。又多數の方々も左樣に解して居らるゝ樣である。而して米が不足するのは勿論當然の理である。

米の食用額は地方により多少の差違はあるも之を國内一般に平均すれば第二表に示せる如く邦人營養量の二分の一を占めて居る。而して其需要の度は都市生活を爲す者には比較的多量で有つて彼等は自己營養量の八十八乃至九十％を米に仰ぐの事實は第四表に依つて明白である。

五　勞働者と米食

斯の如く都市を中心として米飯食が盛んであると同時に、最近人口の都市集中は益々甚だしく、從て米の需要の如きも俄に激增したのである。加之、歐洲戰爭の影響を受けて一時に工業の勃發するや、是等男女の職工は彼等が從來執り來りし鍬や鋤を對に抛つと同時に米麥の混飯や、芋薯、馬鈴薯、黍などの混食をも捨てゝ、直に米のみを食ふやうになつてしまつた。其の結果として、所謂食糧問題――米の不足――を惹起したのは當然の事である。

元來、米飯は邦人が永年食用し來れるものにて吾人の消化器も克く之に慣れ而も美味にして比較的安價であり又營養價値から云つても之に比すべきものは少ないので有る、然し乍ら吾人が絶えず此の單一なる食物を以て吾人固有の蛋白を構成せんとする事は不可能なりとは斷定し得ざるも、必ずや其の間に過不及の生ずる事は當然なるべくアブデルハルデン氏等の立證せる「アミノ」酸選擇の原理より推しても人體營養上偏食法の不經濟なるは論を俟たない。のみならず白米は其蛋白質としての活用量七％に過ぎざるを以て第四表Fに示せる如き食膳法、即ち現今都市生活者の大多數が取れるが如き方法にては蛋白質は總熱量の八％に過ぎないのである。某氏の談に出來邦人は過食の弊があると云ふも是れ邦人食に蛋白少きが爲めに起る止むを得ざる結果なりと聞いたが其れ等は恰度斯る場合に適用する事と思ふ。若し第三表に示せるが如く全國一般の產額を平均して分配すれば蛋白質は十一％に相當す可き理である。今又シペン氏及びチツテンデン氏等の稱ふる如く僅かの蛋白質を以て吾人が克く窒素平衡狀態を維持し得るものとせんも、米のみを以て九十％の營養を取るが如き偏食法は此の學者達も必ず反對するであらうと信ずる。

前にも述べた如く、輓近商工業の發達に伴ひ都市に集中せ

る人々は從來米麥其の他の混食を取り來れる者も一朝都市又は工場生活に入るや直ちに米飯にのみ偏するのが普通である。殊に女工の如き單調な生活を爲す者には食事は唯一の樂みで有つて、而も食膳に臨めば何うしても滿腹しなければならぬ。然るに從來彼等の食し來つた麥飯よりも米飯の方が美味である爲め從つて麥飯常食の時よりも以上に滿腹する結果過食の害として消化器の疾病を惹起するは米飯の活用量より見て當然である。同時に現在に於ける女工寄宿舍の如き衞生的設備を缺ける場所に起臥して米飯偏食を爲す場合に脚氣病の續發する事も疑ふ可からざる事實で有つて、其の爲め本邦諸種の工場が被りつゝある損害の莫大なるは何人も認むる所である。

今又女子が一度職工となるか又は內職の增加に連れて庖廚經濟の如きものは甚だ輕んぜられ、誤りたる米飯偏食の傾向を助長するの感がある。

如何に米飯が美味なりとは云へ、米の如き一定の溫度と日光照射力との下に一定の期間にのみ收穫せらるゝものゝみを偏食して吾人の偉大なる發展を望まん事は恰も輓近の世界的生存競爭に處して其家屋建築材料を盡く木材にのみ求めんとするの愚と相似寄つたものである。

數へ來れば過食及び偏食の弊害は數限り無かる可く、斯の如くして又一方邦人の營養を低下し同時に食糧窮乏問題を惹起しつゝ有るのではあるまいか。

六　榮養法の攻究と中央供給法

過食及び偏食と刻下の食糧問題の關係に關しては大略右に述べたのであるが、次に考へて見たいのは、都市に於ける食糧の供給方法如何である。交通機關に伴ふ商工業の發達は都市の人口集中を益々激烈ならしめたが、悲しいかな都市に於ける食糧供給方法並に處置方法が之に伴ふて發達しなかつたが爲め食糧の不足と暴騰を來した譯ではあるまいか。若しも本邦の全食品生產額と一部分の從來の輸入額とを全國に都合よく配當する、所謂都市榮養法が早くから研究實施されて居たならば、奸商の不正手段以外食品の不足暴騰を防ぐ事が出來るのみならず、都市民の偏食より來る營養不良、脚氣症等の障害をも大部分防ぐ事が出來たであらうと思ふ。

一般の商工業は都市の發達と共に長足の進步を示したにも拘らず食料工業及び商業は何故も少し機械的に發達しないの

であらう、否な未だ組織的にすら研究されて居ない有様である。田舍の人は粗なりとも食物と住宅とは大概、他から仰がなくとも事足りる様だが、都會に於ては人間殊に文明人の生活に最も意味あり價値ある住宅を毫も顧る暇なき程にお互に食事に追はれて居るのは、吾人は云ふに及ばず國家諸共に氣の毒な事である。最も輓近一部の都市民を食事の迫害から救助す可き方法も漸次出來、共同庖厨、購買組合熱も漸次高まつて來たやうであるが、其れ等は未だ九牛の一毛にも足るまい。更に研究すれば方法は幾らでも有るのではあるまいか、今茲に述べんとする米飯中央供給法の如きも亦其の一途である。

紡車をば一人で廻して居たのが、何時の間にやら幾千錘も一度に働く紡績工場になつてしまつた。其れだのに一軒に付き必ず一基の竈を設備して、一日幾時間か人間一人の勞力を煩事に用ひなければならぬと云ふ事は不思議である。歐米諸國も元來一戸一基の竈(かまど)を備へて自分達の麵麭は自分の手で燒いて居たのだが、夙に中央供給法の實行を企てゝ以來パンは誰でも配達して吳れるもの又買ふものと思つて居る位である。だから日本でも米飯販賣が敢て理想家の空論にのみ了りはしないやうに思はれる。

先づ大凡戸數千戸に對し一個の竈(かまど)を設け、高壓蒸氣の力を借りて完全に消毒され而も最も出來具合のいゝ暖い飯を炊ぐ事が出來る、それを金屬性二重箱の飯盒に入れて配達すれば優に一定時間は暖さを保つ事が出來ると思ふ。斯くて販賣又は配達の方法は何とでも自由である。

先づ斯くすれば第一、急激なる米價騰貴の一部を防ぐ事が出來る。第二には薪炭を省く事が出來る。第三に勞力を省く事が出來る。第四に偏食の弊を防ぐ事が出來る。第五に屋內の汚染煤煙等の發生量を減少せしむる事が出來る。本邦爐は薪炭の溫熱利用量一割以內に過ぎずして、他は室內及び家屋の汚染用に供せられて居る。まだ其上に各個の爐を廢止すれば住宅建築上にも諸種の好影響を齎すであらう。

炊事に關する勞力を一日五錢とし、之に要する薪炭を一日五錢とするも一軒の家で毎日十錢だけ節約出來る譯である。混麥飯の如きも米飯に比して面倒であると云ふ點から嫌はるゝ事もあり、馬鈴薯飯だつて戸々に之れを製する事は云ふ可くして行ひ難いのであるが、此の中央供給法に依れば、混麥飯、馬鈴薯飯、皆な意の儘に炊かれて、富めるも貧しきも獨身者も

大家族者も一様に之を味ひ得るのみならず。一朝事ある時には多大の助けとなり、又當然の結果として、前にも述べた米飯偏食より來る經濟上及び衛生上の諸種の障害を防ぎ、糧食の供給を潤澤ならしめ、價格を調節し、國民の營養狀態を良好ならしむる等の德がある。然れども、從來吾人が有する一戶一個の爐は吾邦では隨分久しい歷史を有して居る結果、飯として供給せらるゝのが何となく不潔なやうな氣持がするかも知れない。然し現在、軍隊、寄宿舍、病院等では各々一個の竈に依つて炊がれた飯を供給せられて居るではないか、總て社會改良の政策を實行するに當つては、お互に末葉の感情問題などは排せねばならぬ。

要するに本邦の現狀ではまだ食糧が不足して居るのではなくて米が都市民の要求に對して不足して居るのである、卽ち市民の偏食癖に原づくのである。而して都市の人に集中激烈なればなるほど、其の傾向も又益甚だしい樣である。是を救濟する途は榮養法の組織的研究で有つて、米飯販賣法卽ち中央供給法の如きは其の最も適切なる一方法ではあるまいか。

次に昨年來から大分やかましい、尤も近頃は又少々熱が冷めた樣だが、例の食料問題と禁酒論者に對して一言以て拙考を御參考に供したい

七　酒税と公設浴場及び公設製飯所

最も私は此處で禁酒の可、不可を論ずるのでなく、又酒の弊害を論ずるのでも無いが、米を三百萬石も酒にしてしまふと云ふ事は以ての外だ。百——二百萬石にすれば其れで日本の食料問題も解決せらるるでは無いかと云ふ樣な事を論せられた方がある樣だが、私は左樣な事では何の役にも立たぬ事と思ふ。其れは上表によつても明白な樣に、若し輓近の勢で人口が都市に集中したならば、又其れ等の人々が皆純米飯のみを食ふ傾向になつたならば、例へば日本の土地柄から考へて都合の良い商工業が將來益々發展し、今日の英國の樣にならずとも、人々の過半數が都市又は市町に集合する樣になつた其時に、其れ等の人口の大多數が今日の如く彼等の營養總額の八十乃至九十%を米に仰ぐならば、六千萬石の米が八千萬石乃至は九千萬石になつたとて到底足る譯のものでない。だから私は何とかして速に米飯販賣法を企てゝ、其處で種々の混飯を製造して供給する樣にして貰ひたいのだ。其處で概略の事であるが——今本邦の市町の總家屋約三百萬乃至四

百萬戶として、三百乃至四百戶に就き一ケの米飯中央供給所を設立する。其の數約一萬箇之れと同様に同所に一萬の共同浴場を設立せしむる。其の代價各一個一萬圓と見れば總計二億圓或は三億圓と見てもよからふ、相當に立派なものとし經常費までも供給するならば優に三億圓は超えるであらふ。

偖て其財源だが、私は其財源としては、元々食物の問題だから食物の方から融通するとして例の酒を利用しては如何と思ふ、即ち酒税をうんと増加するのだ。近年の酒造高年々四百萬石之れに麥酒燒酎等を合すれば四百五十萬石で、目下でも年々一億圓の税金が擧つて居る位だから、酒税を三倍にすれば年々二億圓は今より餘分に取れる譯で、左様すれば財源は同じ關係のもので充分融通が出來る事となる。

處で何故私が斯様な事を唱へるかと云ふに、出來何れの國の飲酒又は造酒量を見ても工業の發達と共に、又國勢の發展と共に造酒量は増加して來て居る。換言すれば造酒量と國勢發展の度とは、正比例して居ると見てもよい。若し飲酒を辨護する人があつたならば、酒をよく飲む國民は發展すると云へるかも知れぬ。禁酒家が何んでもかでも惡い事を酒の罪とするならば、飲酒家は又何事をも酒を飲まぬ罪に歸し得るかも知れぬ。尤も吾々には左様な事は何れも根據の薄弱なる表面論だから如何でもよいのだが、元來酒を嗜む者の辯として、否一般嗜好の辯として過度に流れ易い。而して其度を減ずるのには先づ第一之れに變る可き嗜好を他に求めて嗜好の濃厚ならんとする時に之れを稀薄にすればよいのだ。今我が國に於て酒の嗜好益々大ならんとして居る折柄に際し、之れを强制的に抑壓せんとすれば失敗するであらふとは、過去歐洲に於ける一部の歷史に徴しても明白である、尤も米國のは未定である。

今酒税を三倍とする時、酒の代價二倍乃至三倍になつたとして、又同時にその税金を以て食品殊に吾人の主食が安價に求めらるゝとしたならば、一家の收入と支出に於て酒代は非常に目に付くものとなる。——其處で主人の飲酒も家族的の制裁を被る事は大きくはあるまいか、又第二の國民を養成する上に家庭的の鞏固なる教訓が出來はしまいか。

次に私は曩に共同入浴所を官費で造る、又之れを米飯販賣所と一致せしめると述べたが、之れは又一種の過度の飲酒防止策であり、同時に一般國民の保健策である。日本の樣に濕

度高く、夏の溫度高く、冬にも屢々寒冽の氣候に於ては入浴は欠く可からざる保健法である、其れが風習となつて今日日本人は盛んに入浴するのではあるまいか。私も公衆浴の衛生と云ふ事に於ては一昨年或る目的で調査した事があるが誠に奬勵す可きものであつて、私共の思つて居た危險は案外少く、又あつても容易に防止し得る事と決定した。入浴は單に何人にも奬勵す可き保健策であると同時に、嗜好としても又最好のものである。終日働いて後勞働者が一日の勞を休め、又は頭腦の凝り固りを散ずるが爲めには、アクチーヴ（自働的）に血行を盛んならしむるよりは、パツシーブ（他働的）になすを撰ぶは當然である。

其爲めに極少量の酒を用ゆる事は誰れしも反對はなからふ、併し乍ら酒は過度の嗜好となり易きものである事は又誰れしも認むるであらふ。其處で私は此の大役目の幾分を入浴で入れ替へ樣とするのである、同時に入浴すれば酒量は少しでも其目的に對し比較的有効である事も事實であると信ずる。

即ち酒代を高くして入浴料を無料にせうなど云ふ一種の社會に於ける嗜好善導改良政策なのである。

尤も私は酒の稅を多く取る爲めに國民に飲酒を奬勵せよと云ふのでは無い事は勿論だが、又絕對禁酒も根據の薄弱な議論の樣に思ふ。但し未青年禁酒案には贊成だ。寧ろ未青年禁酒など云ふよりも、若し今日の徵兵制度が續行せらるゝものならば、之を利用して廿二歲まで禁止とするがよからふ。煙草も同樣だ。

元來酒とか煙草とか云ふ樣なものは、主として男子の嗜好品である。又其嗜好の初發は十八歲廿歲即ち男子生長期の終り頃の樣だ、多くは此時期が分れ目の樣である。

だから若し多數の男子が徵兵前に斯る嗜好に耽る時は入營と共に非常の困難を感ずるのは當然である、從て自然體格强壯有爲の青年には、斯る嗜好品の過度の害が減少せらるゝ事と思ふ。廿歲までとすると僅か二歲延期するのとで、其間其目的に對する奏効の度が甚だ異るであらふとは兼てより私の所論である。些か愚見を述べて、大方諸彥の御高批を乞ふ次第である。（大正八年十月）

國民精神生活の改造

早稻田大學教授　杉森孝次郎

精神生活の改造を社會的に代表する方法は教育である。勿論此の場合に意味するところの教育は、學校を條件とする形式教育に限るわけではない。耶蘇は一人の教育者であつた。ニイチエも一人の教育者であつた。或はマルクスも、ミルもさうであつた。自己教育を教育と呼ぶことは出來る。然しながら茲では自己教育をば修養の語で表はして置く。

精神生活の改造は制度改造の準備でもあり、制度改造が生活改造の應急的方法を代表するに對比して言へば、生活改造の根本的方法である。デモクラシーの思想が熟するに從つて、輿論が制度改良の有力なる條件となる。即ちこれを形式的に説明するならば、デモクラシーの社會に於ては參政權が普及して居る。議員は選擧區民の意思を代表する筈になつて居る。大抵の制度改造は然るに議會の議決を必要とする。代議政體そのものが輿論の重要を徴表する。精神生活の改造を準備しないで制度改造を敢行することは、『民は由らしむべくし、知らしむべからず』といふ專制時代に於てのみ可能である。恰かも醫者が自己を信頼しない病人に手術服藥を強ふることが不條理であると同様の關係が、所謂今日の社會改造家若しくは爲政家、經世家と、一般人民との間には存せねばならぬ。

精神生活の改造を目下の世界に於て努力するならば、その目的は、聰明の普及と増進とにあらねばならぬ。意思と情操との改造は、聰明を完全にすることによつて自然に結果する。實を言へば、意思と情操に缺乏して居る時代は比較的に尠ない。二千年近く以前に、所謂原始クリスト教徒を迫害した人々に聰明が熟して居なかつたといふことは言へるかも知れない。然しながら意思と情操とが貧弱であつたとは事實が言はさない。意思と情操が貧弱なところに迫害力が強く現はれる筈がない。守舊主義者にも意思と情操はある。たゞ守舊主義者の意思と情操

は、聰明が成長しない間の生命を有するに過ぎない。時と共に、即ち經驗と共に進步主義者が勢を制するに至るのは、聰明そのものが、個性其のものゝ一大部分として、成長の原則に支配されて居るからである。精神生活改造の要件は、迅速に聰明を傳播するにある。そのためには偉大なる聰明者及び聰明者の組織的行動が必要である。原始クリスト敎に例をとつて言ふならば、ポールを使つて敎會が發達し、敎會を通して耶蘇の敎が燎原の火の如くに延び廣がつたことはこれである。近代國民主義の最大先覺者たる位地を占むる伊太利の天才マツチニは、進步と組合とを新時代の原則として力說した。確かに彼には豫言者の眼があつたのである。勞働組合の發達が卽ち組織的行動の價値を例示する。今日の世界を見渡して、國民人の組織的行動は因果といふ巨大なる形式をとつて發達しつゝある。職業人の組織的行動は勞働組合にその一例がある。其の他各宗敎に敎會あり、各專門學術にその特殊の硏究會がある。然しながら所謂常識の根本的敎育者たる位地を占むべき少數聰明者の間に、何等の組織的行動が企てられないのは一つの不備と言はねばならない。各專門と各種團體を橫斷して、常識上の聰明者の團體が、極めて自由なる條件の下に形成せらるる事は、これを國內にしては內政上の制度改造に裨補する効果があらう。また國際的には、各國の隅々に、孤立的に奮鬪して居る同志の勢力を糾合することは、吾人が海陸軍を維持すると同時に必要な時務であらう。文化運動といふ言葉が我國の一部に發生して居るやうである。若し今日世界が制度上の大改造を要する時機に際して居るとするならば、文化運動は當然大いに興起せねばならない現象である。佛蘭西革命が歐洲諸國の政治を民本的傾向に感化した功績は著しい。尠くとも革命を恐れて列國の政治的常識が、人民の意思を尊重するやうに影響されたことは大なる事實である。然るに佛蘭西革命を準備したものは、所謂十八世紀の歐洲の思想界を代表する啓蒙運動であつた。佛蘭西に就いて言ふならば、價値に於ては第一位を占めるルーソーを首めとして、ヴォルテヤ、ディッロ其の他の所謂百科全書學者(百科全書學者とは百科全書を起草編纂した思想家の一團をいふ)が多少組織的に、輿論を聰明化することに努めた功績は沒却し難い。私は革命の信者ではない。然しながら革命を正當に不可能にするためにはその原因を無くせねばならぬ。然るに原因は不聰明にある。革命が起らざるを得ないやうな制度を固執することが一つの不聰明である。歷史的努力に對する充分の理解なく、また論

理的價値に對する眞面目な修養もなしに、輕卒に革命を信ずることが他の不聰明である。如何なる方面から考察しても、聰明を怖れる理由は立たない。聰明の發達に邪魔をしないことが、今日の如き政治上の自由が公認されて居る社會に於ては、暴力的制度變革を避けて、しかも正當な制度改造を可能にする唯一の方法である。精神生活の改造が現在よりも遙かに大きく發達するでなければ、制度改造も、根柢の淺い、生命の短かいものに終る外あるまい。國内に自信ある思想家が、大小簇々として出現する要がある。一種の啓蒙運動が、佛蘭西革命以前の佛蘭西に於てよりも、今日の世界列國に於ては必要である。何となれば革命を不可能にすることによつて進歩を確保する必要があるからである。結局は我國のみならず世界の全面に亙つて、新鮮にして有力なる宗教的大運動が起る希望がある。勿論今日の社會主義には、既成宗教のすべてを合しても、到底足元にも及ばない宗教的實質がある。資本主義に於てさへもさうである。國民主義に於てもさうである。然しながら政治上、經濟上及び科學上、藝術上の傾向又は運動として存在する諸現象の奥に、活働して居る人間的本性の僞りなき衝動と聰明とに、綜合的實現の機會を供給する、原理生命としての意味に於ける新哲學と新宗教とが、恐らくは時代の根本的要求であらう。何となれば制度改造は、人間の再生を意味せねばならぬからである。

（一九一九、一〇、一六）

新刊批評

△**勞働者セリオフ**（中島清譯）露西亞の大革命を題材とせる傑作小說集也勁烈の筆致は能く革命的人物の躍動を描き出し血躍骨鳴るの實感は遺憾なく紙上に躍動せり（定價壹圓貳拾錢東京牛込新潮社）

△**日本工場法と勞働保護**（神田孝一著）我國に於ける勞資協調策なるものありとせば將た生產能率增進の方法なるものありとせば差向き工場法規の革新と勵行とに在り本書は即ち此期待に基き本邦勞動保護の由來に遡り併せて現在の實情に照し其缺陷を訪ねて是正を促さんとするもの也（定價二圓三十錢神田表神保町同文館）

△**激動の中を行く**（與謝野晶子著）婦人評論界の將星たる著者が第八回目の感想集なり社會問題の研究と解決とに根柢を置ける著者の一言一句は殆んど社會に藝術に將た又政治に一大警鐘を鳴らすの感あり志ある士の必讀を希望す（定價一圓四十錢神田仲猿樂町アルス社）

△近代文學に現はれたる**兩性問題**（島村民藏著）兩性問題は古來汲み盡せぬ藝術の題材となつて居る人生の最大問題である無限に伸張せんとする人間の生命の歴史である著者即ち此問題を近代文學に求めて詳細な見解を下し批判して居る是非一讀すべきもの（定價壹圓六十錢麹町飯田町大鐙社）

地方教育家の生活問題

一、地方小學教員の生活問題
二、地方中等教員の生活問題
三、地方教育家の精神生活問題

三井甲之

一

地方教育家の生活問題は國民中堅階級としての俸給生活者の生活問題の一部分である。それは地方生活と都會生活との關係、教育の意義及教育家の地位等に就ての事實及その考察に基く原理の下に論ぜらるべき問題である。それ故にそれは經濟學的、社會政策的、及文化史的の各見地からしての研究を綜合して、之に道德的批判を加へねばならぬのである。しかし今は完成した著述をなすべき場合でもなく、『改造の理論』よりも『改造の方策』を述べようとするから、先づ第一に地方の小學教育に從事しつゝある一友人の感想、意見及び報告を引用しよう。

『七月十二日以後各府縣とも五割内外の臨時手當を支給されてゐますが、際限なく暴騰する物價のために、本縣でも各地で實際生活費を書き出したところ、俸給だけでは何れも不足してゐる。それもほんに生命をつなぐに過ぎない必須のみつもりで不足してゐるのだから、病氣とか其他の臨時の入費には更に不足する樣な譯です。「教員では飯が食へぬ」これが現狀です。實際、財産が幾分でもあるものはよいが單に俸給のみで生活してゐる人、まして妻子ある人などの有樣は實にむごたらしいものです。陋屋に粗衣粗食もまあいゝとしても子弟の教育費が出ないために隨分無理をやつてゐます。心ならずも他人に物質的損害などかけてる人もあります。第一自身の修養費に困つてるものもあります。書物や新聞雜誌は學校で共同購讀するにしても、旅行とか特殊な研究をするとか、金のかゝる事は一切出來

ないのです。

一方村民は景氣よく生活が向上するのに教育者は反對に控へ目になります。物質以外に考へない人だちはすぐに教育者を貧乏教員位に云ひます。甚しいのは輕視し侮ります。けれども翻つて思へば一度に五割の増給は村經濟に大打撃です。この爲めにある村の如きは縣會に背いてまで五割を減じて四割とか三割とか支給するなど騒いだのもあります。小學教育者の俸給が村會議員に、中等教員のそれが縣郡會議員などに左右されると云ふ事は由々しい大問題だと存じます。現在市町村で支出しつゝあるのは、どうしても國庫支辨にしなくてはいけないと思ひます、そして思切つて厚遇する必要があると思ひます。

教育者に轉職者が大へん增しました。その重大なる原因は待遇の問題らしいのです。隨つて教員不足を來しました。一校の教員の定數をそろへる事は大へん骨の折れる事です。短期講習で養成などしても到底十分な補充は出來ません、老朽者もひきとめねばなりません、しつかりしない者でも採用するといふ様な譯で、教育家の資質が低下する、それは直ちに國家生活の弛張に關すると思ひます。

近頃は家族に内職をすゝめます。しかし思ひついた様にこんな事を云ふより以前に困るものは皆やつてゐます。やつてゐて困つてるのです。

物質上の待遇も必要ですが、精神的優遇が更に大切でせう。永く勤めて功多きものには勳八等をくれます。長く教育に從事したものに勳八等とは何たる事でせう。一年志願兵が正八位であるのに比して、立派な中等教員がやつと奏任待遇ではあまりに不釣合でせう。

私は不具を誇張する乞食が路傍の人に憐みを乞ふ様な氣分で泣事めいたことをいふものは讀む氣にもなりません。矛盾した云ひ草の様ですが生活難をあまり口にする様になつた事は流行の意味もありませう。勞働者がある種の人に煽動されて盲動しストライキとか怠業とかをやる様に、教育者としてそんな事を企てたら駄目だと思ひます。空腹をしのべと教育者に強ふることは無理であるが、贅澤生活を羨む様な人は第一に考へなほす必要があると思ひます。

要するに爲政者は教育家を優遇する様に心がけ教育に從事するものは物質的缺乏をうんと我慢して精神生活を向上せしむることにたはまぬ覺悟が必要と存じます。

只今私共の學校職員は何れも生活に餘裕のある人です。』

以上は一友人の言葉として、その人に思想上の責任を負はしめて參考として引用したのではない。僕が同信の世界をそこに見出したが故に引用したのである。つまり僕は友人の意見に全く賛成するのである。

二

こゝで再び地方中學教育に從事してをる一友人の意見を概括して引用しよう。しかしながらなるべく原文をそのまゝこゝへ發表するやう直接引用の形式にする。

一、俸給及手當の情況　私は就職してから三年間かゝつて三圓昇給しましたが、當時は五年間かゝつて五圓昇給するは上等の成績者でした。當時は高等師範を出た優等生でさへ初任四十五圓でした。昨年の米騷動があつてからこの方、即大正七年九月からは一割增の手當を給され、年末になつて三十圓餘の年末賞與を貰ひました。この賞與額は本縣に於てはレコード破りでした。今年一月になつてから、昨年十月に遡つて月二割の手當を給與され、今年二月三月の兩月は三割を給され、今年四月以來本俸五十餘圓に昇給しました。六月になつてから四月に遡つて昇給した本俸の二割を給され、七月以後は三割を給與されることになつてゐます。なほ去る八月中は所謂盆賞與として一ケ月分即ち五十餘圓の賞與を受けました。これは應急手當の意味であり、國庫支辨の官吏と均衡を保つ必要から出たもので、地方の新聞が盛んに書き立てたお蔭なのです。

本縣はこの十月から五割の手當を給與するとか風聞されてゐます。恐らくは事實となつて現はれるでせう。併し五割の手當時代は過ぎて今は十割の手當を騷いでゐるやうに思はれます。敎育者として公然騷いでゐるものがあるかどうかは委しくは存じませんが、內幕に於ては可成眞劍に叫ばれてゐます。大藏省內務省等の下級官吏のやうな態度には出かねますから、外部に對しては比較的穩かにしてゐますが、もしも氣早な者が導火線となつて或る行動を發起すれば、或は何等かのプロパガンダとなつて現はれるかも知れません。

二、生活情況　私が赴任した年には米の相場は一升十五錢でした。今は三等米で一升五十七錢してゐます。約四倍の騰貴です。尤も十五錢といふのは米價に限らず何でも極めて安價であつた年ですが、それにしても物價と俸給との釣合は到底御話しにはなりません。從つて洋服に下駄穿きでゐられるこの地方でありながら、洋服を新調しかねてゐるのが一般です。食物も濱邊

に近い所でありながら、魚類も滅多に買はぬといつてもよいのです。妻子にさつぱりした着物を着させ得る人は先づ無いでせう。これは哀れな事實ではありませんか。大正五年頃までは生活に餘裕があつて地位的欲望を滿してゐられたその隋性があるので、ホンに命を繫ぐだけの生活に切りつめてゐる現狀は悲慘なものです。

　私の學校に創立以來二十餘年間勤續の老先生がゐます。初任三十圓であつて、今は本俸七十圓に三割の手當を貰つてゐますが、大學へやつてある子供に每月學費を送ると、あとの家族數人はどうして生活してゆかれるかと心細くなるといつてゐます。同情に堪へません。（俸給令の判任待遇一等二等即ち七十五圓、七十圓は今年四月まで實現されたことがないといふ情況であつたのでした、全國を通じて、）それで最近他縣へ轉任した教員は百圓二百圓の借金をしてそれが全部の返濟はせられずにゐます。返濟しかねるのは生活に追はれてゐる有力な證據です。或る人は自分の借金を弟に返濟して貰つてゐます。是等の人々は教頭若しくは中以上の收入ある人々の俸給のみによつて生活を維持してゐる人々です。敢て贅澤をしてゐる者でもないのです。中等教員は初任給の割合に增俸しませんでしたから、老後ほど益々生活は困難を感じるやうです。全く制度の罪です。

　殊に近來は勞働者や百姓の方の景氣が好いので、不動產のある者は退くものもあり、無財產の者は多くは會社方面に轉職するものが夥しくあります。英語教師が貿易商社へ轉ずるなどはその一例です。それ故目下は「教育者である」とか「天職と信じて盡す」とかいふ言葉は一種揶揄的に用ゐられてゐます。それで教師も生徒に教員となることをすゝめません。それ故中學卒業生の劣等生が高等師範を希望し入學するといふ現狀です。今年本校を卒業した生徒で銀行へ行つた者は月收六十圓あるといふことです。かういふ有樣では我國將來のため實に寒心に堪へません、自分の子供を自分と同じ職にするといふ考は比較的軍人側に多かつたが、それでも士官希望者の減少して來て、ひたすら物質的收入の方面にのみ着眼する今の社會の風潮は是非改めたいものです。

三、分配と勤務時間　殊に中等教員をして羨しく感ぜしめるものは、實業方面の會社員の收入のやうです。然し勤務時間から言へば中等教員は遙かに僅かなわけです。多くて一週十八時間か二十時間ですから、二十四時間位として俸給を增してやる

のも一方法でせう。如何なる職務でもいやく\ながら從事するやうな狀態にあつては好成績は得られないと思ひます。併したとひ俸給を口にする人でも、職務に從事してゐる間は不平を忘れベストを盡して生徒に向ひ、生徒も亦之を必然的に求めて止まないのですから、まだく\惡い結果を認め兼ねますが、この狀態が長く續きますと教員の數は益々減少し、質は益々粗惡になつて、國家の中堅たる教育の根柢を覆す大問題となるに違ひありますまい。

四、當局者の態度　當局者が近來教育者優遇に腐心してをられるのはよく知つてゐます。それは感謝しますが、惜しい事にはいつも一時代づゝ後れてゐます。「節約せよ」といふ趣旨の文部大臣の訓令が八月中ありましたが、これ以上節約することは出來ないと皆は申してをります。「內職をせよ」と教員の妻にすゝめた訓令もありましたが、それも釋迦に說法でせう。一體今までは教育者を敬して遠ざけてゐた觀があります。殊に中等教員の待遇問題は何時でも後まはしになつてゐたのです。小學校よりも、大學よりも、專門學校よりも、どこよりも後です。此の中等教員が度外視せられてゐたといふことは長い間中等教員の(當局に對する)不滿であつたらしいのです。教育界に三十年盡した功勞によつて勳八等を授けられた如きは、當人も「難有迷惑だ」と云ひ、他人も輕んじてゐます。戰時には村長さへも勳八等に敘せられたではありませんか。三十年中等教育界に盡した功勞に依つて勳八等に敘せられた者を職員錄で調べはじめた物好きがありますが、日本國中に指を屈する位でせう。之は教育功勞章を特制する必要があります。少くも文勳章を制定する必要があります。恩給令の改正も必要です。特別加俸は小學教員にありますが、中等教員にも均霑させるべきです。これらは明年度の議會に出るでせうが、思切つて率を高くすることを希望します。

縣財政としては治水工事等に莫大な支出を要するでせうが、縣參事會員の自覺と奮發とを切に要望します。教育費とあれば頑迷に削減を主張するやうな態度を改めて、教育の施設經營と、教育者に對する新しい理解とを希ふ次第です。宿直料を本縣では一文も支給しませんが、他縣ではどうでせうか。

五、教育者の態度　教育者も今までは誠に消極的退嬰的でありました。教育者の後援とすべき有力の團體もなかつたし、後援し吳れる人々も無く、人の儀表であり君子であつて、「武士は食はねど高楊子」式に祭り上げられて、自分もよい氣になり、

政治と政交渉に、實社會を超脫し、その辭研究心があるでもなく、駄賭を弄し、圍碁、謠曲などに耽つてゐました。それ等がすべて今日の教員氣質を形成させたものだらうと思はれます。熱心に學術の研鑽に努めてゐる者もありましても常にそれは少數です。教育者自らが侮る罪も深いと思ひます。自分の運命は自分から開拓するといふ氣概が欲しいものです。

附記。現在の俸給令は明治三十六年三月の勅令そのまゝです。そして判任待遇は最低三十圓（高女は二十圓）最高七十五圓といふ階級になつてゐます。其の當時の縣判任官は最低十五圓でした。もし今に於て判任官の最低五十圓とすれば（今日主張されてゐる通り）中學校の最低は百圓とすべきでありませう。明治三十六年以前は各府縣で俸給額を夫々定めてありまして、國家は別に規定しませんでした。（但し師範學校は早くから規定あり）、今は師範、中學、高女、實業學校皆共通です。」

この引用についても前の場合と同じく、單に參考としてゞはなく、僕と同じ意見として自分の言はうとするところに合致したものであることを明言する。

三

與へられた問題に就て改造改革の要求と、それが基くところの事實の調査探究とに就ては蛇足を加へる必要はないのである。

一般に教育が繼子のやうな取扱ひを受けて來たのは、明治維新が政治軍事の方面に改革の中心を求めて文化教育の方面に及ばなかつたからである。又それは歐洲文明を取り入るゝに就ても先づ自然科學とその技術とを先にするのも自然の趨勢であつた。自然科學は普遍的法則に準據するものであり、又その應用は眼前に効果を示すのであるから、それを第一に輸入して世界の大勢に追隨しようとしたのは無理もないことである。そのために産業と交通と軍事的施設とは近世化して世界列强の中に加はる實力を得しめたのである。次に現行の法制も歐洲のそれを輸入模倣して舊制度を一變せしめて條約の改正を成就すると同時に憲法を定め議會政治と自治團體との形式だけを完成したのである。

しかしながら此の自然科學的及び法制的改革はその基礎となるべき國民精神があつたから始めて成功したのであつて、自然科學と法制とのみの効果ではなく、それを國民生活の上に生命化する國民精神によつて始めて成就せられたのであつた。此の

國民精神は自然科學及び技術、又は法制の如くに外國の形式を輸入摸倣すべきものではなく、その國家自身に固有のものである。此の日本固有の國民精神は明治維新の基礎であり、明治大正の物質的又は制度的進歩の背景であつた。此の國民精神は徳川時代に於ける勤王の志士、儒者、史學者殊に國學者等の努力の綜合によつて創造せられたところのものであつた。それは畏くも　明治天皇の御製に示さるゝ直觀の世界である。しかしながら維新の志士は殉國者となつて、その繼承者には學者は無かつたのである。井上毅の如き人は學者としての素質を有してをつたが短命であつた。それ故に一般に藩閥といはるゝ方面の權力的地位を占めた人々は軍人又は政治家としては相當の人もあつたらうが、一國の文教の方面に力を盡すに足る學問のある人は少かつたのである。それ故に國民教育の源泉たるべき帝國大學法文科大學等に於ては幕臣系統の學者が勢力を占めてをつて、藩閥系統の人もまた一般に全國の學者も十分に此の方面の改革に干與する機會と實力とを有してをらなかつた。法科大學の方は所謂官僚主義の養成機關ともなつたが、之に比較すると文科大學の方は全く幕臣系統の學者の占領するところとなつてしまつたのである。法科大學は文科大學と比較すれば學生の數も多く、出身者も有力の地位を占めてをるのであるが、國民教育といふ見地からすれば法科大學は文科大學に從屬せしめらるるのである。今はそれらの點を詳細に論ずべき場合では無いから概括的にいつて置くが、學問の性質からいつても法科のそれは文科のそれに從屬すべきで、法科の研究の原理は常に文科の研究範圍である。又一般文教に關する活動は文科出身者の活動範圍である。それのみではない、高等師範學校、師範學校、中等學校、及び私立の大學及び專門學校に教員を供給するものは文科大學であつた。又慶應義塾と早稻田との文科大學の如きも幕臣系統又は徳川時代趣味の創立者と學者とによつて指導せられつゝあるのは明かな事實である。それ故に地方の教育家を養成したところの精神は一言にいへば『舊幕趣味』である。それは同時に被教育者としての一般青年思想をして舊幕趣味の傾向を帶びしめたのである。

文壇の小說、興味中心の流行雜誌、流行のデモクラシー政論一般の骨董趣味及びその反對の新しがり思想等は皆此の舊幕趣味の表示である。それ故に地方教育家の精神生活の問題は此の舊幕趣味の改造改革によつて始めて成就せしめらるゝのである。

此の『舊幕趣味』とは何であるか。今はすでにそれに就て十分に述べて居るべき餘裕が與へられて居らぬからして、此の最も重要な又根本的の問題は之を提出するに止めて、その解決方法に就ては他の機會に述べようとするのである。たゞ一言『舊幕趣味』とは改革前の、それ故に改革を要すべき精神であつて、現日本の軍事、政治、産業上の國家的及び社會的の制度施設にも改革を加へねばならぬが、それらの改革の根本となり基礎となり、それらの改革を合目的ならしむるものは實に國民精神の自覺であつて、その具體的方策としては法文科大學の改革に始まつて、それによつて全國の教育機關を活躍せしめ、そこに教育者優遇の制度も定められ、青年の元氣も涵養せられ、『地方教育家の生活問題』も始めて解決せらるゝのである。

『生活』問題は人生に對する綜合的見地からしてのみ解決せらるべきである。地方教育家の物的待遇についても村會議員、縣郡會議員の精神的自覺を必要とする如きはその一例である、國民教育、中等教育等に就て十分の智識と理解とを有する村會議員又は縣郡會議員は果して今日のやうな腐敗選擧によつて選出せらるゝであらうか。又今日の納税本位の制限選擧制の如きは公共心の缺乏によつて資産を作り得た人々を標準として選擧權を制限しようとするものである。又今日の『選擧』は『腐敗』のシノニムであるからして、それが村會議員及び村治の上に悪影響を與ふべき悪手本となりつゝあることも明瞭の事實である。それ故に地方教育家の生活問題の解決は國民精神、即ち國民生活の綜合的合成の結果によつて始めて解決せらるべきものであり、又それ故に個人及び國民生活の根本問題即ち個人及び國民生活の原理の確立、即ち國民生活の自覺とそれに基く確信とによつて始めて遂行せられ、こゝに學術的修養と實際的生活條件とが向上改革せられ、同時に教育者としての使命が確信せらるゝである。

道義生活と經濟生活

法學博士　神戸正雄

一　道義と經濟と何れが重きか

生活問題は色々の立場より觀察し得る。私は今、經濟上より之を見やうと思ふ。偖て人間は麵麭なくしては生活が出來ぬから、經濟生活が人類に大事ではあるが、併し麵麭のみにても生活が出來ないから、經濟以外の方面、特に道義生活もが大切である。近頃は一般に人々が唯物的に人生を考へて、經濟生活の豐富ならんことにのみ意を用ゆるが、人々は之と共に道義生活の充實を心掛けなければならぬ。道義と經濟と何れが重きといへば、一の生物としての人間の爲には經濟缺くべからずであるが。人間らしき人間の爲めには道義をも缺くことを得ぬ。或度に於ける經濟方便は人間の爲めに絕對必要であるが、其度を超へたる其は最早單に相對的の重要に屬し、此よりは寧ろ道義の方が一層重要であり、前の一定度內の經濟方便と共に絕對必要に屬することゝなる。絕對必要度を超へたる經濟方便にても此絕對必要に屬する道義の爲めの手段となるだけにては、矢張り絕對必要に加へ得る。人間として此等の絕對必要に屬するものを得んが爲めに努力すべきことは當然であるが。人々が往々にして其絕對必要に屬する道義を無視して、單に相對的重要に屬する經濟の爲めに働くに至ては誤つて居る。加之、人々が同胞の中に、絕對必要の十分に充たされざるものゝ存することを傍觀しつゝ、自己の相對的重要を充たすに汲々たるに至りても亦た過つて居る。更に又人は道義的修養を厚くすることにより、經濟生活に於て小量の物にても大なる滿足を感じ得るに拘らず、此修養を怠るが爲めに、徒らに不滿不平の裡に煩悶して、夫の滿足を感ずること能はず、或は大量の物を得ても尙且つ不滿不足を訴へ、或は自ら之を訴へさるも、他の同胞に誇示して、其不滿を刺戟し、以て社會に不滿不足を繁げからしめやうとする

のも愚である。

二　生活方法の改造

私は斯の如く經濟生活に於て道義の指針の重要なることを認むるものである。其處で今日、我邦に生活問題の喧しいのも、其は特に一部の人々の收入金額の增加の小なるに拘らず、物價の騰貴が著大で、自ら其得る所の材料の實量の減少しつゝあるより生じたのである。そして之を矯正するのには右の道義的指針に依るを得るものが多く、尙其上にも智識技藝をも應用することを工夫しなければならぬ。卽ち夫の物價騰貴により生活を窘迫されたる人々は、是非とも從來の生活方法の改造を考へ、從來無駄に費つたものを節して行く工夫を凝らし、更らに其行はれざるだけでは、乏しき材料の享樂の間に滿足を感じ、他の富豪者流を羨望せざるだけの修養を積まなければならぬ。固より彼等が物價騰貴の爲めに、其生活の絕對必要までも狹めらるゝことは氣の毒であるが、併し顧みて其生活に無用の事が少くなく、節し得る範圍の尙ほ存するを疑はない。此節し得るものは飽くまでも節しなければならぬ。贈答婚祭の費用は御互に節省するの申合を爲し、食物は共同に調達することゝし、衣住も輕易簡便ならしむることゝしたならば良からう、更には其につき乏しき材料にても、絕對の必要を侵されざる以上は、其分に安んじて滿足を感ずることの修養を要する。人々が高尙なる道義心の修養を積めば、此事が出來る。人々は物質を無視することは出來ず、之が獲得利用に工夫を行はなくてはならぬが、之と同時に此を超越して、之に捉はれざるやうに心掛くることが肝要である。他の人々に豐富なる物資を有つものありとも、彼れ必ずしも人間として幸福な人でないから、毫も之を羨むに及ばない。斯くして人は精神を以て物資の不足を補ふことを得る。卽ち此精神を利用することが肝要である。

三　資本家階級の反省

物價騰貴に依り生活難を訴ふる人自身は右の如き修養並に工夫を要するが、同一原因により却て生活上餘力を大にしたる人々に於ても亦注意しなくてはならぬ。彼等の切角求めつつある經濟力には最早、彼に取り相對的重要に屬するものが多いのに、之を得るが爲めに、絕對必要に屬する道義を無視することのなきやを注意すべきである。彼等は往々にして同胞の餓死するを傍觀しつゝも、生活材料を買占め貯積み又は跋扈して居る。粗製濫造品を作り、時に有害品をも供給し

て憚らない、此の如くして彼自らとして絕對必要に屬する道義を完ふせざるのみならず、同胞をしても絕對必要に屬する經濟資料を得せしめざるの不都合を生ずる、彼等は又其經濟上得たる力の使用に於ても、相對的重要に屬する物ならば出來るだけ節しなければならぬ。之を節するのが軈がて同胞の生活を豐富にする所以である。其消費する物が直接に貧乏人にも消費せらるゝものならずとも、斯くて消費の節せらるゝことによりて其の消費物に向ふべかりし勞力資本が、他の生活必要品の生産に向ふことに依つて、之を豐富ならしめ、隨つて廣きに亘る人々の生活を向上し、之により恐らくは世の中の多數の人々の少くとも絕對必要位に充たし得ることゝなる。彼れ富裕者は更に又其餘力を以て他の人々の消費し得ざるが如き多費なる消費を爲すにつきて、之を人々に誇示して、其羨望、隨つて不滿不平を刺戟することなきやう注意することが肝要である。此が社會に取りて有利なるのみならず、彼自らの地位を維持するにも重要である。尙又彼等が自己の消費を愼むのみならず、進んで餘力を投じて、廣く一般人の公益を進め、就中、其絕對必要充實することを心掛けなければならぬ。玆に至て一層有功に人々の生活難の救濟に貢獻するを得ることになる。

四　中央及地方政府の施設

此生活難に對しては更に政府卽ち中央及地方政府の施設にも待たなければならぬ。一方には其使用する吏員の俸給給與を物價騰貴に釣合ふだけに引上げなければならぬ。固より此によつて政府以外の處に雇はるゝ吏員に直接に利益を霑ほすことは出來ないが政府の吏員の報酬の良くなる結果は、他にても自然之を引上げざるを得ざることになつて、間接に之を有利にすることゝなる。他方には物價調節を有効に行はなければならぬ。固より餘りに急激に而も大なる變動又は下落を生ずることは、事業界を攪亂し、失業者をも生ずるの故に之が斷行を躊躇しなければならぬが、適當なる度合に於て之を行ふことは躊躇すべきでない。卽ち之が爲めに通貨緊縮を行ひ、併せて生産及輸入の奬勵、消費、及輸出の制限を行ひ、進んでは若干の生活必要品に於て價格公定までも行はなくてはなるまい。斯くして國民の中の或者の利益を制限することにはなるが、其制限さるゝ利益が相對的重要に屬するものであつて、他方に利益を伸張さるゝものがあつて其利益が絕對必要に屬する以上は、全體上之を有利として斷行するを至當としなければならぬ。

自己生存を破壞する日本人

榮養研究所
醫學博士　佐伯矩

食糧經濟の圓滑を期せむと欲せば、一には其生產額の增多を策し、以て食糧の充實を圖ると共に、一には其消費法の改善に力めて、以て食糧の節約を講ぜざる可からず。甲は其實効を擧ぐるに時日を要し、乙は速効其努力に比例す可し。而して食糧不足の爲に應ずるの道、殊に第二策を以て重しと爲す。

食糧の消費法を改善し、國民をして之が節約を行はしめむとするには、下に揭ぐる三の要綱に其基礎を置かざる可からず。

一、食品が含む榮養價の最上を利用する事

(イ)食品は、之を攝取する前、既に其調理法の如何によりて榮養分を失ふ事大なり、例ば米が其搗精によりて、各種有要なる榮養分を損すること著しきは人の普く知るところなり。更に炊飯時米を淘洗することによりて、必要なる榮養分の大量を失ふことも余が大聲唱道するところなり。食物の調理に依りて生ずる所謂廢物を、可及的減殺して、以て食品の榮養價を昂揚することに注意するは最も緊要なり。

世界大戰中、普通八十有プロセントの製粉を造る小麥を以て、九十プロセント以上の製粉を造ることを强制し、或は皮を剝きて馬鈴薯を煮るを廢し、馬鈴薯は煮たる後其皮を剝くの法を撰ばしめたる如き、皆食品が含む榮養價の無益なる損失を防止せしむが爲に他ならず。

(ロ)食品は消化管內に攝取せられたる後と雖も、其食品の性狀如何に關し、同一食品にして尙且つ榮養價に非常の等差を生ず。例ば大豆中の蛋白質が、煮豆として食用せらるゝ際、僅かに其六十三プロセントが榮養上に利用せらるゝに反し、大豆粉(キナコ)として食用せらるゝ時は、其九十三プロセントが榮養上に利用せらるゝが如し、又煮られたる澱粉は消化容易なるに反し、生の澱粉は甚しく不消化なるが如きも

此例なり。更に又、『米の理想的食用法が、米を粉末となし、之を麪麭に製して食用するに在り』といふ余の主張も此同一の理由に基く。

食品を經濟的に消費せむとするには、先其榮養分に考慮を要する所以亦實に玆に存す。

二、人の食物は人の食物なり」

人の食物を妄りに人以外に消費せしめざる事なり、人の食品を食する各種の家畜は之を排斥せざる可らず、又動物が其攝取する飼料中の溫量と、之より產出する食用肉の溫量を比較し、而して苟も其有利ならざるものは皆之を殺す、例ば獨逸國が全國内の豚を鏖殺せるが如き之なり。

吾邦に於て米の不足を國の憂とするに當り、粹米は斷じて之を家畜家禽の飼料に供す可からず、之等碎米はそのまま石臼にかけて粉末となし、以て外國米炊飯上の一層有要なる用途に供す可きなり。

三、主要食品は主要食品として」

人の主要食品を主要食品以外の目的に消費することは戒めざる可からず、米に就て之を見る時は、米を酒に造りて用ふることにより、一年五百萬石の正米を失ふが如きは甚しき失態たるを免れず、飲を嗜むものは須らく米酒以外のアルコール性飲料に其愛を移すの要あり。

上に述べたる三要綱は實に之れ一國の食糧政策を確立するに當りて、其指針となる可きものなり、而して何れも其眞面目なる學術上の研究に立脚せざるは無し、

顧つて吾國亦食糧問題殊に米穀問題の爲めに、焦慮を要するもの實に昨今の事にあらず、而して此間官公の施設するところ果して能く其適切なるを得たりや否や。

余は日本人保健食調査の必要なることを主唱する玆に年有り。一人に必要なる消耗額の標準を調査判定することと無くして、何を以てか一國の適當なる全食糧消費額を計算することを得む、既に消費の標準無し奈何ぞ食糧經濟を論ずるを得むや。

余は國立榮養研究所設立を主唱すること玆に年有り、榮養研究を度外視して食糧政策を建つる所、大過立所に生ず、一例は、馬鈴薯米の奬勵に之を見るべし。

馬鈴薯は之を煮る前皮を去りて水に浸すこと數時間なれば、その所含含窒素物の五十プロセント、無機分の四十プロセントを失ひ、又皮を去りたる馬鈴薯を直に沸騰せる熱湯中に投するも含窒素物の約八プロセント、無機分の十九プロセントを失

ひ澱粉の損失はその馬鈴薯の全榮養價の三十プロセントに達することとさへ有り。

馬鈴薯米を造る場合の如く、馬鈴薯の皮を剝き水に浸し細片となし貴るが如きは、その榮養力の損失非常に大なり。而して之等の榮養分は皆水に溶解して空しく洗滌水中に流れ去るものなり、而して器底に沈降する澱粉はその偶々水に不溶解なるが爲め、洗滌水底に殘留して人目に觸るゝのみ、即ちこは副産物と稱すべきにあらずして、損失せる榮養分の片鱗を示すと謂つべきのみ。若し馬鈴薯を食用するに此法を以てすれば、其含窒素物より計算して年額四億一千萬貫の馬鈴薯を、約半量二億貫として利用するの理に當る。

米を淘洗してその榮養分を失ふことに着目し、之が匡正を主唱し來りたる余は、同じく馬鈴薯中の貴重なる榮養分を空しく溝渠中に投棄するの愚を警告せざる可からざるなり。

新刊批評

△**國政夜話**（岡田恭藏著）原敬氏の序文西園寺侯の題字等壯厳なることなり云ふ所時世を慨し日本の國情を明かにす（定價壹圓東京博文館）

△**女が生活するには**（中村孤月著）女が獨立して生活するには如何にすべきやを實際と理論とに分ちて丁寧に説きたるもの好箇の指針たるべし（定價壹圓大日本雄辯會）

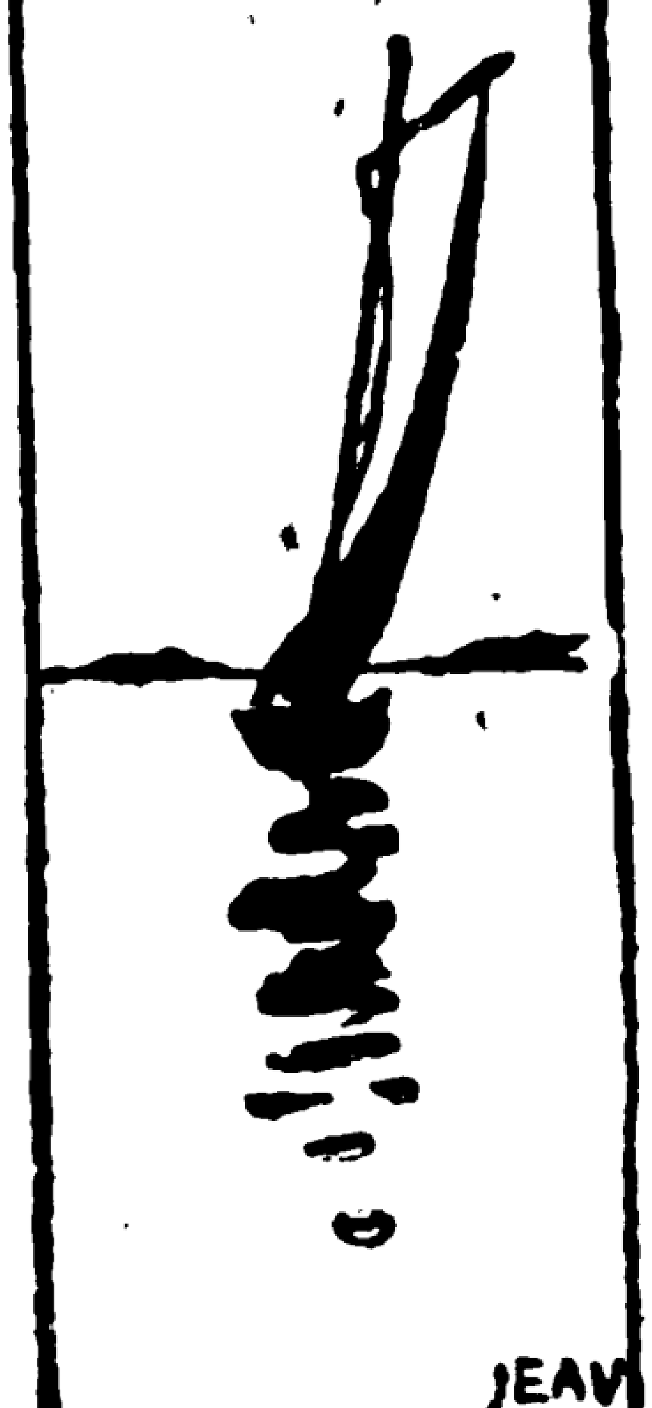
△**改造の叫び**（馬場恒吾）操觚界の新人たる著者が親しく巴里會議を目擊して得たる世界觀人生觀社會觀の結晶にして政治外交軍事社會に亘りて改造を絶叫したる眞摯の聲を聞け（定價五十錢京橋區民友社）

△**結婚期**（谷崎精二著）三百二十頁に亘る長篇小説にして發行旬日にして四版を重ねたるもの作者の眞摯なる藝術に對する態度は遺憾なく本書に顯はれ居れり結婚期に迫りつゝある青春の心の躍動を描き盡し開卷より一氣讀了の興味津々たるものなり（定價壹圓三十錢牛込新潮社）

△**日本改造の意義及其綱領**（鈴木梅四郎著）社會政策に熱心なる著者が幾年研究調査の結晶にして日本の改造せらるべき必然的運命に對する方途を示して具體的に其方法をも列擧す近時の好著（定價貳圓三十錢京橋實生活社）

△**饗宴**（生田春月譯）プラトンの戀愛論として有名なる饗宴篇を譯出せるもの小形輕快な裝訂と相俟つて頗る譯筆輕妙を極む此種譯書中特筆すべきものたるは勿論なり（定價六十五錢神田越山堂）

經濟時報



凡ての價値は勞力が生む
（マルクス）

八時間勞働制と關西資本家の恐慌

＝川崎造船所怠業に原因して＝

近藤泥牛

一波起りて萬波生ず、川崎造船所に怠業と云ふ我も他も眞に想ひ設けぬ新戰術が職工團に依りて決行されたのは、我國勞働界に破天荒の出來事で、關西の大小幾百の工場經營者には靑天の霹靂であつた、怠業は卑怯なり陰險なり怠業に對抗する手段として賃金支給の拒絶をなすべし然らずんば工場を臨時閉鎖すべしと、資本家側の狼狽と恐慌は一通でなく孰れも川崎の社長松方氏の之に對する態度をば、資本家側に取りて極めて重大なる事件として目を睜つて監視したものだ、處が松方氏は賃金不給をも聲言せず工場の閉鎖も行はず、職工團の爲すが儘に任して約一週間を空しく過したので、資本家側は大分松方氏に强硬なる態度に出づべきを勸告したものらしい、而かも松方氏は自分の事は自分で處置すると云つて靜かなること林の如しであつたが、之に反して職工團の步調は亂れかけ、電氣工場は同盟を脫して就業する、分工場には突如八時間制を實施し且つ賃金の値上をする、斯くして搦手からの軟化政策に目的は既に遂げられたりと早くも看て取つた一萬六千人の大怠業も、どちらが屈從すると云ふこともなく綺麗に解決された、松方氏は洵に戰術に長じた男と云はねばならぬ、而も彼は之が爲に屈辱だとても感じたのか社長を罷めてしまつた。職工代表者は罷めてくれるなと申出て、職工團の怠業事件突發の爲に、松方氏の男振を大に揚げた、禍を直ちに福に轉ずる彼の手腕には、松方氏だからあれでいゝが我々はあゝ云ふ遣方を先例にされては困るじやないかと、今では松方は勞働者に好感を持たるゝ反對に、資本家からは一種の反感を買ひ、資本階級の許すべからざる叛逆者のやうに思はれているやうだ。

○

川崎の正味八時間勞働制度實施が發表されたので、ツイ目鼻先の神戸三菱造船所では一方ならぬ狼狽だ、緊急會議を開き兎も角も工場の設備

關係で急遽の八時間制は不可能だからと云ふ名義で九時間制を發表したが、幸にして平生から川崎と對抗しつゝある三菱の職工團は川崎の眞似をするのは癪だといふ痩我慢もあり且つ其處には相當の理解が傭者側との間にあつたものと見え、九時間勞働制の下に落付てる、然るに川崎の職工に劣らぬ讀書家を有する住友の三大工場では尤も川崎怠業の飛火に消防の用心をしたものだ、あの大名式の住友本店が幹部會議を開き、住友伸銅所住友電線製造所、住友鑄鋼所及び尼崎伸銅所分工場に、川崎の實施期日十月一日に先んじ九月二十九日から、八時間以上は働かさぬと云ふ制限をした、八時間勞働制でなく、午前七時就業午後三時退場に決し、殘りて働く者は働くも可とし、川崎と略ぼ同樣の制度を布いたのである、記者が實施第二日目に伸銅所に就て觀察する所に據れば、工場監督者は欣然として、此通りです工場の氣分は誰が眼にも緊張して元氣に滿ちてるでせうと語る、それは全く僞りでなく三千六百の職工が一人殘らず生き〳〵してるかのやうに感ぜられた、正味九時間から八時間に變更した爲に、一日三百六十人分の時間が減る譯だが、工場の執業氣分が引締つたから、多少工場の設備に改善を加へたなら工場としては損失なく、お互愉快にニコ〳〵して働くだけでも非常に好影響を精神的に及ぼすから住友關係約五萬の職工はいづれ悉く八時間制の下に、奬勵的加俸臨時手當等結局本給の約二倍を貰ひ受け、餘暇に讀書修養も出來るとであらう。

○

日本の代表的工場の八時間制實施が他各工場に波及する勢は恐ろしくも亦强いものだと泌々感ぜられた、住友三大工場大阪鐵工所、大阪汽車會社を併せて、大阪の五大工場と稱せられてる、此鐵工所汽車會社も住友に次で八時間制實施と增給新制を發表した、兩會社共八時間制に相當する工場の改善の準備なくして實施するのだから勿論多少の犧牲を拂ふのである、然るに職工側に於て給料制度の改善に會社と主張を異にする所ありて、鐵工所には同盟罷業、汽車會社には怠業が勃發したのは、如何にも遺憾である、大阪鐵工所の職工は因島、備後兩分工場を併せて約一萬五千人、若し之が怠業若くは同盟罷業の擧に出でたら容易ならぬ事件であつたらう、之が早く双互に諒解點を發見して大事に到らざりし爲め、所長山岡順太郎氏は松方式に男をあげる機會を失つた譯である、汽車會社々長の長谷川正五氏は武藤資本家委員の顧問である、其顧問の會社が出發前に八時間制を實施したのは大出來だが怠業で脅されたのには正五博士も實は案外の感じを起したであらう。

○

洪水の決潰したかのやうに磴轄として押し寄せて來た八時間勞働制實施(同時に賃金制改正)は神戸大阪並に其附近約三千の資本家に大恐慌を來した、基礎の確實なる會社工場は此大勢に順應して否應なしに世間並に新制の服從者となるであらうが、僅五六十人以下の少數職工使用のほんの家庭的鐵工業者などの遣り方は一通りならぬのである、之れから鐵工造船界に職工爭事が大に行はれ、資本家同士の啀み合ひが時に小

工場者の間に行はれねばなるまい。

さて既に大工場悉く八時間制を實施すると決まれば其次は當然準大工場より中工場に及ばねばならぬ、怠業や同盟罷工が續々と起されつゝある際、此厄難よりうまく免れんには先手を打つに限ると云ふので、續々として八時間制を公表した、今記者の記憶する丈けでも二十幾工場ある、殆ど金屬と造船工場は全部八時間勞働制を實施されたと云つても差支ない位になつた、顧みれば約一ヶ月前大阪工業會に於て八時間勞働制の可否に就て研究を遂げつゝあつた位の關西工業界が、川崎の怠業に源を起して一瀉千里、八時間制が纖維工業製藥工業等の諸工場以外を殆ど征服し切つたと云ふ形勢の激變には、資本家側の喫驚は云ふ迄もなく、勞働者側に於ても斯く迄に疾風迅雷的に勞働條件中の最も重要なる時間問題が調子可く解決されるとは努々夢想だもしなかつたことであらう。

○

大阪電燈會社は大阪第一品の優良會社である、此會社が幸か不幸か目下重役の暗闘が明るみの喧嘩となつて世間に醜曝しをしてる、而かも流石は大會社だけに時勢に順應する心得方は素早いものだ、日本一の女工虐使の評ある岸和田紡の社長でシャイロックの綽名を受けてる寺田甚與茂氏が重役の代表者資格で、電燈製作所以下十數箇所の工場營業所に悉く八時間制を採用し、同時に智的勞働者にまで增給を決行して內部の紛擾を未發に防いだ手際は鮮やかで、寺田すら斯る諒解を有するかと世間をアッと云はせた、それにもう一つ驚いたのは其工業勞作が紡績並みに八時間制の實施困難なりと世間から認められてた硝子工業界から島田硝子製造所が八時間制實施の仲間入をしたことで、之には八時間制實施濟の各工場がヒドク驚いたとのことだ、そして經營者の島田孫市氏が、私は大阪工業會で八時間勞働制實施の急先鋒の一人です、八時間制不適當と信ぜられてた硝子業に之を實施した私は、職工に對つて硝子業と雖も八時間制の不可ならざることを、諸子の努力で世間に示して呉れなくては、私の此舉は世間の嘲笑の的となるからと諒解を求めました、職工は能く之を理解して最善の努力をして能率を減退せしめない好果を得て居ます、紡績業が色々と口實を設けて八時間制を拒否してる心事は私の腑に落ちませんと、島田氏は氣焔萬丈である。

○

怠業が民業工場を侵せしばかりでなく大阪砲兵工廠の一部工場に波及したのには提理の村岡中將も驚いたであらう、併し之は提理の機敏なる處置で圓滿に解決され、今では一萬何千の同廠職工間には平和の光が美はしく輝いてる、東京方面の陸軍工場のやうにヘマを遣らない處に村岡と云ふ男の冴えた腕前が現はれた、此男が今度の勞働條件改善運動に於て一方に次で功名手柄をしたことになる。

工廠と云ふ官工場ですら怠業を遣ると云ふことが一般工場從業員の頭をどう支配したであらうか、考へて見れば問題は大分大きいやうだ、それかあらぬか大電製作所にも川北電氣企業にも若干の怠業が起つたのみでなく、どの工場も一齊に賃金値上の要求が續起されて、怠業とまで

過ぎざるも緩業位の程度のサボタージユを遣つた、それが芝居者や料理人にまで傳播し、各會社商店の智的勞働者達も、店主や重役が自覺して要求を喰ふに先だちて増給しそうなものだと不平不滿、自然と緩業の氣味あるのは爭はれぬ事實で、何うも此頃使用人の働きぶりが鈍重で困ると云ふやうなことを、資本家連の遊び場所として作られた大阪倶樂部で話合つてると云ふ狀勢で、今や緩業は關西の勞資界を蔽ふてるのである、

特に紡績各工場に於て賃金値上時間短縮の要求が勃發したに就ては、紡績界全體に影響する要求なれば、單獨に一會社で專行して解決する能はず、紡績聯合會の會議によりて行動すべきものなれば、其成行は果してどんなであらう、紡績界切つての頑固爺の寺田甚與茂氏すら、目下八時間制に就て研究して居ますと世間體の好いことを口にする位で、紡績界今後の賃金値上は別として、勞働時間に對する職工の不平は如何にして緩和せらるべきか、或は武藤委員の主張を根柢から覆へすやうな形勢に到達するのではなからうか、將來の事豫測すべからず、玆に此稿を終るに方り、歸着點の那邊にまで進む乎を知り、之に論評を加ふる能はざるを憾みとせざるを得ぬ。——十月七日——

地方投資家に警告す

警戒を要する新設會社の簇生

歐洲大戰亂勃發以來我邦經濟界は著しき活況を呈し、其種類の何たるを問はず既設新規の別無く總ての事業は悉く好況を呈し、往くもの必ず止まる處を知らざるの黃金時代、換言すれば黃金の夢に夢見る如き有頂天時代を現出したるも、昨年末媾和成立の飛報と共に俄然有頂天時代の夢は醒めて財界一般の警戒は遂ひに悲觀と化し、爲めに株式市場は一變して甚しき不振を招致し新事業計畫の如きは全く挫折して其影を斷つに至りたるが當時より引續き今日に至るも政府の施設宜しきを得ず、物價は昂騰に次ぐに暴騰を以てし遂ひに底止する所を知らず、米價の奔騰は延いて雜穀を昂騰せしめたる結果地方民即ち農家は黃金の洪水に襲はるゝに至れり、斯くて一時沈衰狀態に陷りし財界は漸次擡頭し來りて、株式熱の昂まると同時に本年晩春の交より新事業の計畫せらるゝもの日を逐ふて續出し、最近に至りて愈々猛烈の狀勢を示せり、而して之等多くの新設會社は地方民の遊金を吸集する目的なること言を俟たず、其標榜する處は或は國家事業と稱し、或は社會の公益事業なりと高唱し、事業の確實、利益の大を唱へ悉く誇大誇張の言を弄して新聞紙上に株式公募の廣告を爲すもの枚擧に遑なき奇觀を呈するに來れり。新設會社の簇生

果して可なる哉不可なる哉記者は多く言ふを欲せず。現近雨後の筍の如く相繼いで生るゝ新設會社中二三を擧げて其十中の八乃至九迄が斯る信頼す可からざるものなる事を剔抉して以て多數投資家に注意を促すと同時に惡辣手段を以て詐欺的會社設立を商賣とせる不德漢を一掃して以て財界永遠の平和に資せん事を望むものである。

日本新炭、人造炭兩社と髣髴たる

日本德炭會社計劃

……の不徹底極まる目論見……

日本新炭株式會社、人造炭株式會社の兩社が其の醜態を曝露せることは世人の記憶に新たなるものと信ずる、即ち前者は坂式新炭製造爐及揭炭礦區を二十餘萬圓に賣付くる目的を以て創立を企しもの、後者は炭團代用品製造の一小工場及特許權を拾數萬圓に賣付くる目的にて創立せんとせしものにて、兩者共に謂はゞ一種の詐欺的新設會社であるが、揭題の日本德炭も亦不信用なる點に於て前揭兩社と髣髴たるものが存するのである。

同社は資本金百貳拾萬圓內四分の一即ち三十萬圓を以て創立し、新案特許亞炭燻燒竈（發明者青木某）並に化學的作用に依る製造方法を以て亞炭を木炭化し低廉に之を市場に供給し、木炭需給の緩和を圖る可しとの趣旨は、木炭騰貴の刻下に於ける淸涼劑の如き好餌なるも、仔細に其の目論見書を熟讀するに及んで之を眞面目なる計畫と信じ得ざるものが存する、發企人は曰く『青木式燻燒竈は理想的なり、現に仙臺市に試驗竈を築き製炭の狀況を一般人に縱覽せしめつゝあり、而して其製炭は東京府市兩當局者と契約し公設市場に於て販賣の運びに至り居れり云々』と、府市當局者が契約を口約若しくば締結せる如き事萬が一にもありとすれば府市當局者の責任は決して輕からず、如何となれば而は同炭は現在試驗時代に屬して製品の供給は何時の時に實行し得るものなるや判明せざればなり、故に第一の不審とす可く、次には收支豫算に揭示せる亞炭一千三百餘萬貫は岩手、宮城、山形。青森等の所在亞炭鑛區一千百二十五萬餘坪より原料を採掘するものにて、燻燒製炭百四十四萬貫と合算せる販賣高五十萬八千餘圓の收入を得る次第なるが、右の內製炭費採掘費用其他の諸經費二十五萬八千餘圓を支出したる上にて得る所の利益は二十五萬餘圓と成り、三十萬圓の拂込資本金に對し年八割三分四厘の高率の利益を算し得れば、優に年五割の配當を爲し得可しと稱す、右の目論見は試驗に成功し、賣品好調に捌き得たる際の計算なり、而して試驗の成功は未定の問題、賣品の賣行きも亦不確實なるに於て信賴す可き點の毛頭存せざるは言を俟たず、一言にして云へば斯くの如く誇大に利益を吹聽せるものに優良なるものなしと云へば深く探るの要なし。日本德炭の如きは即ち新設惡德會社中の標本たるの資格を完全に具備せるものなりと斷言するを憚らず。

杜撰極まる起業目論見の
見え透きたる標本
……太陽强製紙株式會社……

太陽强製紙株式會社は資本金百萬圓四分の一拂込即ち二十五萬圓の資金に依つて創立すべしと云ふ、而して其目論見豫算は五萬五千圓を以て大石某の發明に係る大石式特許强製紙の特許權を買收し、其工業用建物並に機械等一切を買收し、此他僅々一萬五千圓を事業擴張費として放資する而已なれば、同社の事業費は合計七萬五千圓に過ぎず、而して五千圓の創立費を控除せる殘金十七萬圓を流動資金として一ヶ年の收入は約八十萬圓を算せり、而して六十五萬餘圓の諸經費を控除して十四萬餘圓の純益を收め株主には當初より年三割の配當を爲す可しと稱するも記者は之を信ずる能はず、發企首唱者は曰く『大石式特許强製紙は强靱性に於ては天下無敵なりと』假りにこの發起者の言を事實とするも、如何に大石式强製紙が優良なりとするも、僅かに五千圓を以て買收せる工場に一萬五千圓の擴張費を投じたる貧弱なる工場にて、一ヶ年に八十餘萬圓の製品を生產する事は首肯し難き事柄なり、加之前記の如く工場費に僅々二萬圓を投ずるのみの工業會社が、工場費の七倍强に該當する十七萬圓を運轉資金に振り當てたる如きは杜撰も亦甚しと言ふを得べし、如斯起業目論見收支豫算を以て憚る所なく新聞紙上に株式公募の廣告を爲すもの、單り太陽强製紙會社而已に非ず、近時簇生する新設會社の十中の七八迄は悉く此圏内を出てざる同臭同型のもの而已なり。記者は聲を大にして投資家諸氏の警戒を促す所以である。

惡辣卑劣を曝露したる
資本家根性の現れ
……を證する不合理なる買收……

羊毛を主とする一般毛類及毛織物原料の整製並に之が賣買を目的とし、資本金三百萬圓（四分の一拂込）を以て目下創立計畫中なる日本羊毛整製株式會社は、本年一月資本金百萬圓（四分の一拂込を以て創立せる羊毛整製會社を買收し其事業を擴張するにありといふ。十月中旬の交既に發企人の糾合を了したる模樣なれば同社の株式募集廣告を新聞紙上に見るのも間も無い事であらう。既設會社を買收して大會社が新設された例は從來幾らもある、然し同社の今回の擧の如きは絕無と云つてもよい、と云ふのは既設の羊毛整製は前記の如く當年初月に新設された許りの會社で拂込も四分の一で四分の三は未拂込みなのであるから、この事業が有望で擴張の必要があるなれば、未拂込の株金を徵收して現在株主に其利益を分つのが會社當事者の當然執る可き方策であらねばならぬ、即ちこの當然の方法に依つて全額拂込を決行すれば資本は百萬圓を有するのである、然るに殊更同一重役が新たに同じ目的の會社を新設して資本金を三百萬圓に擴張するも四分の一拂込である以上は流動資金は前社の全額拂込より二十五萬圓減の七十五萬圓に過ぎない譯である。故に此計畫には何等かの魂膽が存する事は考慮する迄もなく洞察せられねばな

らぬのである。惡意に解釋すれば(一)權利の轉賣によりて暴利を得んとする？(二)再設立に際し株價を煽りて不當のプレミアムを付して懷ろを肥さんとする？(三)擴張と稱して工場新設を口實に土地買收其他にて巨利を食らんとする？等此間種々に考へられるのである。然かも記者が斯く洞察する所以のものは前者を買收せんと企て居る後者が全然局外者であるなれば、この推察は當らざるものとも云へやうが前者の重役に依つて後者の買收新設會社が企畫されて居る以上斯く斷定を下されても發起者には決して辯明の餘地は存せぬ事と信ずるのである。之を要するに一般投資者は、既設會社を買收して新設せんとする會社は概ね十が十迄前述の如き淺間しい資本家根性の惡辣な手段が影に潜んで居る事と推定して警戒をすれば間違ひ無いのである。

前掲三社は最近數ケ月間に創立せられたるもの、目下株式募集中のもの及び創立せんとして畫策中に屬する無數の新設計畫會社中より拈んで例したるに過ぎず、即ち無數の新設會社は如何に地位名望ある財界の諸名士を發企人とし賛成人として出現するとも何れも前掲三社と髣髴たるものと做して大差なきものである、如何となれは所謂名士なる者の發企人賛成人と稱する者は殆んど八九分迄は其名義を貸與して權利株と交換するの惡風が現在の經濟界の常套手段となつて居るからである。現に發企人株數千株中拂込濟みを了せるは數百株に滿たざりし醜態を暴露して遂に刑事問題を惹起したるもの最近に於て、化學豆油、常盤採炭の兩社がこれを證して餘りあるものである。この戰慄すべき名義發企人問題は、商業道德上の大罪たるは言を俟たざるも法律上如何とも罰するを得ざる今日にありては、此點こそ投資家たるものゝ念頭に深く刻して最も警戒を嚴にすべき點である、

尙終りに最も見易い例を擧げて此稿を結ぶ事とする。それは危險なる新設會社に限りて新聞政策を巧みに利用してあらゆる好餌を羅列して初心なる投資家を誘惑するの一事である、然るに信頼すべき新設會社はこれと正反對に一切手段を講じない事である。爲めに地方の投資家には信頼すべき完全無缺なる會社は反つて信頼されずして、危險極まる利益大吹聽の惡辣會社が親しまれる如き傾向を呈して居る。この急所を見別ける最も正確なるパラメートルは何かと云ふに、公募株数の多寡に依つて多くの場合は明瞭に識別されるものである。何となれば堅實なる會社は事實に於て有力なる發企人の引受株によつて滿了を告げ得る筈なれば、多くの株を公募に附する必要なきに反し、不確實なる會社に限り人氣を煽動する手段として發企人、賛成人の申込みのみにて既に數十倍に超過せり等と吹聽するに不拘其公募株數には必ず多數を占めるの矛盾を露出するものなり、故に多數の株を公募せる會社は不確實、少數の株を公募せる會社は信頼すべきものと推定すれば大體に於て大過無きものと云ふを得可し。新設會社の廣告文を新聞紙上に見る時戰慄を禁じ得ずと云へる財界名士の言は此の間の消息を最も簡單に而も明瞭に語つて居る至言であると首肯せられるのである。

大阪財界消息

■川崎造船所の怠業厲行には關西の資本家は大分目が覺めたやうだ怠業は實際資本家に取りては迷惑だからなあ松方川崎造船社長は職工の代表委員に對し君等は卑怯ぢやないか何ぜ正々堂々と男らしく同盟罷業の公明なる態度に出でない乎と浴せ掛けたものだ 松方の言ひさうな ことだ■此怠業が大阪の一工場に感染した時大阪倶樂部と云ふ金持階級の道樂者の寄合所へ集まつた資本家達は一時川崎の職工に誰れが怠業を敎へたのだらうと一頻り問題にしたものだスルト知つたか振りした一人がそれは改造と云ふ我々を敵視してる雜誌だよと云つたものだお蔭で無理解な資本家階級が左樣かそんなことを書きよつたかと本屋へ給仕を走らしたがお生憎サマ一軒は賣切れ一軒は一册殘つてましたが發賣禁止で警察へ引上げられましたと云ふ報告に怖いもの何ほ見たしそんな雜誌なら圖書委員へ頼んで備付けやうぢやないか■神戸でも山岡警察部長が敎唆者があらうと大分目を皿にしたらしい大阪の田中警部長も同感々々と警戒したものだ併し新刊の雜誌や書籍から吸ひ取つた智識なら正可改造に治安警察法第十七條の適用も出來まいぢやないかは好かつた■併し川崎の覺醒で關西一の大資本家の住友が其三大工場に八時間勞働制を突如として實施して他の中小資本家を喫驚さしたのは一寸痛快だつた■住友さんすら斯うだお前達はナぜ自覺せぬと他工場の勞働階級が資本家達に勸告するやうにならう資本家は住友さんは殺生だすぜと怨み乍らもハイ〳〵私の工場も住友なみに致しますと出る、大阪鐵工所や三菱關係の工場など續々八時間勞働制の採用を聲言するらしい■それにしても武藤さんは出立前にいゝ手本を示されたものだ此調子で進むと紡績女工も默つて居そうにもないらしいせめては終夜業だけなりとは何とかなりそうな形勢を到來さすであらう■今の大阪は誰が何と云ふても片岡直輝氏の支配だ尤も小山健三、永田仁助の二元老會議所會頭の山岡順太郎氏なんかの努力も閑却されぬが片岡を除却しては何事ものになるまい■山岡に對抗してエラくなる大資本家の島德藏君すら片岡を背景にしてるぢやないか島は大谷順作や田所美治や宮崎敬介や其他之に匹敵する剛の者を味方とし或は子分として關西財界の一角に偉大なる潜勢力を占めてる彼の將來は大に刮目すべしであらう■だが大阪の元老中老株とて長い事はない孰れは若い者の時代が來そうだ若い者と云へば大阪工業會を背景にしてる片岡安氏や會議所の一千萬圓長者安宅彌吉氏などは大分人目を惹いて來たやうだ併し自重が大事だよ■未だ世間では無名と同樣だが直輝翁の相續人たる直方氏(大阪瓦斯副社長)や伊藤忠兵衛氏(伊藤合名會社長)や平野復男氏(上杉愼吉博士令弟)などが最も有望視せられてるやうだ■尤も此人達の天下取りにはマダ〳〵時の力を要するがそれ迄には講和使節の實業顧問で名を揚げた喜多又藏(日本棉花社長)谷口房藏(合同紡社長)庄司乙吉(東洋紡)諸氏が中間人物として現はれはすまいかそれとも此人達は紡績の巨利に甘んじて天下取の望を棄てる丈けの淡い氣持で居るだらうか■道うは云ふものゝ大阪には住友の湯川、中田、小倉、山下一派藤田の阪、坂野一系大阪商船の堀、加藤、木村の一連株式の增山京島の吉田、會議所の今西、稻畑銀行側の松方、星野、坂野、野村、愛甲、濱田、田中それに久原の中山大阪鐵工の下村、江村等の新舊人物が卍巴と勢力の爭奪戰を開始する時代が中間的に存在するものと見なければなるまい(泥牛生)



誤譯の程度

——松浦氏譯『資本論』の誤譯について——

生田長江

私はかなり論争好きであり、他人の意見や仕事なぞに對してかなり無遠慮な批評を加へる方である。けれども、所謂誤譯指摘をしたことはない。直接其人に會つて、もしくは私信で以て誤譯の箇所を注意してやつたことはあるが、それを公開したことはない。議論の序に一つ二つの訂正をしたことはあつても、誤譯指摘の爲めばかりに、わざ〳〵こんな長い文章なぞを書いたことは一度もない。今後もあまり書きたくないものである。

私がマルクス『資本論』を飜譯するに就いての動機や抱負なぞは、先頃の「讀賣新聞」へ一通り書いて置いたし、譯本の卷頭にも譯者序文として詳しく書いて置いたから、こゝには改めて書かないことにする。

兎に角私の『資本論』全譯は、私としての最善を盡した仕事なから、要するに當分の早急な要求に應ずるだけの間に合せ物たるに過ぎない。私は決してその上に大きな自信を繋けてゐるものでない。理解の上にも表現の上にも、隨分不十分な點があることであらうと思つてゐる。

だが上には上がある如く、下には下があるものと見える。松浦要氏譯『資本論』は、私の目から見てさへ、あまり亂暴過ぎるやうである。

實は商賣敵だからと云はれるのがいやさに、なるべく可い加減にして置かうと思つたのだが、よく〳〵考へ直して見れば、それは私自身の直接な損得をばかり打算した量見にすぎない。聊かも正義の念に基づいてゐない。原著者マルクスの被害、及びあのひどい譯本を買はされる人達の被害といふことをも考へ

て見れば、あの譯本がどれ位誤譯に充ちみちた、どれ位支離滅裂な、どれ位無意味な紙屑同然なものであるかといふことを世間の人達へ知らして上げることは、何よりも先づ私の義務でなければならぬ。

私は此誤譯指摘の爲めに、一部の人々から『大人氣ない事をする奴だ』と云はれるかも知れない。他の一部の人々からは幾分の反感をさへ有たれて、私自身の譯本の人氣をそれだけ損ずることになるかも知れない。けれどもそれは仕方がない。

偖て大體の順序としては、思ひ切つて大きな誤譯を先きに擧げ、それほどでない、けれども、殆んど無數と云つていゝほどの誤譯を、そのあとで紹介することにする。

先づ原著者序文、第三頁七行目に、『物理學者は自然現象を其最も著しい形式について觀察するものであつて、此觀察は一現象を攪亂するやうな他の現象の殆んどない場合に於てのみ行うものでもなければ、又自然現象が確かに純粹だといふ保障のある場合にのみ、實驗するものでもない』と書いてあるのは、殆んど何の事だか分らない。

如何にマルクスでも、これほど難解な文章を書くわけがない。原文にはまるで別の事が書いてある。

Der Physiker beoBachtet Naturprocesse etweder dort, wo sie in der prägnantesten Form und von störenden Einflüssen mindest getrüft erscheinen, oder wo möglich macht er Experimente unter Bedingungen; welche den seinen Vorgang des Processe Sichern,

これを私の拙い言葉に和譯すると『物理學者は、物理現象が最も含蓄のある形に於て起り、又他からの影響に攪亂されること最も少きところにそれを觀察する。或は出來るならば、その現象の純粹なる生起を保證するやうな條件の下に實驗をする』になる。

松浦氏は entweder …… oder を weder …… noch と取違へた上に、mindest を kaum の意味に扭ぢまげ、wo möglich を全然食つてしまつてゐる。

同じ頁十三行目の『お前はお伽噺を話してゐるのだと』は、原文に De te fabula narratur とある。普通の英語や獨逸語の字引にも出てゐる拉丁の文句だ。分らなければ其儘にして置くがいゝし、譯する位ならあまり出鱈目をやらないがいゝ。

第六頁四行目以下に松浦氏譯は、『予は資本家及び地主の形態を決して過激に論ずるものでない。此所には此兩者を經濟的範

疇の擬人格、即ち一定の階級的關係及び利害を有するものとしてだけの意味で、其人格を論ずるものである。經濟上の社會構成を、自然科學的行程として解釋する予の見地は、個人は如何に主觀的に此關係から超越しても、社會上矢張り其產物であるから此關係に對して責任ありと考へる他の見地に較べれば、遙かに穩健なものと云へるであらう』と書いてゐる。

中程からお仕舞ひへかけて、愈々無茶苦茶な飜譯である。再び私の拙い譯にしてお目にかければ、『資本家や土地所有者の姿を畫くのに、私は勿論それが引立つて見えるやうな繪具を用ひなかつた。けれども此處にそれらの人物が問題になるのは、唯だ彼等が經濟的範疇の人化であり、一定の階級關係及び階級利害の支持者である限りに於てである。社會の經濟的構造の發展を、一の博物學的經過として見るところの私の立脚地は、個々人が社會的にそれの創造物たるを免れないやうな關係――如何に彼が主觀的にそれを超越してゐるやうに考へようとも――に對して、彼を責任ある者にしないといふ點に於て、他の如何なる人の立脚地にも讓らないのである』と云ふところだ。松浦氏が『人格を論ずる』とかいてゐるところの原文はes handelt siah un die Personen である。この尋常等級的なイディオムを、その度每に解剖して直譯されるのを見ると、可笑しさを通り越して氣毒になる。氣毒を通り越して腹が立つて來る。

八頁十二行目、『古い經濟學は、經濟法則の性質を物理學や化學の法則と比較するので、誤解に陷つてゐる。……更に深く此現象を分析すると、社會上の組織は同じく植物や動物の組織とも、根本的に異ることが解る……然り、此組織の綜合の相違、個々の細胞の相違、此細胞の作用する條件の相違等の結果、同じ現象でも全然異つた法則の根底をなすものである』云々とあるのは、何の事とも解らない。如何に難解をもつて聞えた『資本論』にもこんな出鱈目を書いてある筈はない。果然、私が讀んで見ると、かなりはつきりした言葉遣ひで次ぎのやうに書いてある――『舊い經濟學者等は經濟學的理法を物理や化學の理法と同一視したとき、それの性質を誤解した……現象のより徹底的な分析は、會社的有機體が植物及び動物有機體だけそれだけ徹底的に相異つてゐるといふことを證明する……然り、同一の現象が、それらの有機體の異つた總體的結構の爲めに、それらの個々の器官の變化の爲めに、またそれらの器官を働かせる條件の相違などの爲めに、全然異つた理法に從ふのである』

松浦氏の『比較する』は『同一視する』の間違ひである。松浦氏の譯によれば、社會的有機體が植物及び動物有機體と異ること になるけれども、原文には sociale Organismen sich von einander ebenso gründlich unterscheiden als pflanzen-und Thier-organiymen とある。まるで話が異つてゐる。松浦氏が『全然異つた法則の根底をなす』と譯したところの原文は 'unterliegt gang und gar verschindnen Gesetzen なのである。

九頁四行目から、『マルクスは斯く云ふに當つて究極の到達點を樹立し、此見地から資本制經濟の秩序を研究し說明してゐる。そして此究極點は、嚴格に科學的に構成したもので、經濟生活の精密な硏究には、必ず缺ぐべからざるものである』とあるのは、模範的誤譯の一である。あまり面白いから原文を紹介して見ると――

Indem sich Marx das Ziel stellt, von diesem Gesichtspunkt aus die kapitalistische wirthschaftsordnung zu erforschen und zu erklären, formulirt er nur streng wisenschaftlich das Ziel, welches jede genaue Untersuchung des ökonomischen Lebens haben muss……

これは勿論、『この見地から資本家的經濟制度を研究したり說明したりするといふことに標的を置き乍ら、マルクスは經濟生活に對する各の嚴密なる吟味がもつてゐなければならぬ標的を、嚴密に科學的に說き示してゐるに外ならない』といふところだ。

同じ頁の十一行目、『予はこれ以上他に辨證法として描くことはあり得ないではないか』は、原文に……was andres hat er geschildert als die dialektische Methode? とあるところだ。どうしてこんな譯になるのか分らない。andres……als が讀めないとはあんまりである。

十頁三行目、『ヘーゲルにあつては思惟の行程は、觀念の名の下に獨立した主體と考へられ、眞實の造物者が、單に自個の外的表現を眞實となすに過ぎない』は、殆んど言語の道斷えたる代物である。私はただこの原文と私の拙劣な譯文とを揭げるだけにして置く――

Für Hegel ist der Denkprocess, den er sogar unter dem Namen Idee in ein selbständiges Subjekt verwandelt. der Dennurg des Wirklichen, das nur seine äussere Ersc heinung bildet.

拙譯、『ヘエゲルにとつては、彼が觀念といふ名稱の下に獨立

の主體に變へてさへしまつたところの思考の行程は、現實世界の造主であり、現實世界はその外的現象を形作つてゐるに過ぎない。』

同じ頁の八行目、『けれ共自分が「資本論」の第一冊目を恰度書いた時は、腹立たしい、傲慢な、凡庸な文藝衰退期に當り、今や教養せる獨逸は大言し、宛も』云々は、私の譯文で紹介すれば、『しかし乍ら丁度私が「資本論」の第一卷を書いてゐた時分、今日文化の進んだ獨逸に於て大きな口を利いてゐるところの氣むづかしき、僭越な、その癖凡庸な亞流學者共には、あの勇敢なモオゼス、メンデルスゾオンがレッシング時代のスピノオザを取扱つた如く、即ち「死んだ犬」として取扱つた如く、ヘエゲルを取扱ふと云ふことが氣に入つた』である。

松浦氏は Epigonenthum を『文藝衰退期』なぞと譯した上に、あの邊の文法上關係を全然無視してしまつてゐる。

同じ頁の前後の行に於て、松浦氏は『辯證法はヘエゲルに依つて、頂上に立つものである』と書いてゐる。原文は Sie steht bei ihm auf dem Kopf である。中學三年生以上の者に對しては、大目に見てやることの出來ない誤譯である。

次ぎの行、『現存するものを說明する』の『說明』は、『美化』とでもあるべきところだ。單語で verklären とある。これも決して小さな誤譯でない。

その次ぎの行、『何となれば辯證法は現存せるものを實證的に理解する事に於ては、同時に其否定の理解であり、其必然な衰頽を含み、移動の流れの中に出來上るあらゆる形式、從て又其推移し行く方面を包括し、何等注意もひかないが、其本質上批評的、革命的であるからである』も全然意味をなさない日本文である。如何に難解を以て唱えたるマルクスもこんな無意味な事は決して書かない。彼の本當に書いてゐる言葉を、私の日本語で取次げば、『なぜならばそれが存立してゐるもの丶積極的背定的理解のうちに、その否定の、その必然的沒落の理解をも包容してゐるからである。各の歷史的に出來上つた形體を、波動してゐるもの丶やうに見做し、從つてその一時的な果敢なき方面からも見てとるからである。何物からも欺かれず、その本質に於て批評的であり革命的であるからである」といふ意味になる。

松浦氏は獨逸語の語法文法等をまるつきり御存知ない上に、辯證法がどんな物だか、ヘエゲルの哲學がどんな物だかをも、まるつきり御存知ないやうである。しかし、私はそれを責めるの

ではない。そんな不用意の下に、所謂難解なマルクスなどを譯出しようと思ひ立たれたのが無分別だと云ふだけである。

序乍ら松浦氏は、第三版第四版のエンゲルスの序文を譯しないで置かれた。あのブレンタノオ事件なぞの條を譯されたら、どれ位珍妙な誤譯が續出したであらうかと、つひ、つまらない事まで想像して見たくなる。

偖て、これから本文の方へ移るのだが、先づ十二頁四行目に『ヤコブは嘗て金が價値頗る大なるを疑つた』とある。原文を見ると

Jacob bezweifelt, dass Gold jemahls seinen vollen werth bezahlt hat とあつて、譯文とは似てもつかない物である。

十三頁八行目の『そして單に直接他人の爲めに生產するのでない』の原文は Und miht nur für andre schlechthin. で、『直接』と云ふやうな意味は何處にもなく、『そして單に他人の爲めに使用價値を生產するといふだけではいけない』の意味である。

十八頁二行目の、『人間は其生產に於て自然自身が、卽ち材料の形式だけが、どう變化するかを經驗し得るに過ぎない』は出鱈目で、本當の譯は、『人間は其生產に於て、たゞ自然自身が爲すのと同じ事を爲し得るにすぎない。卽ち、材料の形を變化し得るに過ぎない』とあるべきである。

二十九頁二行目の、『最も單純な價値關係は、一商品と、之を價値は等しいが性質を異にする特殊な商品との間の價値關係であることは明らかだ』に於て、『之と價値は等しいが云々』の原文はzu einer einzigen verschieden artigen Waare, gleichgültig welcher の誤譯である。驚くべき誤譯である。無論急いだ爲めの間違ひではない。この程度に於て獨逸語のいろはを知らないのである。

五十七頁一行目の『バスティア及びコンソルテン』は『バスティア及び其一味のもの』といふべきところ、普通名詞が個有名詞になつたのは御愛嬌である。

次ぎの行で、『メルカンチリストは價値表現の性質上の方面に重きを置き、從て貨幣が完全の域に達した商品の等價物形式を重じてゐ云々』の『貨幣が完全の域に達した』は『貨幣に於てその完成した形態を有つてゐるところの』の誤譯である。これでは譯者は所謂メルカンチリストがどんな物であるかをさへ理解し得てゐないやうである。

五十八頁七行目に、『……が、使用物の生產に於て費された

勞働を云々』のセンテンスは全部間違つてゐる。原文は少し長いから擧げない。

八十八頁終りの行で、『ロビンソンは之に就ては不滿もあるまいし』は、『ロビンソンはそれに彼の悅樂を見出してゐるし』とでも譯すべきところだ。Vergnügen を獨和辭書の敎ふるところに從つて、いつも『滿足』といふ意味にばかり取つてゐるなぞは心細い始末である。

八十九頁十一行目の、『酒場の御主人公』は Herr M. Wirth で、マクス・ヰルト氏である。こゝでは固有名詞が普通名詞にされてしまつたわけである。

九十頁八行目の、『人格上の不獨立は、其上に打立てられた生活範圍と同じく、物質的生產の社會關係に特色を與へてゐる』でも、『其上に』は何の上だか分らないのみならず、全部意味をなしてゐないのである、拙い譯ながら、『人的倚賴關係が、物質的生產の社會的關係に特色を與へるのは、その生產の上に築かれたる生活範圍に特色を與へるのと同樣である』とでも云ふべきところであらう。

九十頁十一行目の、『勞働の自然的形式卽ち其個別性及び商品生產の基礎に立つ共通性を缺くことは、此場合直接の社會形式である』のところは、原文も一寸分りにくゝ出來てゐるから、松浦氏が奇麗に脫線してしまつたのに無理はない。原文はかうだ——

Die Naturalform der arbeit, ihre Besonderheit, Und nicht wie auf Grundlage der Waasen, produktion, ihre allgemenheit, ist hier ihre unmittelbar gesellschafliche Form,

これを日本語にすれば、『此場合勞働の自然的形相は、その特殊性はその直接社會的形相でなく、そしてその一般性は商品生產に基礎を置く社會に於ての如く、その直接社會的形相でないのである』といふやうなことになるであらう。

九十一頁四行目、『關係を裝つて』は『關係に包みかくされて』の誤譯である。

次ぎの行で、『……史上の波動』とあるのは Geschichtsschwelle の誤譯である。閾が波になつたのである。

同じ頁の八行目、『併し商品として相對するものではない』の原文は aber nicht sich selbst wechselseitig als Waaren で、勿論『併しそれらの物自ら互に商品として相對するのでない』といふやうに譯されねばなるまい。そして、かうした種類の誤譯暴譯が特に多いといふことを言ひ添へて置きたい。

九十五頁十一行目の『又經濟學者は此內容がその形式をとるかの問題を提起して來た許りでなく、更に云々』のセンテンスも全部出鱈目である。

百四頁二行目、『水木の實が隣人の海炭に』では、沙翁劇の中に出て來る Dogberry や Seacoal の如き人間が、固有名詞が普通名詞にされてゐるやうである。

百六頁七行目、『人格として相互に關係を持ち』以下三行ばかりは無意味である。als Personen は『その意志がそれらの事物の中に住んでゐるやうな人間として』である。此種類の誤譯も殆んど無數に轉がつてゐることを言ひ添へて置きたい。

百七頁一行目、『經濟的特質を有する人格の假面』は、die ökonomischen Charaktermasken der Personen といふ原文も一寸念入りなので、松浦氏のまごついたのは無理はないが、これは『經濟的舞臺に出て來る人物』の意味である。

百八頁七行目、『商品は他人に對しては使用價値であるが、所有者にとつては單に交換價値を有つ使用價値であり、從つて交換價値たるに過ぎぬ』のところは、單にこれ一つでもマルクス飜譯者にとつて致命的の誤譯と云はれるほどのものである。これを私の日本語で取次げば、『商品は他人に對しての使用價値を有つてゐる。其所有者にとつては、直接にはたゞ、交換價値の運搬者であり、從つて交換手段であるといふ使用價値を有つてゐるに過ぎない』である。

百九頁十行目、『商品が他人に利用なく、爲めに其生產物が他人の欲望を充たすと云ふことは、交換に依つてのみ實證し得るものである』は、まるつきり原文と別なものである。原文を飜譯すると、『しかし乍ら勞働が他の人々に有用であり、從つて其生產物が他の人々の欲望を滿足さすかどうかは、たゞ生產物の交換によつてのみ證明される』である。

百二十四頁の九行目、『社會的生產行程に於ける人間の相互關係は、單に原子論的ではなく』云々のところで、『相互關係』は『態度』とか『擧止』とかでなければならず、『單に原子論的ではなく』は『單に原子的であり』と肯定的にならねばならぬ。

百二十八頁五行目、『商品を久しく金とする事はない』の原文は Seine Waaren noch lange nicht vergoldet, である。譯者は nach lange nicht といふ獨逸語をさへ知らないと見える。

百五十頁十二行目、『其ファウストの欲望』云々は何の事だか分らない。つまり譯者は auf eigne Faust といふ獨逸のイディオムを知らないところから、Faust をファウスト傳說の

ファウストとでも取つたのであらうが、それにしても奇拔千萬な譯をつけたものである。

百五十一頁十行目、『贈られた駄馬は口の中にゐないが』も同じく奇拔千萬な譯である。これは直譯すると、『人は贈りものにされた駄馬の口の中を見ないのだけれど』で、『人はたゞで貰ふ品によしあしの文句は言はないのだけれど』の意味をもつた諺である。かりに此諺を知らなかつたとしても、一寸字引を引けば分りさうなものである。

こゝまで書いて來て、一寸念の爲めに紙數をしらべて見ると、もう豫定を超過してしまつた樣子である。就いては、特別に大きな誤譯といふのをも、遂にあげ盡せないでしまつたわけである。だが、あまり殘り惜しいからもう三つ四つばかり。

ずつと頁を飛んで百六十五頁十一行目、『經濟學上の辯解方法』は die Methode der ökonomistischen Apologetik の譯語らしいが、これでは何の事だか分らない。譯者自身にも恐らく分つてゐないであらう。これは資本家主義擁護の御用經濟學の方法といふ意味である。

再びずつと頁を飛んで百九十一頁始めの行、『人手に渡る』は『磨損する』、『磨滅する』の間違ひである。前後の聯絡から考へ

て見ても、『人手に渡る』などいふ譯のつくわけはなさゝうだが、どうしたものであらう。

更に、ずつと飛んで二百頁十二行目、『此錬金術は聖者の骨でも拒まない』は、『此錬金術にかゝつたら、聖者の骨でもたまらない』の意味でなければならぬ。

更にずつと飛んで二百十頁終りの行、『流通手段は流通内にはいるが、商品は其後逸早く流通外へ出て終ふ』の正しい譯は、『流通手段は流通の内へはいつて來る。けれどもそれは商品が既に流通の外へ出てしまつた後の事である』だ。松浦氏は nach dem といふ獨逸語の用法を bereits といふ一層何でもない獨逸語の用法をすら御存知ないのであらうか。

これで愈々、誤譯指摘のペンを拭ふことにする。時間と紙の上の場所とさへあれば、立派な誤譯惡譯として擧ぐべきものが、いくらでもある。殆んど無數にある。しかも、數が多い爲めに數へ切れないばかりでなく、それが互にくつつき合つてゐて實際のところ數ではかることが出來ないほどである。

私共は松浦氏の譯が、如何なる動機の下に企てられたものであるかを本當には知らない。たゞ氏自身がその譯者序文の中に書いて居られるものを通して想察するに止まる。そして私共

は、氏が眞面目な人であつて、眞面目な動機から眞面目な態度で以て、あの飜譯をもはじめられたものだといふことを、信じたいと思つてゐる。

しかし乍らいかにせん、飜譯の成績は以上紹介し來つた如きものである。あんなひどい書物を拵へた譯者松浦氏の責任はともかくもとして、あれを引きつゞき買はして置くといふのは、買はされる人々にとつて、あまりに氣毒すぎる事である。

私は勿論、松浦氏に對して十分深切であり得なかつたかも知れない。けれども、松浦氏はたつた一人であり、松浦氏の讀者になるべき人は非常に多勢である。私は忍んで小の蟲を殺したのである。

私はこの誤譯指摘といふ、利害の打算に敏感な悧巧な人達の決してやらない、私自身もこれまでやらないでゐたことをとうとうやつてしまつた。顧みて一點のやましさを覺えないながらに、この事の報酬がどんな物であらうかを想像して、何とも云はれない氣味惡さを感ずる。我ながら意氣地のない事である。

咬豆茶話

△高野博士が勞働委員を引受けるとき、農商務、内務、友愛會との仲介の勞を執つた帝大の花形の某博士の言を信じて、ウント承諾した。處が實際は友愛會でも、内務省の態度でも甚だしくその報告と違ふ。そこで博士は斷乎として承諾を取消したのだそうだ。して見るとその責任の一半は内務省と、某博士が負ふべきものぢやと某大學教授は語つてゐた。

△博士は自分の不明から帝大側の權威をも毀けたといふので、大學教授の職をも弊履の如く投げ棄てたが、もと／＼何等の貯へもない處から明日の暮しにも困るほどの境遇にある。所が博士今回の事を知つてか、知らぬでか、去る七月四十五圓の屋賃を五十圓に引上げたばかりのものを、十月から一躍七十圓に値上すると通告して來たそうだ。サリとはアマリに非道因業の家主ぢやないか。

△富豪の贅澤で思ひ出すが、或意味に於ての流行兒福澤桃介は、築地精養軒に於て愛娘の結婚披露の宴を張つたが、何から何まで贅澤づくし、ボーイの衣服まで、新調するさわぎで、二百四十八人招待したが、勿論一人前の費用が二百二十圓かゝつた。

△フラレ大盡、山本唯三郎は北京では女中、藝妓からストライキを喰はされ、郷里岡山でも招ぶ妓の總てに總スカンの綽名をありがたく頂戴し、近頃古き都の大邦でもストライキを喰つたらしい。所がかねてからの寵妓祇園のだん子を根引き相談にかゝつたところが、五萬圓と吹きかけたので、流石の虎大盡も撃退されたとは笑止／＼。



紡績探訪

職工志願の記

——女工哀話「地獄の小唄」——

濱本野花

山本主幹足下

あなたが私の健康を氣遣はれ乍ら勞働者の群に行けと命ぜられた時には主として彼等對資本家の立場から其の生活狀態、勞働時間及び賃銀を統計的に調査せよとの御希望でしたが、私はすつかり自己の使命を忘れ一種の小主觀に捉はれて、職工志願の不思議な經驗と女工達の貞操問題をのみ題材として扱つた事を先づ許していたゞかなければなりません。

シヤイロツクを訪ねて

八月二十×日

垢染んだ白縞の着物は汗に濡れて、穿き古した利休下駄は塵垢にまみれて居る。古い夏帽を阿彌陀に冠つた下から疲れた脂切つた額が力なく覗いて、手に抱へた風呂敷包みを幾度か重さうに持ち替へられた。幾日も雨を見ない盛夏の空に黒く立ち昇る煤煙を眺めた時に最早根氣も何もつきて居た。

其の前日、大阪難波の大日本紡績株式會社攝津工場を訪ねて、職工の口はと訊ねた時、受附の男が烏散臭げに『戸籍謄本を持つて居るかね、それとも引受人でもあるのかね。』と聞いたので、其の何れも持ち合せて居ないと答へると『其れでは駄目だよ、第一、工女なら何人でも雇ふが男工は今の所いつぱいだからね』と云つて斷られた經驗をもつて居るので今日は餘程巧く化けてやらうと考へて居る。

京都を出る時、私の計畫に對して種々と細かい注意を與へて呉れたK工場の人事係H君の談に依ると、近頃其の筋の屬僚などが職工生活を調査する爲め、或は社會主義者が煽動の目的を以て求職者に變裝して來る者が少くない、然し其れは一目すれば解るよ、と云つた言葉なども思ひ浮べられた。

今、私が目差して行くのは泉州岸和田の×××紡績株式會社である。私は何故に此の會社を選んだか。此の會社の社長寺田甚與茂は關西財界のシヤイロツクと異名を取つた男で昨年の夏南海電車の紀州某驛で正面衝突の結果乘客中より數名の死者重傷者を出したる際、社長片岡直輝は死者一人に三千圓の慰問金を支出すべく重役會議に諮つた際、取締役である

寺田甚與茂は一人の死に三千圓と云ふ大金を支出する理由がない、と獨り頑張つた男である。其麽男に對し私の小さな人道主義は義憤を發せずには居られないのである。

×××紡績は明治二十五年の創立で可成り古い歴史も持て居やう、資本金は二百四十萬圓で今期の利益配當は八割で、同業の福島、和歌山の兩紡績と共に全國の紡績業中第二位と云ふ不當利益をせしめて居ながら、職工の待遇に對しては果して何れだけの設備をして居るであらう。株主も重役も恰んど總てが甚與茂と其の一族である事は勿論奇とするに足りないのだが――。

獨身者では

南海鐵道の岸和田驛で、買はれて來た工女の一群に混つて電車を降りた。流石は泉南の工業地だけに平野の所々高い煉瓦の煙突はむくむくとして黑煙を吐き巷街(ちまた)を行き交ふは何れも共の日の勞働を怠けて遊ぶ工女の群である。商町(マーケット)らしい通りには化粧品や吳服類を商ふ、工女對手の商店が軒を並べて居た。其れよりも異樣に感じたのは町に似合はぬ交番所の多い事で有た。

軈て、黑い港の岸に出た。工場から流れ出る熱湯は干潮の海底を攪き亂して琉黃臭い惡臭がそこいら一面に漲つて居た。岸和田紡績は目下事務所新築中なので、假りの出入口が穴倉の如うに港の岸に臨んでゐる。

『お前さん獨りかね、獨りでは困るよ。女房(かみ)さんか妹でも伴れて來たら入れてあげん事もないけれどね。』

受附の男は勞頭先づ斯麽挨拶を以て新米の私を惱ました。そして

『何にも故鄕(くに)にまで連れに歸らないでも、女子(をなご)なら其處らに何ぼでも居るやろがな。』と、更に不得要領謎の如き言葉を發した。

『獨(ひと)身では何故(なぜ)いけませんか、何ぼ其處らに女が居てもまさか連れて來る譯にはいきませんもの。』

『獨身(ひとりもの)は工女を連れて逃げるからいかぬのぢや。工女には金がかゝつて居るからな。』

獨身者(ひとりもの)の男工、殊に若い男は先づ斯うした意味で警戒せられる。女工ばかりの纖維工場では、同盟罷工の煽動者よりも工女蕩らしの若い男が恐ろしいのである。誠に私の斯の第一印象は最後まで氣の弱い私を惱ませた。女、女、肉の歡樂と糜爛した戀の臭氣は最後まで獨身者(ひとりもの)の新入勞働者を惱ませた。

どん底生活

世には親切な人も居る者である。獨身者の故を以て斷られた私を拾つて世話をしてやろと云つて吳れた四十女が居た。

『何にも此處ばつかり工場やあるまいし、妾(わたし)についておいでやす。遙々田舍から來た人がおかみさんや妹はんを連れて步

けるものかい、なあ。』

親切な女は亭主に辨當を持つて來た職工の女房で有た。私は其の女に伴れられて、綿塵垢の飛びかう路次を幾つも幾つも拔けて、とある場末の木賃宿らしい家を訪ねて行つた。

『まあお入りやす。四號工場に人がいる云うてたさかい訊いで來てあげますわ。』奥の方で別の女の聲がした。

此家は、岸和田紡績野村分工場の指定下宿武田シカと云ふのである。此の地方の工場では女工は總て寄宿舍に收容するが男工寄宿舍の設備はない。指定下宿と云つても到底讀者諸君の想像もつかぬ悲慘なものである。先づ中に入ると日の目も見へぬ暗い室がある、便所と床下の臭が混がらがつて鼻を襲ふて來る。空箱を並べて板を渡した上に綿のはみ出した煎餅蒲團を敷いて死んだやうに寢込んだ裸體の男がゐる。不潔な朝鮮服を着た男が悲しげに鼻唄をうたつて居る。

『今日は休みですかい。』私は裸體の一人に訊ねて見たが、彼は殺人犯人の如ふな慘い眼でちらつと私を睨んだ儘一言をも發しなかつた。

『あんた、御飯まだどすやろ、おあがり。』裸體男の一人が云つて吳れた、床板をめくつた土間に古い臺が据へてある。陶器の鉢にぼろぼろになつた黑い飯が盛られて、雨黒の入つた笊の中に洗ひ洒した大根漬があつた。

其れで一日の食料が四十二錢、會社から三錢の補助が出て居るから缺勤すると四十五錢を仕拂はねばならぬ。

壁上張紙ありて曰く「寄宿舍の女工宿泊する事斷然お斷り」と。斯うしたどん底生活と寄宿舍の女工とは近來流行の勞働問題とは甚だ縁の遠いものである。無自覺の勞働者よ。勞働會議委員が稍々ともすると資本家側より選ばれ、少くとも技師とか監督とかと呼ばるゝ人々の送り出さるゝのを幾ら憤慨したつて其れは駄目な事だ。

日給一圓二十錢也

會社では兎も角も本人を伴れて來い、と云つたさうだ私は宿と何か特別の關係のあるらしい若い男に連れられて野村分工場の事務所に出頭した。何方を見ても殺風景な人間ばかしである。私は入口で一ツ、係員の前で三ツ叩頭した。

『是れか、よし。』事務員は何か品物のやうに私を扱つて居る出された志願書に原籍、姓名、年齢、を正直に記入した。

『お前、學校は何處まで行つたのや。』

私は默つて「教育程度」と書かれた欄へ「高等小學二年修了」と書いた。

『字がうまいな。スカッチへゆけ。』

私にはスカッチの意味が解らなかつたけれど、へえと云つて叩頭をして置た。

『今まで何をして居たのや。』

『牛乳配達です。』

『嘘云へ。』と云つてチラと睨めつけられた。

『スカツチは勤まりますまい、リングへ入れて貰へまへんやろか。』連れの男が口をきいた。

『リングは獨身者はあかん、夫婦者か年寄でなくては。』

事務員は素氣なく斷つた。

『あんたはんはお名前はだれ云ひますやろ。』私は恐る恐る試驗官然たる事務員に訊ねた。

『名前きいて何するのや。』と云つて横向いてしまつた。よく肥つた髯を刈り込んだ三十四五才の男で有た。

連れの男は何か話てゐた。軈て私達は挾竹桃の花の咲いた狹い門から追ひ出された。

『スカツチと云ふのは機械場やよつて、忍耐さへすればぢき給料が上るのや。始めは面白うないけんどな。』作れの男が云つた。

『あの事務員さんは何と云ひますか、そして給金は何れほど貰へますやろ。』

『あれは林さんと云ふ人や。給金は來月の二十日が來なければ解らんけれど一圓から一圓二十錢位ゐまでやろ。』

『いつから働きますか。』

『明日の朝からや、交代は六時やけんど、始めてやよつて六時半頃に行きなはれ、わしが連れて行つてあげるよつてな。』

歸る街上で幾人もの朝鮮人に出逢つた。

不思議な男の談話

其の夜は遂にまんぢりともしなかつた。襲ひ來る惡虫どもと堪へ難い惡臭とにまんぢりともしなかつた。睡眠不足に疲れた私は翌朝早くから菜葉服を着て麻裏をはいて工場の門を潜らねばならなかつた。集つて來る職工達の中で私の新らしい服裝がひときわ人眼をひくやうに思はれた。

スカツチと云ふのは打綿(Scutching)の事であらうが、此の一室では梳綿(Carding)も行はれてゐるのである。スカツチャーやカードの運轉する音が轟々と響く、をまけに室內に漲る綿ほこりは耳と眼と鼻との總てを障害した。私は箒を携げてしつきりなしに土間の綿くづを掃除してまわつた。

隣室は粗紡、精紡の工場で二百餘の工女が始紡機、間紡機、輪具精紡機などの轟々喧々たる音響中で、頭から眞白な綿をあびながら立ち働いてゐる。

午前六時の交代時間から。九時に十分、十二時に三十分、三時に十五分、合計五十五分と五分の餘裕を見て一時間を除く、午後六時までの正味十一時間を（夜業は午後六時に始まり午前六時に終る、休憩時間は日勤と同じ）機械の響と綿ほこりの中に立ち働いて居る憐れな工女の群に、更に恐ろしい惡魔の手が人知れず跳梁跋扈して居る事を讀者諸君は既に想像して居られるであらう。私は今、その最も悲慘な實例を御話しやうとして居るのである。

私が工場に入つた其の日の夕方、私は工場の人達が煉瓦場と呼ぶ海岸を歩いて居た。此處は煉瓦工場の裏になつて居て人通りなども稀で有る。私は其處で東京の本社や其他親しい人達に手紙を書かうとした。

『何を書いて居ますか。』

不意にうしろから呼び掛けられたので驚た。顧ると、昨日以來始終私の周圍に現はれては接近しやう、しやうとして居る不思議な男である。私が最初職工の女房に連れ込まれた宿の入口に此の男の影を見掛けて以來、路を歩いて居ると尾行して來る、蕎麥屋に行つて居ると何處からか入つて來る。事に依つたら刑事かも解らないと思はれた。

『手紙を書いて居ました。故鄕へ出さうと思ひましてね。』

と私は微笑しながら無雜作に答へた。

『斯う申しましては甚だ失禮かと思ひますが、君は普通の職工ではありますまい。屹度何か目的が有て東京からいらつしやつたのでせう。』不思議な男は明晰した口調で云つた。私は一寸と薄氣味が惡かつた。

『いゝや。仕事がなくつて困つたものですから來たのです、あなたは何方でせうか。』

不思議な男は淺黃服のポケットから手帖を取り出して、その中から。「市岡鐵工所職工增山三平」と舊式な四號活字で印刷した粗惡な名刺を取り出した。

『あなたが幾らお隱しになつても駄目です、私はちやんと知つて居ますよ。然し、此の工場に入つて勞働問題の研究をなさらうたつて到底緖口も見付かりますまい。其れよりか可憐な工女の生活を御聽き下さい、隨分非道いんですからね。』

『ハ、、、私は其樣者ではないんですよ、でも工女の話なら滿更いやでもありませんよハ、、、』と私は何だか不自然な誤魔化しかたをした。

二疊に三人の割合

工女の寄宿舍は高い塀に圍まれて工女と係員の他には何人だつて見る事が出來ない。然し工女の話に依ると二疊に三人の割合だから六疊の室には九人まで詰め込まれる譯であるそれが晝夜交代の十八人で六枚の蒲團を使用するし、晝間だつて明るくつては眠られないと云つて雨戸を閉めて居る。をまけに工女の大多數は呼吸器病に犯されて居るので狹い不潔な室内には病菌が漲つて居やう。

食費は一日十錢と云ふ是には又意外に安いと思つたら、外國米の飯に朝は古い漬物、晝と夕とは野菜の煮附け一皿に偶には申譯的な魚肉を添へる位ゐ、勿論物價騰貴の今日一日十錢の食費では如何にしてもやつて行ける筈はないがそれにしても工女の食物は其の營養量に於て決して彼等の健康を保證する事は出來ないのである。

煙の立ち罩めたやうな綿埃塵の中に於ける正味十一時間の

勞働と斯うした不健康な生活とは勿論彼等の壽命を刻々に蝕んで行く。識者の談に依ると工女の恰んど總てが病人であると云つても過言ではあるまい。其の病氣の大半は呼吸器病で之れに次ぐは花柳病であると聞いては工場內の風紀が如何に紊れて居るかを思はされるのである。

男一人に女五人

『獨身者（ひとりもの）では困るな、工女を蕩して逃げるからな。』私が岸和田の土地で耳にした最初の言葉は是れで有た。

『紡績の職工は十日したら止められぬわい、何しろ女の擇り喰ひが出來るさかいな。』第二の言葉は是れで有た。

女工が其の不愉快な寄宿舍に宿泊する者は毎夜三分の一位ゐだと云ふ。殘る三分の二は故郷も名も知れぬ男と相擁して薄穢い木賃宿に不安な夢を結び、甚だしきは煉瓦場や海岸の物蔭で怪しい一夜を明す。其の結果は自殺となり嬰兒壓殺となり墮胎となる何れにしても警察の御厄介だ。小さな町だのに交番が多いと最初私が怪んだのも亦無理ではなかつた。

何分一人前の女工になると日給八十錢以上一圓二三十錢迄、それに時間外勤務があり夜業がある、一ケ月三十七八圓の收入は容易な事だと云ふ。だから一日働たら二日位ゐは遊んで暮す、遊び對手は怠け者の男工である。男一人に女五人の割合だと云ふから如何に其の風俗が淫猥であるかは察する事が出來やう。

特殊民の娘

『恰度昨年の此の頃でした、或夜私が此處いらの海岸を步いて居ると向ふの棧橋から海中に飛び込んだ者がある。此處は遠淺ですから干潮の時には何麼にもがいたつて死ぬるものではありません。直ぐ飛び込んで行つて引き上げて見ると十七八位の美人なんです。』

例の不思議な職工増山三平君は斯う語つた。

女は高知縣の赤岡と云ふ特殊部落の娘であつた。（記者の郷里は偶然にも其高知縣である、特殊部落の娘が郷里にゐて迫害せられるよりも他郷に出て素性を隱したい爲め盛に工女を志願して行くのである。）山崎千代喜と云つて此處の工場では有名な美人、それに仕事も出來たので七八十圓の貯さへできるやうになつた。所が工場に居ても寄宿舍に居ても耳にする話は穢惡な男女間の情事ばかり、始めのうちは自分が特殊民の娘だと云ふ氣遲れからなるべく男工から遠かつて居たのが、ふとした事から同郷の銀行員上りの男工と關係する事になつた、所が三ケ月もたゝぬうちに貯金はすつかり男の爲めに費消してしまうと、最初から自分の素性を知つて關係して居た男に逃げられてしまつた時には猛烈な花柳病に犯されて居た。それでも彼女は逃げられた情夫の事を忘れ兼ねた。をまけに此の頃見るものを見ないのは、必然姙娠したのであらう。と

途方に暮れて投身自殺を計つたのだ、と女は自白した。

『私は可愛さうだつたから其夜私の宿に泊めてやりますとね、さつき自白した事はケロリと忘れたやうに、幾日でも身を委すから國に歸るだけの旅費を借して呉れ、と云ふのです。特殊民の娘だつて構ひませんが花柳病で妊娠ときては幾ら野獸のやうな私達だつてたまりませんからね。それだけは斷りましたよ。』

其後女の消息はとんと知れなかつたが、何でも其の秋の終る頃、岸和田とは隣り村の一宮の海岸で骨と皮とになつて野倒れ死して居たが其女は特殊民の娘山崎千代喜らしかつた。

『全く可愛さうですぜ、嫁入仕度位ゐはして歸るつもりで故郷を出て來た者が、一年もたゝぬうちに肺病や心臓病に冒されて骨と皮とになつて歸郷するならばまだしも、病氣と男との爲めに淫賣になるもの娼妓になる者、甚だしいのは今の娘のやうに野倒死する者があるに至つては、勞働時間の短縮よりも賃銀の値上げよりも先づ是等の魔の手から無自覺な工女の群を如何にして救濟すべきか、が紡績勞働者にとつては大問題ですからね。』と増山三平君は馬鹿に昂奮して居た。

地獄の小唄

女工一人に二十圓の募集費を見積つて居る。拔目のない募集人は浮世の風に緣遠い山間僻地を巡廻して、たゞでさへ自由な世界と都會の榮華に憧憬する田舍娘を捉まへては甘言の有りつたけを並べて煽動する。娘を紡績の工女にでも出さうと云ふほどの親達なら先づ二十圓の前金に眼が眩むのも無理はない。人肉を喰ふ惡魔の存在などは夢にも知らぬ山家育ちの阿母は、娘の出世と喜んで赤飯でも炊いて送るのである。

其れが斯ふした結果にならうとは全く想像もしなかつたのであらう。工場街の初秋の夕暮、悲しくも聞ゆる工女の歌に耳を傾けて見給へ――、

甘い言葉に欺されて、來て見りや此世の活地獄、出たくも出られぬ鬼ケ淵、どうせ生かしちや返すまい。

誠に生きて歸る者は稀であると云はねばならぬ。處女の血潮は野獸の如うな色魔の群に吸ひ盡され、薔薇色なりし其の肉は機械の響と塵垢の爲めに枯らされてしまう。幸にして無事に歸つた者でも其の恰んど總ては一ケ年を出でずして恐るべき病氣に襲はれるのが常である。又、歌ふて曰く、

ねぼけ眼で朝の五時から辨當箱下げて、工場通ひのいじらしや、娘盛りを塵の中、晩には死んだよになつて寢る。

而も、其の枕する處たるや二疊に三人の小世界、それも所謂萬年床の到底人間のベツドとは思はれない。

こんな工場は早く地震でガラ〱潰れ、寄宿舍なんぞが皆燒けて、社長も監督も事務員も、ちよいとペストで死ねばよい。

是れ捨鉢なる彼等が僞らざる告白とも云へやう。更に現實

を曝露せる左の歌を見よ、

國を出る時や父母に、金を送るというて出たが、何時しか男工さんに欺されて三年滿期にや丸裸。

只一片の俗謡として聞き捨てにすれば其れまでゝある。歌は詐らさる心の聲である。何人か悲しくも聞く此の歌に人としての嘆息を洩らさぬ者があらうか。

服を着替へて

數日の後、私は淺黄色の職工服をアルパカの背廣に着替へて岸和田警察署に山上氏を訪ね、工場に關する統計及び調査物件に就て辭を低くして質問したが、氏は、何處か官署の囑托で來られたのなら兎も角も、新聞雜誌記者に御話しする事は一寸と差し閊へます、と云つて何にも洩さない。只意味ありげに微笑しながら『兎も角調べて見れば驚くやうな事實を發見せられるでせう。』と云つた。

同署の高等警察係高島＋××は、つい一ケ月ほど以前友愛會から職工に化け込んで來た者が有つたが二三日で歸て行た。兎も角も新聞社に行ても醫者を訪ねても、君を滿足さすやうな材料を得るには困難でせう、と云つた。

署長は頻りに私が工場に居た日時などを訊いて私の名刺の端に記入して居たが工場の方へ注進でもするのか、或は氏名欺稱の嫌疑でも有たのだらうか。然し乍ら當時の職工志願書には將か欺らさる原籍姓名年齡を記入して置た筈だ。警察を辭し、俥を走せて町の新聞社、醫師などを歷訪したが何れも頗る不得要領に終つてしまつた。

大阪の實業界に於ける人格者S氏は私に云つた。

『君は馬鹿だよ。寺田甚與茂を責める者は恐らく岸和田界隈には一人だつてあるまいけれど、あの町の人達は寺田の資本に依つて生活して居るのだからね。君に對つて寺田の惡口を吐く者が有らう筈はないぢやないか、實際靜に考へたら人間としては苦しい嘘を吐いて居るんだぜ。

苦しい嘘僞が何か私には解らないが、眞實官吏も商人も百姓も口でこそ立派な議論も云ふけれど、資本家の前には總てが意氣地のない奴隷である。他人の娘が闇へやらが死んで行かうが其麼事は對岸の火災だと云ふのか。

勞働問題大に論ずべし。然し乍ら吾人は勞働者として其の生活の改造を呼ぶよりも、先づ人間として人道の爲めに彼等可憐なる女工の群の健康と貞操の爲めに蹶起しては何うであらう。弱き者よ曹の名は女なり、誠に刻下の勞働問題は勞働者中の一部智識階級の問題であつて、彼等弱者は永久に忘れらんとしつゝある事を私は悲しむ者である。

稿を終るに當り、私は彼の工場街の夕暮に、唇の色さへ褪せし工女等が悲しく歌つた小唄の一節を再び繰り返さう、

甘い言葉に欺されて、來て見りや此世の活地獄、出たくも出られぬ鬼ケ淵、どうせ生かしちや返すまい。

（九月十日京都支局にかて）



湯河原哀話　蛇態ケ瀑

澤田撫松

一

私が國府津で下りたのは午後四時十二分であつたから、輕便の時間に間に合ふまいかと心配しながら電車に乘ると、小田原の町の中をかなり緩漫な速力で進行した。熱海行きの輕便鐵道小田原驛へ着いた時は五時を五分過ぎて居たので、急いで切符賣場へ行くと、滿員でだめだと言つて切符を賣つてくれない。これが終列車だつたから、この汽車に乘りはづすと湯河原へ共の晩泊る譯に行かないから、驛長に談判すると、やつとのことで、二等室へ入れてくれたが、汽車とは名ばかりで、山の手線の電車よりもちいさい汽車で、一ツの客車を二ツに仕切つて、二等と三等とに分けてあるのだから、滿員になるのも不思議はない。二等室の隅に立つたまゝ身動きも出來なかつたが、江の浦で下りた人があつたので、漸く腰が下された。只た一ツの客車を不恰好な機關車が引摺つて人道を進行して行く樣子が、まるで鐵道馬車と言ひたいが實は鐵道牛車と言つた方が實質を表現して居る樣に思つた。汽車が茶店の前で止ると、赤い襷をかけた若い女が、梨の剝いたのや、冷したサイダなどを賣つて居た。なかにはコップで冷酒を飲むで居る客もあつた。

『サー出ますぞ』

機關士が聲をかけると、錢を拂つて窓から乘客が頭をひつこめる。不恰好な汽罐から臭い煙を吐いて進行を始める、その油煙が客車の中へ入つて顏に當るのがいやな氣持であつた。けれども汽車の窓から見える相模灣の景色がまるで繪に描いた樣であつたから汽車の進行につれて變つて行く海面を眺めて居ると油煙ぐらゐは我慢が出來る。それも段々暗くなつて、吉濱へ來た時は夕日が落ちて行手は眞暗になつて居た。濱邊の方に大きな屋形の樣なものを建てゝ、それに無數の提灯が吊つてあつた。提灯の火で其の邊が明るかつたから、男や女が澤山居ることが見えた。その屋形から少し離れた所に、同じ樣な提灯の屋形を建てゝ人が集つて居た。そして互に罵り合つて居た。その光景が不思議であつたから、向側に腰をかけて居た乘客に尋ねると、毎年八月十六日の晩に、こうした提灯の家形を二ツこし

らへて、どちらの家形の提灯の火が先へ消ゑるかを爭ふので、先に皆消えた方が負けで、一ツの提灯でも最後まで消えなかつた方が勝ちになるので、これを吉濱の提灯戰と言つて村の若衆や娘等が一年に一度の樂しみにして居るのださうだ。汽車が湯河原の町へ着くと、宿屋の番頭が幾人も提灯を持つて待つて居た。私が泊らうと思つて居た敷島館の番頭が出迎ひに出て居たから、直ぐ馬車に乘つた。馬車は四人乘りで、私が乘つた時は誰も乘つて居なかつた。

『敷島館でございます、敷島館の御客樣はございませんか』

番頭が馬車の傍で聲をかけて居ると、二人伴れの女客が馬車の中へ入つた。馬車は動き出したが眞暗で女の人相は分らなかつた。坂路を鈍い速力で登つて行つた。三十分も經つたと思ふ頃馬車が止ると、電燈の光線で馬車の中が明るくなつた。縮緬絞りの浴衣に黑の絽縮緬の羽織を着た三十位の女と、同じ縮緬絞りではあるが前の女よりは少し派手な浴衣を着て、青葉色の絽縮緬の羽織を着た二十位の女とが馬車から下りた。此所は敷島館の前であつたから私も下りた。二人の女は二階へ案內された樣だつたが、私は三階へ案內された。時計を見ると八時を二十分ばかり過ぎて居た。一風呂浴びてビールを飮むと睡くなつて來たから、床の中に入ると谿流の音が耳にたつたが、それを聞きながら眠つて了つた。

二

朝目を覺して新聞を見やうと思つたが、十時頃でないと來ないと言ふから、机の上にあつた湯河原の地圖を擴けて見て居ると、谿流の水源に蛇態ケ瀑と言ふ大きな瀑が書いてある。蛇態ケ瀑と言ふ名が私の好奇心を唆るに充分であつたから、朝飯を濟ますと、地圖をたよりに蛇態ケ瀑を見に行つた。敷島館の横を左へ廻つて、藤木橋を渡ると右へ折れ、中西旅館の前を谿流に沿ふて眞直に行くと、石段の上に大師堂があつて、本堂の傍に瀑が落ちて居る、それは淸瀑と言ふ瀑であつた。其所の堂守に聞くと蛇態ケ瀑へ行くには、大師堂の石段を降りて谿流に架つた橋を渡つて山へ登ると不動の瀑がある、其所を更に登つて行くと詩興ケ原へ出る、右手に落ちて居るのが五段の瀑で、それから少し登つたところに蛇態ケ瀑があると親切に敎へてくれた。敎へられた通りに石段を下りて、橋を渡らうとすると、橋の傍に立札が立てゝある、見ると、

不動の瀑

一、華嚴の瀑より小なり、飛込むに宜しからず、仲よく手を引かれて散歩の目的によし。

二、兩眼鏡を逆さにして見たる華嚴の瀑と同形

世をすねた都の女瀧の茶屋

手蹟も拙からず、墨くろ〲と書いてあつた。こうした山の中

に都の女が住むで居ると言ふことが、何かの物語にでもある様な氣がして、私の好奇心は蛇態ケ瀑よりも此方に引きつけられた。不動の瀑と書いた道しるべの立札をたよりに、細い山路を登つて行くと、丸木柱の門が見えた。門の前に燈籠が立つて、その障子に『とりかこむ山を屛風に冬ごもり』と書いてあつた。そして門の柱に『御茶きこしめせ、まづい汁粉も候、頓狂庵』と書いた柱掛けが掛つて居た。中へ入ると、谿流に面して茶亭があつた。その右側に母屋がある。私は母屋の縁側に腰を下すと、色の白い、眼に張りのある、綺麗な女が茶を持つて來た。これが都の女の正體かと注意して眺めた。着物は木綿の浴衣であつたけれど、銀杏返しの髪を張つて、拔衣紋に着こなしたところが普通の女でないと一目で知れた。

『都の女とはあなたのことですか』

澁茶を飲みながら聲をかけると、

『ホヽ』

白い手の甲を口邊へ持つて行つて、美い笑顔を見せた。

『頓狂庵の御主人はあなたですか』

疊みかけて尋ねると、

『それは、あのう、夫でございます』

きまりのわる相なふうをして立とうとした。

『では御主人に一寸お目にかゝり度いのですが』

こうした山の中で、斯る女と二人住むで居る男を、心にくゝ思つたから、どんな人物か逢つて見たくなつた。女が勝手の方へ入つて暫らくすると、荒い縞の浴衣を着た、三十五六の男が私の前へ來て、

『私が頓狂庵の主人須藤忠作でございます』

丁寧に挨拶した。

『お見うけ申せば、こう言ふ山の中にお住みになるお人柄とは思はれませんが、何時頃から、どう言ふ譯でこんな所に住ひになつたのですか、御差支がなければ伺ひたいものです』

商賣氣を出して單刀直入に質問したが、遊びに來た場所で、新聞記者氣質を出したことを、私は自分ながら恥しいと思つた。

『お話を申す程の譯もありませんが』

須藤君は別にいやな顔もせず話を續けた。

『私は東京の者で、日本橋で羅紗屋を致して居りましたが、日露戰爭後の經濟亂調子の餘波を受けて破産をしたのです。すると、昨日まで兄弟の樣にして居た仲間の者が、まるで鬼の樣になつて貸金を取り立てるのです。そら借りた物を返へすのですから、文句はありませんが、長い馴染の同業者であつて見れば、幾等か溫い人情があつてもよささうに思はれますが、世間はさうは行かないものと見えます。さうした冷たい殘酷な世の中を見せつけられましたので、私はつくぐ〜世間と云ふものがいやになつたのです。そんな冷酷な社會に一

日も交つて居るのが馬鹿々々しくなつたのです。それにこれが……』

須藤君が一寸と横を向くと、銀杏返しの女が、下を向いて、膝の上で盆を弄つて居た。

『山の中へでも入つて了いたいと言ひますので、一寸申し上げるのを忘れましたが……恥を言はねば理が分りませんから申します。實は妻は其の當時よし町で水戸家の里となつて藝者をして居たのですが、私に同情してくれまして何所へでもついて行くと申しますので、以前よくこの湯河原へ遊びに來たことがありまして地理を知つて居た關係から、この不動の瀑を開くことを思ひ立ちました。此邊は全く路もない所で、樵の外は人の通はなかつた所です。私がみつ……妻の本名です、みつを伴れて此所へ參りましたから、木を切つたり橋を架けたりして路をこしらへまして、自分等の住む家をやつと建てますと、四十三年の箱根の山洪水で、私共は命からがら〳〵逃げましたが、水が退いてから歸らうと思ひますと、路はめちや〳〵、家は流されて跡もないのです。その時は全く二人で死のうかと思つた位です。妻は其の時十七でしたが、自分で鍬を持つて路をこしらへると言つたふうに働いてくれますので、私もついそれに勵まされ、出來ない工面を無理にして、どうかこうか住めるだけの家をこしらへました。』

須藤君がこうした話をして居るところへ、

『しばらく』

聲をかけながら入つて來た二人の女客があつた。見ると昨夜同じ馬車で宿へ着いた女であつた。女の方でも知つて居たと見えて、私の方を向いて默禮したから、私も默禮を返へした。

『マアよく來られましたね、』

須藤君の細君おみつさんが立ちあがつて懷かしさうに二人の傍へ寄つた。

『ほんとうによく來られましたね、こんな山奥へ、暑かつたでしやう、サーこちらの涼しい所へ』

おみつさんは嬉しさうに二人の客をもてなして居た。

『あれから一ぺん來たい〳〵と思ひながら、つい折がないもんだから』

年増の方が、私の向側の牀几に腰を下すと、

『いゝ所だわね、私たちもこんな所に住むで居たいわ』

若い方の女が谿流を眺めて、おみつさんの身の上を羨んで居た。二人の話を聞いて居ると、二人ともよし町の藝者で、お客を箱根へ送つて行つた歸りに、おみつさんに逢ひたいので湯河原へ寄つたと言ふのであつた。

『あれからもう三年になるわね』

年増の藝者が思ひ出した樣なことを言ふと。

『さうね、一昨年の秋だつたね』

おみつさんも釣り込まれた。

『三年目に來ても、此邊は餘り變つて居ないわ』
『東京の方は變つたでしやうね』
『變つたの何のて、今姉さんが東京へ來たら、さら驚くことよ』
『十年と言ふと一昔だからね』
『全くだわ、照ちやんがこんなに大きくなつたんだもの』
おみつさんと年增との話を傍で聽いて居る若い方が照ちやんと言ふのらしい。
『姉さん、お菊さんが殺された土橋て、今私たちが通つて來たあの橋じやないの』
照ちやんが姉藝者に聞く、
『あの橋なの、だけど其の時の橋とは何だか變つて居る樣だよ』
『殺した信さんが飛込むだ瀑て、どれ、今私たちが見て來たあれなの』
『イヽエ、あれじやないわ、この山の奥にある蛇態ケ瀑と言ふ、そら凄い瀑』
若い藝者と年增の藝者との話を聽いて居た私は、女を殺して蛇熊ケ瀑へ飛込むだ男があつたと聞いては、それを聞きのがすことは出來なかつた。

三

新しく建つた別莊の二階から下を眺めて居たお菊は、柴を背負つて行く樵の腰に、磨ぎすました大きな鎌のあるのを見て戰慄をした。信さんに逢つたら、あんなツル〳〵した鎌で、脇腹を抉ぐられるであらうと思ふと、血塗になつて此所へ倒れる自分をまざ〳〵と見て、身うちの寒さを覺えた。お菊は信太と初めて逢つた時のことから、信太が監獄へ送られるまでのいきさつが、活動寫眞でも見て居る樣に、あたまの中に繰返へされた。

待合松若葉から口が掛つたので行つて見ると、四五日前宴會の席で逢つた二十四五の男であつた。それから三日置き、四日置き位に呼ばれて居たので、二ケ月程の中に互に打ち開け話をする樣になつた。

『僕の樣に親も兄弟もない人間はこれからどうなることやら、成功したところで悦んでくれる者もなく、困つても助けてくれる者がない、考へて見れば心細いもんだ』

信太は幼少の時に兩親に死別れ、叔父に引取られて十四の年まで育てられたが、元の主人の靑木時計店へ小僧に住込むと間もなく叔父は死ぬ、叔母は再婚して行方が知れなくなつた。主人は孤兒となつた信太を憐れむで、家族同樣にしてくれたので平和な月日を送つて居たが。それも僅三年であつた。信太が十七になつた暮に、主家が破產した爲めに、信太は浮世の荒浪の中におつぽり出されることになつた。それから暫らくはかなり苦

勞をしたが、今の會社へ務める樣になつてからは、何事も順調に行つて、今では集金主任と言ふかなり重い地位に就いたが、獨りぼちと言ふ淋しさは、毎も胸から去らなかつた。

『ちつとも淋しがることはないわ、あなたが成功なさつたら私が悅ぶし、困つたことが起つたら私が助けるわ』

お菊は無邪氣な笑顏を見せた。世の中を淋しい〳〵と思つて居た信太は、お菊と言ふ對象が出來てから俄に元氣づいて來た。空想が極度に擴張して、お菊を妻にして家庭を作つて居るところなぞを胸に描いて見たりして居た。明けても暮れてもお菊のことが念頭を去らなかつた信太は、無理な工面をしてはお菊に逢つて居た。お菊も信太の純な心持と、馬車馬的に突進する熱烈な愛情とに動かされて、信太を心から愛しがる樣になつた。そして信太が節制のない遊びをするのに心を痛めて居た。

『こうして始終逢つて居られるのは、私嬉しいけれど、餘り無理なことをして、後であなたが困る樣なことが起りはしないかと、私それが心配でならないわ』

お菊が心配をしだした時はもう遲かつた。三ケ月程の間に、信太は會社の金を二百圓ばかり遣込むで居た、それが何時までも知れずに居る筈がない、とう〳〵支配人の目に止まつて、一悶着起つた末、警察の手に渡され、橫領罪として未決監へ送られた。裁判の結果執行猶豫となつて監獄は出る事が出來たが、さて身を落ちつける場所がない。親もなく親戚もない信太は、こうした場合に、自分を引取つてくれる者がなかつた。仕方がないから四谷の永住町の木賃宿に泊つて身の振り方を考へたが、木から落ちた猿の樣な、孤獨無援の信太にどうすることも出來なかつた。今の身でお菊を訪ねると言ふことは好まなかつたが、外に相談をする者がないので、夜こつそりと、人目につかぬ樣に、よし町にお菊を訪ねた。と、よし町にはもうお菊が居なかつた。信太が入獄すると間もなく、岡本と言ふ成金に落籍されたと言ふ話であつた。信太は落膽して何をする氣にもなれなかつたが、どうしても今一度お菊に逢つて見たくて仕方がなかつたから、よし町で敎へられた下根岸の家を搜すと直ぐ知れた。自分の服裝を見ると、晝間玄關から訪ねる譯に行かなかつた。その日はそのまゝ歸つて、翌日の夕暮に出直して行つたが、家の中に誰か居るかも知れないと思ふと、迂闊に訪はれないから、表を行つたり來たりして居た。人の顏もはつきりと見えなくなつた頃、格子戶を開けて外へ出やうとする女があるので、外燈の光ですかして見ると、髷や着物の好みは變つて居るが、紛ふ方ないお菊であつたから、

『お菊……』

信太が思はず聲をかけると、女は信太の顏を見て、

『マア』

と言つて立ち止まつたまゝ、あとの言葉が出なかつた。信太は自分の服裝に氣がつくと俄に面目なくなつて、そのまゝ駈け

出さうかとも思つた。あまりに突然で、面くらつたお菊も、やつと氣がついたと見えて、

『さあどうぞ』

中へ入つて、先にたつて上へあがつた。

『入つてもいゝかい』

信太はおづ〳〵しながら奥へ通つた。

『誰も居ないのですから、かまいません』

座布團と煙草盆とを出しながら、お菊は信太の姿をじろ〳〵見て居た。

『こんな服装で來る氣はなかつたのだけれど、つひその、此方に居ると言ふことを聞いたもんだから、……然し迷惑だらうね』

十一月と言ふのに汗づいた單衣に、細い寢衣の帶を締めた信太は、會社の金を遣ひ込むだのがばれて、未決監へ入れられてから、執行猶豫の恩典を受けて今度出獄したまでのことを語ると。お菊は同情の籠つた眼つきで信太の顔を眺めながら、熱心に聽いて居た。

『そんな譯でね、出獄は許されたが、何所へ行かうにも身の落ちつき場所がないのだ。尤もこれまで親しくして居た友達には相談に行つたがね、大抵は玄關拂ひを喰つた。なかには逢つてくれた者もあるが、監獄へ行く様な人とは交際は出來ない、今後は一切來てくれるなと、まるで物貰ひか何ぞの様におつぱらはれた』

信太が悔し涙を零すと、お菊も襦袢の袖で眼のふちを拭いて居た。

『世間と言ふものはそんなもんですかね、人の心ほどたよりにならんものはありませんね』

お菊は浮薄な世間を罵つた。

『私が元の身で居たら、借金してゞもあなたを立派な男にするんですけれど、今では人の世話になつて居る軀ですから…………私もこんな身にならうとは思つて居なかつたのですけれど、父さんの厄介になつて居る主人筋に當る旦那から話があつたもんですから、何にも親の爲めだと思つて、こんな所へ伴れられて來たんです。だけど、あなたのことは毎心配して居ました』

しんみりとしたお菊の話につり込れて、信太は兩眼に涙を一ぱいためて居た。

『あなた、それでは寒いでしやう』

お菊は立ちあがつて簞笥の抽斗を開けると、銘仙の着物と同じ縞の羽織と、襦袢と帶とを出して信太の前へ置いた。

『これから何をなさるにも、そんな服装ではどうすることもなりますまい。これは旦那の着物ですから、あなたは氣を惡くなさるかも知れませんが、そんなことを言つて居る場合でありませんから、これを着て勤め口でも搜してください』

信太は旦那の着物と聞いてはいゝ氣持はしなかつたが、お菊の言ふ通りそんなことを氣にして居る場合でないから、言はれるまゝに着物を貰つた。

『難有う、この親切は死でも忘れません、あんまり長居をして居て、迷惑をかけてはすまんから、今日はこれで歸ります。何れ落ちつき場所がきまつたら手紙で知らします、難有う難有う』

信太は幾度も幾度もおじぎをして、着物を包むだ風呂敷包を抱へながら歸へつて行つた。

四

信太が下根岸から金杉上町へ出て、電車に乗らうとすると、

『コラ待て』

後から聲をかける者があるから振り向くと、巡査が交番から半分軀を出して此方を向いて居るのであつた。信太は自分じやないと思つて行かうとすると、

『待てと言つたら待たんか』

嚙みつく樣な聲で巡査が怒鳴つた。何事か知らんと信太が交番の前まで行くと、巡査は風呂敷包を開けて、この着物はどうしたと聞く、お菊に貰らつたのだと言へばよかつたのだが、さう言つたらお菊が迷惑するだらうと思つて、いゝかげんな出鱈目を言つたら、愈々怪しむでとう／＼警察へ伴れて行つた。信太もたまらなかつたので、警察ではお菊から貰らつたと眞實のことを言つたが、それは僞りだと言つて信じてくれなかつた。執行猶豫で一週間前に出獄した者だと言ふことが分ると、何を言つても信じてくれないで檢事局へ送られた。檢事局ではたつた一度の取調べで又も未決監へほり込まれた。半月程たつて公判が開かれた時、風呂敷包の中の着物は盜むだものでない、全くお菊から貰らつたものだと言ふことを一生懸命で陳べると、裁判長はそれでは次回の公判にお菊を證人として訊問すると言つて、事實の審問を續行することにした。二回目の公判が開かれた時、お菊は證人として法廷に立つた。信太と顏を見合したが、二人とも下を向いてせつな相な顏をした。裁判長に注意されて、お菊が書記の讀み上げる宣誓書に拇印を捺すと、裁判長はお菊の住所姓名年齢を聞いた上、

『證人は被告に銘仙の羽織着物並に帶と襦袢とを與へたことがあるか』

嚴かな口調で審問を始めた。お菊は何と言つてよいか返答に困つた。自分がやつたのに相違ないから、今更やらぬなぞと言はうものなら、信太がどんなに困るであらうかと言ふことを知らぬではなかつた。殊に傍に居る信太が、狂者の樣な眼つきをして自分の方を凝視めて居るのを見ると、何としてもやらないなぞと言ふ嘘は言はれなかつた。けれども今眞實のことを言つたならばどうなるであらう、旦那はきつと立腹るにちがひな

い、その結果は自分の關係が絶えるばかりでなく、兩親と二人の弟とが路頭に迷はねばならぬことになる。自分がこんな藝者になつたり妾になつたりして居るのは何の爲めだ。兩親を安樂さして、二人の弟を教育したいが爲めでないか、自分はもと〳〵一家の犠牲になつたのだから、今信太に義理を立てゝ一家の破滅を招いては、これまでの苦心が皆水の泡になる。それでは親や弟に申譯がない。信太には氣の毒ではあるが、こゝはやつた覺がないと言ひ張るより外はない。それが爲めに信太が重い刑を受ける樣なことがあつたならば、死んで言ひ譯をすればよい。どうで自分の體は親同胞の爲めに投げ出してあるのだから、愈々となれば死ぬだけのことだと、お菊は咄嗟の間に決心をした。

『あげました覺えはございません』

眼をつぶつて言ふと、

『すると被告とは知り合ひでないのか』

裁判長は疊みかけて問ふた。お菊は返答にまごついたが、

『全く知らない人です』

騎虎の勢、思ひ切つて言つて了つた。

『お菊、何を言うんだ、今更そんなことを……』

信太がお菊の傍へ寄らうとするのを廷丁が支へた時、お菊の顏の色は見る〳〵變つて、其所へ倒れた。廷丁に擔ぎ出されたお菊は伴れて來た女中に介抱されてやつと氣がついた。そして馴れない所へ來たので腦貧血を起したのだと言譯をして居た。

五

裁判所から歸つて來たお菊は、氣拔けの樣になつて床に就いて居た。當人は馴れない所へ呼び出されて、いろ〳〵のことを聞かれたもんだから、腦貧血を起したので、何となく體がすぐれないのだと言つて居た、二週間程たつて、幾分か氣が落ちつきかゝつた時、信太が窃盜罪で懲役一年六ケ月に處せられたと言ふことが新聞に出て居たので、それを見たお菊は又病氣が重くなつて、枕があがらなかつた。醫者は神經衰弱だと言つて居たので、旦那もそれ程心配して居なかつたが、體が段々瘠せるばかりであつたから、ほかの醫者にみせると、神經衰弱には相違ないが、肺も幾らかわるくなつて居ると言ふ診斷で溫泉へでも轉地をさすのが一番だと言ふことであつたから、これまで二三度行つて土地に馴染のある湯河原へ養生に來ることになつた。初の間は宿屋居住をして居たが、溫泉宿では不便なこともあるし、不經濟でもあると言ふので、天野屋旅館の對岸、觀音堂へ行く道の右側に貸別莊があつたのを借つて、其所へ移つることになつた。最初は月に一二度づゝは旦那がやつて來て、いろ〳〵世話をやいてくれたが、一年以上にもなるのに體の方がちつともよくないのを見て、旦那はいや氣がさしたのか、時々手紙をよこすだけで、出て來ることは滅多になかつた。旦那の

來ないと言ふことは、お菊にとつて苦痛でも何でもなかつた。旦那の顔を見ない方が氣が休まつてよいとさへ思つて居た。けれども、さうした旦那の態度を見ると、お菊は不安を感ぜずには居られなかつた。自分の樣な軀になつては、旦那の愛を繋いで置く譯には行くまい。若しさうなつた曉にはどうなるであらう、自分はどうなつたつて關はぬけれど、親や弟はどうなるだらう、旦那の保護を離れることを考へると、世の中が眞暗りになつた樣な氣がする。かう言ふ方面にも胸を痛めて居たので、お菊の病氣は少しも快い方には向はなかつた。お菊は自分が信太を罪に陷れた罪惡に身を責められるのと、生活の不安に脅されるのとで、生きて居るそらはしなかつた。果然お菊の杞憂は事實になつて現れた。湯河原へ行つて一年半にもなるのに、病氣がちつともよくないのだから、一先づ東京へ歸へるがよい、お前の父の方へ話がしてあるから、大森の家へ暫らく落ちついておいで、然し今日明日と言ふのでない、一二ヶ月の中にそちらを引きあげる樣に仕度をしておけと言ふ手紙が旦那の所から來たのであつた。お菊は覺悟して居たことではあるが、愈々湯河原を引拂はねばならぬことになると、馴染が出來たゞけ去り難い情もあつた。自分に對しこうした冷たい仕向けをする位であるから、實家への仕送りにも手心が加はつては居まいかと、そんなことにまでも胸を痛めて居た。それにこんな軀で東京へ歸つたら、二度と再びこの湯河原へは來ることが出來まいと思ふと、見飽いて居た彼方此方の瀧や藤木川の流までが懷かしくなつて、一日でもそこらを歩かないと氣持が惡かつた。今朝も滑瀧から不動の瀧の方を歩いて、歸へつて來ると疲れた軀を欄干に靠せかけて、二階から下を眺めて居たのであつた。

『あのう、東京から女の方がお出でになりました』

女中のお兼が襷をはづしながら片手を突いた。

『どんな方』

お菊は此方を振向いた。

『よし町の清葉さんとおつしやりました』

女中の言葉が終らぬ中に、お菊は上り口の所から下を覗き込で、

『清葉さん、かまいませんから、あがつてください』

お菊は二階から聲をかけた。主人の敏捷な行動に驚いた女中は、二階から駈け降りて玄關へ出た。そして清葉を二階へ案内した。

『まあ暫らく、何時來たの？』

『昨夜來たの』

『一人？』

『イ、エ、お客さんと』

『よく分つたわね』

『宿屋の女中に聞いたら直ぐ分つたわ』

お菊と清葉が隔てのない會話をして居る中に、鐘も過ぎて夕暮になつた。夕食をすましてから二人は伴れだつて散歩に出た。大師堂から清瀑の茶店へ出て、此所で二人が話をして居ると、溫泉町の方に電燈がついてそこらが段々暗くなつて來た。

『何だかぞく／＼して來たから歸りましやうよ』

お菊が立ちあがると、

『袷羽織を着て居ても寒い樣な氣がするわね、それにお菊さんは病人だから、こんな瀑の傍に居たのはよくなかつたか知らん、』

清葉もお菊のあとについて石段を降りた。

『秋て、心細いものね、木の葉は散るし、虫は鳴くし、私の病氣もよくないし』

石段を降りきつた時、お菊は立ち止まつて夕闇に自分の姿を眺めた。

『そんな元氣のないこと言ふものでないわ』

『だつて、私もう長くなからうと思ふから』

『よして頂戴、こんな淋しい道で、そんな心細いこと言はれると、何だかこわくなつて來るわ、人通りもないし、早く歸りましやうよ』

清葉はお菊の手を執つて足を早めた。冷たい夕風が吹くと、足下にさら／＼と木葉が鳴つて、流れの音が耳に立つた。

『お菊』

底力のある、太い男の聲が夕闇の中から、二人の前面に響いた。

『わからないか俺だ』

堅縞の筒袖を着た男が、右の手をのばして、お菊の胸座を取つた。

『信さん』

お菊が男の名を呼んだ時は、力まかせに突かれたので、土橋のたもとに倒れて居た。

『きさまは、何の恨があつて俺を監獄へぶち込むだのだ。一年と六ヶ月、牢屋の飯を食つて來た信太は、きさまを殺すより外に望みを持たぬのだ。あとの月の晦に牢を出て今日で二十日、きさまの在家を搜しにうろつき廻つた。俺を牢屋へ入れた代りに、きさまを地獄へ陷してやるのだ』

ピカリと光つたものが闇に躍ると、お菊の胸から鮮血が流れた。

『信さん、あなたに殺されて、私は嬉しい』

手足を踠いて、苦しみながら、お菊はきれ／＼に叫んだ。息も血液も止まつたかと思つた程、總ての官能が働かなかつた清葉が、漸く我にかへつた時は、解けた黑髮を谿流に浸して、岩角に白い肉體を橫たへて居るお菊を見るだけで、男の姿は見えなかつた。

六

『だつて其の場合どう出來るものかね、そら後で考へると、何とかしてお菊さんを助けられなかつたかと思ふけど、まるで雷神が落ちた樣もなんさ、ヤツと言ふとバタンだもの、何をするひまもないわ、それに私の軀は縛られた樣に動かなかつたんだもの』

年増の藝者が息もつかずに語つた。

『男はどうなりました』

私が傍から口をはさむと、

『警察の方が來て、犯人はきつと山へ逃げ込むだに違ひないと言つて山の中を搜したんです、するとこの山の奥の、蛇態ケ瀑の瀑壺に筒袖を着た男が浮いて居たんですて、そして死骸に大きな蛇が卷きついて居たと言ふのです』

清葉の話に引きつけられて居た私は、蛇態ケ瀑の深淵を胸に描いた

『私はその蛇態ケ淵をこれから見に行かうと思つて居るのです』

私がこう言ふと、

『お止しなさい、これからまだ半道もありますし、それに平生人の行かない所ですから、蛇にでも纏ひつかれては大變ですよ』

おみつさんが心配さうな顏して止めてくれた。その親切を無にするのは惡いと思つたが、此所まで來て見ないで歸へるのは殘念であつたから、路をよく敎へて貰つて、茶亭の裏口から山路を登つて行つた。隨分險はしい路で、山路に慣れない私にはかなり苦しい事業であつたが、七八丁も登つたと思ふ所に小さな平があつた。滑瀑の堂守に聞いた詩興ヶ原がそれであらうと思つて、左の方を見ると、果して瀑が見えた。五段に落ちて居るから五段の瀑と言ふのださうだが、木の葉の繁みに隱れて一段だけしか見えなかつた。其所を眞直ぐに登つて行くと、恐しい響がする、それは水の音であつた。蜒々として白蛇の草葉を縫ふて下るが如く見える大瀑が、眼前に展開したのであつた、私は傍へ寄つて、飛沫を浴びながら瀑壺を眺めると、渦を卷いて木葉を吸込むで行く深淵の底に、人間のはかり知られぬ神祕の潜むで居る樣に思はれて、大蛇に卷きつかれた男の死骸が、水底に見える樣な氣がした。

社會評論

勞働使節を送る

黒き弔旗は桟橋に、念佛、呪咀、漫罵、怒號の聲海を壓する時、勞働使節を載せた伏見丸は碇を上げた。其の船に乗つて世界の改造に參する勞働會議に臨む人は、今日我が國擇り抜きの大人物ばかりである。不得要領居士として瓢簞鯰の如き、曾つて一個の定見を吐き得ざる鎌田榮吉氏がある。國民を衣食難に泣かせても、七割、八割の暴利を喜ぶは資本家の正義として、八時間勞働の反對の旗印を上げてゐる武藤山治氏がある。其の顧問としては長唄や、清元に咽喉の自慢をする以外に能事のない遊蕩兒菊池武德氏がある。好んで權門富豪に出入して幇間醫師の仇名ある金杉英五郎氏がある。明治初年、北海道開拓使拂ひ下げ事件に、金權の横暴で世を憤らしめし五代友厚氏の嗣子五代龍作氏がある。其の婦人顧問に至つては叔父の光は七光りで、澁澤男の姪にして、ピアノ、琴以外に女工いぢりの道樂を有し金剛石の指環を輝かして、信州諏訪の製糸工場を視察し、工女より蛹を投げつけられて、大に面目を上げた田中王堂氏夫人がある。更らに勞働者の代表としては、深夜、夜逃げして、警視廳の自働車に依りて眼鼻の附いたるトランク然と横濱に運搬せられ『卑怯者』『馬鹿野郎』『無能代表會排せよ』の惡罵の中に船に上つた桝本卯平氏がある。鐵工組合より除名されて何等の資格なきに拘はらず、尻馬に乗つてかけ出したる堂前孫三郎氏がある。眞に百鬼晝行に非ずして百賢夷狄に使する光榮ある日に際會して、我が國の勞働者は宜しく感謝の涙を捧げねばならぬと思ふ。我が國は世界に比類なき誇るべき立派な國であるだけに、勞働賃銀も安く、勞働時間も長いのは之れ國體の精華である。何も禽獸の如く賤んでゐる夷狄に學んで八時間勞働などを要求する必要はない。若し國際勞働會議に非ずして國際軍事會議が開かれて、其の代表が『日本の軍人は歐米の軍人より其の素質が劣つてゐるから……』などゝ云はうものなら、國賊、非國民の攻撃で、横濱埠頭を無事に上陸することは出來まいが、其處は勞働會議丈け其のやうな心配はないであらう。たとへ五大國の一に加はり、世界の强國と大きな顔をしてゐるとも、實は日本の勞働者は無智、無能であると勞働者の缺點

を殘き立て、神州淸潔の國を印度の黒ん坊式に謙遜して除外例が得られたなら、勞働代表の使命は成就せられるわけであらう。斯くて人種差別撤廢の要求で自ら差別を要求して撤廢とは何事ぞと肱鐵を喫ふの日を期待されるわけであらう、眞に帝國萬々歳である。

拜金宗の本山から

鎌田、武藤、菊池の諸氏は拜金宗の本山として、黄金萬能主義を天下に宣傳し天下を惡化した慶應義塾の出身である。此の學校からは藩閥內閣の提灯持ちの、吏黨議員井上角五郎氏を產んだ。教科書事件の收賄知事溝部惟幾氏を產んだ。日淸戰爭の時、外債とならば格別、內債だけてはと、頗るからんだ返事をして、伊藤首相を怒らしめた愛國的銀行家中上川彥次郎氏を產んだ。『拜金宗』の一書を以て慶應義塾の意氣精神を天下に誇つた高橋義雄氏などは、未だに舌の徒であつて、黄金萬能主義の言行反かず、言行一致者の多いのは此の學校の誇であつた。勿論福澤翁が『農業の日本』から『商業の日本』に變化する大勢に乘つ爲め政府萬能主義に反對して民業奬勵、產業發達、商賣繁昌を題目として、人間を利己的動物と見たことは、偶々一知半解の門生して、脫線せしむる所以であつた。翁が威武に屈せず、富貴に淫せず、文明の福音を宣傳する前に何者をも敵として恐れなかつた其男子的精神は何處かに忘れて、『利己的動物』の一點をのみ高調し、金儲けの前には何者をも敵として恐れざる慶應義塾の學風を製造した。高島炭坑夫虐待事件天下を動がした時、虐待事件の揉消しを力め、虛僞の報道を朝野新聞に掲げて一世を欺かんとしたものは、慶應義塾出身の犬養木堂氏ではなかつたか。而して之れが三菱の富に佞して後に三菱を大株主とする郵船會社の提灯持ちとなる奇緣であつた。鑛毒四縣に蔓延して、肥田沃野は黄芒白葦の荒野と化し、數十萬の人民產を失ひ業に離れ、老幼溝壑に轉じ、壯者他國に流離する一大悲慘事を雲煙過眼視して古河家の財に媚び、遂に鑛毒問題を發生せしめた栃木縣知事溝部惟幾氏は慶應義塾の卒業生であつた。十幾年農商務省を威嚇して、工場法の無用を叫び、次官、局長の懇請に聽かずして、勞働者に不便不利なる、骨抜き鮨式の工場法を造らしめた各市商業會議所の委員や、紡績組合の役員は其の多くが慶應義塾卒業生ではなかつたか。人間は利己的動物であるといふ應病與藥の翁の言葉を穿き違へて、此の言葉に其の射心

狼慾を粉飾したのは、實に慶應義塾の卒業生であつたのだ。其の親、讐を殺せば、其の子之れに倣つて人を傷けんとするやうな弊風は實に翁をして地下に泣かしむるものであつた。今、勞働使節として鎌田、武藤の諸氏を送り、鎌田氏が慶應義塾の學長として、慶應醫科大學の擴張に寄附金思はしからざる時、今此の大役を引き受けしは、此の大役をさへ果したら、即ち學校の旦那筋たる資本家の利益になるやうに果したなら、學校の寄附金變ふるに足らず慶應義塾萬々歳だといふ人もある。又武藤氏も此の大役を自己の立場より立脚して、同業者の利益を圖つてやるならば、將來氏が財界に於ける勢力は眞に恐るべきものがあるであらうと、之等の道聽途說は其の云ふ者に一任して、吾人は兩氏が先師福澤翁の稜々たる俠骨、愛人濟世の念胸裏に鬱勃たりしを回想して、單に資本家の利益を代辨する青背機たらさらんことを希望する。之れが只の慶應の卒業生で、勞働者はいくらコキ使つても金儲けさへすれば構はぬといふ其んちよ其處らにウヂ〳〵してゐる會社の重役なら云はないが二氏共に有德の君子として知られてゐる人だから……

武藤氏の謬見を破す

くどいやうだが吾人は今少し武藤氏に苦言する要を見る。其れは武藤氏が頑強に時代後くれの思想を以て國民に強ひ、更らに世界に向つて其の謬見を臆面もなく吐露せんとする危險があるから。武藤氏が勞働問題の解決に對して依然として温情主義だの、家族主義だの云つてゐるのは、六十近い歲をして歲にも愧ちざる間抜けさに人をして失笑せしめる。武藤氏が鐘紡職工慰安の爲め拋つた何萬圓かゞ大變な御自慢だが每半期に何萬圓かの配當金を貰ふうち、其の一期丈けを貰はぬことにして、其れを吐き出して職工の娛樂機關を作つた處が、其れが賃銀奴隷の解放にどれ程の效果があつたか、成程鐘紡は家族主義、温情主義が行はれてゐるから、女工共は工場の勞働で皮膚病、關節病、消化器病、呼吸器病、神經病、泌尿器病を起し、肥大なる幽靈のやうに脊ぶくれにふくれ上り、たゞならぬ身となれば、双子を生んだり、蛸のやうな子を生むのは家族主義、温情主義の賜である。家族主義、温情主義のお蔭で手を折り、足を挫き、眼を失へば直ちに工場を追つ拂はれる。鐘紡が農商務省に申告する、工場災害表は家族主義、温情主義の生きた證據で、生れ

もつかぬ不具や血の混つた痰を吐く肺病病みは、悉く家族主義溫情主義に感泣した人である。

寝るのうれしさ起きるのつらさ仕事と小言がなけりやよい
紡績工女が女なら子守お三は姫御前
女工さすやうな氣の利いた親は何故に女郎に賣らぬやら

寄宿舎の窓から歌はれる之等の唄は、悉く家族主義、溫情主義の雰圍氣から生れたもので、鐘紡の女工は沙漠に住んでゐる動物でなくして、樂園に住んでゐる天使である。武藤氏は八時間勞働制に反對して勞働時間を短縮すれば、其の爲め時間の餘裕があつて、買ひ喰ひするものが多くなり、從つて病人が多くなると、武藤氏の言の如くんば、八時間勞働は病人製造を目的とする怪しからんものであつて、若し八時間勞働が行はれたなら、武藤氏たるもの買喰ひ防止同盟會を全國紡績屋の爲め設立せねばならぬ義務がある。其れは兎に角武藤氏が勞働時間を短縮して八時間勞働にする時は、當然資本家が獲得すべき利益を削減せられ、資本家金儲けの邪魔になるといふことが其の本音であるらしい。女工共を『吾人の同胞』などゝ、體裁のよい言葉で胡魔化しても、元來資本家の前に在つては『眼鼻の附いた器械』である。『呼吸をする原料』である。器械と原料は金儲けの道具だから、粗末にせずにいたはるのは、算盤勘定得である。されば此の意味に於て、家族主義、溫情主義は大なる意義を有するので、器械には油を、牛馬には秣を不足せぬやうにすることが、實に資本家の德義であり、德は得で即ち利益であるといふのが、武藤氏の掛値のない處であらう。此に於て『國家の爲め』といふことは附けたりで國家の爲めと號すなら、誰れでもへこたれるといふことは、當世資本家の奥の手で、財界の君子人武藤氏も御存知だ。

新聞は富豪の爪牙也

東京の十五大新聞が職工ストライキに世界的の新らしき記錄を作つてから間もなく、大阪には鳥居素川氏の大正日々新聞が生れ、東京には松山忠次郎氏の買收した讀賣新聞が新裝美々しく打つて出た。大正日日新聞の社長藤村義郞氏は、大は軍艦より小は平野水に至る迄、日本の海外取引きを一手に引きうける三井物産の重役で、其の株主には海軍事件の山本條太郎氏を初めとし、天下の奸商として三尺の兒童にも其の名を知られる神戸の鈴木商店がある。此の外、肥後出身の實業家、關西の實業

家など、金錢に緣ある人々が多く關係してゐるやうだ。翻て讀賣新聞を見ると、此の新聞は紡績界の巨頭和田豐治氏や、東株理事長鄉誠之助氏など三菱系の實業家が出資したといふ話で、前者に三井的色彩が鮮やかに、後者に三菱的陰影の著しいものがある。されば若し海軍事件や、鈴木商店燒討ち騷ぎが起つた時、大正日々は能く此の株主の爲め辯護の筆を揮ふであらうか。若し鐵道國有反對式の三菱の放恣なる行動を演じた時、さては和田氏の如き紡績屋の資本家の我利的要求を社會に向つて提出した時、讀賣新聞は如何なる態度を執るであらうか。福岡の新聞は其の旦那筋なる炭坑屋の橫暴と殘虐には一切盲目であらねばならぬ。宇都宮の新聞は其の大なる顧客たる古河家の鑛山で、いかに坑夫の悲鳴を揚げても、一切耳を掩はねばならぬ。大阪朝日は寺內內閣を攻擊するには殆んど完膚なかつたが、社長村山翁と友人なる住友男の經營する別子銅山の鑛毒問題は沈默を守つてゐる。大阪每日は天下の大新聞かも知らないが、社長本山氏の男家たる藤田組所有の鑛山で、いかに坑夫が悲慘に泣かうと、いかに資本家の橫暴が近隣の田園に禍しやうと、コンナことは一言半句も新聞に書くことは出來ぬのだ。今日の新聞は資本家に依りて存在し、資本家に依りて經營し、資本家の營利の目的に使用せらるゝものであつて、資本家の廣告機關、辯護機關であり、兼ねて又資本家の利益を侵害せんとする勞働者の壓迫機關、鎭壓機關であらねばならぬ。斯くて社會的正義の名に依りて資本家的正義は高唱せられ、權力階級の利益の前に『社會の輿論』は製造される。近頃名古屋の財界に飛躍せる福澤桃介氏が、從來の新聞記者買收策を止めて、名古屋新聞を買收して東京ダイヤモンド社の經營に委ねたる如きものは、自家營業の立場より其の非を飾り、其の醜を掩ふべき、臭さいものに蓋をする新聞の必要を自覺したものであつて、無冠の帝王、社會の木鐸を廣告人足視したるは福澤氏の徹底した處であらう。兎に角今日の新聞が、資本家金儲けの扶助機關として、虛僞を白紙に印するを天職とするものなるは勞働者の眼に鮮明に映じてゐる。

士官學校入學取消し

近頃士官學校の入學志願者の激減と、其れから入學志願者の入學取消しの事實を以て、之れ財力萬能の社會的惡風潮、成金跋扈の惡感化であると慷慨する人もあるやうだが、實際今日軍人

の生活難は、洋服細民や、袴乞食とかはりはない。一二等卒が七錢五厘、上等兵が十五錢の日給では、煙草一つ碌に買へない境遇で『貧乏少尉』『やりくり中尉』『やつとこ大尉』で百圓其處いら貰つても家賃に、米に、副食代、瓦斯、炭、電燈、軍服代交際費から辨當代、冠婚葬祭、教育費、何人かの家内を之れしきの月給で支へるのは眞に辛らいことである。中隊長殿がこれだから、其の先きが見えてゐる。若し大尉限りで休職となれば、其の末路はみじめなもので、靑年會館の職業紹介所に佐官級の古手軍人は掃き捨てたい程あるさうで、軍人よりの生活難は、人をして泣かしめるものがある。されば千代萩の千松式に、腹が空つても飢しうはないと痩我慢張つても、腹が空つては戰が出來ない。爲めに武勇を相立つること能はずして、君國に忠義をすることの出來ぬ心配から、軍人志願の少くなつたわけではないか。軍人志願者も人である、イヤ軍人も人である。一通りの慾はある、今は亡き陸軍經理局長野田豁通氏は、陸軍部内の淸廉を以て鳴らした人であるが、其れでも日本硫黄會社の重役であつた。藩閥攻擊の侃々諤々の論客たる小澤陸軍中將も、徵兵生命の社長であつた。水產會社のボロを出して狂言自殺をした鹽谷中將、海軍事件で腹を切りそこねた百萬長者の日本製鋼所の山内中將は世人の記憶に新たなる處であらう。愛錢といふ辯が若し世人の病なら亦軍人の病である。小判は汚いと扇子を開いて受取らなかつた直江山城守は、之れは昔の一つ話で、兵部省出仕、海軍病院藥局長をやめて帝國生命の社長となつた福原有信、海軍士官をやめて住友銀行の設立に盡力した田邊貞吉、海軍局事務官から東洋汽船の取締になつた伊東祐忠、海軍技師から宇治川水電の技師長になつた石黑五十二氏、さては山の手で地所持ちの今は亡き石本中將、未だ御存在中の石黑前軍醫總監など、武人愛錢の例證は殆んど枚擧に堪えぬのだ。此のやうなことを想ひ來れば、士官學校入學志願の取消しを些も怪しむことはない。

華族社會の龜裂

宮内省にては從來舊公卿華族たる公侯伯子爵家に對して、舊堂上華族救助資金なるものを下附してゐたが、此の恩典に浴せざりし奈良華族十八名の、救助資金の分配に與らうと運動したのは、淺ましいなどゝいふのは野暮な話で、皇室の藩屛、國家の光華、國民の儀表などいふ形容詞を除き去れば、彼等も一箇

の經濟的動物である。上院で歳費の貰へる伯、子、男の三爵の投票に、いかに投票賣買、權利讓渡しの醜行が行はれるか。ボロ銀行や、ボロ會社の頭取や重役に祭り上げられ、或は講義錄や、何々會の會頭に名前を貸して衣食の資をつくる者、或は富豪成金と婚姻して、其の持參金に借金を片づけんとするやうなのは上の部で、下の部になると、舊臣の二階に佗住居する者、藝者屋の食客となる者、電車の車掌に志願する者、壯士俳優になる者實に千差萬別である。明治三十八年、中島錫胤男が一代華族論實行の倡首となり、其の死後爵位を返上してから、乃木大將も自殺して家を絕ち(之れは再び興されたが)板垣伯は近頃死と共に爵位を辭した。一方同族中の生活難の急迫、却つて爵位を有することの費用かゝりで有難迷惑を感じつゝある時、乃木伯や板垣伯の一代華族論實行に拍手したる社會は、今や華族制度撤廢の旗印を上げんとする氣色が見える。日本改造同盟のやうに明かに華士族平民の差別撤廢を要求してゐるが如きは、世運の變遷に驚くべきものがある。明治三十四年の社會民主黨は、貴族院の廢止を叫んでさへ、社會の秩序を紊亂するものとして直に法に問はれたが、二十年後の今日華士族平民の差別撤廢を要求して、些も人の怪しまぬといふものは、急轉直下の時運の變遷に驚くべきである但し華族の社會に於ても、華族といふ肩書を去り、赤裸々の人間として生きんとする新しき時代に眼醒めたる靑年の白樺一派からトルストイ伯は出來るかも知らぬが、陸軍武官の官服を脫いで勞働者解放の運動に投ずるクロポトキン公は生れるやうなことはあるまい。

內相の俠客招待

憲政會內閣の大隈侯も招待好き、御馳走好きであつたが、此の一點に於ては床次內相たるもの大隈侯に決して後れを取る人ではない。文士招待、講談師、落語家、浪華節招待、俠客招待と、今後は女優招待、活動辯士招待、門附、流し、三味彈き招待の日が來るであらう。其れは兎に角內相は招待せぬといひ、俠客は招待されたといひ、露は尾花と寐たといひ、尾花は露と寐ぬといふ頗るからんだイキサツをケロリとして、內相官邸で御馳走したのは內相たるもの男の顏を潰されては死を以て爭ふ男を賣る俠客に謝罪した上であらうか。俠客招待、俠客招待、俠客の親分乾兒の關係が單に一時的、突發的のものではなくして、其の生活を保證する經濟的原因があることは拔きにして、『協調』の白粉で塗り潰した溫情主義の發展に資せんとする爲めであるか。其れとも去年のやうな不詳事の米騷動が起つた時、俠客の力を借つて警官の用を爲さしめんとするのであるか。政友會の近衞兵たる三多摩の壯士が演說會場妨害以外、國民生活には何の利益も與へぬやうに、時代錯誤の俠客にニコポン主義を用ゐた處が、國民の生活問題を解決する所以ではあるまい。明治天皇が教育勅語に宣はせし『國憲を重じ、國法に遵ふ』の語を冷眼視せんとする、義賊や、復讐を語物にする浪華節が、必ずしも國民思想の統一者でないやうに、賭博常習者の舊時代の遺物たる俠客は新時代の國民に用はない。

改造俳壇

旭は五尺大地に雲の動くなり　鳴雪
稲妻や千賀の鹽竈夜を更けて　同
返し照る日はまだ在りぬ雁の腹　同
傘させば日も射す秋の雲間かな　同
團栗を踏み割りてさても姫御達　同
妹に媚ぶむくつけき花の木槿かな　同
錦木に鶏來て居る曇りかな　同
寢て聞けば睾丸痛し蟋蟀　同
客送り出て妻が見出でし雨の月　左衛門
稲妻に追はるゝ五位の叫びかな　同
行くまじき家に忘れし扇かな　同
旅商人矢立の紐の秋扇　同
鮫紋刺していたく痛れぬ秋海棠　同
秋暑く末生り胡瓜皆曲がる　同
海に飽きて去るへき宿の殘暑かな　同
雇ひ尙解かぬ厨や秋暑し　同
新涼にばた〳〵鳴す團かな　同
新涼や雨聲を作る夜干物　同
新涼やすてに古りたる團扇の句　同

鈴虫の逃れてめぐるや有左り　野島
秋の日や靜まりまさる土の色　同
秋風のかすけき垣の木末かな　同
厨事やめて灯せよ秋の雨　同
秋の蚊帳障子の中となりにけり　同
柿の木に曲りとなりて徑細し　敦江
追かけて來て話途切れず鶏頭花　同
實朝顏に紫蘇高々と垣根かな　同
逃げる犬大きく見たり花芙蓉　同
偉呼べば柿の店より曳き出せり　同
朝飯の温き寺なり百舌鳥の秋　靜堂
かけ聲に膨るゝ波や鰮引き　同
話の中に金のことあり扇置く　同

月斗子中島男來桑

雨の中に蟲靜かなる夜長かな　同
谷廣う傘の如く百舌鳥飛べり　鹿鳴
(故郷を偲ぶ)淋しさや秋の夜空と曇る月　同
(病床二句)覺めしとき潮聞重みや夜長月　同
障子しめて室のくらさや萩の雨　蘆仙
師の聲の冴え〳〵と夜學更けにけり　同
秋天の氣に充り居る一河かな　同

稲妻に打ひろごれる網を見たり　暮村
夜に入りて大風止みし障子かな　同
秋扇筆執るべくも無かりけり　同
尾を振つて百舌鳥鳴かで居る見ゆるなり　竹香
海鳴れば雲の迅さや秋の空　同
（東海寺）秋風に楔鳴る寺の廣さかな　同
新涼の海見飽かずや白帆來る　紫雲
露凝りし軒の雫や白芙蓉　同
菊大輪旭眞向にあたりけり　同
秋晴れや蟲木に居りて高啼きす　寄耳
畝淺き黍危うけれ初あらし　同
芋の葉の水玉逐える小蜘蛛かな　同
立秋や縫ひ急げども又句あり　波那女
新涼を迎ふる空の色を見よ　同
破蓮に動かぬ水や風に動く　同
抱き付いて莢豆に青き蟋蟀かな　病可香
大きく飛んで荻に隱れし蛙かな　同
かな〳〵や稗畑中の一軒家　百竹
穂芒や網張切つてかゝり舟　同
お會式の太鼓まばやら夜明けたり　春美
歸るゝや芒に舟の隱れ去る　同

子規忌前に東京暴れざりし夢らしや　七赤
秋海棠を蔽ふ芭蕉を覆ふ木の實落つ　凉々子
草の家や後の雛に敗遣挾く　不二
赤き灯に宿るときめて夜寒かな　寄桐居
立秋や片葉の松に砂の白　究愛
蟲鳴くや露の干草を苅り止めば　燈霞郎
耳聳てゝ猫屋根傳ふ渡り鳥　鳳玉城
蟲の聲冴けき月に動きけり　貴雲
活け終へて小坊主去りぬ菊の花　小白帆
芦戰ぐなへに絡まる狹霧かな　揮雲
首傾れて老犬行くや霧の下　同
墓發く我を見知るや天の川　同
都人未だ雁聽かで居る月見かな　徂春
谷渡りて鵙見えずなりぬ鳴いて居る　同
煙上げて日去りし家や百舌鳥の聲　同
柿落ちる音あらしの中に聽きにけり　同
我が剝いて無様なる柿や澁からず　同

○投句規定○

□編輯局選□當季雜詠一人三十句以下の事□締切毎月十日限り
□半紙一枚に十句を認め綴じ置く事□雅號住所姓名記載のこと
□東京市芝區櫻田久保町七改造社宛□改造俳壇と表記のこと

文藝漫語

▲帝展第一回の日本畫に初入選で、而も一擧に二點通つた人に、廣島晃甫と名乘る青年畫家がある、晃甫では一寸耳遠いかも知れぬ、それも其の筈、廣島君本名は新太郎と云つて、雅號の晃甫は滅多に使つた事が無いからである▲然し廣島新太郎と聞けば、廣業門下の吉田秋光君と共に昨今賣出しの挿繪畫家として、少年少女雜誌の愛讀者諸君の記憶に浮んで來る名前であらう。此の點恰かも二科で名を成した青年洋畫家の鍋井克之君が、展覽會の季節以外は、中西屋書店發賣の玩具や繪本を考案して、糊口を凌いで居るのと同一步調かも知れぬ、但し廣島君は挿繪畫家としての天分以外に、生理解剖圖や黴菌擴大圖の模寫に妙を得てゐるさうだ▲廣島君の繪で本年の帝展に入選したのは、「靑衣の女」と「秋の野の宮」の二點であるが、其の中の一つは先月の院展に出品して落選したもの、他の一點は締切り間際の五日の晩に完成、搬入しようと思つたら例の吹き降りで、自働車を呼んでみたが應じないので、仕方なしに目黑から上野まで手車で運搬さしたら、其の賃銀驚く勿れ十五圓▲貧乏書生が十五圓を投出しては後が頗る心細いと、空になつた財布を前に置いて思案投げ首の處へ、ヤツと入選の飛報に接して當人漸く生還つたやうな心地がしたとの話。晃甫君出世物語正に件の如し▲當代文壇の流行兒廣津和郎君が、もとカフエー日比谷に居た、おもとさんと云ふ女中さんを迎へて、琴瑟頗る相和して居る事は、世間周知の事實であるが、同じく文壇流行兒の一人なる久米正雄君も、例の漱石令孃筆子さんとの約束が破れて、悶々の情遣るに由なく、盛んに「ほろり型」の失戀小說を書いて居た時分、不圖した動機から、カフエー・ライオンのおきみさんと云ふ女中と知合になり、其の後女は誰の種か知らぬが死兒を分娩して、一時身を隱して居たが、最近またもやライオンに戾つて來て會ふ人每に久米君のお惚氣を言つて居るとか▲宇野浩二君と共に、童話作家から一躍水準を突破して文壇の表面に立つた流行作家に和名、大泉黑石君、露名アレキサンドル・ステパノウヰツチ・コクセキイ君と云ふ日露の混血兒作家がある。本人の註釋によれば、ステパノウヰツチは英語のスチイヴンソンに相當する名前なさうだ▲此の人非常な健筆家で、一晩四十枚位の原稿を書く事は平氣だと云ふが、俄かに文名が高くなつて來たので、警視廳では斯う云ふ先生に露西亞の過激思想でも宣傳されては堪らぬとでも思つたものか、一日同君の許に高等課長を派遣して、若し君が警視廳と在留露人との間に立つて應對の役目を引受けて呉れるなら、貴君の生活を保證する爲めに百五十圓の月俸を支給しようと思ふが、どうか願まれては下さるまいか」と交涉したが、同君は他に覺悟があつたものか、言下に奇麗に斷つた「朝日新聞」に長篇を書く約束が出來「新小說」にお抱へ同樣の作家になる事の決定したのも、それから間もなくの事であつた。但し「新小說」のお使ひには鈴木三重吉君が立つて、美事に調訂して來たものだと云ふ▲片上伸氏曰く「露西亞人の間には、毒のない嘘なら幾何でも吐くと云つたやうなユウモラスな人間が、可なり澤山見かけられるさう云へば露西亞の名にはスキイで終るのはあるが、セキイは殆ど聞いた事がない、だから大泉君のコクセキイだつて怪しめば怪しむ餘地がないでもない。

營業所　大阪市北區堂嶋濱通三

東洋紡績株式會社

營業所　名古屋市西區仲ノ町

出張所　東京市日本橋區小網町壹

一　低廉なる水力電氣供給

一　發電所　山城國宇治町

一　發生電力四万八千馬力

一　資本金　貳千五百萬圓

大阪市北區曾根崎上二丁目

宇治川電氣株式會社

電話北

長六〇〇番
長六〇一番
六〇二番
六〇三番
六〇四番
六〇五番
六〇六番
六〇七番
六〇八番



昨日今日

正宗白鳥

空は秋らしく澄んでゐたが、日の勢ひは朝から烈しかつた。おくめは狹くるしい軒下へ盥を出して、同じ年輩の隣家の主婦と向合つて洗濯にいそしんでゐた。潔癖な彼女は、腰つ骨や手足のだるいのも構はず、一寸念に汚れを落してゐたが、をり〱苦しげに息を吐きながらも、殆んど口を噤んでゐることはなかつた。絶え間なく何か知ら喋舌つてゐた。

あらまし片付けて濯ぎ直しながら、

「これを濟ましたら、少しの間横にならなきや、どうにも我慢が出來ないんですよ。去年まではこんなでもなかつたのに、カラもう意氣地がなくなつて」

「無理をしない方がよう御座んすよ。私なども無理をすると直ぐ身體に障るんだから、溜りませんわな。氣持でばかり力んでゐても年齢が承知しませんからね」

「でも奧さんは心が御丈夫だから結構でさあね。私なんぞ二三ケ月も續けて病院通ひをしなければいけない、さうしたらいくらかよくなるよた

びく＼／云はれてるんだけど、そんなに長い間治療に身を入れられる御身分ぢやないんですからね。入浴と按摩で誤魔化してるんだけど、病氣つていふ奴一度人の身體に取つついたが最後、執念深くつて容易に離れるこつちやない。奥さんなぞこんないやな思ひをしなさらないだけでも大變な幸福なんですよ」

「貴女も思切つて病院通ひをなさいよ」

「このお正月に主人が戻つて來た時にも、その話をして餘程さうしようと思つたのですけど、おつたの方が大切だと思つて、私の方は見合せることにしたのですさ。母子が一緒に病院の御厄介になるんぢや溜りませんからね」

おつたがこの春二三週間ある病院へ入つてゐたのは、病氣のためではなくつて、隆鼻術をされるためであつた。露骨にその話をされるたびに、隣家の主婦は返答に窮するので、今も笑ひを忍んで、

「つたちやんはこの頃は大變お歸りが遲いぢやありませんか」と話を轉じた。

「この頃はちつとは役に立つやうになつたものだから、調寶がられてるんでせう」

「でも感心ですはね。朝も早くから家の御用をなすつて、それから一日働いてゐらつしやるんだから……。人間は若い間に身に藝をつけとくほど結構なことはありませんよ」

「どうせお嫁に貰つて與れる所はないんですから、一生獨りで口過ぎの出來るやうにしとかなければなりません、」と云つて、おくめは立上つて握り拳で腰を打ちながら、「でも、おつたも日が暮れて歸つてくると、田口さんのお孃さんにじろ＼／顔を見られるのがつらいんですつて。あの女はこの頃日が暮れると屹度門の側へ腰掛けを出して涼んでるんですからね」

「私なんかこの歳になるまで涼臺に腰を掛けたことはありやしない。……あのお孃さんは何故あゝ騷々

しいんでせう。あんな風でもお嫁に貰ふところがあるんですかね」
「本當さ。大きな聲で唄つたり騒いだりされるのには弱つちまふ。頭に響いてなりませんよ。あんなのを當世風とでも云ふんですかね」
おくめはバケツへ積上げた洗濯物を重たさうに提げて二階へ上つた。照りつける烈しい光に目の眩みさうな思ひをして、顔を顰め吐息を洩らしながら、一々物干竿へ掛けてゐたが、それでも八百屋や酒屋の御用聞が來ると、戯談口を利いて笑つたりした。
一日の大役を濟ましたおくめは、水道の生ぬるい水を二三口飲んで、それから長煙管で二三服吸つて、いざ一休みしようと枕を出したが、ふと氣づいて縁側の簀戸の陰に置いてゐる水盤の側へ寄つて、龜の子を覗いて見た。おつたの趣向で配置された小石の側に二つの龜の子が大人しく動いてゐた。岐阜のある會社で働いてゐる夫が、この夏季休暇にちよつと上京した時に、知合ひの家から貰つて來て、大切に飼つて置けと命じたものであつた。こんな物がどこが面白くつてと、おくめは厄介にしてゐたが、毎日見てゐると多少の興味も起つて來たので、「丈夫で遊んでゐてお呉れよ」などゝ獨言を云ひながら、忘れずに餌を與へてゐた。餌には卵がいゝといふことだつたので、「贅澤で困るね」と云ひながら、少しづゝでもその餌を絶やさなかつた。隣家の臺所のあたりに卵の殻が落ちてゐると、「龜が頂きますよ」と云つて、殻についてゐる一滴の卵の汁をも粗末にしなかつた。「龜の子も無事に暮して居ります」と、夫へ宛てた手紙の端へ時々は書き加へた。
おくめは今日も龜の子の無事なのを見て安心して、假寢の枕に就いた。洗濯が過ぎたので、三十分や一時間の休息では身を起すことが出來なかつた。どうせ午餐は自分一人で手輕に濟ませばいゝのだか

ら、午砲が寢耳に響いて來ても慌てなかつた。

垣根一重を隔てた田口の家では、相變らず唄つたり囃したりし合つてゐて騷々しかつた。「奥さん、私ちよつと久保町まで行つて來ますから、誰れか訪ねて來たらさう云つて下さいましな」と、隣家の主婦が勝手口から聲を掛けても、おくめは夢心地で空返事をした。

暫くしてやうやく目が醒めたが、氣だるくつて食慾も起らなかつたので、お茶だけ飲んで、煙草を吸ひながら、取留めのない思ひに耽つてゐたが、すると、そこへ、

「奥さん、どうも有難う。誰れも訪ねて來ませんでしたでせうか」と、隣家の主婦が勝手口から他所行の顔を出して此方を見たので、おくめは先つき留守を頼まれたことを思出して、

「何方も入つしやらないやうでしたよ」と答へて、臺所の方へ出て行つて。「今日は戸外は暑御座んしたらうね。……何處まで行つていらしつたの？」

「久保町へ預かり物を返しに行つて來たんですがね。彼方でも戸を締めて誰れもゐないもんだから、馬鹿々々しい、無駄足を踏んで來たんですよ。先つき不意に思出して、他人の物は早く返して置かなければいけないと氣になりだしたから、大急ぎで出掛けたのですが、こんなことなら、午餐後に一寢入りして、日が暮れてから行けばよかつたんですよ。……本當に馬鹿を見ちやつた」

「奥さんも氣が短かくおなんなすつた」と、おくめは笑ひながら、「久保町のお宅ではまだ夏季休暇でお暇なんでせうね」

「いくら暇だつても、さう川歩いてばかりゐてどうするんでせう。若い者はあんなに遊んでばかりゐたいんですかね。全體二月もお休みが續くのはあんまり長過ぎますわな」

「でも、結構ぢやありませんか。同じお勤めでも、主人のやうな忙しい會社の社員に比べると、學校の先生は餘程氣樂なんですね」

「さうでもありますまいよ。何しろ僅かな月給しか取れないんですから」

隣家の主婦は汗ばんだ手で風呂敷包を抱へて、これだけ立話をしてから自分の家へ入つて行つた。おくめはこれだけでもお喋舌をしたお蔭で、頭がハツキリして來たので、仕事の座に就いて古物をほつくりだした。彼女は氣象として染返しや、寄せ集めの繕ひ物は氣に入らないので、成らうことなら、母子三人、柄のいゝ仕立おろしを着たかつたのだが、今年は〳〵と待設けながら、さういふ時節はめぐつて來なかつた。

暫く根の疲れる針仕事をして、日暮れ頃に洗濯物を取込んだり、掃除や打水などしたりしてゐたが、ふと水盤に龜の子が二つともゐなくなつたのに氣付いた。驚いて、座敷や庭先を隈なく捜したが見つからなかつた。おつたや大吉が歸つて來るまで默つてはゐられなかつたので、おくめは、「奥さん大變なことが出來ましたよ」と、甲高い聲を掛けながら、隣家の勝手口に立つた。が、其家の主婦は不斷のやうに大袈裟に受けては呉れないで、

「どうなすつたの？」と、案外卒氣なく云つて、卒氣ない顔を向けた。

おくめの神經には相手の態度が直ぐに感ぜられたので、話を仕掛けるにも張合ひが抜けたが、でも龜の子の行衛不明のことだけを知らせると、

「どうしたんでせう。……小さな龜のことだからさう遠方へは行つてやしますまいよ」と、主婦は感じのない答へをした。

「もつと捜して見ませうよ、……本當に何處をまごついてるのか知らん」と、おくめも氣のない口を利いて、自分の家の勝手口へ行きかけたが、すると、主婦の憎くさげな舌打ちが、おくめの耳に響いて來た。何のために機嫌が惡いのか知らんと、彼女は可笑しく思ひながら、家へ入つて、改めて鷄の子の行衛を捜してゐた。緣の下へ首を突込んだりしてゐると、そこへ、おつたが歸つて來たので、先つきから胸に溜つてゐた鬱憤を、慌たゞしい口調で洩らしたが、

「だけどさう遠方へは行つてやしないでせう」と、おつたは隣家の主婦と同じやうなことを冷淡に云つた。

「ぢや、お前も捜してお呉れな。あれほど大事にしてゐたのに逃げられちや口惜しいぢやないかね」

「それもさうね」

「おつたは庭へ下りて、彼方此方を見廻つたが、小蟲一匹見つからなかつた。周圍が薄暗くなつたので、強いて母親に諦めさせて、夕餐の仕度に取掛つた。そして、髮結ひの師匠から貰つて來た二三足の古足袋を見せたが、すると、おくめはいやな顏して、

「なんだねえ、そんな物を……。お前も浮かり茫乎してゐないで、量見を引締めてゐて呉れなきや困るよ。私の家では零落れてゐるからお前に髮結稼業をさせやうといふんぢやないよ。お前は容色が惡いから、一生獨り立ちの出來るやうに身に藝を付けて置くために、あんな所へ弟子入りしてゐるんですよ。あんな所から古足袋なんかを有難さうに貰つて來るつてことがあるものですか。先方から持つて行けと行つても、お斷りしなきやいけないよ。足袋くらゐはお母さんが新しいのを買つて上げるから、他人のお古なんぞを決して穿いてお呉れでない」と、近所に遠慮しないで、高い聲でツケ／＼と云つた。

「だけど、これを持つて行つて返して來る譯には行かないわね」と、おつたは無邪氣に云つた。
「貰つて來たものは仕方がないから塵溜へでも棄てゝおしまひな」
おくめはこんなに云つたゞけで氣が濟んだので、娘と二人で睦まじく晩餐の膳に向つた。大吉は晝間はある會社の雜用に雇はれ、夜は夜學へ通つてゐるので、歸りは何時も遲かつた。
夕餐後おくめが風呂へ行つた後で、おつたは先日來讀む暇のなかつた××新聞の續き物を讀みつゞけようとして、隣家へ借りに行つたが、其家の茶の間では、主婦か久保町の磯村といふ若い男と差向ひで事ありげな顏して話込んでゐた。おつたはその男を見ると極りの惡い思ひをして入りかねてゐたが、
「新聞は用簞笥の上に置いてあるから、御自由に持つて入つしやいな」と。主婦は煩さうに云つた。
「えゝ、……」
おつたは借らないで歸るのも變だつたので、磯村の目を避けながら、用簞笥の側へ寄つて、盗みでもするやうにソッと二三枚の新聞を取上げて行きかけると、主婦は、
「お午過ぎに、あなたのお母さんに留守をお願ひして、私がちよつと家を空けた間に大變なことが出來たんですよ」と、出拔けに云つた。
おつたはドギマギしながら足を留めて、「盗棒でも入りましたの？」
「そんなことぢやないんですがね」と云つたゞけで、主婦は磯村との話を續けて、「ほんとに一足ちがひだつたの。途中で出會はなかつたのが不思議なくらゐだよ。運が惡いとそんなものなのかね」
「しかし、馬鹿な奴ですよ。そんなに失望するには及ばないのに。……叔母さんの仰有るやうな間違ひはしでかさんでせうが、何處かへ行つて無駄に煩悶してるだけ不憫ですね」

「でも、貞三は思詰めると何をしだすか分らないから心配だよ。名刺を投込んで行つたくらゐだから、よく／＼私には會ひたかつたのだらうのに」

二人のこんな話を、おつたは聞きながら出て行つた。そして、自分の家の茶の間へ入つて、新聞を開けて、續き物を讀みかけたが、主婦の言葉に刺戟されて心が亂れてゐたので、讀むことがよく頭に入つて來なかつた。長湯をした母親がやうやく歸つて來ると、直ぐに隣家の話を口早に傳へたが、おくめは動じないで、

「私の知つたこつちやないよ。留守を賴まれたからつて、隣家の事にばかり氣をつけちやゐられないからね」と言ひ放つて、自分が假睡してゐた間に、隣家の方で聲がしたのを夢心地で聞いたやうにも思ひながら、「貞三さんといふのは久保町の磯村さんの從弟のことだらう。あの人なら私も顏を知つてゐるのだが、奇麗な柔しさうな男だよ。少し面倒な事が出來てるのだが、どうかして話を纏めてやりたいと、隣家の奥さんが先日云つてゐなすつたよ。何の事だか譯はよく聞かなかつたけれど、多分思合つてる人でもあるんだらう」

おくめは、男にでもあんな奇麗な人もあるしと、貞三の顏を思出すにつけても、目の前にゐる娘の容色のすぐれないのを心に掛けた。全體娘の醜い顏をも贔負目でよく見るといふ世間の親心とは違つて、むしろ實際以上に醜く見るのが、おくめの癖になつてゐるのだつた。せめて鼻だけでも、も少し格好よくなつたらと、手術をして貰つたのだが、思はしいほどの効果はなかつた。

「あゝ／＼、男でも貞三さんのやうな奇麗な人もあるし、女でもお前のやうな不容色者もあるし」と、無遠慮な歎息を洩した。

面と向つてお前は醜い〱、何故人並に生れつかなかつたらうと、平生無遠慮に云はれるのを、おつたは何時も笑ひ〱聞いてゐたのだつたが、この時は、

「私どうだつていゝのよ。お母さんにも構つて貰はなくつていゝの」と、突慳貪に云つて、顔を背けた。そして、母親が何か話しかけても取合はないで、暫く首伏して新聞へばかり目を留めてゐた。隣家の親戚にあたる貞三といふ若い男は彼女も一二度見たことがあるやうな氣がしたので、記憶にぼんやりしてゐるその男の面影を明かに思浮べやうと努めたり、思合つてゐるといふ相手の女についていろ〱に想像をめぐらせたりしてゐた。

暑いと云つても八月の末だから、夜は氣持よく涼しかつた。蟲の音も繁くなつた。が、おつたは手頼りない思ひに胸苦しくなつて、はては睫毛を涙で濕らせてゐた。

「龜の子がゐなくなつたことをお父さんに知らせようかね」と、やがておくめが話を向けると、

「龜の子なんかどうでもいゝぢやないの。お母さんはあんな者がそれほど可愛いんですか」と、おつたは當てつけるやうに云つた。

「飼つて見りや龜の子だつて可愛いぢやないか」

「あんな汚らしいもの。何處が可愛らしいことがあるものですか。ゐなくなつて結構だわ」

「お前はどうかしてるよ。……何だつて今夜はそんな憎て口を利くのだい」

おくめは不思議に思ひながら、娘の目顔を覘き込んだが、すると、無言の間に娘の心が自から感ぜられるやうな氣がして、俄かに悲しくなつた。そして、勵みをつけたり慰めたりするよりも、むしろ娘の先途を哀れにのみ思ひ過ごしながら、

「お前も今の稼業はいやになりだしたのかい。人様の髪を結つたりするのは面白いことぢやあるまいけれど、それも仕方がないぢやないか」

「今更そんなことを云つたつて駄目よ」

　おつたは立つて格子の側へ寄つて、薄暗い戸外を眺めてゐた。が、幸ひに大吉が歸つて來たので、母子の陰欝な氣持も自から紛らされるやうになつた。

　翌日、おつたは平生通りに早く起きて、家事の手助けを濟ましてから出て行つた。おくめはとに角一安心して、自分の仕事を續けてゐた。すると、午後になつて、隣家の主婦がふと、勝手口から顔を出して、

「龜の子はまだ見つかりませんの？」と、昨日と違つて柔しく聲を掛けた。

「何處をまごついてるんですかね」と、おくめは昨日の腹癒せのつもりで冷淡に云つた。

「私の方でも詰らない騷ぎが起りかけたんですけど、どうやら收まりがつきさうなんですよ」

「それは〳〵」

　何時ものおくめなら自分の方から乘出して話を進めるのに、この時はわざと空々しい受答へをした。主婦も張合ひが拔けて、二三言無駄口を利いただけで勝手口から姿を消したが、おくめは相手に行かれてしまふと、立入つた事情を聞かなかつたのが殘り惜しく思はれた。……貞三といふ好男子にそれほどに思はれてゐる女は全體どんな美しい女なのだらうと、おくめはその女を一目でも見たいやうな氣がした。

　午過ぎに隣家の主婦は、また家を空けて出て行つたらしかつたが、今度は留守を頼まれなかつた。お

くめは日盛りに例の通り疲れ休めの假寢をしてゐたが、夢心地に隣家の聲を聞きつけたので、ふと目を開けたが、人聲は自分の家の窓の側でしてゐた。田口の娘や近所の子供が笑つて騒いでゐるのだつた。

「煩いね、本當に」と、呟きながら、おくめは起上つて、簾の隙間から外を見たが、見ると、一匹の龜の子が子供だちによつて弄ばれてゐた。

「それは何處にゐました？」と、叱りつけるやうに云つて、急いで出て行くと、

「泥溝の中にゐたのを僕が取つて來たのだよ」と、子供の一人が云つた。

「私の家で飼つてゐたのだから返して下さいな」

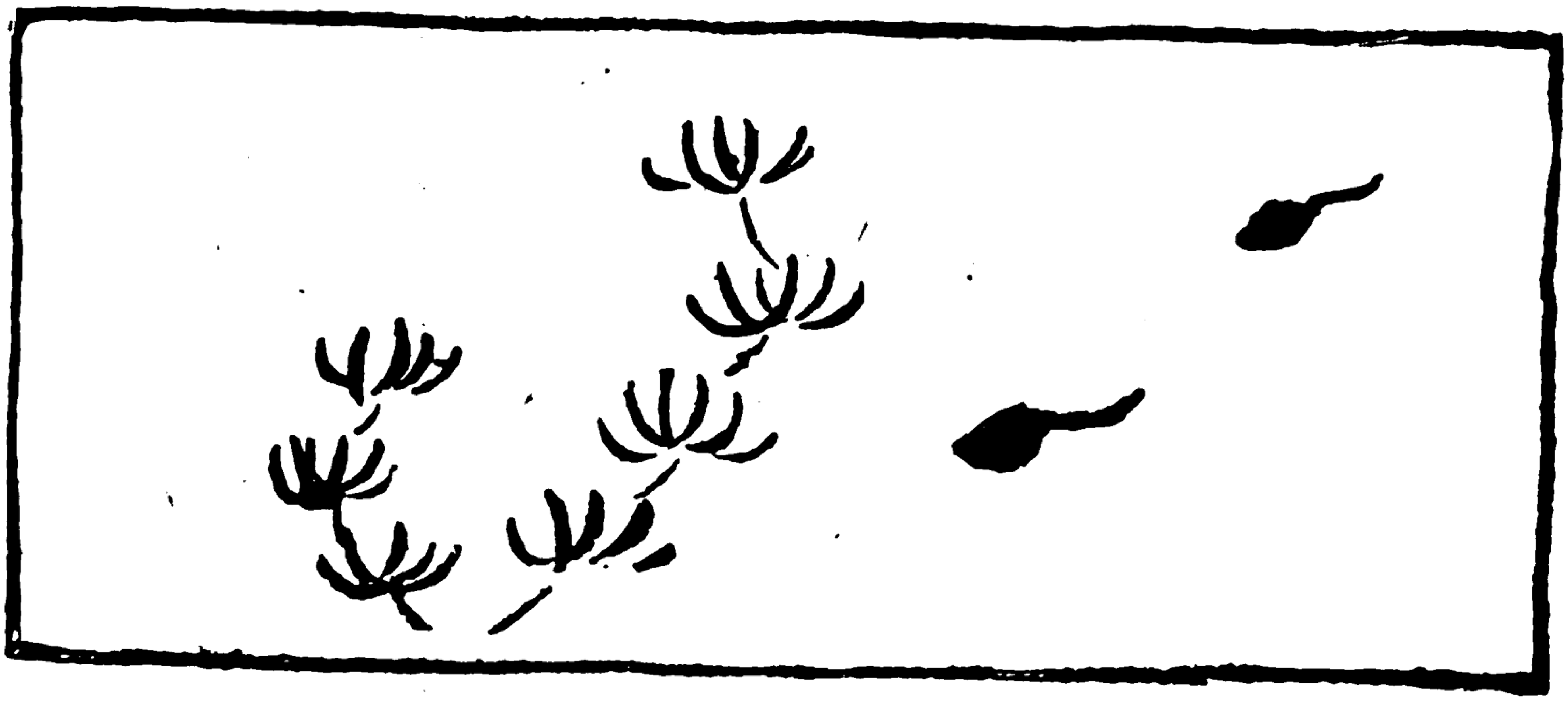
おくめは皆んなを押退けて、泥だらけの龜の子を「可愛いさうにこんなになつて」と云ひながら、手の平に載せて家へ入つた。そして、水で奇麗に洗つて水盤へ放したが、龜の子は身動ぎもしなかつた。突ついても動かなかつた。

「死んだのか知らん」と、暫く見守つてゐると、不憫になつて、涙が零れた。

「だから何處へも行かないで此處にぢつとしてゐればいゝのに。お前も馬鹿だねえ。こんなに大事にされてゐながら、何が不足で出歩いたりするのだい」と、獨言を云つたりしてゐた。

隣家の主婦は何時の間にか歸つて來てゐて、臺所働きしながらおくめの聲高な獨言を聞いて微笑してゐた。

この二軒長屋ではこんな風で、昨日今日を過した。



半日

鍋井克之

朝になつたので靜に隣りの妻の顏を覗き込んで見たが、別に變つた樣もなく寢苦しかつたやうでもなかつた。それでもう一つ延び上つて妻の身體越しから向ふの端の赤ん坊を又覗いて見たが、これもスヤ〳〵とよく眠つて居た。

郊外の家ではあり、初夏のギラ〳〵とした太陽が、早朝から雨戶のスキマ〳〵に差し込むので、朝寢には都合が惡いのであつた。それに妻が產後ゆつくりとした安靜を取らずに無理に身體を使ふのであるから、他に手のないところから、どうしても私はあまり樂は出來なかつた。

「さあもう起きねばならぬ」

さう思ひながら私はまだじつとして居た。

丁度その頃私は今迄の務め先きを辭職することにしたので、家事の手傳ひには好都合であつた。けれども兎に角一家の主人であるべき筈の男が女中の代りをしたとて、安心して食つて行けるものではなかつた。產

前から産後へかけて、それからそれへと勘定に入れてない思ひがけない入費が嵩むので、實はその辭職に就いても一日も二日も三日も四日も考へては、待て〳〵と胸を撫でては居たのであつたが、到頭やはり辛抱が出來ず惡い時とは知りながら斷然と止めることにしたのであつた。その時には郊外にかうして只じつと住んでさへ居れば、電車賃も入らないし、毎日畑類のものさへ食つて居ればなど〻いろ〳〵田園生活者の眞似を考へて、算盤などをおいて見たりした。よく友人から聞いた、鷄を飼つて、その產みたての、箸で挾み上げてもすぐにこわれさうもない程の新鮮な玉子を食ふと、もうそれで一ヶ月もの滋養が足りるといふやうな話も、愈々となると話の正體は消えてしまつて、晝に魚を食へば、晩食には電車に乘つてでも牛肉が買つて來たくなる。ましてや畑を耕して見たり、鷄を飼つて見たりなどはこの上の面倒を增すものとしか思へない。その上妻の鄕里の方からは、子思ひの老いた母親が內々に「お前の家では機嫌よくやつて行けるか、まさかそんな事もあるまいが、いつか着物をこしらへる爲めに送つた金は每月の生活費に足して終つたとか聞き及んだが、今は未だそれが殘つて居るか。何に使つてもそれはよいが、あまり不自由なやうなれば子供をつれて早く歸つて來い、それでゆつくり養生をして元々の身體にしてはどうだ、後々困らないやうによく考へて返事をせよ」と云ふやうな意味の手紙が來たことを妻から聞いた。私は一寸イラ〳〵としたが、それは決して怒れる筈のものではなかつた。却つて先方の云ふところに道理もあり、深切もあるので、私は氣をとり靜めて、「そんな心配には及ばない。稿も段々と賣れるやうになつて、もう來年あたりは何處かの御屋敷の裝飾でも賴まれるかも知れない。」などとよい加減な返事を妻に書かしたのであつた。その舌の先きの未だかわかない中に、只一つの賴みであつた職を捨て〻終つたのであるから、私としては少し大膽でもあつた。その上惡い時には重なるもので、

その後妻の產後の病が、ほんの疲れ丈けで濟むと思ひの外、追々と田舍醫者から知名な病院へ變へなければならなくなつて來たので、この上どうなる事かと心細い氣もして來る。元來が一定の僅少な收入を切りきざんで居た私は、似た者夫婦で妻も又向ふ見ずのやりくりは出來なかつた。それどころではなく、早や氣遲れに立ちおくれて、二重にも三重にもそれを重荷にする方であつた。それで昨夜は來月と來々月と丈けの豫定をなるべく掛けはずれのない樣に見積つて、それとはなしに安心するやうに妻に簡單に話して置いたのであつた。

けれども妻は案外力を落した風もなく、平常の通りに目を醒ました。

私は私の力の無い樣を妻に見せないやうに、殊更よく寢たふりをしてなるべく異つたところのない樣に注意した。私がかうおど／＼とするのは勿論こゝで云ふ物質だけの問題ではない。それを手傳つて居る影が外にある。もう夏の終りもすぐ手近に控へて居るので、私はその頃毎日繪を描き初めて居た。然しその繪は何處へ持つて行つても、素人が喜ぶ風のものでもなく、と云つてまた、これは黑人向きの新生命の躍動した革命畫であると、どなり立てる勇氣のあるものでは尙更なかつた。たゞ裝ひもなく自分の出來る丈けのことを、見える丈けの目で平凡に描いて居るのであつたが、それは賣れもせず、ほめられもせずに、早やその中に時代に遲れて行く姿が私の心に寫つて來る。來年あたりは立派なお屋敷の注文があるだらうと云ふのは妻もはかない賴みにして居るだらうが、それは眞赤な僞りである。第一私の助からないのは「妻よ、今日は俺にもよく仕事が出來たぞ、さあこの大根を煮て樂しい食事をしよう、ここにリンゴが一つある、これはお前と二人が半分づゝたべよう、そして明日は俺れの繪が出來上る日だ、から赤飯をたいて心ばかりの祝ひをして吳れ」――こんな言葉が八つざきにされても私の口からは出な

い事である。それどころではない、私は殆ど繪を描きに行くのは、逃げ出すやうにして、これこそ俺れの天からさづかつた本職で、子供が泣かうが飯がこげつかうが、この場合俺れの妨げをするのは何事だと云つた風な、とんでもないッツバッタ棒を心に立てゝ荒々しく門口を出て行くのであつた。けれどもそれは決して天から授かつたと云ふ自信でも何でもなかつた。恐らく子供と飯から逃げる八つ當りであらう。そしてその餘勢でころげる樣なあわたゞしさで息もはら〳〵に畑道をうねりながら、毎日描いて居る場所に辿りついてやつと三脚をすゑて見ると、自然はゆつたりとして何事もなく、平らかに私の目の前にひろがつて居る。もう私は一時になめられた樣につかみ處もなく、空氣のぬけた力なき筆先きを畫布にたゝきつけた計りで、歸りはスゴ〳〵とたち戻るのであつた。

私は床の中であゝ今日はよく晴れた天氣だなと思ふと、曇り日の寫生を休む事が出來るので、却つてこんな日はその方がよかつたと思つたが、さてそれとて爲すことは何もなかつた。只なすことは生きて居る限り永遠につきない女中のすることの身代りより何もなかつた。と云つて私は今日の樣な厭やな日は何もしないでは尚更立つても、居てもゐられない。さうイラ〳〵と思いながら、妻には悟られない樣にと押へ押へ起き上つた。

赤ん坊の起きないやうに私は雨戸をあけた。

妻はその間にヒヨロ〳〵した樣子で勝手元の方へ立つて行つた。何かガチヤ〳〵と音がしてその次ぎにバケツの音がした。私はすぐにそれを氣づいて急ぎながら、赤ん坊の起きない樣に拔足で妻の手からバケツを受取つた。私が家に居る場合はなるべく妻に水を汲まさないやうにと心がけて居たからである。漸く朝飯の膳の前に私達夫婦が坐る頃には、もう赤ん坊は妻のかひなに抱へられて、そのあいた右

の片手で茶碗を卓の上に置いたまゝ飯を口に運ぶ様にして妻は食ふのであつた。

私は妻にかう云つた。

「あの五十圓の金だね、あれは郵便貯金に預けて置く方がいゝだらう、つひ持つて居て使つて終つて、來月と來々月の足しにする金が無くなるといけないからね」

妻は勿論「それはさうです」と答へた。今預けても二ケ月も經たない中にすぐ引き出すのにきまつて居るものを、大層らしくする必要もないのであつたが、何となしこれから思ひ切り節儉をした生活で固めて行きたかつたので、その礎の様なつもりでもあり、一つには妻の心もちも頼りがあつてよからうと思ひ付いたのであつた。またその五十圓と云ふのは今度職を止めたに就いて慰勞として貰つたものであつたから、特にもこんな風に預けて見たかつた。愈々預けに行くとすれば、そのついでに丁度その郵便局を少し向ふに行つた堤の側にN博士が住まつて居るので、博士に屆けるべき金子が封筒入りで私の手に預かつて居るのも早く手渡しして用を濟して終ひたいと考へた。それは今迄の務め先きからの依頼であつたが、N博士は新高山に天文臺を設置したいと云ふ計畫で、日夜病軀を事ともせずに研究に餘念のない人であると云ふことは私も前から聞き知つて居た。私はN博士の家に寄り道することを妻に相談しようかどうかとも考へたが到頭それは何も云はなかつた。

「今日は病院の日ですから、なるべく早く歸つて下さいな」

『ハア、ヨシヨシ』、

これ位の程度であまり詳しい話はせずに私は五十圓の自身の金と博士へ渡す紙包みとを持つて家を出た。私は素直にヨシヨシと答へたが、それは私の心では決してヨシヨシではなく何か云ひたかつたもの

があつた。私は却つてヨショシと云つた言葉に大變な不滿を覺えて來たが、仕方なしに默つて砂ほこりのかわいた田舎道を歩いて行つた。

私にはもう何を見ても新しい感覺などはないのではないかと思ひながら、青い草がほこりを被つて居る道を歩いて居た。時々思ひついては家の間から見える細道の樹の茂みなどを二三歩たち戻つて迄も一寸眺めたりした。「あゝ見える、見える」から私の心が叫ぶと私はそれで少し安心しながら繪を描く時の事を頭に浮べたりなどして居た。ぶら〳〵と歩いて郵便局の前に來た時私は先づ初めにN博士の家を訪ねることにした。それで郵便局を素通りにして街道から再び畑道へ曲つた。その突き當りには永く續いた一筋の堤がうねつて居て、私の歩いて居る道がその堤の下で人道のトンネルになつて居るのが見える。博士の家は丁度そのトンネルの手前にある事を聞いて居たのであつたが、そのトンネルの處まで私は行つて見たかつた。そしてトンネルの前まで來ると又トンネルを越して見たかつた。トンネルの下は流石に冷々としてその周圍は水氣がうるんで煉瓦の色が濡れ輝いて居た。トンネルを出ると私はその堤の上を見たかつたので露に濡れた草に足を入れながら上に上つて見ると、思ひがけないその堤の上は白い布を延した樣な多摩川上水が、コンコンとして流れて居た。私はそこで右を見、左を見た。遠くの薮かげの綠の原には牧場の牛が散在して居るのも見えた。私はそこでN博士のことを考へた。

「――紳士でも豪商でも恐らくそれ程の人達なら、たとへ藝術の藝の字を解さないほどの人でも、どこか奥ゆかしい、物わかりのある人物に相違ない。そこが何でも一流の人物たる味で、その點では大人物は皆意氣相通ずるにきまつて居る。多分N博士も今私がこれをことづかりましたと云つて取次ぎに出せ

ば、博士はすぐと「どんな人が來たか、小僧か、小僧でない、頭の毛の長い人か、それなら一寸俺れが禮を述べて會つてやらう」などと云ふ鹽梅になるに違ひない。そしてN博士と對座すると話はいろいろとあつて繪の事にも及ぶであらう‥‥博士も繪描きも同じことだ、‥‥さうだ、その話を歸つたら私は妻にしてやらう、博士はかう云つた、私はかう云つた。‥‥勉強一圖に辛抱する者に徳がある。‥‥よろしい、その話を妻にも聞かしてやらう。――」

私はこんな事を考へて、また露に足をぬらしながら、堤を下つた。そして再びトンネルをぬけた。私は博士の門口に立つて念入りにその表札を眺めておいて、懷の中で封筒をもじ／＼とさせながら博士の簡素な邸宅の庭を通つて行つた。折よくそこには博士の夫人と覺しき人がすぐに私の差し出すものを受取つて奥へ這入つて行つた。私が氣をもんで待つ間もなくすぐに『どうも御苦勞樣で』と云ふかすかな聲が耳の邊にしたかと思ふと、早や今私の出した封筒はそのまゝ私の手に返つて居るのであつた。私はボンヤリと之れを受取りながら仕方なしに足は門外の方へ歩き初めて居た。その封筒は依然として前に私の出した儘の少しの變りもなく矢張N博士殿原稿料と記してあつた。が、中味が取り去られて居るらしい事はその薄つぺらな西洋紙の横封を持つた時に感じられては居た。それでよく見ると、封筒の端が奇麗に二枚に放れて居て、N博士殿とある下には小さい認印が押されてあつた。それにしてもあまりに呆氣ない博士の早業に、私はその空袋を握つたまゝ踏む足の力もない樣な氣持ちで又細道を歸る方に歩いて行つた。

來る時にも通つたそのあたりの景色は、色づいた六月の麥がのびる丈けのび切つて、それ等一面の黄色い麥の中から玩具の樣に建てられた黒い家が出て居る。私は見るともなしにそこに眺め入つた。私は

また氣を取り直してそこで繪を描くことを考へた。腰を三脚の高さにかゞめたり、延び上つたりしてその家を目標に寫生の際の位置を計つた。私が徜ゝうろ／＼として見廻して居たうちに、ふと私の目と出會つたその黑い家の戸口に立つて居たお神さんらしい人の目は、直に私に私の心がいかむ様な印象を與へた。私は少し體裁悪くスゴ／＼とそこを通り過ぎて終つた。そこから街道の角まで來ると、その角の引き廻した家は大きな肥料屋で、その裏口の庭には大きな人糞の溜壺が三つも四つも列んで居た。そして諸所から荷車で集められて來た下肥を大勢の者が、各自にその壺の中へあけて居る處であつた。私は初めはその臭氣に鼻をしかめようとしたが、しばらくの中にその匂ひはそれ程の氣にならずに何とはなしに、そこに働いて居る人達の心安さを想像して居た。

たゞ下肥を壺にぶちあけるばかり、――

「あゝこんな仕事なら、さぞ何の心配も生れずにすむ事であらう」

私は暫時そこに佇んだ。

豫定よりも餘程遲くなつて私は郵便局の前迄戻つて來た。田舍の寂しい郵便局には誰れも人が這入つて居なかつたが、私と一足違ひ先きに爲替貯金の受付口へ立つた四十歳位の勞働者が一人あつた。そこの受付の事務員は若いに似合はず大變叮嚀な人で、私はその人が前から好きであつた。私は仕方なくその先口の人の用が濟む迄差し出し口の所へその勞働者と向ひ合ひになつて、私の方は左から差し出すべきものを用意して居た。私は先きの五十圓の金を揃へてその上に他に出すべき手紙類を乗せて輕く右の指先きで抑へて居た。すると勞働者は少々顏をもじ／＼と

させながら、頗る痛み入つたと云ふ謙遜な叮重な言葉つきで貯金の通ひ帳を造つて貰ふ事を頼んだ。事務員が「ハイ〳〵」とすぐに受付けて大きなスタンプの音を勢よく一つさすと
『お金はいくらですか』と聞いた。
勞働者は前よりももう一段と低い調子で、
『二十錢ですが、まことに御面倒をかけまして、‥‥二十錢でもお願ひ出來ませうか‥‥ハイ、どうも‥‥』と云つた。
事務員は『二十錢、はあさうですか』と答へたが、その時ちらと私の顏を見たその目なざしは少し笑ひを帶びて居た。けれどもその笑ひは人のいゝ、すなほな笑ひで私には決してその勞働者を輕蔑した樣な意味の惡いものとは感じられなかつた。で、私も少しその事務員の笑ひ丈け位のものを事務員に返したのであつたが、私の心は何とも知れず一種の恥しさを感じた。知らず〳〵私の右の手は五十圓の金の上で手紙をひろげる樣にしながら、その金が見えない樣につゝましく、隱さなければならない氣がして居た。その勞働者らしい人は住所姓名を問はるゝまゝにオジ〳〵と答へて居た。その時ふと見ると一匹の毛蟲　勞働者の肩に這つて居るのを私は發見して、「あゝ毛蟲」と叫ぶとその人は驚いて、それを拂いのけようと二三度身をゆすぶつた。けれども毛蟲はまだ落ちなかつた。勞働者にしては毛蟲の恐れ方がやゝひどいので、私はよほどこの人は毛蟲が嫌いだなと思つたが、先程から何とかこの人に好意が示せないのかと思つて居たらしい私の心は、私も隨分毛蟲を一倍と恐れる方にも拘らず、勢よく手をのばしてその人の肩から大きな毛蟲をつかみ落した。それでやつと安心したらしく、勞働者は嬉しさうに厚く禮をのべながら、出來上つた通帳を受取つた。私は勞働者がまだそこを立ち去らない先きに五十圓の金を

窓口に突き出す元氣はなかつた。で、私は手紙にはる切手の方を先きに求めてその人の出て行くのを待つた。勞働者は通帳を腹卷におさめながら、局の前に止めてあつた荷車をごろ〳〵と引いて行つた。

私は漸くのことと五十圓の貯金を濟して、村の小學校の横手の草道をたどつて行つた。

うつろの様な私の心が、いろ〳〵のことを考へて居た。私の心は妻にかう話して居た。

「――さあ、今日こそ俺はお前とゆつくり親しく語り合はう。まあ俺の話を聞いて呉れ、今日あの五十圓を持つて郵便局へ行くとね、世の中には下には下があるもので、四十恰好の男だのに何とまあ二十錢の貯金をしに來た人があつたぜ、それでも大事なお金だ、二十錢でもそれはかまはない。つまり二十錢でも五十圓だと思つて毎日預けて居れば、眞實の五十圓の喜びが得られる譯で、五十圓毎日預けて居るのも同じ様なものぢやないか。さう思へばうちなどはまだ〳〵思ひ様が足りない、不足を云へばどうにでも切りがなくて、切りがなく不幸だ。お前は常によく俺に何も話をして呉れないと云つてこぼすが、さあ今はついでに俺れの日頃の思わくも話して置かう。俺は子供の時に喜んで何回でも聞いた話があるのだが、それは斯んな話だ――或處に貧しいおばあさんと、おぢいさんがあつたが、或晩やつと二人が食べるお米を貰つたので、大喜びでおばさあんは井戸端でそのお米をとぐ中に、おぢいさんはそれを煮る爲めの柴を拾ひに出かけて行つたのだ。そのあとへ乞食が來ておばあさんのお米をといで居る處で頭を下げるので、到頭おばあさんはそのお米を皆乞食にやつて終つたんだ。そこへおじいさんが歸つて來て、大變歎いたけれども、人のいゝおぢいさんは、「かまはないまたよい事があらう、今晩はこの柴丈けをたいてあたつて寢ることにしよう」とさう話し合つて二人は機嫌よく寢て終つたさうだ。そのあくる朝だ、おぢいさんもおばあさんも目を醒して見ると、大きな藏が三つも建ち並んで居て、その初の藏に

はお米が一パイ、次の藏には着物が一パイ、又次の藏にはお金が一パイ。それで二人の年よりは大變大喜びをしたと云ふ事だ。俺は子供の頃いつもこの話を聞きながら初めの藏にはお米が一パイと云ふところになると、すや〲と眠つて終つたさうだ。俺は『初めの藏にはお米が一パイ』と云ふこの調子が何とも知れず大好きだ。勿論――俺達…特に俺は乞食に皆自分の米をやつて終ふ程の奇麗な慈悲心は恥しながら持つて居ないことを毛頭かくす氣はない。だから手前勝手な藏だけを望んで居るのではないが、只俺は今あるが儘の姿に滿足して、なるたけはね出さない様にはね出さない様にとしながら、日々のはげみを怠らないで居るのだ。それで決して不足を云はないのだ。何か心にあき足らぬことが湧いて來れば「さあ柴をたいて寢よう。明日はよい事があるだらう。さあ柴をたいて寢よう」で何事もたんのうして寢て終ふのだ、さうして又明日、又明日とそれをそのまゝにつとめてさへ居れば段々心に藏が立つて、『初めの藏にはお米が一パイ』と云ふ安らかな心を得られるであらう、それを待つて居るのだ。』然し待つて居る俺は仲々つらい。今俺が云ふ様にさう美しくは行かない。待ちながらにも俺はやはりいら〲する。お前が俺に『あなたは冷い人ですね』とおづ〲云つた事があるが、あれには俺の心が板の様に硬くなつた。まつたく俺はお前に對して溫い言葉さへ一つ與へない。金もなくてすむその言葉さへ俺の口からは出ない。今俺が云つた様に俺の心に藏を建てようと思つて熱心な爲めにそれが建つ迄はお前に溫い言葉さへ與へないと云ふのはそれは僞りかも知れない。それは勝手な云ひ草かも知れない。然し他は惡いたくらみのある譯ではないのだから、まあかう云ふことにして置いて呉れ。毎晩二人で貧しく柴をたいて寢る、さうすると終には藏が建つ、さうするといつか俺の心にも溫い風が吹いて俺の家は靄々とする……まあかう云ふことにして置いて呉れ。それでも今日はよくお前にも解る様に話したゞらう。

只一づに俺とてさう冷いばかりでもないのだ。——」

私は知らず知らずの中にもう自分の家の門口に立つて居た。

私がぼんやり門口を這入ると、妻は待ち兼ねた樣に赤ん坊を抱いて乳を飲しながら

『大變遲いでしたね』と云つた。

妻の顔を見、赤ん坊の顔を見ては今門口迄思ひ續けて來た私の心もちは、掻き消すが如くに霧散して終つて、常の樣の人間がうじや〳〵して居る樣が又元通りに戻つて終つた。

私は何の爲めに無愛想に云ふのか、いつもの言葉付きで、

『さあ早く病院のこしらへをしないと時間が切れるぜ』と歸る早々促し立つた。

『いくらさうおつしやつても子供が泣くのに、一人ではとても駄目ぢやありませんか』

さう云はれゝば私が遲くなつて惡かつたのを萬更ら知らぬ顔でも居られなかつた。私は今先きの事を思ひ出して、二十錢の貯金のことを詳しく話して、まだうちの五十圓は比較にならぬ程いゝぢやないかと互に笑ひたいと思つたが、咽喉元までその言葉がこみ上げて來ても、口先きからはもじ〳〵と支へて動かなかつた。それでも

『今日貯金に行くと二十錢預けに來た人があるよ、四十位の大人の人だがね』と、やつとこれ丈け話した。

『へえ、それはどんな人でせう、隨分貧しいんでせうね、』と妻は感心しながら、せか〳〵と急いで病院へ行く用意をした。

私は赤ん坊に澤山妻が乳を飲ました後、それを受取つた。それで妻は漸く出て行く事が出來るのであつた。

私は一人で「ヨイヨイ」など〻囈言の様に赤ん坊をあやしながら、誰れも居ない家中をくるくる廻つて居たが、終に赤ん坊を抱へたまゝ不自由な片手をのばして押入から、田園を描きかけて居る一枚の油繪を取り出した。そしてそれを床の前の柱によい光線を向けて立てかけた。また「ヨイヨイ」と赤ん坊をあやしながら、廊下を往つたり、來たりしてその油繪を見据ゑながら心にうなづいた。私が歩きながら繪を見て居ることは例へ垣根越しに人がのぞいて居やうとそれは決して氣付ぬ姿であつた。自分の繪を見るに誰に遠慮をするわけでもないが、私は斯うして知らぬ顔して人に隠れてそれに眺め入つた(完)

(大正八年九月)



大地の涯

吉田絃二郎

ヘルモン山の脈々が夕燒の光りを浴びて紫にかすむでゐるのが、ガリラヤの湖を越えて仄かに、雲の下に見えてゐた。葡萄畑や無花果の下の農夫たちの姿はいつの間にか、山の夕影のなかにかくれてしまつてゐた。木蔭の井戸から水を掬んで歸る村の女たちであらう、肩に水甕を載せた白い衣の人影が靜かに薄暗のなかを家の方へ動いて行つた。

麓の家からはかすかな燭の光りがまたゝき初めた。時折、驢馬の鳴く聲などが何處からともなく傳はつて來た。

白い頭衣をはづして、靑年は草の上に投げるやうに置いた。

『今夜もまた草のなかに寢るのか!』

靑年は柔かな草の上に、兩脚を投げ出して、腰を卸しながら獨語ちた。限りもなく寂しいやうな、悲しいやうな、懷かしいやうな、感じが彼の心に湧いて來るのであつた。

湖の上にはやがて、霧につゝまれた漁火がまたゝきはじめた。空には星が撒きちらされてゐた。空は涯しもなく高く、尊く想はれた。

青年は跪いて祈つた。それは彼の少年時代からの習慣であつた。彼は父に叱られて終日家を追ひ出されてゐたやうな時にでも、日暮れになれば屹度こつそり歸つて來て父の大工小屋のなかで、自分ひとりで寂しく祈るのであつた。彼は一日でも祈らずには居れなかつた。

彼は生れながらの寂しい人であつた。彼は生れた日から父の愛といふものを知らなかつた。兄弟の愛さへもほんとうに知ることはできなかつた。一日のうち、夕暮の祈りの刹那ほど彼にとつて嬉しい折はなかつた。彼はその刹那だけは、ほんとうに涙を流して心から生きてゐることを感謝したい心持になるのであつた。眼に見えぬ懷かしい世界が彼の心の底深くよみかへるのであつた。

彼は久しい默禱の後、頭をあげた。

毎夜、同じ時刻に同じ位置にまたゝいてゐる星も、大抵彼の馴染になつてゐた。彼はヘルモン山の見當に輝いてゐる三角形に位置した星群や、カペナウンの見當に光つてゐる夫婦星を今夜も直ぐに見出した。星のきらめきは彼にとつては、不可思議な謎でも語つてゐるやうに思はれた。たゞさう思はれたばかりではない、彼は或る時は、たしかにその星の一つ一つが、彼に向つて悠久な何ものかを語つてゐることを信じやうとさへした。

彼はもどかしく思つた。「人間には何故星の聲を聽くことができないのだ！」彼はさう獨語ちて草の上に突つ臥して寂しい默想に耽ることもあつた。彼には草や木のざわめきにも、微風のなかにも不可思議な神の聲が流れてゐるやうに思はれてならなかつた。

「氣が狂れたのだよ、あの子は……」

近所の人ばかりでなく、彼の母のマリヤも兄弟のヤコブやヨセたちも、さう言つて、彼を對手にしないことが多かつた。

繁みのなかで夜の小鳥の聲が聞えた。彼は星明りに薄暗い木立のなかを覗いて見た。森は再びもとの靜けさにもどつた。

彼は今朝ヨルダンの河岸でヨハネに洗禮を受けた刹那の不思議な心の驚きやよろこびを想ひ出した。

「イスラエルを救ふ者は！」と言つて、彼の眼を見つめてゐた野の男の顏が泛かんで來た。

ヨルダンの河のなかゝら飛び出して來たばかりのやうに想はれる野の男は、青年の手に接吻してさう言つたのであつた。その眼は柔和であつた。けれども青い靜な海のやうな瞳の底には冒しがたい權威がこもつてゐた。その男の短い言葉は青年の胸に滅すことのできぬ疑惑と光とをあたへた。

×

青年は頭衣をひろげて、靜に體を柔かい草の上に横たへた。ぷうんと懷かしい土の香ひと一緒に芳ばしい甘すつぱいやうな花の薫が漂ふて來た。「野茨だな！」といふ意識がほんの、ちよつとの間、青年の頭に泛かんだ。

青年はいつとはなしに、おぼろげな記憶をたどつて、久しい年月の間忘れてゐた不可思議な旅の男のことを想へてゐた。

彼がまだ幼いころであつた。彼は始めて父のヨセフと母のマリヤに伴れられてエルサレムの都に上つた。彼は母のマリヤと見知らぬ男とが町を出た寂しい橄欖の森のなかで：何れくらゐの長さの時間で

あつたかは彼の記憶にはわからなかつたが……語つてゐたことを想ひ出した。子供心にも彼は母が眼を紅くして泣いてゐたことを知つてゐた。その男は頭から白い頭衣をかついで、燃えるやうな紅い衣を着てゐた。エルサレムの宮の窓から見えてゐた絹の窓掛と同じやうな色だといふ聯想がその時彼の心にも泛かんだ。その男は幼兒の額に接吻して、やがて薄暗い橄欖の木立のなかに寂しさうにはいつて行つてしまつた。彼は何だか心細くなつたので母の胸にしがみついて泣いた。

「泣くんぢやない。ほうれ、お星さまが見えた……」と言つて母が彼をあやしながら、旅の男が歩いて行つた見當の空を指した時は、紫色の星が橄欖の上にぴか〳〵と輝いてゐた。彼はしばらく星の光りを不思議さうに見まもつてゐたのであつたが、後から後からと悲しみがこみ上げて來るやうで泣き止まなかつた。

　若い母が悲しさうな聲でいつもの子守唄をうたつてくれたので、彼はやつと落ち着いたやうにして眠つてしまつた。

　彼が眼をさました時は、彼は薄暗い明りの下に父と母の前に柔かい布につゝんで、秣桶のなかに寢かされてゐたのであつた。

　父の顏は暗かつた。

「こんなに遲くなるといふことがあるものかッ。」と言つて、人の善いヨセフがマリヤを叱つてゐた。

「でも、この子が宮の內陣のなかにはいつて行つたきり、何處に行つたのか少しも分らないで、今まで探して歩いてゐたのですもの……」といふやうなことを母はくりかへしくりかへし父に言つてゐた。

　彼は母の言葉を聽いてゐる間に、今まで知らなかつた人間生活の一つの不可思議な謎を見出したので

あつた。

「何故大人つてものは、まるで眞實とちがつたことをいふのか知ら?」といふやうな幼い疑惑を抱いたのであつた。彼ははじめて母に對して罪の芽とでもいふやうな不快な感じを抱いたのであつた。彼は母の肉體のどこかに、今までに知らなかつた暗い恐ろしい影が動いてゐるやうな氣がしてならないこともあつた。

エルサルムの町は逾越節の頃だつたので、家々では羔羊が煮られ、門口の楣や鴨居には羔羊の血が赤く塗られてゐた。家といふ家にはイスラエルの村々からの人々や外國人までもが集まつて來てゐたので、葡萄畑や橄欖樹のなかに筵を敷いて寢てゐる旅の男たちもあつた。宮の周圍の階段や廻廊の軒下などには遠い旅の順禮たちが、星の光に照らされながらごろごろと寢ころんでゐた。ヨセフは妻と子供のためにやつと厩の一隅を借り得たのであつた。横木一つ隔てゝ厩の一方には一疋の驢馬がつながれてゐた。夜つぴて驢馬の草を食む音や、床板を蹴る音が聞えた。

彼がふと眼をさました時は、父は毛皮にくるまつて枯れた秣の上に眠つてゐた。母はうつむいたまゝ泣いてゐた。母の生ぬるい涙が彼の顔に落ちたのであつた。母は彼を抱き上げて額に接吻した。夕方橄欖の森で見た星が、その折きらきらと厩の軒の上に輝いてゐたのを彼は今にも記憶してゐる。

彼の母はナザレの村でも知らぬ人のないほどな眼の澄んだ、色の白い、美しい女であつた。彼女は誰にも愛せられた。ヨセフも善い人であつた。「人の善い大工のヨセフ」といふのが村での通り名になつてゐた。しかしヨセフは彼に對しては隨分冷たい眼をむけることもあつた。彼が他の兄弟たちと遊んでゐる際にも、ヨセフはぢいつと彼の顔と他の兄弟たちの顔とを見くらべるやうなことをしてゐて、急に立

ち上つて彼の腕を掴んで、「何處かに出て行つてくれ！惡魔の子ッ……」などゝ言つたこともあつた。彼は何で、父が出し拔けにそんなことをいふのか知らなかつた。たゞ父の暗い顔や涙をためてゐる眼が、悽いやうに想はれることもあつた。

自然彼は家といふものから遠ざからなければならぬやうに運命つけられてゐたのであつた。

「この子は野良のなかで生れたやうに、野良ばつかり歩いてる。」とも言つて父は叱つたこともあつた。

「お前は巡禮の子か？乞丐の子かッ？」とも言つて、草の上に寢ころんでゐるところを見つかつて、父に叱られたこともあつた。

まつたく彼は野良の子であつた。彼のうちには放浪者の血が豊かに流れてゐた。彼は一日でも野の光を見ないでは心が落ち着かないこともあつた。涯もない曠野のなかを貫く一本道を、あてもなく歩いて、驢馬を曳いた男と話したり、旅から旅をへめぐる巡禮の群と一緒になつたり、井戸の傍に憩つてゐる田舍娘たちと語つたりしてゐる間に、彼は家に歸ることも忘れて、或る時は一と月も二た月も村に歸らないこともあつた。また或る時は隊商の群にはいつて埃及附近までもさ迷ふて歩いたこともあつた。彼はそこでは或る時は鹽を作る家に雇はれたり、葡萄畑のなかに働いたりした。そこは海に臨んだ熱帶地の町で、町の入口には遠い沙漠をわたつて來た隊商の群が、喬木の蔭で、大きな革袋に水を滿たしたり、駱駝に荷を積んだりしてゐた。

青年はその町で聲の美しい歌うたひの女と戀に落ちた。女が熱病で死んで間もなく、彼は北の方へ長い旅をつゞけて故郷へ歸つて來た。彼も女と一緒に病氣にかゝつたりしたので、埃及の町を立つ時は、彼の懷のなかには少かの金も遺つてゐなかつた。彼は道々無花果や葡萄を拾ひながら、燃えるやうな熱

砂の道を歩いてゐた。

彼は道すがら幾度、豚や驢馬の食ひ殘しものをうらやんだか知れない。彼は父の食卓に幸福な眼を輝かしてゐるであらう兄弟のヤコブやヨセを心から羨ましいと想つたこともあつた。

彼は父の家に歸つて行つた。彼の放浪者的な性格を到底改むることのできないことをあきらめてゐた父は、彼が疲せ衰へて、野良犬のやうな姿で歸つて來たのをむしろ傷々しい心で迎へた。父は逾越節のために飼つて置いた羊を殺して、この不幸な性格の子をいたはつた。父は葡萄の甕を開いて、歸つて來た長子のために近所の男女を呼んで酒宴を開いた。

彼の弟たちが父の仕打に不平を抱いて二三日働かなかつた折も、父は決して彼を叱らなかつた。彼は生涯、その折の父の寂しい、やさしかつた眼を忘れ得なかつた。またその時ほど、彼は父を懐しいと思つたことはなかつた。ほんとうな父がよみかへつて來たやうな感じがしてならなかつた。

父は彼が埃及に行つてゐた一年餘りの間に見ちがへるほど衰へてゐた。その髮は眞つ白になつてゐた。今までになく父は彼に溫かい心を注ぐやうに想はれた。

「お前はなあ。とても大工はできまい。お前を大工にせうとしたのは俺の考へちがひだつた。お前は學者になるか、祭司にでもなるか、お前の好きな途を選んだ方が宜からう」とも言つて、ばかに痩せこけてゐた彼の肩などをさすつて見た。彼には彼の肩をさすつてゐる父の骨だらけに痩せた手が傷々しく感ぜられた。

「お父さんも弱りなすつた！」彼は生れてはじめて涙ぐましい心で、父の顏を見ることができた。

實際父は衰えてゐた。そして彼が歸つて來て、半年と經たぬ間に父は死んだのであつた。死の床にも

父は滅多に姿をも寄せつけないで寂しく死んで行つた。

人の善い亡父（ちゝ）のことが色々と彼の胸によみがへつて來た。彼は或る時は、父を恨んだこともあつた。彼は非常に濟まないことをしたと思つた。そして亡くなつた父が善い人であつたことを考へれば考へるほど彼は、ともすれば一人の母に對して暗い感じを抱かないでは居れないこともあつた。

父の死後、殊に彼は幼年のころのエルサレム詣でのことが氣にかゝつて詮方（しかた）がなかつた。彼は橄欖の森で見た旅の男の姿を胸に描いてゐた。彼は恐ろしい、悲しい事實が今にも眼の前に叩きつけられるかも知れないと思つた。彼はその旅の男の記憶をつとめて忘れやうとした。しかし彼が旅の男の幻を忘れやうとすればするほど、彼の心の底からは不思議な旅の男の幻が彼の心にはつきりと映つて來るのであつた。

或る日のことであつた。母がたつた一人で祈りをしてゐる後から近づいて行つて、

「あなたはあのエルサレムの森で逢つた旅の男をお知りですか？」と訊ねた。

『何をそんなばかなことを……お前は何か考へちがひだよ……そんなことがあつたものかね……』

母は呼吸をはづませながら言つた。母はほんとうに狼狽してゐた。母の顏色は蒼ざめてゐた。

「それは乾度、お前の子供の時の幻ですよ」と言つた。母が隱さうとすればするほど彼の心は自分でも何うすることもできないほど冷酷になつた。

「しかしおつ母（か）さん。ほんとうにあなたは石で撃たれるやうなことをなすつたことはないのですか』とも言つて、彼は母の顏を見つめた。母の顏色は死んだ人のやうに白かつた。彼は惡いことをしたと思つた。しかし既うそれは取りかへしのつかぬことであつた。今までこの世界で——人にかくれるやうにし

てゞはあつたが――彼に對して母の愛といふものを感じさしてくれたたゞ一人の母との間にも冷たい鐵の扉が立てられた。

『お前の顏を見るのも厭つ！』とも言つて、母は彼を避けやうとすることもあつた。そのことがあつて以來、母と子の間には深い溝が横たへられた。

燭をかゝげて、跪づいてゐる母の姿を見て、彼は幾度不快な感じと同時に、耐らなく寂しい感じを抱いたか知れなかつた。

『ヨセフの子が氣が狂れた！』と村の人たちが言ひ出したのはこのころからであつた。

×

父が死んでから後一層彼の心は暗くされた。ほんとうにしみじみとした愛をもつて父を見ることもできなかつた過去の生活が悔ゐられた。彼はとりかへしのつかぬ蹉跌をしたことに氣付いたのであつた。彼は寂しく死んで行つてしまつたヨセフのことを想へると何處の世界までも追つかけて行つて詫びなければならぬやうな氣がしてならなかつた。憎んだり、疑つたりしてゐる間に人間は餘り早く死んでしまふ寂しさが犇々と彼の胸に迫つて來るのであつた。

彼は或る時は埃及の海岸の町を思ひ出した。旅の貧しい放浪者のために歌を唄つてくれた可憐な女のことを想ひ出した。墓場の深い底から尙ほ彼女の聲が響いて來るやうにさへ想はれた。亡くなつた父のことが想ひ出された。森のなかで母と別れて行つた寂しい旅の男のことが想ひ出された。彼にとつて人生は、自然は、あまりに寂しい墓場のやうにおもはれてならなかつた。

彼には人間の死といふ恐怖がいつも暗い鬼憑のやうにつきまとふてゐた。彼は山に昇つて行つた。山

腹を横に掘り貫いた岩窟のなかに父の死骸は葬られてあつた。彼は終日墓場をさ迷ふこともあつた。そこからはガリラヤの湖が見え、湖にそゝぐ幾條かの白い流れも見えた。ヘルモンの峯が雲の下に脈々としてゐるのも見えた。

一度死の幕が卸された刹那に永遠に失はれて行く人間の生活ほど寂しいものはなかつた。彼は山の上に横たへられてゐる幾つもの柩を見た。彼は悲しみつゝうなだれがちに山を下つて行く若い女や、老人を見た。黒い頭衣の下にかくされた人々の涙を見た。

「死が近づいた！」彼は人間の顔の一つ一つにそのやうな恐ろしい運命の言葉が刻まれてあるやうに想つたこともあつた。

凡べてのものが刹那々々に死の手に滅ぼされて行くのであつた。彼はぢつとしては居られなかつた。ちよつとでも體を休めたり、家に落ち着いてゐたりすると、後から後からと死の恐怖が、彼を襲ふのであつた。

彼は曠野に出た。彼は空を見た。微風の聲を聽いた。鳥の唄に耳を傾けた。柔かい草の香を嗅いだ。そこにも刹那的の榮華があり、死があつた。けれども彼はそこに始めて死の底にかくれてゐる永遠の悲しい慰めの仄かな聲を聽くことができた。

そこでも梢の鳥は死に、花は散つて行つた。靜な自然は凡べてそれ等の刹那的な生命を受け容るゝ墓場であつた。それは寂し過ぎるほど寂しい墓場であつた。けれどもそこに漂ふてゐた永遠な死の香ひや、悠久な自然の悲しみは、恰かも母の懷のやうに彼の疲れ切つた魂のために悲しい子守り唄をうたふ搖籃をあたへるのであつた。

彼は青い草の上に寢た。悠久な、そして人間の力では知ることのできぬ、不可思議な悲しみの聲が地の底から天に向つて叫んでゐた。

綠の野につゝまれたものは凡べて限りもない悲しみと寂しさとをもつて飾られた。鳥も花も羽蟲も刹那的に滅びて行つた。彼等の屍が青い大空に抱かれ、青い草につゝまれてゐる時、そこには尙ほ永遠し悲しみを泣く自然の默思と蠱惑とが彼の魂をとろかすほど漂ふてゐた。

死を恐れた彼、自然の無限な孤獨や悠久の默思に魅せられた彼は、一日でも家のうちにぢつとしてゐることはできなくなつた。

彼はナザレの母の家を捨てゝ、森から森、野から野と經めぐつてゐたのであつた。

放浪者的な彼の魂は野の小鳥のやうにあてもなく曠野をかけめぐる間に、更生へつたものゝよろこびを見出すのであつた。

野は限りもなく寂しかつた。灰色にとざゝれてゐた。しかし小鳥にとつては羽打ちつゝ灰色の空を翔つて悲しい唄をうたふことのみが、彼女にあたへられたたゞ一つの生活であつた。

氣の弱い、寂しい夢を追ふ放浪者的な彼の生活にとつて、奇蹟のやうな靈感があたへられた。

「イスラエルを救ふものは……」と言つて彼の眼を見た不可思議な野の男は、今までに彼自身が意識してゐなかつた或る力强いもの、或る無限な光を、彼自身の裡に見出させたのであつた。

毛皮を身に纒ふて、蜂蜜の壺を腰に下げてゐた男は、屹度逢ふかぎりの青年たちに向つて「イスラエルを救ふものは……」と言つたにちがひない。けれども彼ほどその男の言葉に動かされた青年はなかつた。

彼はヨルダンの岸でその男と一度逢つた刹那から生れかはつたほど、自分のうちに力強いものを見出したのであつた。

夜なかに彼は幾度か眼をさました。遲い月が出てゐた。森の暗い繁みから夜鴬の聲が靜かに聞えて來た。

『大工の子ではない！』恐ろしい聲が聞えた。彼は身顫ひした。しかしそれは何うしても耳を塞ぐことのできない魅惑的な聲であつた。

背の高い東方の學者らしい崇高い旅の男が、月明の橄欖の森を歩いてゐる姿が幾度も彼の心に映つて來た。

彼の神經は今までになく昂ぶつてゐた。彼の眼の前には黄金の光明に滿ちた世界が展かれた。世界中が不可思議な音樂に充たされてゐた。彼は夜が明けるのを待ち遠しく思つた。

×

カペナウンの町を中心として、ガリラヤの湖に沿ふた町から町を歩く放浪者の一群があつた。一人の背の高い青年を中心にガリラヤの湖に漁つてゐた若者や、羅馬政府の收税所の下役や、搏徒や、つひこのころ牢舍から出て來たばかりの男たちが、正午の日光を浴びながら野の中や、井戸の傍や、また或る時は町の酒場に集まつて手も洗はないでパンを食つたり、酒を飲んだりして、高い聲で語り合つてゐた。

彼等は青年を『先生！先生！』と呼んでゐた。青年は滅多に口を利くことはなかつた。彼は大抵は眼をつむつて、瞑想に耽つてゐるやうであつた。彼の顏には時として深い憂鬱な影が流れることもあつた。また或る時は彼の眼はまるで嬰兒の眼のやうに幸福に輝いた。

彼は不思議と人を惹きつける力をもつてゐた。彼が酒場の一隅に坐つて、うれはしげな顔をして物思ひに沈んでゐる時、人々は人間生活の凡べての苦痛を分つことのできる救世主は彼でなければならぬとさへ思つた。彼の輝いた額、彼の紅寶石のやうな唇、海のやうな深い色の瞳を見た時、魂の不安を抱いてゐる人々は、たゞ一人の慰安者として彼の周圍に接近して行つたのであつた。

或る者は彼はイスラエルの祖先たちが豫言して置いたその救世主であるにちがひないと信じた。

長い間羅馬の虐政の下に、苦められてゐたイスラエルの子たちは、久しい時の間、夢の世界を描いては、そこにせめてもの慰めを見出さうとしてゐたのであつた。

彼等は羅馬の兵卒に引き摺られて行くイスラエルの同胞の悲慘な姿を日として見ないことはなかつた。彼等はまた町の辻に羅馬人の手によつて鋸をもつて胴を斷たれた同胞の屍を見た。

しかし彼等は劍を執つて立つほどの勇氣も決心も實力も持つてはゐなかつた。彼等はその祖先がバビロニヤから埃及にさ迷ひ、埃及で異邦人に苦められた昔、大豫言者モーゼが彼等の間から生れたことを想ひ出しては、第二のモーゼの出現を信じてゐた。彼等は現實には餘りに弱い民族であつた。彼等は二千年來夢に近い奇蹟を待つてゐた。

彼等は幾度となく第二の豫言者モーゼを見た。しかしそれは皆羅馬人の間諜であつたり、金錢を貪る食はせものであつた。

『豫言者が生れた！』といふ言葉が再び彼等の間に傳へられた。賢い男たちは『また例の食はせものだ！』と冷笑した。無智な農夫や漁師や女たちのみが湖の附近に集まつて、青年とその一群の人々を見た。

彼等はそれが眞實の豫言者であるか、否かを考へる遑さへなかつた。たゞ彼等は誰でも宜い、現在の境地から彼等を救つて、イスラエルの鄕土を昔のモーゼの世界に引き上げてくれるものが欲しかつたのであつた。

或る痛風を病んだ男は屋根の上から綱をくゝりつけて、青年の傍に下された。家をめぐつて十重二十重に立つてゐた群集は、青年がその男の額に接吻した時、「救世主が生れた！」と叫んだ。或ものは歌をうたつた。

痛風の男が何うなつたか、何處に歸つて行つたかは誰も知らなかつた。たゞ「その男が立ち上つて歩いて行つた」といふ噂だけがひろがつて行つた。

殊に青年の名が、湖畔の村々に喧しく傳へられたのは、カナといふ山沿ひの町に行つた時であつた。青年の一行が或る豪家の前を通りかゝつた時、彼等は無花果の下にぼんやり立つてゐる男を見出した。恰度黄昏ころであつた。

「何故泣いてゐるのだ？」と青年が若い男に訊ねた。

「婚筵の葡萄の甕が空になつてしまひました。日が暮れては町まで取りに行くこともできませぬ。私は主人に對して申し譯がないのです……」と言つて若者は泣いた。

青年はその男に命じて凡べての甕を門の外に持ち出させた。四斗か九斗ぐらゐ盛る石甕であつた。青年はその僕に命じて六つの甕になみ〳〵と水を盛らせた。彼はまた自分で葡萄を捥ぎとつて甕のなかに入れた。

彼は僕にみちびかれて花婿と花嫁の前に歩いて行つた、ガリラヤの湖畔で既に彼を見知つてゐた者も

あつたので、群集のなかゝら「救世主！救世主！」といふさゝやきが聞えた。

先きの僕は石甕を群集のなかに据えた。人々は盃を甕に入れては水を掬んで飲んだ。

廣い室の中も、窓の外も、客と見物人で一っぱいであつた。人々は盃を擧げては救世主をほめたゝえた。

夜が更けても人々は尙ほ唄ひ、踊つた。靑年は一群の人々をつれて、いつものやうに湖畔の森のなかへ歸つて行つた。

婚筵で六つの甕の水を葡萄の酒にしたといふ噂が、救世主の奇蹟として、數日後には町々に傳へられたのであつた。

白い頭衣をかむつた、白い衣の靑年の姿が湖沿ひの草のなかに見出さるゝ時、漁師たちは網を捨てゝ彼の後に痕いて來た。盲人や跛者や癩病患者たちは彼の衣にさわつたゞけで涙を流してよろこんだ。

盲人が眼を開いたの、啞がものを言つたのといふ噂がガリラヤからデカポリス、エルサレム、ヨルダンの地方までひろがつて行つた。

×

旣う彼は今までのやうに死を恐るゝ靑年であることはできなくなつた。無論彼の心の底には永遠に解くことのできない不可思議な人生の暗い蔭がこびりついてゐた。彼はそれを思ひ出すごとに耐らなく寂しかつた。彼はまた死といふ儚い姿を思はずには居られなかつた。死の後の解しがたい謎についておへずには居られなかつた。

けれども彼は夜となく、晝となく、彼の周圍を取り卷いて彼にすがりついてゐる貧しい人々や、病に

苦しんでゐる人々を想ふと、眼に見えぬ世界について、自分ひとり瞑想に耽つてゐることはできなくなつた。

彼は凡べてを抛つて彼に信頼して來る人々を見た時、はじめて人間と人間とが結びつくことによつてそこに生み出さるゝ心の天國を見出したのであつた。

一人の癩病患者が彼の足に接吻した時、彼はその男の頸を抱いて、その額に接吻してやつた。『何といふ美しい世界であらう！』彼は生れて始めて自分の心に不可思議な光明の世界が輝くのを知つた。そこには病氣もなく、貧困もなく、死もなかつた。

彼は盲人の眵を拭いてやつた。盲人は涙を灑いで彼の足を洗つた。

「何といふ光明に照らされた大地であらう！」彼の前には盲人もなく、啞もなく、世界は溫かい涙と、感謝に充ちてゐた。

彼は嘗て野の草のなかに見出した不可思議な自然の蠱惑を、貧しい人々の心のなかに、收稅吏の心のなかに、搏徒の心のなかに見出したのであつた。

或る時は四千、或る時は五千の人々が湖畔の丘の綠草のなかに彼と共に坐つた。そこには嘗て人を傷けた若者もあつた。羊を盜んだ男もあつた。幾十人の男を裏切つた女もあつた。彼等は青年の前に跪いて過去の恐ろしい罪惡を語つた。彼等は涙を流して語つた。たとへそれが何のやうに恐ろしい罪惡であらうと、彼等は一人として、その罪を憎むことはできないほど、彼等の心は寛大にせられてゐた。彼等は他の人々の恐ろしい罪惡を聽くたんびに、その不幸な男や女たちのために泣いた。そのやうな折青年は

「天國が生れた！」と幾度も想つた。

彼は久しい間求めてゐた天國が、罪人の心のなかに、娼婦の心のなかに潜んでゐることを知つた。現在の人間の世界、罪を犯した人々の心の世界、貧しい人々の心の世界！彼はそれ等の人々の心のうちに天國を見出したのであつた。

×

湖に沿ふた丘に今日も彼は人々と一緒に草の上に坐つてゐた。正午過ぎには五千人の男女が彼をめぐつて集まつてゐた。

湖をわたつて薫ばしい風が吹いて來た。草は輝いてゐた。子供たちの樂しい笑ひ聲が彼の周圍を取りまいてゐた。彼の心はよろこびに顫へた。

彼は貧者の福音を說いた。彼は罪を悔ゆる人々の幸福を說いた。彼は悲しみある者の恩惠を說いた。彼は敵をも愛すべきことを說いた。彼はソロモンの榮華に比べて野の百合の生活の更に幸福なることを說いた。彼は一日の苦勞は一日にて足れることを說いた。

このやうな彼の說教はみんな彼のその刹那々々の實感から湧いたものであつた。彼は身に一錢の貯へをも持つてゐなかつた。彼はたゞ一枚の頭衣と一枚の衣を着てゐたばかりであつた。けれども彼はその刹那に大空も、湖も、微風も、雲も、鳥の聲も悉く彼の心のうちに溶けこんでゐたことを知つた。更に彼自身が凡べての自然と、凡べての人々の心のなかに結びついてゐることを實感した。彼は、今、この刹那に、空の鳥と一緒に無限の生命のなかに溶けこんでゐることを知つた。

何物をも持たざるが故に、凡べてのものを持てりといふ貧者の怡悅が彼の心の底に燃えた。

彼れの顏は輝いた。天國は湖邊の緑の丘の上に生まれたのであつた。

太陽が傾きかけた。人々は彼の周圍から離れなかつた。その時であつた、一人の少年は彼の前に近づいて來て籠をさゝげた。籠には五つのパンと二つの魚があつた。

「これを先生に！」と言つて、少年は恥づかしさうに顏を紅くした。

「お前のパンは？」と彼が少年にたづねた。少年は微笑んだまゝ人ごみのなかにかくれてしまつた。

彼の心は天使でも拜し得たもののやうに感謝に充たされた。彼はそのパンと魚を割いて周圍の人々に與へた。

人々は夕陽の光りを浴びてパンを食つた。パンを携へて來た人々は自分のパンを裂いて見も知らぬ人々に與へた。黄金を持てる人々は貧しい人々のために、金嚢を倒まにして與へた。二枚の衣を着てゐた女たちは、その一枚を貧しい女や、老人たちに與へた。山の上には人類が今までに見たことのない幸福な世界が展かれてゐた。彼が山を去つた時十二筐だけのパンや魚が草の上に遺されてあつた。

彼は人々をうながして山を下らせた。しかし人々は何處までも彼の後を追ふた。

その時であつた或る一人の學者は、彼の行くところまで隨いて行きたいと願つた。

「空の鳥には巣がある。けれど人の子には枕するところもない。」と言つて、彼は言下に學者の請ひを退けた。彼れは學者の冷たい眼を憎んだのであつた。

學者の後から一人の男が彼の前に進んで來て地に跪いた。その男はガリラヤの者ではなかつた。言葉にも訛があつた。

「先生！私は罪人です。何うしても救はれることのできぬ罪人です。私は先生のお話を聽いて居ます間

にも幾度先生のお話を裏切るやうなあさましい心を抱いたか知れません。先生！私でも救はれるでせうか！」と言つて、その男は燃えるやうな眼を彼の方に向けながら彼の手に接吻した。

彼はその男の髪に接吻した。神經質なその男の眼は絶えず物恐ぢするやうに動いてゐた。恰度家を失つた小犬のやうに思はれた。彼はその男を見てゐる間に涙を流した。

日が暮れてしまつた。彼は湖のほとりやカペナウンの町で、集まつて來た人々のうちから十一人の弟子を選んで舟に乘せた。そして湖の向ふ岸に行くやうに準備をさせた。

彼は人々に隱れてたゞ一人で暗い森のなかにはいつて行つた。彼は非常に疲れてゐた。彼はもの〻怪に憑かれてゐたものが、醒めたやうな心の空虚と、寂寞とを感じた。彼は殆んど何を語つたかさへはつきりとは記憶してゐなかつた。

「……兄弟に恨まることを憶ひ出したなら、禮物を神の壇の前に留いて、先づ兄弟と和らいで後、神の前に禮物をさゝげろ……」と言つた言葉や「女を見て色情をおこすものは心のうちに姦淫したのだ」と言つた言葉などが斷れ〳〵に彼の記憶によみがへつて來るのであつた。

彼は自分との間に冷たい溝を橫たへてゐるナザレの母や兄弟たちのことを考へた。彼はまた埃及の港にゐたころの彼自身の生活や、戀に陷ちた不幸な埃及の女のことなどを想へた。

「僞善者！」弱い自分自身のことを振りかへると、彼の心は暗くされた。

「しかし、群衆の前に立つた時、俺は心から、信じたことを言つたのであつた。一言一言が俺の魂の聲であつた。あの刹那に俺は自分を裏切つてゐたとは思はぬ。」と考へて自分をはげますやうにもした。しかし彼は自分のうちに潛んでゐる暗い影や、醜い罪惡や、虚僞を思ひ出すと、群衆の前に立つて語つた

ことがほんとうに寂しかつた。心苦しくてならなかつた。

『この僞善者を御心のまゝに罰して下さい。苦しめて下さい。しかし、あの刹那だけは私は心から、さう信じてゐたのでありました。』彼は地にぬかづいて祈つた。

『私には何うして宜いのか分りませぬ。私はこのまゝ一人で遠い世界に逃げませうか。罪といふことを思ふ機會もないやうな世界に。私は富の空虛なことを感じてゐます。名譽の誘惑にも勝つて居ます。しかし群集のうちもし一人の女も見出さなかつたとしたら？：何といふ汚らはしい心でせう。私の心はたしかに、恐ろしい罪を抱いてゐます。私は不思議な力に醉つたのでせうか。私の言葉は空虛でせうか。神。私はあなたを信じます。けれどもまた疑ひます。あなたはほんとうに在られるのでせうか。神、神、……私は寂しくてたまらない……』彼は起ち上つては草の上に跪いて祈つた。

彼は麓の方で、彼を呼ぶ聲を聽いた。空は急に曇つてしまつた。風につれて雨が叩きつけるやうに降つて來た。

風につれて人々の聲が途切れ〳〵に聞えて來た。『先生！先生！』と叫ぶのはたしかに夕方舟に乘せて、準備を命じて置いた男たちの聲であつた。

彼は丘を下りて行つた。普段は處女のやうに靜かな湖も荒波を逆卷いて狂ふてゐた。木葉が飛び、梢が折れ、飛沫は麓の道までも吹きつけられて來た。

彼は人々を呼んで見た。湖の上は薄暗かつた。人々はあわてふためいて岡の方へ舟を近づけやうとしてゐたが、波の搖れかへして、舟は何うしても岸につけることはできなかつた。

彼は衣をかゝげて遠淺の瀨をさぐりながら舟の方へ步いて行つた。彼は荒波を恐れぬほどの絕望的な

勇氣を持つてゐたのであつた。彼は半身を水に浸しながらも舟に飛び乘つた。人々は「先生が水の上を歩いて來た」と言つて驚きの眼を瞠つた。
「先生！とても舟は出せません。このあらしでは‥‥」と言つて舟板の上に身を投げ出したのはシモンといふ漁師上りの男であつた。
彼等は梶を取る術も忘れたかのやうに、棹を握つたり、帆布を掴んだりして、岸の方へ岸の方へと舟を寄せやうとあせつた。
「沖に！」と彼は力強い聲で命ずるやうに言つた。彼はその刹那に「死生天に在り」といふやうな絶望的な大膽な決心を抱いたのであつた。彼にとつては今夜の恐ろしいあらしは、彼自身の使命や運命を試みる神の恩惠であるやうにも想はれた。彼は先つき山の上でたゞ一人で靜に祈つてからこつち、自分自身に對して可なり絶望的な考をもつてゐた。
「イスラエルを救ふものは‥‥」と言つたヨハネの言葉に動かされた自分自身を冷笑したいやうな心にさへなつてゐた。
彼は湖のなかに身を投げて自殺をはかりたいほどに絶望してゐた。彼は暗のなかに白く立ちあがつてゐる波を見ても、少しも恐ろしいとは思はなかつた。彼は舟が木の葉のやうにもてあそばれて、今にも覆らうとする場合にも少しも驚かなかつた。
「死か？生か？」彼は舟板の上に靜座しつゝ、眼をつむつて、あらしの音も、波の怒りも意に介せないかのやうに落ち着いてゐた。
「何故、帆を張らないのだ、帆を！」彼は眼を開いて幾度か男たちに命じた。

「この風に帆を張れば沈むばかりです。」と言つて、そこに立ちすくんでゐたのはアンデレであつた。彼は自分で立つて行つて帆綱を捲き上げた。彼はその時、帆の下にうづくまつてゐる一人の男を發見した。その男の肩は薄暗のなかにも顫へてゐることが分つた。

「誰だらう、こゝにゐるのは？」とアンデレに訊ねた。他の男だちも這ふやうにして近づいて見たが、誰も知つてゐなかつた。

彼はその男の肩に手をあてゝ見た。その男が顫へてゐるのが、彼の手にはつきりと感じられた。

「誰だらう？」と再び言つて彼が薄暗のなかにその男の横顔をのぞいて見た刹那に、彼はその男が、先つき彼に救ひをもとめて來た男であることを知つた。

「お前はかくれてこの舟に乘つたのか？」と彼は訊ねた。その聲はやさし過ぎるほどやさしかつた。

その男はうなづいて見せた。そして「お免し下さい。私を救つて下さい！」と訛のある言葉で言つた。

「恐いのかい？あらしが……」と彼は訊いた。その男は再び突つ俯してしまつて顫へてゐた。

彼が自分で帆を張つた刹那であつた、凄じい響を立てゝ帆檣は中程から折れてしまつた。そのはづみに舟は三度ばかり大波を喰つた。

成る者はモーゼを念じた。成る者はダビデを念じた。彼等はつひ一時間ばかり前まで、彼等が「救世主！」と呼んでゐた男が同じ舟に乘つて居ることを忘れてしまつてゐた。

彼等がそのことに氣付いた時は彼は、倒れた帆檣に身を寄せて、靜かに濡れた帆布の上に眠つてゐた。

夜が明けて湖は凪いだ。舟は向ふ岸のガダラ人の岸に吹き着けられてゐた。

湖に沿ふた野には豚を飼ふ家がならんでゐた。彼等は岸にあがつて行つて、草の上に横はりながら休

んだ。彼は笑ひながら弟子たちの前夜の驚いた姿態を眞似て見せたりした。弟子たちも一緒になつて笑ひこけた。彼はまた昨夜舟のなかにかくれて痕いて來た若者に話しかけた。若者の名はユダ。エルサレムからずつと南に寄つたケリオといふ所の小商人であつた。後では人々はこの男を「イスカリオテのユダ」と呼んでゐた。

彼は豚の多い村を好まなかつた。彼は人々をうながして舟の修繕をしたり、朝の食事の準備をした。その間に附近の村々からは多くの人々が集まつて來た。昨夜のあらしに湖を渡つて來たことが大きな奇蹟として人々の間に語られた、また或弟子たちは彼が湖の上を歩いて來たなどゝいふことを人々に語つた。

彼は舟に乘つて、岸邊に立つてゐる人々に語つた。人々は草の丘から湖のなかにはいつて來て、裾をからげながら彼の話を聽いた。若い男たちのうちには衣を捨てゝ彼の舟近くまで泳ぎついて來たものもあつた。

彼はその夜、湖をわたつてテベリヤの方へ舟を向けた。月が出て、縹渺たる湖面を微風が音もなく過ぎて行つた。彼は幾度か手を水のなかにつけて藻草の白い花を嗅いで見たりした。

彼は他の弟子たちが笑ひ興じながら語つてゐる間に、たゞ一人舳の方に座つて湖の面を見入つてゐるユダの寂しい姿を見た。

彼は輕くユダの肩を叩いて微笑んだ。

彼のこの打ち解けた親しい態度にユダは心のどん底から動かされてしまつた。

「先生。私は生れてはじめてあなたのやうな打ち解けたお心の方を見ました。あなたはほんとうに救世

主です……』と言つて、ユダは彼の足に接吻しやうとした。

『私はお前の友達だよ。兄弟だよ。』と言つて彼は却つてユダの手を握つた。

　ユダの眼には感謝の涙がためられた。ユダは生れて、ほんとうにはじめて人のやさしい心を知つたのであつた。ユダの心には愛のまつたく新らしい世界が生れて來たのであつた。ユダはその夜卅のなかで月の光に照らされながら不幸な過去の半生を語つた。

×

　ユダは生れて間もなく母を失つた。ユダは殆んど母についての記憶を持つてゐなかつた。繼母に育てられたのであつたが、ユダが十一の時父が死んだので繼母は間もなくユダを捨てゝ家を出てしまつた。ユダは叔父の家に引きとられて、そこでは他の奉公人たちと一緒に奴隷のやうに働かなければならなかつた。

　ユダの叔父は人の善い氣の弱い男であつたが、勝氣な細君に氣兼ねしてやさしい言葉一つユダにかけてやることはできなかつた。ユダは叔父に伴れられて驢馬を曳いては隣り村まで出かけて行くことがあつた。そのやうな折、叔父は居酒屋に立ち寄つては、ユダにも溫かいものなどを喰べさせて『自家(うち)に歸つても、物を食つたなどいふんぢやねえぞ。腹一つぱい食つとけよ……』と言つて、ユダが好きなものを卓子の上に取つてやつたりした。ユダはそのやうな折には子供心にも叔父がいとしくて、洟と一緒に涙を飲みこむやうなこともあつた。しかしそのやうなことは年に一度かそこいらで、大抵はユダの心は暗い冬のやうな孤獨の寂しさに鎖されてゐた。彼は大抵の日は空腹に苦しんでゐた。叔父や叔母の眼を盗んでは物を食つたこともあつた。彼は自然、人の『顏色を見て』はものを言つたり笑つたりするやうに

なつた。纖弱で、ひがみ易い、疑り深い、女性的な性格の彼の神經はいつもいら〱しく針のやうに鋭く動いてゐた。

神經質なユダはまた無性に人をなづかしがつた。兩親の愛をも、兄弟の愛をも滿足に味ふことのできなかつた彼は、誰でも宜い、彼を愛してくれるものでさへあれば、飛び込んで行つて、その人の懷に抱かれたいやうな心を持つてゐた。けれども彼は一度だつて彼がもとめてゐたやうなやさしい言葉や、凝視や、微笑をあたへられたことはなかつた。世界中が彼には申し合せて冷たい眼を向けてゐるやうに想はれてならなかつた。

彼はすべてのものに對して反抗的な態度を持つやうになつた。彼は搖籃のなかに眠つてゐる嬰兒を憎んだ。彼は若い母の懷に抱かれてゐた嬰兒の手にいやといふほどひどく嚙みついて逃げて行つたこともあつた。彼は驢馬を鞭打つて、後脚を傷けたこともあつた。それでも從順に彼の後から跛いて來る驢馬を見てゐると、ひとりでに涙が出て來て、彼は驢馬の綱を曳いたまゝ草の上につくばふてゐたこともあつた。

村の大抵の子供たちは意地惡いユダの眼を恐れて、ユダの姿を見ては、隱れるやうになつた。ながいこと跛足をひいてゐた驢馬に荷を積んで、毎日のやうに村を出て行くユダを人々は冷笑の眼をもつて見た。

ユダの味方になつて、ユダの意のまゝに動いてくれるものはこの世界では驢馬と、一疋の野良犬ばかりであつた。犬は雨の降る日、ユダが驢馬を曳ひて歸つて來た夕暮の道で、捨てられてあつたのを見出したのであつた。彼が抱いて歸つて來た時意地の惡い義理の叔母は「犬にまでパンを食はせることはで

きぬ」と言つて、雨のなかをまた犬を捨てさせにやつた。ユダは雨にびしよ濡れになつた犬の子を抱いて暗い夜の道を歩いてゐた。彼は犬の子と一緒に叔父の家を脱け出してしまはうかと思つたりした。彼は小犬を捨てゝ歸つて來てからも、小犬の鳴き聲が氣になつて、詮方がなかつたので、こつそり寢床をぬけ出して行つて、雨のなかを小犬を探して抱いて歸つて來た。そして母屋から離れた厩のなかに、夜つぴて犬を抱いて寢たこともあつた。ユダは犬を連れて來たために、幾度も叔母に擲りつけられた。しかし彼はしまひには白い齒をむき出して、叔母の腕に喰ひつくほどの抵抗をしたので、しまひには叔母の方で氣味惡がつて、ユダの犬に對しては手をつけることができなくなつた。

神經質な眼の、痩せこけたユダの後から從順に隨いて行く驢馬と痩せ犬とを村の人々は、毎日のやうに見た。ユダは時としては自分の食ふものも食はないで、二つの從順な動物に與へることもあつた。彼は二つの動物に對しては非常にやさしい主人であつた。けれども、もしその犬が、他人の口笛を聽いて、その方へ走つて行かうとするやうなことでもあつた場合には、彼は思ひきつて殘忍な仕打をするのであつた。彼は犬の首を摑んで、全身を顫はせながら犬を地にたゝきつけるやうなことをした。また或る時は彼の口笛を聽きながらも犬が、牝犬の方へ走つて行つたので、橋の上から犬を河のなかに投げ込んだこともあつた。

彼の神經質な性質は年一年と彼の性格の上に反抗的な暗い影を投げかけて行つた。

ユダが十六の時であつた。井戸の傍で驢馬に水を飲ませてゐた折であつた。一人の若い女がユダの傍に來て、彼の驢馬の背を撫でながら、驢馬を物珍しさうに見入つてゐた。

ユダは不圖眼を上げて若い女を見た。ユダよりは三つも四つも年上の女であつた。彼女の皮膚は青春

の歡樂や蠱惑を湛へたやうに柔かく、ほんのりと紅く、若者の魂を息詰まらせるほどに柔かに盛り上がつてゐた。胸や兩腕には美しい寶石がかざられてゐた。ユダは今までに、そのやうな美しい女を見たことはなかつた。女の髮や皮膚の香ひが、はじめて彼に異性の魅惑を胸苦しいほどに感じさせた。彼はわなゝゝと自分の腕や胸が顫へて、いまにも眼がくらみさうであつた。

女はユダの燃えたやうな眼を感付いたので顏を赧めて微笑みながら、ユダにやさしい一瞥をあたへて歩いて行つた。ユダはいつまでもその女の白い齒と睫の長い黑い眼と、異性的な香ひとを忘るゝことができなかつた。

女は羅馬の役人の娘であることをユダはしばらく經つてから知つた。その女はユダにとつては女神のやうに尊く、美しくも想はれたのであつた。間もなくその女が、羅馬の若い士官と結婚したことを聞いた時は、彼は夜、厩のなかにはいつてすゝり上げて泣いたこともあつた。彼にとつて世界中が急に寂しい墓場のやうにおもはれてならなかつた。

彼の叔父が死んだのも恰度そのころであつた。彼は義理の叔母の家を捨てゝ數年の間エルサレムからガリラヤの方をさ迷ふたのであつた。

その時彼は湖のほとりではじめて青年の說教を聽いたのであつた。今まで知らなかつた明るい世界が彼の眼の前に展かれたやうに想はれたのであつた。

湖面を滑つて遠い笛の聲などが聞えた。

舟は靜かな微風にまかせて月光の下を走るともなく走つてゐた。弟子たちは大抵晝の疲れに眠りこけてゐた。師は自分で梶の柄と帆綱とを握りながら、ユダの物語りを聽いてゐた。

「先生。私を死ぬ日まで救つて下さい！」と言つてユダは舳の舟板の上に跪いて、子供のやうにすゝり上げて泣いた。

師はユダを氣の毒だと思つた。何處までもいたはつてやらなければならぬと思つた。彼はユダが仲間のうちで、たゞ一人の異邦人であるために、他の弟子たちに蔑まれることを杷れたので、特に彼がユダを信ずる心の厚いことを人々にも、ユダ自身にも知らせるために、ユダに金嚢をあづけることにしたのであつた。

×

湖から上つて彼は故郷の方へ志して歩いてゐた。

「救世主が來る！」といふ聲はイスラエル中に響いた。或る者は劍を執つて祖國のために起つべき秋であると叫んだ、昔、彼等の祖先がヨルダンの河を渡つて東の方からイスラエルにはいつて來た日の光榮や歡喜が、イスラエルの山にも谷にも漲るであらうと想像するものもあつた。

「彼は吾々の王だ！」と叫ぶものもあつた。絕望しかゝつてゐた師は再び自分自身のうちに不可思議な力が湧いて來るのを感じた。

その時であつた。かねてヘロデ王の宮中に監禁されてゐたヨハネが殺された。ヨハネの死は却つて彼の勇氣を增さした。「イスラエルを救ふものは……恐らく自分であつたらう！」といふ信念が時とすると炎のやうに、再び彼の心に燃え上るのであつた。

サマリヤの或る村に行つた時であつた。正午ごろであつた。師は食物を買はせるために弟子たちを村のなかにやつて、一人で村の入り口に待つてゐた。無花果の下に井戸があつて、あたりには小鳥が鳴い

てゐた。彼は旅から旅を歩いてひどく疲れてゐたので井戸の傍に腰を卸してゐた。若い女が水甕を抱いて井戸の方に近寄つて來た。

　彼はその若い女に水を飲ましてくれと言つた。

『でもあなたはユダヤの方でせう。何うしてサマリヤの婦に、そんなことを仰つしやるのです。』と言つて彼の顔を見た。ユダヤ人とサマリア人とはもと／＼仇敵のやうな間柄であつたからであつた。

『……………』默りこんだまゝ彼は女の顔を見て微笑んだ。女は彼の崇高い風貌に打たれてしまつた。女は噂に聽いた救世主のことを想ひ出したのであつた。女は水甕を彼の前に置いて彼の足に口づけした。彼はその女に『限りなき生命の泉』の譬喩話を語つて聽かせた。

　弟子たちが村から歸つて來た時は、そこには女の話を聽きつたへた村の人だちが夥しく集つてゐた。彼は村人に引き留められて二日間村の人たちのために道を説いた。

　彼の心のなかに燃えて來た『イスラエルを救ふ者』といふ自信は一層强められた。彼は十二人の弟子をつれて、人々を避けて森のなかにかくれた。彼は始めて、イスラエルの迷へる羊を救ふべき大使命を十二の若い人々に命じた。

　師は弟子たちを村々におくるについて嚴かに語つた。

『イスラエルの家の迷へる羊に往け。天國は近づいたと宣へ。病人を癒せ。お前たちにはその力があることを信ぜろ。價なしに受けたのだから價なしに人に施せ。金または銀、または錢を身に帶びてはならぬ。行嚢、二つの裏衣、履、杖も持つてはならぬ。お前たちを遣はすのは羊を狼の群に放つと同じい。蛇のやうに智く、鳩のやうに柔和であれ。幽暗い所でお前たちに教へたことを光明い所で人々に語れ。二羽

の雀は一錢で買られる。けれども神のゆるしなくば一羽も地には落ちぬ。神を信じて行け。地に平和を出さんためではない。劍を出さんためである。父母に背け、子女を捨てよ。我がために十字架を擔へ、生命を捨てよ。』

師の顏は聖靈にみたされたやうに輝いた。弟子たちは二人づゝ、或ひは三人づゝ別れ々々になつて森を出て行つた。

師は弟子たちのうち、たゞ一人だけが寂しさうに麥畑のなかを俯向いて行つたのを見た。イスカリオテのユダであつた。

師は異邦人であるユダを氣の毒だと思ひながら一人歩いて行く彼を木蔭から見送つてゐた。ユダは一度も振りかへらないで行つてしまつた。

×

弟子たちが傳道から歸つて來たのは麥の穗が黃ばみはじめたころであつた。弟子たちの傳道は成功しなかつた。彼等の周圍には一つの奇蹟をも起らなかつた。或る者は師に對して幾分の疑惑を抱きはじめたものもあつた。殊にイスカリオテのユダの傳道ははげしい侮蔑をもつて迎へられたのであつた。村の到るところでこの若い異邦人は最初から罵倒せられた。師はユダの話を聽いて心からユダを慰めてやつた。

師は弟子たちをつれて幾年振りにナザレに歸つて行つた。しかしこの村では彼自身の傳道も根本から失敗であつた。村の人々は彼の母や貧しい兄弟や妹たちを知つてゐたので、「大工の子！」だの、「狂人！」だのと言つて、彼を蔑んだ。一度母との間に釀されてゐた冷たい疑ひや感情は昔のまゝに彼等の心の底

に横はつてゐた。彼は母や兄弟たちのあたゝかい抱擁さへ與へられないで故郷を出た。或る村人はナザレの村外れの崕に、彼を待ち伏せてゐて、谿の底に突き落して殺さうと計つたものもあつた。

豫言者はその故郷に容れられずして、再び悄然として故郷を立つた。

弟子たちの師に對する失望は一層はげしくなつた。或る日一人の弟子は『私等は凡べてのものを抛つて、あなたに隨いて來たのですが、私たちは何を得られるのでせう？』と訊ねた。

師は默りこんだまゝ何にも答へなかつた。

彼の顏は一日一日と暗くされて行つた。

彼は數日滅多に語ることもなく、自分ひとりで森のなかにかくれては祈つた。

このやうな折、彼を慰めてくれたものはイスカリオテのユダであつた。人々の心が師から遠ざかれば遠ざかるほどユダは師に近づいて行つた。師一人寂しく祈つてゐる時ほど、ユダは師を懷かしいと思つたことはなかつた。ユダはそのやうな場合には師を自分一人のものとして所有し得たやうな滿足を持つことができた。

『ユダは師のために谿に下つて泉の水を掬んで來たり、師のために寢床を作つたりした。

『ユダは師と二人だけで傳道をして歩いたらば……』と思ふことも度々あつた。

『たとへ惡魔の道を傳へる人であつても宜い、師とたゞ二人きりで歩くのでさへあるならば……』と思つたこともあつた。

或る日パリサイの若い男が師の前に跪いて、師を家に導いたのであつた。數十頭の羊と、少かの葡萄畑を持つた男であつたが、師のために紅い絹の敷き物をもとめて迎へた。師がその男と卓をかこんで晩

餐を一緒にしてゐる間に、師の後に一人の美しい女が立つてゐた。頸や腕にはまばゆひほどの寶石が飾られてあつた。女はぢいつと師の横顔を見つめてゐた。

師が横を向いたと同時に女の黒い瞳が輝いた。女は不思議な力に惹きつけられたやうに、しばらくは彼の周圍から身動きすることもできなかつた。

「美しい花嫁！」師は笑ひながら、さう言つて女を見た。パリサイの男も笑つた。

女は師の足下に跪いて泣いた。女はその涙で師の足を濡らして、自分の黒い髪を解いて師の足を拭いて、接吻した。星のやうな寶石と、野から摘んで來たばかりかと思はれる白い百合が、甃の上に落ちた。女は蠟石の盒に充たされたナルダの香膏を師の足に抹つた。

師は靜に女の髪に接吻してやつた。女はすゝり上げて彼の足下に泣いた。

「お前は私の妹のやうだ！」と言つて、師は尙一度女の白い手に接吻した。

「先生。この女は無益なことをするではありませんか。あの尊い香膏を賣つて貧民を救つた方が……」と言つた癇高い聲が聞えた。イスカリオテのユダであつた。眼は怒に燃えてゐた。

「花嫁のやさしい心を拒むことができるか。お前は婚筵に招かれて唄をうたはぬか？」ユダと女とを等分に見ながら師は笑つた。

「私は今夜の婚筵の主だ。花婿だ。お前たちは何故花婿と花嫁のために唄つてくれぬか。」師は子供のやうに笑ひながら三度女の髪に接吻した。

「でも、この女は……」パリサイの男は侮蔑の色を泛かべながら語らうとした。師はその男の言葉をさへぎつた。師はその女がマグダラのマリヤであることを知つてゐた。師はまたその女が嘗て七人の戀人

を持つてゐたことをも知つてゐた。師はパリサイの男の口からその女を辱かしめたくなかつたのであつた。それで師は譬喩をもつて語つた。

「五百の金を借りた男と五十の金を借りた男があつた。債主は二人の借金を免してやつた。二人のうち何つちが。債主の恩を餘計にありがたいと思ふか？」

「五百の金を借りてゐた方でせう。」とパリサイの男が言つた。

師は輕くうなづいて見せた。彼はちよつとマグダラのマリヤを見て、再びパリサイの男に言つた。

「お前の家にはいつて來た時、お前は私の足に水もくれなかつた。この女は涙で私の足を洗つて、髪で拭いてくれた。お前は口づけもしなかつたが、この女ははじめから私の足に口づけしてくれた。お前は香膏も抹らぬが、この女は私の足に香膏を抹つてくれた。この女は多くの罪の債務を免されたから、その愛も深いのだ。罪の深いものほど愛も深い。」師はさう言つてパリサイの男や弟子たちを見た。ユダの暗い顔が師の眼に映つた。「善人は天國に入ることはできぬ。救はるゝものは罪人ばかりだ。」師はマグダラのマリヤの柔かな手を握つて、立たせた。

家を出た時は日が暮れてゐた。平つたい石屋根の上では人々が腰掛の上に寢ころんで星を見てゐたりした。

師は弟子たちを伴れて麥の畑を村の外へ歩いてゐた。師の顔は近ころになく輝いてゐた。

×

時は三年を過ぎた。師はカペナウンを中心として多くの信徒を持つた。同時に多くの敵をも持つた。

彼を殺さうとしたのは羅馬の當局者ばかりではなかつた。エルサレムを中心とした古い宗教家たち、學

者たちは彼を破戒の惡魔であり、神をけがすものであると信じてゐた。

危険は刻々外部から迫つて來た。

けれども師にとつて最も恐ろしい危険は敵の劍よりは、自分自身の心のなかに釀されかゝつてゐた暗い不安であつた。

師はまつたく酒に醉へる人のやうに、自らを信じ、運命を信じてイスラエルの人々のなかに獅子吼したのであつた。

師は心から溢れ出る愛の美しさを信じた。正義を信じた。彼の言ふ一言一言が直ちに神の聲であることを信じてゐた。

しかし彼は惑はずには居れなくなつた。

彼の弟子たちの間にはげしい嫉妬が燃えはじめた。十二人の弟子たちは、師が天國に昇つた時、十二聖徒の御坐を賦へらるゝことを信じてゐた。そして弟子の中の誰が、最も彼に近く坐るかといふことについても猜疑の眼を瞠つてゐた。ゼベダイの二人の子ヤコブ、ヨハネは、その母サロメを通して天界の最高の位置をねだつた。師はひとり祈る時、ひとり野を歩む時、人間の魂の閃きを見る時、神の世界の永遠性を信じた。萬有の永生を信じた。けれども彼は天國が何のやうなものであるかを知ることはできなかつた。まして十二の聖座といふやうなことについては、譬喩的に語つたまでゝあつた。

師が刹那的に直感した天國は、彼一人のみ見ることができるものであつた、彼の弟子たちにも傳へることはできなかつた。彼は天國の譬を語つた。印象を語つた。弟子たちは譬喩や、印象をそのまゝに實在として受け容れたのであつた。

師はまた彼自身について考へないでは居れなかつた。彼は無限の愛を說いた。けれども彼は自分の心のうちに絶えず湧いて來る二面の剋せる愛憎の念に苦しめられた。

師は祈る時大抵、ヤコブ、ヨハネ、ペテロを伴れて山にのぼつた。彼は少か十二人の弟子をも公平に愛することはできなかつた。

師はイスカリオテのユダの嫉妬深い、ひねくれた性格を悲しんだ。彼の不幸な境遇を氣の毒だと思つた。けれども彼の心は日一日とユダから離れて行った。

師は「お前は氣の毒な男だ。」と言つて涙を流したことがあつた。けれども彼は嘘つきで、貪慾なユダを憎まずには居れないことがあつた。

「先生。私を救つて下さい。」と言つて彼の足下に泣き伏したのはユダであつた。しかしそのやうな折にもユダは「私はペテロと一緒には働けません」とも言ひ、「私はヨハネと一緒には居れません」とも言つた。ユダはマグダラのマリヤをも憎んだ。師と二人だけでイスラエルの野を歩いて、師の凡べての愛を自分一人の所有としたかつたのであつた。

師はユダのその心を憐むことはできた。しかし師の愛は一人のための愛でなくて、凡べてのイスラエル人のための愛であつた。師の愛がひろげられて行けば行くほどユダは師に對して失望しなければならなかつた。ユダは世界の人々を救ふ救世主を欲しなかつた。ユダはユダ一人のためにのみ泣き、笑ひ、愛してくれる對手が欲しかつたのであつた。

愛といふものを忘れてゐたユダの心に愛の芽生えをあたへたものは師であつた。ユダは愛を知つた。しかし師にもユダの貪慾な心は何うしても取り去ることはできなかつた。ユダは貪慾な心を持つて師の

愛の凡べてを要求した。
師の愛は限られてゐた。師はペテロを愛した。ヨハネを愛した。癩病患者の姉妹を愛した。ユダはその少かを與へられたのみであつた。
ユダは師にかくれて收稅吏と博奕を打つた。ユダは泣いて師の前に懺悔した。ユダは師にかくれて女を買つたこともあつた。ユダは師の前にすゝり上げて泣きながら懺悔した。
師は意志の弱いユダのために泣いた。ユダは心から師を愛した。けれども師が他の弟子たちと笑ひながら語つてゐるのを見たりすると、その刹那に凡べての自分の心を裏切られたやうな不快をユダは感ずるのであつた。師を愛することの强いだけ、憎むことも深かつた。
ユダはパリサイの人々のなかにはいつて行つて師を罵ることもあつた。弟子たちの口から、ユダのそのやうな忘恩的な行爲が、師の耳につたへられた。師の心はそのたんびに暗くされた。
殊にユダは或る場合には平氣で師のゐないところでは『僞善者だ！』『鬼に憑かれた男だ！』と言つて師の行爲を笑つたこともあつた。弟子たちはユダが言つた通りの言葉を師に告げ口することもあつた。しかしユダが他の弟子たちの前に師を罵つたのは、師に對してではなくて、師をば、自分等のみの所有物であるかのやうに振舞つてゐるペテロやヨハネたちに對する憎みや嫉妬からであつた。
ユダが弟子たちに師の陰口を利く場合には、無論師に對する幾分の不滿もあつた。けれどもユダが師を罵つてゐる刹那ほど、ユダは實際師を懷かしく思つてゐることはなかつたのであつた。
ユダは他の弟子たちの前で『先生が救世主なら、俺たちだつて救世主だ。』と言つて、一段高い岩の上にのぼつて、師の歩き振りを氣取つて歩きながら、みんなを笑はせた。彼自身も間拔けた聲を出して笑

つた。しかしユダは實際はいらいらしい心に泣いてゐたのであつた。

師はユダの不幸な性格に對して深い同情を持つことはできた。弟子たちが異邦人として、貪慾な男として、ユダをさげすむ時も　彼は『ユダの子供らしいところを見ろ、親なしに育つた子だからひねくれてるのだ、可愛さうに愛に飢えてゐるのだ。』と言つて弟子たちをいましめた。しかし師自身が日一日とユダから遠ざかつて行くことを、何うすることもできなかつた。

ユダほど品の宜い、氣さくな男はなかつた。ユダは無學な弟子たちの間では比較的本も讀んでゐた。ユダは師に隱れて酒場の女たちと一緒の折には子供のやうになつて踊ることもあつたが、他の男たちが酒を飮んでは、ともすれば昔の漁師や收税吏に立ちかへつて放歌亂舞する時は、ユダは滅多に醉つたことも、唄つたこともなかつた。師さへも弟子たちと一緒に唄つてゐる間でも、ユダはひとり隅の方で醒めたる眼と、孤獨の寂しい顔とをもつて人々を見てゐた。ユダは人々と一緒にうたひ、踊ることのできぬ男であつた。師はよくそのやうな折には、隅の方からユダの兩手を握つて、ユダを踊らせやうとした。ユダは眼に一つぱい涙をためて師の手をもぎはなした。もしペテロかヤコブたちが手を握るやうなごとをしやうものなら、ユダは彼等を突き飛ばすやうにして彼等から離れた。

『吾等は笛吹けど彼は踊らず！』と輕口を利いて師はやさしく微笑みながらユダの肩を擦つて葡萄の果をユダの手に握らせた。ユダは眼に一つぱい涙をためて、懷しさうに師の顔を見た。

エルサレムの羊の門に近くベテスダといふ池があつた。池の周圍には五つの廻廊があつて、そこには盲人や跛者や病人などが、池の水の動くのを見まもつてゐるのであつた。人々は池の上に白い波が立つのは、天使が下つて來てその翅で池の水を動かしてゐるのだと信じてゐた。白い波が立つた時、一番先

きに池の水に浸された者は、何のやうな病でも癒さるゝといふ傳說が昔からのこつてゐた。

　彼等の一行がはじめてエルサレムに上つて行つた時であつた。彼等は廊一つぱいに呻いてゐる病人のうち、殊に脚も腕も腐つてしまつた癩病患者を見た。その病人が寢てゐた直ぐ下の床板は腐つてしまつて、彼は石の上に直かに寢てゐた。

「幾年寢てゐるか？」と師は訊ねた。

「三十八年……」とその男が冷たい眼を輝かしながら言つた。その男の顏は鬼のやうに淒慘な色をたゝへてゐた。

　周圍は腐肉の臭氣に息詰まりさうであつた。

「なぜ池のなかにはいらぬのだ？」と師がたづねた。

「俺かはいらうと思ふと、他の奴がはいつてしまう。俺をかついで行つてくれる奴がないからだ。」とその男は腹立たしさうに言つた。

　その時、池の面に白い波が立つた。師は誰を選ぶ暇もなく、彼に一番近くゐたユダに命じて、病人をかつがせた。ユダはよろこんで腐つたその男を背負ひながら池のなかにはいつて行つた。病人の顏よりも一層ユダの顏が幸福に輝いて見えた。

　師はユダの愛すべきことを知つてゐたので、他の弟子たちが居ない折には、彼をなだめながら「みんなと打ち解けて働いては何うだ！」と言つた。

　他の弟子たちに對しても「ユダを可愛がつてやつたら何うだ！」と言つた。

　ユダも或る場合には弟子たちのうちの二人か三人かと親しくすることもあつた。ユダは他の弟子たち

にも愛してもらひたかつたのであつた。
　しかし彼の性格の底には、彼を歩一歩、破滅にみちびいて行くところの弱點があつた。ユダはヨハネをも愛し、マタイをも愛した。けれどもユダはヨハネの前ではマタイの陰口を利いた。またマタイの前ではヨハネの惡態をついた。人に愛せらるゝためにユダは、他人の陰口を聽く事を喜ぶ人間の弱點をいつも利用しやうとかゝつてゐたのであつた。凡べての人に愛せられたいために、ユダは自然凡べての人を敵としなければならないやうなやりかたをしてゐたのであつた。
『ユダは愛すべき男だ。けれども大事を托することのできぬ男だ。』といふ感じが、何時とはなしに師の心に喰ひ入つてしまつたのであつた。一人を愛することよりは萬人を愛せんとする大事業の方が師には尊く思はれたのであつた。
　師はぢいつとユダの顔を見つめることがあつた。ユダの澄み切つた眼の底には蛇のやうな賢さがあつた。それは惡魔の賢さであつた。ユダの聲は女性的であつた。綿々として斷えがたい感傷があつた。けれどもその後には妖女の殘忍さが潜んでゐた。
『この男ほど感じの宜い男はない。けれどもこの男ほど惡魔に憑かれ易い男はない。』師はさう思つてユダの顔を見た。
『最も人間的な、最も惡魔的な可憐な男！』師は涙ぐましい心でユダを見た。
『愛せよ、どん底まで愛せよ。』師の心はユダを見るたんびにさう叫ぶのであつた。しかし彼の心はそれほど一方に於てはユダから遠ざからうとしてゐたのであつた。
　師はユダの髮を接吻した。師の眼には涙が輝いてゐた。しかしその刹那に師の心にはユダを警戒しや

うとする心が湧くのであつた。

ユダを見るごとに師の心は苦痛を覺えて來た。ユダさへゐなかつたら、師は師自身の愛を完きものと考へたかも知れない。けれどもユダに對する時、師の愛は最も眞劍でありながら、最も不純なものであるやうに思はれた。師にはユダは師の愛の成長を破壞するために惡魔によつて遣はされた人間のやうにも想はれるのであつた。

しかし何にも考へてゐないやうな無邪氣な顔のユダに接吻をあたへる刹那に、師は幾度か「ユダこそ眞人間で、俺は惡魔ではないだらうか？」と考へ恐れることもあつた。ユダは師にとつては恐ろしい誘惑であり、試煉であつた。

師はユダを弟子としたことを後悔することもあつた。

×

最後のエルサレム上りが來た。マグダラのマリヤをはじめ數人の女たちがいつも彼の周圍に集まつてゐて、師の面倒を見た。なかには富める女もあつて、彼の傳道の經濟的方面を助けた。彼はこれ等の女たちに對しても、自分の眞の妹に對するより一層親しみを感じて接近してゐた。

たゞ師は時々女たちと親しく語つてゐる際に、無花果や、檉柳の蔭から彼等の方を見てゐるユダの眼が不快でならなかつた。それは彼が埃及から歸つて以來久しい間殆んど意識しなかつたところの、異性間の懊惱や嫉妬に似た焦燥を師の心に喚び起させるのであつた。

このころ弟子たちの間には童貞といふことや結婚といふことなどが問題になつた。

「一人で居ることは最も善い。けれどもそれができなければ二人になることも善い。」と師は弟子たちに

話した。師はマグダラのマリヤの淫艶な皮膚や髪から來る異性の誘惑に對しても、妹に對するほどの純潔な心持ちで接することができた。

しかし或る日ユダが蒼ざめた顔をして彼の前に懺悔した。

「先生！」ユダは彼の前に躰を投げ出して泣いてゐた。

ユダはマグダラのマリヤを戀ひしてゐたのであつた。彼は暗がりを歩いてゐた時、狂人のやうになつてマリヤの唇に接吻しやうとしたのであつた。

師はユダの懺悔を聽いた。師は懺悔することによつて人間の何のやうな罪惡も救はるゝことを信じてゐた。

「このやうに度々罪を犯しても救はれるでせうか？」とユダが訊ねた時、彼は「幾度罪を犯しても懺悔することによつて凡べて救はるゝ」と言つた。

「神は無限に寛大である。神によりて救はるゝ人間もまた神の如く寛大に罪をゆるさなければならぬ。」と言つて、師は暗にユダの利己的な心を挽めやうとした。

「それならば幾度くらゐ人をゆるしますか？」とユダが訊ねた。

「……」彼は默つてユダの顔を見つめてゐた。

「七度くらゐですか？」とユダが訊ねた。

「更に七十倍せろ。」と師が答へた。

ユダは頭を垂れたまゝ木陰に立ちつくして考へ込んでゐた。

そのやうに寛大な愛を説いた師の心が、このころになつてゆるぎはじめたのであつた。ユダの懺悔を

聽いてからこつち、師の心の底にはともすれば戀愛に似た心のいらいらしさや、猜疑の念が湧いて來るのであつた。師は一層ユダを恐るゝやうになつた。

師はそのやうな折は、たゞ一人で山にはいつて祈つた。

しかし祈つても祈つても、彼の心の底に潜んでゐた惡魔的な心が滅されないことがあつた。女の白い皮膚や、ユダの蛇のやうな眼が師の祈りの靜觀の世界にあさましくも動いて來ることがあつた。

×

逾越節が近づいて來た。

日一日と彼等はエルサレムに近づいてゐた。

師は途中でも幾度かひとりで山にはいつて祈つた。彼の面には暗い影が動いて行つた。

彼は再び刹那々々に彼を脅かしてゐる死について考へないでは居れなかつた。彼は彼の周圍に夜となく晝となく藏されてゐる血なまぐさい劒の閃を想像した。

一日一日と彼の信仰が搖ぎはじめた。彼の身邊に恐ろしい毒刄が藏されてゐるのを知つた刹那、彼がいだいてゐた永生や神の國の面影が、彼の心から霧のやうにかすかになつて行くのであつた。

彼が直感を通して信じてゐた神の世界は、現實目前の死に脅かさるゝ時、極めて不安な影を喚び起して來たのであつた。

「何故こんなに死が怖いのだ！」彼は自らを叱るやうに詰つた。彼は自分自身に對して「汝、信仰うすき者よ。」と叫ばなければならなかつた。

彼は村里を恐れて、大抵は弟子たちと一緒にこつそりと山に寢ることが多かつた。

嘗てたゞ一人で森や野をさ迷ひあるきながら見た空の星が、數年前と同じやうに、同じ天の位置に輝いてゐた。彼は空を見、風の聲を聽いてゐる間に、數年前の無智な放浪者に立ちかへつてゐるのであつた。

野の香ひ、土の香ひ……それは彼が數年來一日でも忘るゝ事のできなかつた不思議な蠱惑であつた。放浪者的な野性と、詩人風な夢を追ふ心を豐か過ぎるほど豐かに持つてゐた彼は、一日でも野の風に吹かれず、草の香ひを嗅がない折には、窒息するやうな苦痛を感じたのであつた。

彼は麥の畑を横切つて歩いた。湖から湖をわたつて人々と語つた。彼は無花果の下に夜を更かした。星の下に寐た。彼ほど大地そのものゝ懷に抱かれたまゝ眠ることを喜んだものはなかつた。

「野良の子!」父ヨセフが呼んだやうに、彼は一生野の蠱惑からのがれることはできなかつた。

彼は自分の周圍に集まつて來るまゝに弟子たちや女たちを連れて、再び「野良の子」となつたのであつた。

しかし彼が不圖自分自身を顧みた時、彼は恐ろしい生活の變化が自分の周圍に起つてゐるのを氣付いたのであつた。彼は人間らしい弱さや涙をさへ隱さねばならぬ師といふ立場に置かれてゐたのであつた。

彼は嘗ては草の葉を滑り落ちる露一つにも限りもない自然の驚異や禮讚の心を感じたのであつた。彼は眞夜中に草の床を跳ね起きて、まるで狂人のやうになつて神をたゝへたのであつた。

森は暗かつた。悠久な星の光のみが遠く高く煌いてゐた。彼はその祈りに對して何一つ與へらるゝことのない空虚な夜の空を見つめてゐた。

森の暗を通して、葉が落ち、露が落ちて行く仄かな音が聞えた。

彼は再た起き上つて自然の不可思議を驚きつゝ、讃嘆しつゝ祈つた。

彼に對して、何等神の聲も與へられなかつた。彼は暗い、涯しもない大自然のなかにたゞ一人眼さめてゐる自分自身を見出した。

「自然は限りもなく廣く、暗く、人間は永遠に星の光から離れて、孤獨な寂寞の底に蹴落されてゐる！」

彼は暗い草の上に跪いてはさう思ひながら空を見上げるのであつた。

空も星も、大地も悉く眠つてゐた。彼は世界にたゞ一人眼ざめて、孤獨と不可思議な人生の寂寞を泣く自分を見出したのであつた。

父ヨセフの家を出奔して以來彼は一夜だつて、このやうな眞夜中の祈りを經驗しないことはなかつた。

その祈りは最も絕望的な人間の祈りであつた。けれども彼は一日でもその祈りなしには生きて居れなかつた。

鳥は悲しい聲をしぼつて鳴く。けれども鳥にとつては悲しい聲の祈りこそ只一つの生活である。

彼には眞夜中の絕望的な悲しい祈りほど尊いものはなかつた。彼は大地に涙をそゝぎながら祈つた。

彼の絕望的な涙が地を濕ほせば濕ほすほど、彼は大地を愛する心の强く深く、自分のうちにわいて來るのを感じた。

彼は自分の涙の祈りに對して、天や星が高く無言のまゝに遠ざかつて行けば行くほど、天を、星を懷かしむ心の、または天を星をいたみかなしむ心の自分のうちに更に强く燃えて來るのを感ずるのであつた。

彼は無智な小鳥が悲しい歌をうたひながら死んで行くやうに、わけもなしに驚かるゝ自然、餘りに沈默と寂寞とにつゝまれた自然に對して、あこがれ、おのゝき、絶望しつゝ、悲しい祈りのなかに一生を終るべきであつた。

野のなかの孤獨な寂しい悠久な祈りの歌をうたふべき小鳥の運命に、彼は一生をさゝぐべきであつた。人生は、自然は、寂しさが故に、悠久なるが故に彼の心に無限の誘惑を感じさせた。心ゆくまで人生と自然の悠久と寂寞とを悲しむ涙の他に、彼にはほんとうな生活はなかつたのであつた。彼は森の子であつた。小鳥の友人であつた。

しかし『イスラエルの民を救ふものは……！』と言つた野の豫言者の言葉と、その折の不可思議な凝視は、彼を驅つて、野から人間の巷に追ひやつたのであつた。

彼は人々の間に道を說き、愛を說いた。

彼は嘗て經驗したことのないほどな人間と人間との愛執、人間の魂と人間の魂との溫かい抱擁を、この數年の間に知つたのであつた。嘗て彼が野の草に對して、微風に對して、薄明の空に對して、夜の大地に對して感じてゐた驚異や懷かしさを、彼は人間の心のなかに見出したのであつた。

彼は人間の心と心との間に無限に押しひろめられて行く愛を感じた。愛をもつて凡べての生けるものの中心の力と信じた。不可思議な、無限な生命（いのち）と信じた。

人々は野のなかに彼の姿を見出す每に『救世主！』と叫んだ。そして彼の無限な愛をもとめた。

彼は或る刹那にはいやでも自分自身を『救世主！』と信じないでは居れなかつた。無限な人間的な愛の力強さや尊さを信じないでは居れなかつた。

彼は三年の間殆んど人々の聲と期待とに醉はされてゐたのであつた。

しかし三年の時間が經つてしまつた。時間はやがて、狂醉者のやうに自己を信じてゐた彼の心からむざむざと彼の自信を、彼の力を、彼の愛の深さを滅してしまつた。

彼の周圍に危險が迫つて來れば來るほど弟子たちは彼を疑ひはじめた。

「先生、あなたはほんとうに救世主ですか？」と訊ねた弟子もあつた。

「吾々の師よりも、尚つと偉大な學者がエルサレムの殿堂には幾人も居る！」と叫んだ弟子もあつた。

彼の心は日に日に暗くされた。

彼は弟子たちの言葉を不快に思つた。けれども彼は何うしても弟子たちを叱ることはできなかつた彼は全く無學な、何の信仰も何の力も持つてゐない自分自身を餘りに明かに見出すやうになつてゐたからであつた。

彼は絶望から絶望の底に沈んで行かなければならなかつた。

×

野の香ひ！土の香ひ！數年前の大地の香ひがさながらに彼の胸によみがへつて來るのであつた。それは久しく忘れられてゐたほんとうの自分自身の姿を見出し得た懐しさを彼の心に喚び起すものであつた。

彼は一つ一つの草の葉を吹いて來る靜な夜の微風を感じた。梢と梢の擦れ合ふ靜な聲を聽いた。葉と葉の私語を聽いた。彼は籠からのがれ出た小鳥が森の空氣を見出したやうに、露を含んだ冷たい夜風を涙ぐましい心で呼吸した。

彼が母の懐に抱かれて見知らぬ旅の男を見た橄欖の森に輝いてゐた夜の星が昔のまゝの神秘さと寂寞さと悠久な影とをたゝえて彼の眼によみがへつて來た。

地の涯から涯までが沈默の魅惑をもつて彼の魂を悠久な暗の世界へ誘はうとするのであつた。

森の木蔭で夜の鳥の聲が聞えた。

彼は涯しもない夢の旅をつゞけた數年前の『野良の子！』となつて、再び霧のなかに、草のなかに、野から野とたゞ一人でほしいまゝに經めぐつて歩きたかつた。それが彼にとつてはほんとうな生き方であるやうな氣がしてならなかつた。

父に背いて行つた時も、母に憎まれて隠れた時も、森は、野は、凡べての自然は、ほしいまゝに彼の放浪者的な魂のどん底まで彼をよろこばせてくれた。彼は再びまつしぐらに森の悲しみと寂しみのなかに還らうとしたのであつた。

彼は人間の巷に走つた。そこでは彼は人間の愛を知つた。けれどもそこには僞りがあり、憎みがあり、嫉妬があり、劍があり、陰謀があり、死があつた。

彼は森を捨て、野を捨てゝ行つた自分を悲しんだ。蔑すんだ。

彼は何もかも、過去の一切を忘れて、野のなかに還らうと思つた。

彼は夢から醒めたもののやうになつて、大地の上に跪いた。

彼は數年前の寂しい心と、悠久な孤獨とを感じながら祈つた。

彼は數年振りで無智な放浪者の寂しい涙を流して祈つたのであつた。それは耐へがたく素直な懐かしい涙につゝまれた祈りであつた。

彼はその刹那、死の恐怖からも、弟子たちの不信からも、明日の不安からも全くのがれてゐたのであつた。

『森の子は森にかへつた！』彼は森の巣に歸つたやうな氣易さと自由とを感じながら大地に跪いてゐた。彼は祈りを終つて起ち上つた。

しかし彼の心は再び言ひがたい悒鬱に取りつかれた。彼は既に一人の放浪者として森に歸るには、餘りに重い鎖につながれてゐる自分自身を見出さなければならなかつた。

彼は暗い草の上を見た。そこには彼の周圍に恰かも母の懷に抱かれた嬰兒のやうに安心しきつて眠つてゐる弟子たちを見出さなければならなかつた。

ペテロもヤコブもユダも草を枕として快い鼾さへ洩らしてゐた。晝の間は何かと、罵つたり、妬んだりし合つてゐる男たちが、まるで子供のやうに罪もない顏をして眠つてゐた。ペテロの胸にはユダの手が投げかけられてゐたりした。

女たちは女たちで小羊のやうに一緒に抱き合つて眠つてゐた。彼は月の光りに照らされたマグダラのマリヤの白い顏を見た。嘗て星のやうな寶石をつらねられてゐた髮は、何の飾りもなく草の上に投げ出されて、彼女の白い腕に抱かれてゐた。嘗て輝いてゐた衣は一枚の黒い衣にかへられてゐた。

『彼女こそ天使だ！』彼は神に信賴し切つたマリヤの忍從と信賴に充ちた姿を見ながらさう思ふのであつた。彼はマリヤの足下に跪いて泣きたいとさへ思つた。

夜が更けて行つた。月の光が白く流れてゐた。草の上にうまいした十二人の男と四人の女たちは、ほんとうにヘロデ王の榮華も及ばない野の百合の生活そのものに還つてゐたのであつた。

「何といふ尊い信頼であらう！」
彼は一人一人の弟子の額に接吻してやりたいやうな心持になつた。
彼は何うしても眠れなかつた。村外れの蹄の音を聽いても彼の胸は波打つた。
「俺は最も臆病な、最も不信な人間であつた！」彼はさう思つて草の上に起き上つてゐた。

×

夜が明けた。野の草を流るゝ靜かな風に吹かれながら彼等は祈つた。
彼等一行の姿を野の中に見出した村の人々は「ホザナよ！ホザナよ！」と叫んだ。病人は師の衣にさわつた。盲人は彼の手に接吻した。彼は凡べての疑惑を振り捨てゝ、力强い信仰に立ちかへらなければならなかつた。彼の頭上に太陽が輝き、天上から神の聲が響いて來るやうにさへ思はれた。夜つぴて女のやうに弱い心を抱いてゐた彼は、夜が明けると同時に再び殉敎者のやうな强い心に立ちかへるのであつた。
村の入り口などで師はよく少年の群を見た。少年ほど彼にとつて嬉しいものはなかつた。彼等の眼は何ものにも囚へられぬ自由奔放な夢の世界を見つめてゐた。彼等の唇は直ちに永遠の神の世界をうたつてゐた。彼はぢいつと少年の群を見つめてゐる間に、殆んど彼自身を忘れてゐた。
「天國はこゝにある！」彼は嬉戯してゐる少年の群を見てはさう思ふのであつた。そこでは富の觀念もなく、名譽の觀念もなく、死の恐怖もなかつた。そこでは殆んど彼と我との差別の考さへなかつた。そこでは犬も羊も人間も差別を忘れられてゐた。小鳥は彼等の唄のリズムを縫つて翔つた。野の花は彼等の舞踊の足にもつれて薫つてゐた。
彼等は決して彼を救世主とは呼ばなかつた。彼等は彼を『おぢさん！』と呼んだ。彼等は彼に對して

何をも要求しなかつた。彼等は時として彼に葡萄の果を與へた。しかしそれはさゝぐる心からではなかつた。見知らぬ旅人に果實を分つ心からであつた。仲間の者にパンを分つ心からであつた。何の要求をも、何のたくらみもない笑や、凝視が、少年によりて彼にあたへられた。

それはほんとうに人間の魂が人間の魂に飛び込んで行く、魂の嬉戲であつた。

「神の國は嬰兒のうちにある！」彼はさう思つて、いつまでも少年たちの顏を見つめてゐた。

エルサレムから二里ばかり手前の道を歩いてゐる時であつた。彼の心は暗くされてゐた。彼は歩一歩死に近づくことを豫覺してゐたかのやうに重い足を引き摺りながら埃の道を歩いてゐた。彼は幾度も引きかへしてしまはうかとさへ思つた。その時であつた。彼は彼の方へ近づいて來る若い母と嬰兒とを見た。嬰兒は彼を見て微笑んだ。師はその刹那に夢中になつてその子の柔かい手を握つて、口をつけた。嬰兒は師の頭を幾度も小ひさな手でたゝいては笑つた。

「何時までも生きてゐたい。そして嬰兒のやうな心持で人々を抱き、愛して見たい！」と師はおもつた。死の影が彼の心を暗くすればするほど、彼は生きることのよろこびを想はずには居れなかつた。

彼が橄欖山の麓まで歩いて行つた時であつた。「救世主が來た！」といふ聲が町にも村にも傳はつて、輝いた麥や辛子菜の畑の間を走りながら人々が彼の方へ集まつて來た。

眞つ先きに近づいて來たのは驢馬と驢馬の子を連れた女であつた。ユダはその女の驢馬を取つて自分の衣を脫いで、驢馬の背に布いて師を乘せた。道に沿ふて群がつた人々は棕櫚の葉を手に握つて師をたゝへた。或る者は自分の衣や頸飾の寶石などを道に投げて彼を迎へた。

「ダビテの裔ホザナよ！」列樹からも、畑からも、街からも群集は狂喜して叫んだ。

「主の名によりて來るものはさいはひなり、いとたかきところにホザナよ！」歌の聲が響いた。

群集の聲にあはせて弟子たちも歌をうたひながら城の方へ歩いて行つた。

弟子たちは感極まつて慟哭するものもあつた。ユダは驢馬の口を取りながら幾度か師を見上げた。師の眼とユダの眼がかち合つた時、師もユダも微笑んだ。彼等の眼にも涙がたゝへられてゐた。逾越節のための小羊が家の傍につながれてゐたり、小羊の血を塗つた柱が春の光に照らされてゐたりした。軒毎に春の風が吹いてゐた。

彼は群集にたゝへられながらエルサレムの殿堂にはいつて行つた。

彼は神の名によつて兩換人の案や、鳩を賣つてゐる男たちの椅子や、物賣りの天幕などを壞つてしまつた。

彼の一生のうちこの日ほど力强い彼を見たことはなかつた。彼は敵のなかにはいりながら正面から敵を罵つた。彼はエルサレムの殿堂の前に立つて、殿堂を破壞すべしと獅子吼した。彼は學者や祭司やパリサイの徒を前に於いて哲學者や、偶像禮拜者を罵つた。彼は長者の前に立つて、富める者の天國に入るのは駱駝が針の孔をくゞるより困難であることを說いた。

彼は宮のなかで語つてゐる數人の學者たちを見た。それはみなユダヤ出の男たちであつた。彼が近づいて行つたことを氣付いたので、彼等は一層聲を高くして議論をしてゐた。彼等は大抵ギリシャ語を使つてゐた。

中央の卓に凭りかゝつてゐた豚のやうに肥つた男は、十五六年も前にギリシャに留學してゐたのであつたが、今でも人の前では大抵ギリシャ語をつかつてゐた。またその隣りに立つてゐた男はユダヤの言

葉で話すにも、外國語風のアクセントを使つて語つてゐた。

彼等の唇からはソクラテスだの、プラトーだのといふ名が繰りかへされてゐた。

彼等は、師を見て『ナザレの男！』と言つたきりで、振り向きもしないで、お互に何か語りながら笑つた。

師の周圍には漁師だの、農夫だの、無智な男や子供たちが集まつて來た。彼は宮のなかに坐つてゐる男たちの面前で『愚なる學者よ！』と叫んだ。彼は彼の衣にさわつてゐた少年を抱いて『嬰兒の心を持つ者だけが天國に入る！』と說いた。

彼は古いエルサレムの破壞者であつた。

彼は古いエルサレムが生んだあらゆる學者と宗敎と虛僞と奪とを一日で破壞してしまつた。彼の前には羅馬の權威も、ギリシャの哲學も、長者の富も何の力をも持たなかつた。

彼は野から生れ來たまゝの人間力の表現の絕頂であつた。彼は恐ろしい巨人の力をもつて凡べてのものを破壞した。

彼は自分自身の勇氣に醉ひながらエルサレムの町を出て郊外のベタニヤに行つた。

×

ベタニヤにはシモンといふ癩病人がゐて、その二人の妹たちは師がエルサレムに來るごとに忠實に師に仕へたのであつた。

シモンの家に歸つてからの師はまたもとの弱い人間に立ちかへつてしまふのであつた。

弟子たちは村の方へ食ひ物を買ひに行つてゐたので、家には死人のやうになつて床につききりのシモンが眠つてゐる傍には、師が跪いて祈つてゐた。

「寂しい。たまらなく寂しい！」さう言つて師は寢床の上に體を投げた。かと思ふと、彼はまた起き上つて、室のなかを歩きながら、寢てゐるシモンの手を握つて「シモン！お前とわたしと何つちが幸福であつたらう！」とも言つた。

　マリヤやマルタや、その他の女たちは師のために寢床をかざつてやつたり、彼の衣の塵を拂つてやつたりした。彼が白い花が好きであるといふので、わざ／＼山まで出かけて行つて、白い花をかざつたりした女もあつた。彼の足に香膏を沃いだものもあつた。

　彼は周圍の女たちにはげまさるればはげまさるゝほど死の恐怖を強く感じた。生きるといふことが限りもなくなつかしかつた。

「ユダ！」といふ聲が師の耳に聞えた。母の懷にいだかれた嬰兒のやうにして、女たちにみとられながら寢てゐた師は、何かに驚いたもの〻やうに急いで寢床の上に起き上つた。

　師は、もし、他の弟子たちの名がその時、呼ばれたのであつたなら、恐らくそのまゝ眠つてゐたにちがひないと自分でもおもつた。彼は自分自身の心の片隅にひそんでゐるユダを恐れる暗い影を何うすることもできなかつた。

　ユダはその時、祭司や學者たちの詭計を聞き出したので、急いで師に知らせに來たのであつたが、師がユダを恐れてゐるやうなその態度はユダの心にも冷たい影を投げたのであつた。ユダは靜かに踵をかへして村の方へ出て行つてしまつた。

　ユダはあてもなく森のなかを歩いてゐた。

　ユダは幾度か草の上に身を投げ出して泣いた。

ユダは師を愛した。ユダは『俺ほど心から師を愛したものがあらうか！』とも想つた。

ユダはまた師がユダを愛してゐることを知つてゐた。けれども同時に師が自分を恐れてゐることをも知つた。彼は師が自分を恐れ、遠ざけやうとしてゐる原因についても知つた。『それならば何故、師は私の心を作りかへてくれることはしないか。救世主であるならば何故私の弱い心を強くしてはくれぬか？醜い心を何故に美しくしてはくれぬか？』ともユダは思つた。師をうらみたくさへなつた。

『師を捨てやう。自分ひとりで故郷に歸らう！』とも考へた。けれども師ほどユダにやさしい愛の溫みを敎へてくれた者はなかつた。世界のどこを歩いても師の眼ほど、師の聲ほど、愛に充ちたものはなかつた、生命に充ちたものはなかつた。

『師を捨てゝ何處に行かう！』

ユダは草の上に突つ臥して泣いた。

犬が遠くからまたゝきはじめた。ユダは再びシモンの家に歸つて行つた。

窓からは明りが戶外の方にもれてゐた。かすかな夜風につれて土の香が漂ふてゐた。麥の畑も、葡萄の畑も霧につゝまれて、森の方からは夜の鳥の聲などが聞えて來た。

窓からは女たちの靜かな歌の聲が流れて來た。ユダは暗がりのなかに立ちとまつてゐた。室にはいつて行つて、女たちの自分に對する冷たい眼を見るのがユダには苦しかつた。

ユダは思ひ切つて室のなかにはいつて行つた。シモンが寢床の上に橫になつてゐる他には、女たちばかりであつた。

『先生は？』とユダがたづねた。

「先生は、多分お祈に行かれたのでせう！」とマリヤが言つた。

「お一人で行かれたのでせうか？」とユダがたづねた。ユダの聲はふるへてゐた。

「お一人ではないやうでした。」一人の女の聲が室のなかゝら聞えて來た。

「ペテロ、ヤコブ……さうでしたね？」と他の女の聲が聞えた。

ユダの心は一層暗くされた。

女たちは薄暗い燈の前で豫言書を讀みはじめた。マリヤの聲であらう、裏の方へ開いた窓際から澄んだ歌の聲が響いて來た。

ユダの心にはまた獸的な暗い影が動いて來た。

……………………

ユダが草の野で祈つてゐた時は、師もまたペテロとヤコブをつれて行つて、二人を十五六歩山の下の方に留めて置いて、自分ひとりで山の上に行つて祈つてゐたのであつた。師は夜明少し前まで地にぬかづいて祈つてゐた。師の祈のなかにはイスカリオテのユダの名が幾度もくりかへされた。

×

逾越節（すぎこしのいはひ）の第一日が來た。

師は弟子たちと一緒にエルサレムの町にはいつて行つた。

道で水甕を持つた女に出逢つたので、師はその女に逾越節（すぎこしのいはひ）の晩餐のことを賴んだ。その女はよろこんで彼と十二人の弟子とを案内した。

廣い二階の室であつた。

夕暮だつたので、室のなかは既う暗かつた。

羔を煮る油の香などが階下の方からかすかに、漂ふて來たりした。方々の家の窓からは祭らしい明るい燈の光がまたゝき初めた。祭りの歌の聲などが何處からともなく響いて來た。

卓の上には酒が置かれ、『酵母入れぬパン』が置かれた。

師ははじめからその日は默りこんでゐた。弟子たちも近ころになく打ち沈んでゐた。弟子の一人が杯を落した音が、室中に響いた。それを拾ひ上げやうとした弟子の手が滑つて再び杯を取り落さうとしたが、今度は巧く取り落さなかつた。その手つきがまるで輕業師のやうだつたので、それを見てゐた二三人の弟子たちが笑つた。少し離れて弟子たちの小ひさな騷ぎを見てゐた師は寂しさうに笑つたが、何かまた考へ込んだやうにして俯向いたり、時々暮れて行く戸外を見たりした。

エルサレムの町の學者や祭司たちの詭計については彼も弟子たちも不安を抱いてゐたので、みんなの頭のなかには『最後の逾越節！』かも知れぬといふやうな豫覺が動いてゐた。室中が自然陰氣になりがちであつた。室の空氣さへ呼吸を壓迫するほど重苦しかつた。ペテロは立つて行つて窓を明けたりした。

『何處かで鳥が啼いてゐますよ……』とヤコブが言つた。

『何の鳥だらう。黒鳥か知ら？』とペテロが窓の傍に立つてゐて言つた。

『黒鳥はまだ啼くまい。夜鶯かも知れぬ……』と誰かが言つた。

師は弟子たちの話を聽きながら、窓の外に注意を拂つて鳥の聲を聞かうとしてゐるやうに見えた。

羔の肉が人々の前に並べられて間もなくであつた。水甕をはこびながら、彼等をこの家に案内して來た女が、卓の端に座つてゐた一人の弟子の耳に口をつけてさゝやいた。

師は弟子の顏色が蒼くなつて顫へたのを見て、彼の危險が近づいて來たことを知つた。弟子が立つて彼の方へ歩いて來やうとしたのを見て、彼は手を擧げてその弟子を止めた。そして彼はその弟子に命じて盥に水を運ばせた。彼は衣を脫いで、一人一人の弟子の足を洗つてやつた。

師の顏は幾分の光明を認めたやうに輝いて來た。彼は弟子たちの前に跪いて彼等に詫び、彼等に感謝しなければならぬと思つた。師はその刹那ほど弟子たちを愛し得たことはなかつた。師はその刹那に初めてユダに對しても凡べてを抛つて、最も純潔な愛によつて彼を抱き得ることを信じた。

「最も惡まれ、最も愛せられた人間であつた！」と師は自分自身の生涯を始めて意識することができた。師の心のうちには再び勇氣が漲つて來た。

師は再び衣を着て卓についた。

師は一人一人の弟子のためにパンを割いた。

「私の肉だ！」と言つて弟子たちに與へた。その聲は低く、寂しく、短かゝつたが、最もやさしい、親しみ深い聲であつた。

師は更に杯を取つて一人一人の弟子にあたへた。

「私の血だ！」と言つた。さすがに室中が嚴肅な感じに壓へつけられた。

師は更に弟子たちの興奮した顏を見た。ユダの眼が幸福さうに輝いてゐるのが師には耐らなく嬉しかつた。

「今夜、恐らく私は敵の手にわたさるゝであらう！」と言つた師の言葉は暗かつた。弟子たちの間には絕望と同時に殺氣がみなぎつて來た。咽び泣いたものもあつた。

『誰が先生を渡しませう！』と叫んで、彼の手に接吻したものもあつた。

『しかし、人間は弱い、その場になつて見なければわからない。たとへお前たちであらうとも、その刹那まではお前たち自身の心を信ずることはできない。』師は落ち着いた、しかし絶望的な調子で言つた。

『先生、私たちの間に誰が先生を？』とマタイが語氣を強めて行つた。マタイの眼は涙に輝いてゐた。

『それは喩譬だが……』師はさう言つて、寂しさうに笑つた。恰度その時であつた、師は彼の横に立つてゐたイスカリオテのユダの不安な顔を見た。それは數分前の輝かなユダの顔とはまるで異つた顔であつた。師はいつものユダのひねくれた、疑り深い眼の光りを見出したのであつた。師は最後の刹那にこの不快な感じを抱かなければならぬことを腹立たしく思つた。

師は何うかしてユダに對するその刹那的な憎惡を捨てたいと思つた。師は今日までユダに對して最も多く詫びなければならぬ心の罪を作つてゐたことを思ひ出した。師はユダから救はれなければならぬと思つた。

ユダを最も強く愛する心をあらはすために師は皿のなかの炸をつけて肉の一ときれをユダに與へた。しかし肉を食つてゐるユダの顔を見つめてゐる間に、彼は何うしてもユダを憎まずには居れなくなつた。ユダの蛇のやうに惡賢い眼や、羅馬人の貪慾を想はせるやうな突つ張つた頬骨が、過去のいろいろな不快な聯想を師にあたへた。師は第二の肉を挿んだ釵を投げ出すやうに卓の上に置いた。

弟子たちはひそかにユダの方を偸見しながらさゝやいた。そして彼等は『先生、最後まで私はあなたを離れません！』と言つて、師を取り巻いてしまつた。ユダは卓の隅の方へひとりで暗い心を抱いて坐つて、この光景を見てゐた。

ユダには、師を自分等のみの所有のやうに振舞つてゐるペテロやヨハネの振舞が腹立たしかつた。

「もし、この中に先生を賣るやうなものがあるなら、私が……」と言つてペテロが劒を拔く眞似をして、ユダを見た刹那に、ユダの心のなかには激しい反抗心が湧いて來た。

「ふーむ……」ユダは彼等の眞劒さや、狼狽さを冷笑してやりたいやうな氣になつた。そして絶望的な窮地に陷つた猛獸のやうに冷酷な甕落ちつきに落ちついた目で人々を見た。

「彼奴等の鼻をあかしてやつたら……」と思ふと、ユダは大きな聲を絞り出して泣きたいやうな、笑ひたいやうな氣になつた。全身が無性にわな〱と顫へた。

「何時だらう?」と師が訪ねた。

「眞夜中近くでせう。」と言ひながら弟子の一人が窓を明けて空を見上げた。

「少し寒くなつて來たやうだ。」と言つたものがあつた。

「金嚢を持たぬものは金嚢を持て。旅袋も準備しろ。衣を賣つて劍を買へ。」堅い決心を面に示しながら師は言つた。室中の人々の心はこの上もなく緊張した。

「二口の劍がありますが!」とペテロが言つた。

「それで宜い……」と師が言つた。

師は先に立つて室を出た。みんなは夢中になつて興奮してゐた。弟子たちも後から痕いて出た。弟子たちは半ば絶望的に聲を上げて歌をうたひながら室を出て行つた。ユダはだんまりこんで最後に室を出た。

一歩でも近く師に寄り沿ふやうに、先を爭はんばかりにして歩いてゐる弟子たちの姿が、ユダには腹立たしかつた。冷笑をあびせかけてやりたいやうな氣にもなつた。

ユダは暗の道を後から痕いて歩いて行つた。白い衣を着た男たちの姿が暗いゲッセマネの木立のなかに吸ひこまれて行くのであつた。

ユダはその間一度も誰からも聲をかけられなかつた。ユダの心は泣くばかりに寂しかつた。人々の姿は森の暗のなかにかくれてしまつた。

ユダはもう、一歩でも歩いて行くことはできないほど疲れてしまつてゐた。彼は流れの畔に立ち止つて、やがて草の上にしやがんでしまつた。

世界中が自分を憎み、自分を捨てゝしまつたやうな寂しい感じが、ユダの心の底から底からと涙を誘ふて來るのであつた。

×

「先生、何處までお出でになりますか？」弟子たちは幾度も同じ問ひをくりかへすのであつた。彼等はだんまりこんだまゝ、師の白い衣を目あてに森のなかを歩いて行つた。

弟子たちの心には色々の不安が湧いて來た彼等にとつては師は生命であり、愛であり、神の國であつた。しかし彼等は眼の前に師を失はうとしてゐる。彼等の神の國も生命も滅びやうとしてゐる。彼等は惑はずには居れなかつた。

彼等は歩くことさへも臆劫になつた。

師はずん／＼と森のなかを歩いて行つた。

「先生、何處までおいでになります？」とまた弟子の一人のトマスが言つた。

「父の國へ……」と師が言つた。

「父の國は何處です？」ピリポが訊ねた。

「私は父である……私を愛するものは父を愛するのである……私は永遠に生きてゐる……私は眞理である、道である、愛である……私は永遠にお前たちの裏に生きる……私はお前たちを捨て、孤子とはしない。いつもお前たちと一緒に生きてゐる……」と言ひながら師は歩みをつゞけて行つた。

師の信仰は焔のやうに燃えた。師は信仰に醉つた。師は何ものをも恐れなかつた。弟子と彼自身の心とがまつたく一つになつて永遠に愛のうちに生きてゐることを感じた。

しかし、そのやうな白熱した心持ちは長くはつゞかなかつた。

師は弟子たちのうちにユダがゐないことを氣付いた。彼の心は暗くされた。燃えるやうな信仰が根柢から覆されたやうな絶望を感じた。

「俺はたゞ一人の人をも心から愛することはできなかつた！」と師は獨語ちた。ユダの姿、ナザレの母の姿、ナザレの兄弟や妹たちの姿、死んだヨセフの姿、嘗て母に抱かれて橄欖の森に見た旅の男の姿などが彼の眼に映つて來た。彼は絶望的な吐息をした。

「俺は醉つてゐたのであらうか？」

「俺は自分を過大に信じてゐたのであらうか？」

「俺は母を愛したか、父を？眞實の俺の父を……？」

「何故、俺はナザレの小ひさな家の子として母を愛さなかつたか？兄弟と一緒に働かなかつたか？」

「私が死んだら、ナザレへ歸つて母の面倒を見てくれ。」師はマタイを呼んで言つた。母に對する彼の愛は一生のうち、この時ほど强く燃えたことはなかつた。

『しかし俺には餘り恐ろしい力が心のうちに動いてゐる。俺はそれを信ずる。しかし誰を眞實に愛し得たか……』

『何といふ偉大な空であらう。野であらう。何といふ美しい人間の心であらう。ペテロ……トマス……ヨハネ……マリヤ……ユダ……』

『人間の心を措いて、大空を措いて、野を措いて、この生命を措いて何處に神の國があらう！』

彼は生きてゐたかつた。彼は死を恐れた。

彼は跪いて祈つた。汗が額から滴り落ちた。

『………』彼は絶望の聲を絞つて祈つた。

×

師は起つて弟子たちのところに行つた。弟子たちは疲れて草の上に眠つてゐた。彼は弟子たちをゆすり起した。

『夜が明けるまで眠つてはならぬ。惑はないやうにお祈り！』

彼はまた弟子たちから離れて祈つた。彼はちよつとでも祈らずには居れなかつた。餘りに恐ろしい夜であつた。餘りに不安な誘惑の夜であつた。

『死ぬほど苦しい！』弟子の一人は夢うつゝのなかに、さう言つた師の聲を聽いたことを後まで記憶してゐた。

彼はまた弟子たちのところに歸つて來た。弟子たちはまだ眠つてゐた。

彼は三度弟子たちのところに歸つて來たが、弟子たちは三度とも草の上に眠つてゐた。

『一人行くのだ！』それは彼にとつて雄々しい決心の聲であり、超人の悲痛な聲であつた。

彼が嘗て一人で夜毎に見た青い星が輝いてゐた。微風が星の光りを撫でるやうに吹いて來た。彼は弟

子の傍に近寄つて行つた。弟子の一人が頭を擡げて彼を見た。
「お寢み。ゆつくり眠つた方が宜い。いつまでも一緒には居れぬから……」彼は弟子を見てさう言つて、彼自身もまた弟子たちに列んで草の上に横たはつた。

ケデロンの河を渡つて籠から炬や提灯を點して、棍棒や劍などを持つた兵士や祭司長などが、師の方へ近づいて來た。

ユダはその先頭に立つて、師を見た刹那に飛んで行つて師に接吻した。

ユダの生あたゝかい涙が師の手に落ちた。

「先生。私はあなたを賣りました！」と言つてユダは子供のやうにすゝり上げて泣いた。二人の間に緊張し切つた沈默がつゞいた。

「私は今救はれた、お前も……。私ははじめてほんとうにお前を愛することができた！」師はさう言つてユダの髮に接吻した。師の絶望的な眼の底には無限の愛に滿ちた涙がためられてゐた。師は恰度母が嬰兒の背を撫でるやうに、やさしくユダの背を撫でゝ泣いた。ユダが咽び泣くたんびにユダの痩せた背骨が師の柔かい掌に波打つやうに響いた。

師は人々に擊たれつゝ、罵詈せられつゝ祭司長の家の方へ歩いて行つた。彼は幾度かよろめいて道に倒れやうとした。

師はまだ夢に醉つてゐるやうな氣で暗い道を歩いてゐた。

橄欖の森で見た旅の男や、亡父のヨセフや母のマリヤのことなどがそれからそれへと想ひ出された。暗い無限の寂しい世界が彼の心に映つて來た。そこでは橄欖の森で見た旅の男も、ヨセフも、母のマリヤも、ユダも、マグダラのマリヤも、弟子たちも、同じ暗い野のなかに坐つてお互がお互の暗い瞳の底を見つめて永刧に默想してゐるのであつた。そこには罪といふ觀念も、憎みといふ觀念もなく、人々は

たゞ一つの寛容な心に溶け合つて、悠久な世界の暗い不可思議な姿を凝視してゐるのであつた。

そこには聲もなかつた。色もなかつた。笑ひも、涙もなかつた。暗と悠久の默思が人々の疲れた魂を靜かに搖籃のなかに憩はせてゐた。

二三度鷄の聲が聞えた。

夜が明けかゝつて來た。

街も列樹も群集も彼には墓場のやうに寂しく呪はしかつた。

彼は兩脚がすくんで、呼吸がはずんで少しも歩けないので度々立ち止つた。そのたんびに人々は「盗人！」だの「かたり！」だのと罵つては彼の脚や肩を擲りつけた。彼は子供のやうに大きな聲を出して、地べたに體を投げ出して泣いて見たいとも思つた。

彼は幾度かユダの最後の寂しい眼を胸に描きながらエルサレムの宮の方へ引かれて行つた。彼の心の底から底からと涙がこみ上げて來るのであつた。

×

夜が明けてからエルサレムの町中には色々な噂が傳へられた。豫言者の弟子の一人が劍を拔いて祭司の長の僕の耳を殺いだことだの、弟子たちが見苦しくも師を捨てゝ我れがちに森のなかに逃げてしまつたことだの、祭司の長の庭で夜を明かして火を焚いてゐた僕たちの間にまぢつて、弟子の一人が様子をうかゞひに來てゐたのが、捕縛されないで逃げてしまつたといふことなどが尾に尾をつけて町中に語られた。

その日の正午少し過ぎてからであつた。人々は更に新しい事實を見出した。

それは三十枚の銀をエルサレムの宮の前に投げ捨てゝ行つたユダが、町外れの木立のなかで首を縊つて死んでゐたといふことであつた。（八年十月）

豫告

本誌生れて茲に八ヶ月、數萬の發行部數を有する幾多の雜誌界に嶄然頭角を抜いて隆々の勢威を張り、今や峻嶺の嶷乎として天冲に聳へ、悠然雲界を睥睨するの概あり、蓋し出版界絶無のとに屬す。同人は此眷顧に報ひんが爲めに十二月號は本年掉尾の計畫として

階級鬪爭號

と爲し、我社同人は意氣愈々壯なる活躍を試み、歷史的に、思想的に、政治的に、社會的に、此難問題解決の最高批判を下し、諸家の眞摯なる研究を乞はんとす。社會問題の根本を究めんとする士に缺くべからざる論議批判たるは贅するを要せざるべし。

毎月一日發行 一回

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	二錢
半ヶ年	二圓九十錢	不要
壹ヶ年	五圓八十錢	不要

外國行郵稅は一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候

▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

▼新刊書寄贈其他編輯上の事は編輯所へ申出られ度し

本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北隆館　上田屋　至誠堂

大正八年十月二十七日印刷納本
大正八年十一月一日發行

本號に限り 金六十錢

編輯兼發行者 印刷者 東京市外品川東海寺三四六 横關利藤太

印刷所 東京市京橋區尾張町廿七番地 秀英舍

發行所 東京芝區櫻田久保町七 改造社
電話新橋一五〇五
振替東京八四〇二

■初冬の好讀物■

前東京毎日新聞社長 山本實彦著 寫眞版三十餘頁

第五版

人を見よ山を見よ

新式總クロース
頒美本正價壹圓
郵送料八錢

序に曰く

欠伸して一句。起きて一句。蛙が鳴いたで一句。世が緑になつたて一句。蚊がさきぬうちに一句。みゝずのやうにのばしたこの一書。

支那政界の大立者梁士詒を拉へて共和政に及第する目玉なるやと試驗臺に立ち、明石大將は豪傑試驗の落第者、水野前内相は探偵政治家の舊型、秋山中將は神經衰弱的天才なり、屈原は高士、雪舟は古今の人格者、鉢の木の常世が現代に慕はしいと欽し、佛法僧鳥を高野山頂に聽いて世界一の靈鳥なりと讃へ、濱口雄幸は、大宰相として適任なるやを評し、スコットの「湖上の美人」で名高いカトリン湖畔で半日の瞑想に耽れるを叙し、高知に民權婆さんを訪ねて民權論の當時を追憶し、頭山滿の情事を語る、巴里千尺の空中より歐洲の風雲を窺ひ、雪のウラル、月のスエズに憧憬し、野武士の隊長、長曾我部元親の越へし四國アルプスを越へし記など全巻趣味溢るるが如し。

國民新聞 曰く人を見るにも山を見るにも一隻眼を有するは本書の著者り

東京朝日 曰く、人物評は皆着眼の他に類するを見ず蓋し近來の快著として江湖に推薦す

發行所 東京南品川東淺間臺二四六 改造社 電話高輪一一九〇 振替東京八四〇二

回西村伊作著

□四六判二百五十八頁□定價貳圓五拾錢
□寫眞圖版四十九葉□送料內地金拾錢

再版



樂しき住家

洋風住宅建築の栞

□吾人は自己の生活樣式を改造すべき時期に到達した。

□生活改造の根本は、先づ住宅の改良より始めなければならぬ。

□著者は過去十數年間に大小各種の住家を設計し建築した。

□著者は藝術家である、而も空想に憧れない實際家である。


□本書は無趣味な設計書でない、一種の趣味ある讀物である。

□家を建てんとする人は此書を讀まば物質的の利益多大である。

□各自の家を樂しき住宅たらしめんとするもの先づ此書を讀め。

□本書を一讀すれば、洋風建築の名稱と居住の作法を悉く知る。

□版元 東京市京橋區尾張町 振替口座東京五五參 警醒社書店□


專賣特許
完全燃焼
巴風呂
内釜式
外釜式
燃料の節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図
東京市神田区
鍛冶町廿番地
巴商會
電話(神田)三四八番
振替(東京)四三二番

（改造第一卷第八號）（大正八年十月二十七日印刷納本、大正八年十一月一日發行）

東京秀英舍印刷

（大正八年三月二十一日第三種郵便物認可）（毎月一回一日發行）